

機動戦士ガンダムL(ルミナス)

C4—1341

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《人類が増え過ぎた人口の捌け口を宇宙に求めてから、1世紀が過ぎようとしていた。だが：人類は未だ、誤解無く分かり合う事は出来ず、争いの火種は地球圏に燻り続けている。》

シヤアの反乱から1年。これは、決して歴史の表舞台に出る事は無かった、ある狭間の物語である。》

目次

第1話『灰色のガンダム』	1
第2話『グラナダ』	20
第3話『誕生』	36
第4話『邂逅』	46
『邂逅』(2)	62
第5話『秘密会談』	78
第6話『平和の流星』	90
第7話『ピースミーティア攻防戦』	98
『ピースミーティア攻防戦』(2)	109
『ピースミーティア攻防戦』(3)	121
『ピースミーティア攻防戦』(4)	136
『ピースミーティア攻防戦』(5)	153
第8話『アンバークイーン』	172
第9話『新たなる火種』	189
第10話『世界の歪み』	202
『世界の歪み』(2)	215
第11話『セレーネの声』	228
『セレーネの声』(2)	240
第12話『モビルビット』	257
『モビルビット』(2)	271
第13話『混迷の宇宙』	286
『混迷の宇宙』(2)	303

第1話 『灰色のガンダム』

U・C・0094年。アナハイム・エレクトロニクス社の拠点である、月面都市フォン・ブラウン。ここに、1人の女性がやって来た。彼女の名前は、シーナ・ランチエスター。黒のスーツ姿で街を歩く様は、都心の会社で働くキャリアウーマンと言った様相を呈している。栗色の髪を靡かせ、初めて訪れた月の街並みを見渡していく。

「…うん、いい街。」

スペースコロニーの街並みにも似ているものの、体感的には月の方が活気があるように感じる。アナハイムという巨大な軍産複合体企業の恩恵があるからだろう、と…そんな事を考えては、ちよつとした笑いが溢れてしまう。何を隠そう、私はこれからそこに行くのだから。

手に握っているコーヒーの入ったボトルを口へと運び、一口飲んでいく。フォン・ブラウンに来て初めて立ち寄った喫茶店でテイクアウトしたものだが、これもコロニーで味わうコーヒーとは違う香りや味がした。普段飲み慣れているコーヒーよりも、若干だが苦味が強い。だが、深い味わいと香りがなんとも私好みで、このコーヒー1杯だけで月に来て良かったとさえ思ってしまう。

人混みを抜け、徐々に人通りも疎らになると、その頃にはボトルのコーヒーも温くなってきており、またあの喫茶店に行きたいな…、なんて思いながら、スーツの上着ポケットから携帯端末を取り出してマップを開いていく。現在地の場所を確認し、目的地であるアナハイム本社ビルまでの経路を再確認すると、端末を再びポケットに仕舞って歩き出す。

そこから約10分程で、目的地のビルに到着した。

※

アナハイム・エレクトロニクス。元は一般家庭の家電製品を製造し

ていた普通の企業だったが、1年戦争を皮切りに軍需産業にも手を伸ばし、今では地球連邦政府や連邦軍にも絶大な影響力を及ぼす巨大企業となった。実際、私が所属している部隊のモビルスーツも、軍艦も、細々としたパーツも、その殆どがアナハイム製だ。逆に、アナハイム製ではない所を探す方が困難かもしれない。それ程までに、アナハイム・エレクトロニクスという会社は、この地球圏全体に根を張って浸透していると言っても過言ではない。

と…事前に予習しておいた事を頭の中で思い返ししながら、私はエレベーターが最上階に着くのを待っていた。50階建てのビルは、流石のエレベーターでも最上階まで着くには時間がかかる。

「……新入社員ですか？」

ふと、同じエレベーターに乗り合わせていた、初老のスーツ姿の男性から声をかけられる。白髪混じりの髪をオールバックに固めており、顔に刻まれた皺と顎髭姿は、何ともダンディーな紳士といった雰囲気醸し出している。アナハイムの社員なのか、はたまた関連企業の職員なのか、そこまでは分からないものの、邪険に扱うのも私の立场上良くないと思い、愛想笑いを浮かべながら口を開いていく。

「ええ、今日からお世話になります…シーナ・ランチェスターと言います。」

外面は良く見せ、まるでいい所のお嬢様のようなお淑やかな笑顔を浮かべながら、小さく頭を下げて自分の名を名乗っていく。本来の私は寧ろ真逆だが、第一印象の大事さは分かっているつもりだった。

ゆつくりと顔を上げて男性を見てみると、先程と変わらない柔らかな表情を浮かべたまま、私を見ている。表情の変化が無いのでどんな風に受け止めたのか分からないものの、少なくとも悪印象は避けられたようだ。

と、エレベーターが途中の階で止まった。どうやらこの男性が降りるようで、別れ際に「では、また。」と言いながら会釈をしてフロアへと歩いていく。まるで再び会う事になると言っているような物言いに首を傾げつつ、同じ職員なら確かに会う機会もあるだろう…と、その程度に思いながら、エレベーターの扉を閉じていく。そこから止ま

る事はなく、最上階の50階まで真っ直ぐ上って行って、社長室のみがある最上階に到着した。

エレベーターの扉が開くと、目の前には一本のみの真っ直ぐな廊下が姿を現し、私はしつかりとした足取りで廊下を進み始める。床には絨毯が敷かれているので、ヒールの音もそれ程響く事は無く、僅かにふかふかとした感触を感じて歩いていくと、社長室の扉の前に2人のスーツ姿のガードマンが佇んでいるのが見えてきた。屈強な体格と目つきから、恐らくは私と同じ軍人の類なのではないかと思ひ、無意識に私の視線も鋭くなってしまう。

「此方に社員証を。」

ガードマンの1人が、ICチップが内蔵されている社員証カードを読み取る端末機器を取り出して、私に向けて差し向けてくる。もう1人のガードマンは、私の一挙手一投足に常に目を光らせている。セキュリティを考えれば、当然の対応だろう。加えて、廊下の入り口からここに来るまで、至る所に監視カメラも設置されている。流石は天下のアナハイムと言った所だろうか。

私は懐から社員証のカードを取り出し、端末機器に軽く翳していく。ピピツ、という機械音が響くと、端末機器が緑色に発光したので、社員証が本物であると認証されたようだった。

「ご苦労様です、最後に指紋を。」

本人である確認はこれだけで終わらず、2段階認証となっているように、端末機器の液晶画面に指の腹を押し付けるように促された。私は社員証カードを懐に戻すと、小さく頷きながら指を押ししていく。再び端末機器からピピツ、と音が鳴ると、また緑色に発光したのが分かり、ホツと胸を撫で下ろしていく。ガードマンの2人も、何処と無く安堵したように感じた。

「どうも。」

ガードマン2人が扉の前から1歩引き、社長室のドアを開けた。私は小さく会釈しながら声をかけ、背筋を伸ばして真面目な表情で中へと足を踏み入れていく。

社長室は、私が想像したよりも質素だった。大きなテーブル、応接

用のソファアが並ぶスペース、そして社長用の机と椅子。唯一目を引くのは、天井が全てガラス張りとなっており、月の空が一望出来る点だった。

「失礼致します。シーナ・ランチエスター、只今着任致しました。」

社長は私に背を向ける形で、椅子に座りながら月の空を眺めている。私はこういう場合、どのような挨拶をするのが適切なのか分からないので、普段のように敬礼をしながら挨拶をしていく。私の声に反応したように椅子がくるりと向きを変え、社長の姿がしっかりと確認出来た。

「遥々ご苦勞、少尉。ああ、ここでは敬礼は不要だよ。」

先程エレベーターで一緒になった男性よりも、僅かに年齢が上を行ってそうな風貌をしており、仕立ての良いスーツに身を包んだ社長が、私の敬礼に対して笑みを溢しながら指摘してくる。別に恥ずかしいだとか、そんな感情は抱かないものの、敬礼の必要がないと分かったので手を下ろし、足を揃えながらその場にジッと佇み。

「挨拶は程々にしておこうか、少尉。早速だが君への辞令だ。今から君には、我が社のグラナダ工場へ行ってもらおう。」

「はっ…。グラナダ、ですか…?」

私は、社長から手渡された辞令書を受け取りつつ、つい社長に問い直してしまった。てつきりフォン・ブラウン工場での仕事だと思っていたからである。そんな私の心境を汲み取ったのか、私が欲している情報を社長は口にし始めた。

「君には、うちのニュータイプ専用新型機のテストパイロットを頼んでいたね。だが、まだ未完成の状態なのだよ。そして、新型機の開発はグラナダ工場が担当する。…分かったかね?」

「……了解致しました。」

社長の短くも要点をまとめた簡潔な言葉に、私はしつかりと頷いていく。グラナダ工場と言えば、あのサイコフレームの製造設備がある施設だと聞いているので、新型機にも当然サイコフレームが搭載される事が分かり。となると、確かにグラナダでテストを行うのが妥当だろうと納得していく。

だが、きつと…その新型機というものは、あのアムロ・レイ大尉の為に用意されるものだろうと、ぼんやりとだが考えたりしていた。今現在も生きていれば、の話だが。

「…では、直ちに向かいます。」

「ああ、よろしく頼むよ少尉。詳しい事は辞令書の中を読んでくれ。」

これで社長への用件は済んだ。社長も次の予定があるらしく、どこかへと電話をかけていく。

私は敬礼ではなく、しっかりと頭を下げて一礼していくと、社長室を後にした。

※

「おや、また会いましたね。」

「……さっきの…。どうも。」

驚いた事に、あのエレベーターで一緒になった初老の男性と、思わぬ形で再会した。輸送貨物船の中で、だが。

社長室から出た後、私は辞令書の中身を確認してここに居る。そこに書かれていたのは、グラナダ工場勤務となる事に加え、今日の何時にグラナダへ向けて発つかの予定時刻や、どのスペースポートから出発するのか、そして船の認識番号まで細かく記載してあった。月の地理や事情にあまり詳しくない私としては、寧ろ有難い事ではある。

そして、予定の場所と時間にスペースポートに辿り着き、船の番号も確認した上で搭乗して…この展開である。まさか、この初老の男性まで同じグラナダ行きの職員だったとは驚く他ない。

既に貨物船は出航しており、私達はスーツ姿からノーマルスーツに着替えていて、ビルの中で話していた時よりも幾分か雰囲気が砕けているように感じる。

「これから宜しく、少尉殿。」

「な……、私の階級を…っ。」

まだ打ち明けてすらいなのに、いきなり階級を言われてしまえば、表情が驚きの色を濃くしていき、私は目を丸くしてしまう。もし

かすると、この男性は…。

「私の名前はウオルド・シャウラ。今度の新型機の開発責任者として選ばれたのです。君の事は既に、軍からの資料で確認させてもらっていますよ。」

「…そうですか…。」

もう知られているなら、着飾る必要もない。やはり、同じチームとして働く職員だった。私は部隊に居る時のような、つい荒っぽい口調に変わっていく。これが普段の私なのだ。

「…で、他のメンバーとかは？見た感じ、私とシャウラさんの2人しか乗り合わせてないけど。」

「ああ、他のメンバーは既にグラナダに居るよ。フォン・ブラウンから向こうに行くのは私だけさ。」

彼の言葉に、私は1人納得しながら頷いていく。それなら私と彼だけしか乗っていない訳だ。そう思っていた矢先の事だった。

突如として、船体の真横をビーム砲が掠めながら横切ったのだ。次に、船内にアラート音がけたたましく鳴り響く。

「ッ——、攻撃…!?!」

私はすぐに席を立ち、壁にかけられている船内回線の受話器を手にとると、操縦席のパイロットへと繋いでいく。まずは状況を把握しなければならぬ。

「キャプテン、今の攻撃はっ?」

『分からないが、どうやら海賊みたいだ…!』

「こんな月の周回軌道上に、海賊が…? キャプテン、すぐに付近の警戒パトロール艦隊に救難信号を!」

『やってはいるが、ミノフスキー粒子が濃くなってきた…振り切るしかない…!』

私は受話器を元の場所に戻すと、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて、壁に握り拳を叩き付ける。こんな非常事態に何も出来ない自分が腹立たしく、怒りの矛先を壁に向けて殴りつけた。

と、その時…ある事に気付く。この船が、何の船であるのかという事を。

私はすぐに振り返り、ウォルド・シャウラへと詰め寄っていく。

「シャウラさん、積んでるんでしょ？この船に…モビルスーツを…」
そう、この船は輸送貨物船。私の考えが正しいなら、積んでいてもおかしくはない。どんなものであれ、動かせる機体があるならやりようはある。

私の問いかけに対して、彼は眉を顰めながら難しい表情を浮かべた。

「…あるにはある。だが…」

「あるなら私が乗ります、案内してっ！」

これから私の上司となる彼に対して、有無を言わせない剣幕で詰め寄り、ジロツと睨むように見つめ。次の瞬間、再びビーム攻撃が来ると、回避する為に船体が大きく揺れ動き、私も彼も蹠踉めきながら壁やシートに捕まっっていく。

こんな場所で死んでなんかいられない、死んでたまるか。そんな私の言葉と気持ちに折れたのか、彼は苦渋の表情で頷いていた。

「…こつちだ、少尉。」

「…はいっ。」

直ぐに部屋を出ると、廊下を突き当たりまで進んでいき、幾つかのドアを開いて貨物室に向けて移動していく。他の乗組員達は慌てている様子で、一種のパニックに陥っていた。無理もないだろう、こんな場所で無防備な状態で襲われているのだから。

もし攻撃が当たれば、当然船内の酸素が急激に無くなる可能性がある。私も彼も、途中からはヘルメットも被り、最後の隔壁の扉を開いて貨物室へと入っていった。

「…あれが、この船が運ぶ積荷だよ。」

貨物室内に入ると、モビルスーツなら10機は收容出来るだけの広さがある中で、たった1機だけハンガーに格納されている機体があった。そのモビルスーツを指差しながら、彼は私に告げてくる。

私は、驚きの余りに一瞬声を出すことすら忘れて、ジツと食い入るように見てしまう。

「ガンダム…。」

見間違えようがない。鋭い4本のブレードアンテナに、背部に装備された6本のファンネル。カラーリングは全身灰色だが、どう見てもアムロ大尉が設計を施したHi-νガンダムそのものだった。

だが、これで海賊がこの船を狙う理由が分かった。何故ガンダムを積んでいる事が漏れているのか、そこまではまだ頭が回らないが。

私は躊躇う事はなかった。貨物室内は無重力空間となっていて、床を蹴り出して一気にコックピット目掛けて跳躍していく。ハッチを開き、コックピットへと乗り込んだ際、少し遅れて彼もやって来た。

「少尉、この機体はまだ未完成品だ。それに武装も…っ、」

「動くならそれでいいです、機に火を入れますっ。離れて下さい…！」
一刻の猶予もない。私は彼の言葉を遮るようにしながら、コックピットハッチを閉じていく。普段使い慣れているジムIIIとは確かに勝手は違うようだが、操縦出来ない程複雑な訳ではない。私は起動スイッチを押し、この機体を起動させた。まるで産声のような、熱核融合炉の稼働音がコックピット内にも響いてくる。

「システム、チェック…。バランサー、よし…火器管制、オンライン……。全天周囲モニター、起動…よし…っ。」

コンソール画面を操作しながら、この機体の初期設定をこなしていく。本来ならマニュアルを片手に手順をきちんと踏む事だが、今はそんな事をしていない暇はない。必要最小限の確認をした所では、どうやら既に空間戦仕様に調整自体は済んでいるようだった。モニターを起動させると、貨物室内の映像がコックピットの全天周囲モニターに映し出される。ちょうど彼は、貨物室から船内通路へと出ていく所だった。あとは外に出るだけである。

私はコンソール画面を再び操作し、通信設定をこの船と同期させると、周波数を合わせてヘルメットのマイク越しに話し始めた。相手はこの船のキャプテンである。

「キャプテン、貨物室のハッチを開けてっ、出撃しますっ！」

『なっ…あの積荷で…！よせ、外は海賊のモビルスーツも複数接近してきてるっ。』

「奴らの狙いは、この機体なんですよ？ だったら、私が囮になるからっ。その間に安全圏まで離脱して！ 早くッ！」

『む、う……ッ。』

押し問答の末、キャプテンは束の間の時間考え込んでいた。キャプテンの気持ちも分からなくはない。この積荷を無事にグラナダへ送り届ける事がキャプテンの任務であり、それを放り出すような決断を迫られているのだから。

だが、私も軍人だ。危機に際しては、この身を犠牲にしてもキャプテン達を助ける義務がある。そして、今の私にはそれが出来る。

やがて、キャプテンは貨物室のハッチを開放してくれた。

『こっちは艦砲射撃を回避するので精一杯だ、後は自分で出てくれ！』
「…了解っ。」

短い返事の後、バランサーがちゃんと働いている事を確認するように、1歩、また1歩と、灰色のガンダムを動かしていく。問題なくハッチ前までやって来ると、掛け声一つ。

「…シーナ・ランチェスター、ガンダム…行きます！」

緑に輝くデュアルアイが一際光を放ち、私とガンダムは月の海へと飛び出していく。これが、運命の初日。

※

やはり、宇宙は良い。

遙か遠くに存在する星々、太陽、惑星。それら小さな光が散りばめられ、然しとても冷たく暗い。人の存在を拒む場所ではあるものの、だからこそ私には心地良く、自分が自分らしくあれる唯一の空間だと感じる。自分らしく、という意味には、ここが死に場所となっても本望だと言う事も含まれているが。

『…時間です、閣下。あくまでも今回はテスト、無理に戦闘状況に介入する必要はありません。』

ふと、コックピット内に響く男性の声。聞き慣れた、私を補佐する参謀の声だ。その声に反応するように、私はゆつくりと目を開いていく。

コックピットの計器類、操縦桿、ペダルの感触、全天周囲モニターに広がる宇宙の海。ああ…ようやくこの日が来たのだと、私は感情の昂りというものを抑え切れない程に、つい口元を弛ませます。

「分かっている、無理はせんよ。」

何処となく、男性の安堵したような息遣いがスピーカー越しに聞こえてくる。私の声が聞けた事の安堵なのか、身の安全に配慮する事を約束した事の安堵なのか、或いは両方か。

総司令部も、随分と過保護な男を側に遣わしたものだ。だが、これから行うべき作戦の為には、これくらい過保護なお目付け役が必要な事も分かっている。この身を常に危険に晒す事になるのだから。

「さて…、行くか。」

漆黒の宇宙を、黒いモビルスーツが溶け込むように飛翔していく。

※

「数は…3…!!!」

灰色のガンダムに乗り込んだ私は、月の海へとその身を投げ出し、姿勢制御スラスタを噴射しながら高速で接近してくる熱源へと向きを変えていく。こちらへと向かってくる数は3つ。その内の1機は他の機体に比べ、足が速いように感じられる速度で迫ってきている。所謂、隊長機という奴かも知れない。

敵の機体コードを自動でこの機体が識別をし始め、コンソール画面に表示がされる。こちらに接近してくる機体は、3機ともギラ・ドールガ。何度も交戦してきた機体だけに、どう立ち回れば良いのかも熟知しているつもりだった。

唯一、というよりも、致命的な問題点を挙げるとするならば……

「武器、武器は…っ……、無し…!?!」

私は愕然とした。

コンソール画面を素早く操作し、WEAPONの項目を選択して開いたはいいものの：そこには、選択肢すら設定されていなかった。つまり、この機体は丸腰なのである。背中に装備されているフィン・ファンネルすらも、お飾りである可能性が高い。

ようやく、何故彼やキャプテンが、出撃を最後まで渋っていたのかの理由が分かった。そもそも、戦えない機体なのだ。だが、だからと言って、ここで逃げたらそれこそ軍人の恥である。私は覚悟を決め、操縦桿を握り締めて、ペダルを目一杯踏み込み、スラスターを全開にしてギラ・ドーガの小隊に突っ込んでいく。

身体に感じる加速Gの負荷。ジムIIIとはまるで違う、桁違いの加速感、速度、反応性の良さと高さ。この機体が正真正銘のガンダムなのだと、私に思わせてくれている。戦いの場において、私は気分が高揚していたのだった。武器が無いなら、無いなりに戦えばいい。

「攻撃…回避——ッ。」

ギラ・ドーガ全機から、ビーム・ライフルによる射撃が行われた。3つのビームの閃光が迫り、私はスラスターを小刻みに噴射しながら攻撃を回避していく。攻撃の軌道を見る限り、どうやらコックピットへの直撃は避け、機体の四肢や頭部を破壊して無力化しようという意図が感じられる。

やはり、海賊が奪いたいのはガンダム本体らしい。なら、私にもやりようはある。

「海賊風情が…ッ！」

今度はこちらの番だと言うように、ギラ・ドーガの内の1機へと距離を詰め、肉薄していく。向こうはビーム・ソード・アックスを抜いて構えるものの、その攻撃軌道を見切れば、紙一重の距離で斬撃を回避し、ギラ・ドーガの脇腹を思い切り右脚部で蹴り飛ばしていく。加えて、向こうが体勢を整える暇を与えずに、今度は左腕を振り翳し、握り締めたマニピレーターを思い切り頭部のモノアイへと叩き込んでやる。元々の基礎設計のお陰か、ガンダリウム合金による高強度の恩恵なのか、勿論出力の高さもあるだろう。ギラ・ドーガの頭部がぐしやりと潰れ、モノアイが機能を停止した事が分かる。

だが、一時的に視界を奪ったに過ぎない。直ぐにビーム・ソード・アックスを振り翳してきた為、敵の機体を蹴り飛ばしながらスラストを噴射し、攻撃を回避していく。

然し、それが致命的なミスとなる。

「ッ——、くそ…ッ！」

残る2機のギラ・ドーガに左右からワイヤーが発射され、機体の両腕に雁字搦めに巻き付けられてしまった。こんな装備があるだなんて、私は初耳だった為、反応も対処も出来なかった。

左右に引つ張られ、両腕が軋む音が聞こえ、コンソール画面には過度な負荷が掛かっている事を告げるように、両腕部が赤く点滅してアラート音がコックピット内に鳴り響く。

不味い、このままでは。頭では分かっているけど、スラストを噴射して脱出する事も叶わず、3機のギラ・ドーガが再びビーム・ライフルを構えてきたのが見える。

このままやられるのか。成す術もなく、ガンダムを鹵獲されてしまうのか。私は、まだ何も成し遂げてすらいらない。こんな所で死んでなんかいられない。

「……ガンダム…ッ。」

私は、叫んだ。心の内から溢れ出る言葉を。

「——私に力を貸せっ!!」

次の瞬間、私の脳裏に何かが逆るような感覚が襲い、それは形となって機体に反映されていく。背部ファンネルラックから6枚のフィン・ファンネルが射出され、それらがまるで意思を持っているかのようにコの字に変形すると、次々に頭上からビームを放ち、絡みついたワイヤーを撃ち抜いて拘束から機体が解放されていく。

そして、敵である海賊達の声が、回線が混線した事で聞こえてきた。

『どうなってやがる…っ、武装は無いんじゃないのか…!!』

『慌てんな、落ち着け!』

『あのガンダム、なんで装甲の隙間から光が…ッ!?!』

『こ、殺されちまう…!』

『こうなったら仕方ねえ、墮とすぞツ!』

やはり、この機体の情報が漏れている。それも、武装が無い事すら。だが、彼らも必死だ。鹵獲を諦め、自らの危機を振り払おうと本気で攻撃を仕掛けてくるらしい。各々がこちらとの距離を取り始め、ビーム・ライフルを構えてくる。

「行け…ツ、フィン・ファンネルツ!」

尤も、反撃の暇を与える程、私はお人好しではない。上手く言葉では言い表せないものの、6つのファンネルそれぞれを、私の手足のよう自在に操れる“確信”が生まれていた。攻撃のタイミング、侵入コース、軌道、全てが私の思考通りに動いてくれている。

最も距離が近かったギラ・ドーガに、まずはファンネル達が襲い掛かっていった。向こうもビーム・ライフルを急いで構えて反撃を試みているが、ビームの攻撃はファンネルには当たらず、虚しくも宇宙の彼方に消えていく。そして、四方八方からファンネルによるビーム攻撃が降り注ぎ、左肩部、右脚部、背部スラスタに命中し、最後はコックピットを撃ち抜かれて爆発した。

「次…!」

撃破を確認すれば、私の意識はその隣のギラ・ドーガに向けられていく。迫り来るファンネル達に対して、2機目のギラ・ドーガはライフルとしての機能から切り替え、ビーム・マシンガンとして弾幕を張り始めた。

この判断は正しい。私も訓練時にそう教わった。だが、ファンネルはその程度の弾幕では易々と撃ち落とせはしない。粗雑な弾幕を掻い潜り、ファンネルが次々とビーム攻撃を撃ち込んでいくと、頭部に1発が命中して一瞬ギラ・ドーガの動きが止まる。その隙を見逃さず、2発、3発とビームが機体を貫いていき、コックピット周囲をファンネル達の全方位一斉射で撃ち抜き、2機目も爆発した。

『くそ…があ…ツ!!』

最後に残った、恐らく隊長機と思われるギラ・ドーガが突っ込んでくる。向こうは脚部に追加スラスタが装備されているようで、まだ

精密には操作し切れていない私のファンネルの攻撃を振り切り、ビーム・ソード・アックスを構えてきた。

私は、内心舌打ちをしていく。あまりにも接近されてしまえば、迂闊にファンネルの攻撃は行えない。こちらの機体も被弾する恐れがあるからだ。

「くそ…ッ！」

お互いに罵声を飛ばし合いながら、私はガンダムの操縦性の良さ、反応速度に命を賭ける。振り下ろされたビームの刃を、姿勢を変え、事でスレスレの所で回避し、左脚部を思い切り蹴り上げて相手の得物を吹き飛ばしてやる。咄嗟の事で反応が出来なかったようで、柄が蹴り飛ばされた事で一瞬ギラ・ドーガの体勢が崩れ、その隙を見逃さずにコックピットへもう1発蹴りを入れていく。

『がつー、あ…ッ!?!』

再び混線が入ってきた向こうのパイロットの声は、ガンダムの蹴りをまともにコックピットブロックで受けてしまった事で、凄まじい衝撃を肉体に受けている事を物語るような呻き声だった。恐らくは、脳震盪やら内臓へのダメージやら受けているだろう。

そして、蹴り飛ばした事で再び機体間の距離が開き、ファンネルのオールレンジ攻撃の間合いとなった。

「——ファンネルッ!!」

私の掛け声、そして思考に敏感に反応するように、コックピットブロックに埋め込まれているサイコフレームが光を僅かに放ち、ファンネル達が一斉にギラ・ドーガへと襲い掛かる。

向こうもハツとした様子で、シールドを巧みに使いながら何度かファンネルの攻撃を耐えていたものの、長くは保たなかった。四方八方からのビーム攻撃が胴体やコックピットを貫き、最後の1機も宇宙の塵と化すように爆発していった。

「ッ——、はあっ…:…:はあっ…:、や…った…:!!」

ファンネル達に“戻れ”と思考を飛ばすと、従順な子供達のように機体へと戻ってきて、背部ファンネルラックにそれぞれ再接続されていく。これで、目の前の危機は去った。

初めての機体、そして自らにとって未知のサイコミュ兵器の使用。あまりの出来事の連続で、私はかなり疲弊してしまっていた。ヘルメットのバイザーを開けると、額から滴る汗を指で拭っていく。汗の雫がコックピット内を漂う姿を目で追いながら、遠くでは海賊達の母艦が宙域を離脱していくのが見えた。どうやら、これ以上の戦闘は危険と判断しての撤退だろう。私としても、戦艦とやり合うのは今は厳しい。

『……。——い：少尉、聞こえるかねっ？こちらは安全圏に離脱した。速やかに合流してくれっ。』

ミノフスキー粒子の散布濃度が低下した事で、通常回線での通信がようやく通じ始め、輸送貨物船から通信が入ってきた。声の主はキャプテンである。

あれだけの艦砲射撃を回避し続けたのだから、キャプテンも疲労が凄まじかっただろうという事は、容易に想像がつく。尤も、海賊達もお目当ての積荷を破壊する訳にはいかないので、航行を無力化させる為の砲撃だっただろうが。ともかく、この場から離脱して合流するでしょう。

「……了解っ。」

私は短く返事をした後に、スラスターを噴射して月の海を再び駆けていく。

※

月の周回軌道から外れた宙域には、大小様々なデブリや廃棄された資源衛星が存在しており、一種の暗礁と化している。連邦軍の目を掻い潜り、活動拠点として根城を築く犯罪組織や海賊も少なくない。月と地球への航路を狙って襲い掛かる海賊組織『アドラー』も、このデブリ帯を拠点として活動している組織の1つである。

保有艦3隻、保有モビルスーツ15機、構成員は全て合わせて70名に迫ろうかと言う程の、このデブリ帯では1番の規模を誇る海賊組織だ。その内の1隻が、狩りを終えて秘密ドッグへと入港していく。

『お疲れ様です、ボス！お宝は手に入れましたかい？』

ドッグのゲートが閉鎖され、アドラーの旗艦でもあるムサカが、ドッグ内のドッキングベイに無事に着岸し、作業員達による整備作業と乗組員の下船準備が進められていく。作業アームでしっかりと船体を固定された所で、ドッグの管制室からの通信が飛んできた。お宝、というのは勿論…あのガンダムだ。

「いいや、今回は失敗だ…。大事なモビルスーツも3機失っちゃったからな。」

こちらの返事に、管制室の男は驚きの声を張り上げていた。無理もない、アドラー史上最大級の報酬が約束された仕事だったのだから。しかも、今回は絶対に失敗出来ない、わざわざ主力であるこのムサカと、ギラ・ドーガの精鋭部隊まで引き連れて行ったのである。それで失敗だと言われたら、驚きや落胆の反応があつて当然だろう。

『そんな…！だつて、向こうは丸腰だった訳でしょう!？』

「それはそうなんだが…どうやら情報に誤りがあつたみてえだ。」

乗組員達が次々に降りていく中、ブリッジで通信を介して会話を何度か繰り返していくと、今度はドッグ内にアラート音が鳴り響く。これは、不明機接近を知らせる緊急アラートだ。その音に、艦内もドッグ内も、皆一様に慌しく反応している。

『ボス、識別に該当無し！あつ、いや…通信…？』
「繋げ。」

管制室からムサカのブリッジへと通信回線を繋げてもらい、ブリッジの巨大なモニターに映像が映し出された。リアルタイム通信が出来ると言う事は、それだけこの秘密アジトに既に接近している事を意味している。警戒網は何重にもそれなりに敷いている筈だが、それすら掻い潜ると言う事は、かなり危険な相手であると認めざるを得ない。

モニターに映し出された映像に映っていたのは、桃色の髪をした凛々しい女だった。

『お前が、この海賊組織のリーダーか？』

その美しい見た目とは裏腹に、かなり高圧的な物言い、ギャップ

につい驚いてしまう。だが、女相手に怯む程女々しくはない。こちらと同じように言葉を返していく。

「ああ、そうだ。お前は誰なんだ？まさか、同業者か？」

こちらの質問に、女はどこか不敵な笑みを浮かべていた。いや、こちらを嘲笑っているようにも見える。その態度に、内心腹立たしい気持ちを抱いてしまうが、そんな事は表情には出さない。

だが、次に述べられた言葉を聞いた瞬間、背筋が凍りついてしまう。『口の利き方に気を付けるんだな、海賊風情が。私はカトレア・ペンタス…よもや、名を知らぬ訳ではあるまい？』

「——ッ、し…失礼…しました…っ。」

すぐに頭を下げ、先程までの無礼を謝罪していく。

何故だ。何故、この人がこの場所にやって来たんだ。カトレア・ペンタス…今回の仕事の依頼主だと聞いている。そして、彼女は…。

『今回の顛末を聞きに来たのだよ、アドラーのボス。とりあえず、入港許可を貰いたいものだな？』

「は…、はっ…い…おい、ゲートを開けろッ。」

管制室の男性に半ば怒鳴るような形で指示を飛ばすと、閉じたばかりのゲートが開かれていき、ようやくここで彼女が乗り込んでいるモバイルスーツの姿を目にした。

それは、漆黒のモバイルスーツ。脚部や肩部といった一部の装甲が赤に染まっているのが、やたらと不気味に見えてしまう。そして、流線美という言葉がピッタリのシルエツト。ドッグ内に居る部下達も一緒になって見ているが、誰も見覚えがないシルエツトだと言わんばかりにポカンとしてしまっている。

だが、俺だけは違った。あのモバイルスーツには見覚えがある。あれは——

『ご苦労。そして、さようならだ。』

「なっ——!?!」

漆黒のモバイルスーツが動いたかと思えば、右手に握られている大口径且つ長砲身の武器を構え、彼女は躊躇う事なく引き金を引いた。巨大なビームの閃光が目の前に広がり、ムサカブリッジの大部分が撃

ち抜かれていく。アドラーのボスは、何が起きたのか理解する暇もなく死んだ。

慌てふためく他の構成員達。我先にと逃げる者も居れば、迎撃しようともビルスーツに乗り込もうとする者も居る。だが、そんな事はお構いなしと言うように、ドッグに係留されている3隻の艦艇に次々にビーム攻撃を加えていく。

『行け、フアンネル。』

彼女の声と共に、遠隔攻撃子機であるフアンネルが複数射出され、仕上げと言わんばかりにドッグ内の至る所を無差別に攻撃し始めた。船のメインエンジンを撃ち抜き、起動前のビルスーツのコックピットを撃ち抜き、そして一部のフアンネルの攻撃がムサカノ弾薬庫に着弾すると、凄まじい爆発が起こり始め、それは両隣の艦艇へと誘爆していく。

ここまで来れば、もう手を加える必要はない。漆黒のビルスーツはそう言わんばかりに攻撃の手を止めると、フアンネル達が機体へと戻り、踵を返すように彼女は海賊達の根城から離脱していく。直後、アドラーの本拠地である資源衛星の残骸は、凄まじい爆発を起こして内側から粉々に砕け散った。あれでは、生存者はまず居ないだろう。直後、通信が入った。

『…お疲れ様です、閣下。無理に介入しなくても良いと言った筈ですが…』

「あれもテストの一環だ。それに、やはり海賊程度ではガンダムの相手は務まらんようだったからな。」

『…だから、殲滅したと?』

「この機体を見られたからには生かしてはおけん。それに…いずれは私のものとなる地球だ。宇宙の航路を荒らす輩を先に掃除したまでの事。」

答えに納得したのか、若干心配が残っているのか、通信相手の男性はそれ以上は何も言わなかった。

然し、あのガンダム。パイロットはニュータイプの素質がある人物

のようだが、果たして私の前に立ちほだかる程の存在となるのかどうか、今はまだ分からない。未完成品とだけ情報として得ているが、完成すればどんな機体になるのかも予想がつかない。

だが、それでも負けるつもりはない。このカトレア・ペンタスの敗北は、あつてはならない事なのだから。

「…帰投するぞ、ギムレット。」

『畏まりました、閣下。指定座標にて回収致します。』

漆黒のモビルスーツが、宇宙の闇に再び溶け込んでいくように、暗礁地帯の中を駆け抜けていく。その姿は、誰の目にも触れる事は無かった。

第2話 『グラナダ』

海賊組織によるガンダム襲撃事件から、早1週間が経過しようとしていた。私、シーナ・ランチェスターはと言うと、グラナダではなくルナツーにその身を置いていた。先の襲撃事件の当事者として、戦闘状況に陥った経緯や顛末についてを、参謀本部から派遣されてきた聴取官に事細かに説明している。もう何度も同じ話を繰り返しているような気がするが、聴取が終わるまでは身動きは取れない。仕方ない事だと受け入れ、部屋と聴取室を行き来するだけの日々を送っている。

一方のガンダムはと言うと、既にグラナダ工場に搬入され、何やら改修作業が行われているとだけ耳に入っている。このルナツーには、そんなに詳細な情報が入って来ないので、実際はグラナダに行かない事には不明な点だらけだが。

「それで、少尉は命令も無しに出撃したと？」

「…そうなりますね。ですが、そうでもしなければ海賊に拿捕されていました。乗組員の身の安全を守るのが、軍人としての私の使命です。」

「ふむ……。」

この聴取官の男性、如何にもな堅物エリートといった雰囲気と物言いをしてくる。この1週間で数名の聴取官相手にそれぞれ説明してきたが、中でも今対峙している彼が最も曲者だ。

兎にも角にも、命令もない出撃が問題なのだというスタンスで質問を投げかけてくる。融通の効かない人間というのは、きつと目の前の聴取官の事を言うのだろうか。

「本来であれば軍法会議にかけるべき事案と私は考えますが…参謀本部は、少尉のニュータイプとしての素質を高く評価しているようです。」

「…それはどうも。」

なら今すぐにも解放してくれ。

私はその言葉が間違っても飛び出ないように我慢していく。結局、

私も連邦軍の士官という立場があるので、聴取が完全に終わるまでは缶詰めにならざるを得ないのは理解しているので、少しだけため息を吐きながら視線を逸らしていく。

ニュータイプ……そう言われても、未だに私には実感が無い。ガンダムを操縦している間は無我夢中だったので、あれは夢だったんじゃないかとさえ思ってしまう程だった。元々素質がある事は軍から聞かされており、不思議な感覚を感じる事は何度かあったものの、次にガンダムに乗り込んだ際にファンネルが動かないんじゃないかと不安にもなってしまう。

と、その時。聴取官の携帯端末にメールが入った事を知らせる通知音が鳴り響き、彼がメールを確認し始めた。その表情はやはり変わらないものの、確認を終えてゆつくりと私を見つめてくる。

「……少尉、たった今参謀本部から連絡が入りました。明日の0500時を以て少尉の聴取を終了し、テストパイロットの任に戻る事を許可します。」

「……ありがとうございます。」

私の表情は変わらず、無愛想な表情で軽く頭を下げるのみ。だが、内心ではほくそ笑みながら聴取官を見つめる。ざまーみろ、と。

私は、私が行った行為に後悔はしていないし、間違った事をしたとも思っていない。損害は無く、海賊の脅威を退けた事を、きつと参謀本部も考慮してくれたのだろう。明日にはこの狭い部屋に來なくていいと思うだけでも、私は飛び跳ねたくなくなるくらいに喜びを感じていた。

私はすぐに席を立つと、丁寧に敬礼をしてから部屋を出ていく。無機質な部屋を出た先は、これまた無機質な廊下が広がっている。自分に与えられた仮の部屋は廊下を真っ直ぐに進み、突き当たりを右に曲がればすぐの場所にあるので、まず迷いはしない。部屋へと向けて歩きながら、明日からの任務について考えを巡らせていく。

「……ガンダム、か。」

あの、アムロ・レイが基礎設計を施した、特別なモビルスーツ。ファンネルを抜きにしても、反応性の高さや操縦性の素直さ、センサーの

反応速度、スラスタの出力の高さ……どれを見ても素晴らしいの一言に尽きる。一度乗っただけでこんなにも魅了されてしまったのだ、テストパイロットとして任務を引き受けて本当に良かったと思う。

部隊に戻ったら、隊長達に自慢してやろうなんて思いながら、私は部屋の扉を開き、ベッドへ横になつていく。グラナダの部屋のベッドは、この部屋のベッドよりもふかふかであつて欲しいと、身体を沈めながら思つたりして、チラリと時計へ視線を向ける。そろそろ夕食が運ばれて来る時間だ。

「…乗りこなしてみせるさ…絶対。」

拳を握り締め、天井を見上げながら、私は一人静かに呟く。

※

小惑星『イサベル』。かつては小惑星アクシズと肩を並べる存在だった、アステロイドベルト帯に属する軍事要塞。一年戦争終結時よりジオン残党の片割れ達が隠れ蓑として利用し始め、アクシズとはまた別の組織として形成されていった歴史がある。

2度に渡るネオ・ジオン戦争。その敗残兵や負傷兵達、そして技術者達を受け入れ、着々とその勢力と軍事力を増強させている。現在のネオ・ジオン内において、同じ名を語つてはいるものの、実質ミネバ一派とは別の勢力として見られている。そんな小惑星イサベルのネオ・ジオン勢力を束ねる存在が、漆黒のモビルスーツと共に帰還した。『エアロック作動を確認。閣下、お待ちしております。』

格納庫内に響く、スピーカー越しに聴こえる下士官の声に、私はモビルスーツのメインエンジンを切り、コックピットハッチを開けて格納庫へとその身を乗り出していく。既に眼下には、機体の整備班と技術班のスタッフ達が忙しなく動き出しており、この機体のデータ回収と整備作業に取り掛かる事が伺える。

私はノーマルスーツのヘルメットを脱ぎ、桃色の髪を無重力の空間にふわりと靡かせながら、床へと下りていった。その先には、私の参謀でもあるお目付け役の男が待っていた。

「お疲れ様で御座いました、閣下。如何でしたか？」

彼の名は、ギムレット・クルス。私よりふた回り以上歳が離れている、第一線からは退いた元パイロットだ。腕前も確かで、観察眼も鋭く、何よりも戦況分析の力に秀でている。私にとっては有難い存在であり、数少ない信頼の置ける側近だ。

彼は恭しく頭を下げ、私に操縦の感触について訊ねてきた。海賊を討った話は既に終わった話なので、今更その事を蒸し返したりはしない所も彼の良さである。

「ああ……とても良いな。やはり、私の身体に馴染む感覚がする。」

私の返事を聞くと、彼は安堵の息を吐いた。私の一挙手一投足に敏感に反応を示す彼の言動は、私から見れば少々大袈裟な気もするものの、あまり指摘する気もない。そして、私は自分のモビルスーツをゆっくりと見上げていく。

『ヤークト・キュベレイ』……それが私の愛機に名付けられた名だ。ベースとなったオリジナルのキュベレイを設計した元フラナガン機関の技術者達と、サイコフレームに詳しいアクシズから避難してきた技術者、そしてネオ・ジオンと関わりの深いアナハイム社の社員を呼び、遂に完成させた機体。

機体は黒をベースとしながら、肩部のバインダーや一部装甲は赤に塗装してあり、まるで悪魔のような見た目をしている。私は、この機体を気に入ってきていた。

「機体のテストは今日で終わりです。後は、作戦を実行に移すのみとなりました。」

彼の言葉を受け、私は再び視線を戻していく。作戦という言葉に、何処か不敵な笑みを浮かべながら、私は口を開いた。

「……いよいよだな。地球の真の統治を実現しようじゃないか。」

彼も、私も、目指すものはハッキリとしている。地球連邦政府のよくな腐敗した組織に委ねていては、やがてあの青い星は壊死してしまうだろう。だが、我々イサベルのネオ・ジオンなら、より良く人々を導けると確信している。その為に、私はこうして存在しているのだから。

ノーマルスーツを脱ぐ為に、私はその場から去り、自室へと向かっていく。参謀である彼は、ただ私の後ろ姿を見守っていた。

※

「……これが……！」

アナハイム・エレクトロニクス社、グラナダ工場。聴取から解放されたシーナ・ランチェスターがその場に到着するや否や、すぐに格納庫へと駆け出す。ここに来るまでに、現在のガンダムの改装状況は聞き及んでいたの、この目でしっかりと見ておきたいと思っていたのだ。格納庫に入ると、すぐにその姿が飛び込んでくる。

ガンダムは、その装甲を殆ど外され、骨格が剥き出しの状態となっている。あまり技術的な事は詳しくないものの、骨格から全て作り直すような話は聞いていたので、中々見れないモビルスーツの骨格姿に目を輝かせていた。

「ご苦労様です、少尉。現在、新素材を用いた骨格に作り直す所です。」私の元に近付いてきたのは、整備服を着たメカニックマンだった。口振りからして、今回ガンダムの改装作業において現場のリーダーとなるような人物だろう。私より一回り年上くらいだろうか、若々しい中にも確かなベテランの風格を感じさせてくれている。

私は小さく頭を下げた後に、すぐに質問を投げかけていった。

「その、新素材って言うのは……やっぱり、サイコフレーム？」

「ええ、その通りです。元々はコックピットブロックのみに試験的に組み込んでいましたが、今回は全身のフレームに組み込んでみようと考えています。」

「ぜ、全身に……っ。」

正直、説明だけでは想像がつかない。全身にサイコフレームを実装すると、どうなってしまうのか。私はつい、骨格が剥き出しとなっているガンダムを見上げてしまった。

勿論、テストパイロットなのだから乗りこなしてみせるのは言うまでもないものの、もっと詳細に知らなければならぬと感じ、そのま

まの状態でメカニックマンへと話しかけていく。

「……その、サイコミュ兵器が私の感応波とリンクして、ファンネルを動かせるのは…理解してるけど…。つまり、私の思考が…全身にそのまま働くって事…?」

「概ねその通りです、少尉。ただ、我々も初めての試みとなりますので、少尉の協力は不可欠です。」

聞いてしまえば簡単な話ではあるが、実際に動かしてみないことは、やはり想像がつかない。言うなれば…フルサイコフレームとでも名付けるのだろうか。誰もが未知の領域に足を踏み入れようとしている中、私の操縦に全て懸かっているというのは、中々のプレッシャーを感じてしまう。

だが、彼を始めとするメカニックマンや技術者達は、このガンダムを真剣に作り上げている真っ最中だ。その努力が実を結ぶように、私は私に与えられた任務を全うするまで。

「ちなみに、稼働出来るようになるまではどれくらい掛かりそうなの?」

「既に追加装甲や武装については、別の部署で製造中です。あと2週間もあれば、この機体を稼働状態まで持っていける見込みですよ。」

「……了解。」

2週間…長いようで短いような、なんとも言えない日数を言われ、私はとある不安のような胸騒ぎを覚えていた。

海賊に襲われた時点で、ガンダムの情報は外部に漏れていた。それはつまり、こちら側に内通者が居る可能性があるという事。また海賊や犯罪組織に襲われ、ガンダムを鹵獲されてしまう恐れだつてある。それは絶対に防がなければならぬので、何か使える機体があれば…と、思わずにはいられない。そんな私の複雑な表情と雰囲気を感じたのか、メカニックマンの彼が気遣うように言葉をかけてくれる。

「…我々も全力で、迅速に作業を進めます。少尉には、なるべく早く乗っていただきたいですから。」

「…ありがと。」

私は、短く感謝の言葉を述べて、彼に頭を下げていく。願わくば、こ

の2週間の間に襲撃がない事を祈るしか、私には出来なかった。

※

聴取室生活から解放されたと思いきや、今度はグラナダで似たような生活を強いられている。と言っても、グラナダの方が幾分か気が楽だ。

「兵装に関してはヒーリングガンダムを参考に、そしてサイコフレームの力を十二分に発揮出来るよう、このように現在進めている最中です。いいですか、少尉?」

「了解です…。」

私は現在、グラナダの施設内にある会議室に缶詰め状態となっている。ガンダムの改装が終わるまでの間に、主要となる武装面の説明や、どのように機体のバランスが変わる予定なのか、またサイコフレームの基礎知識についても講習が繰り返されている。講師役は、私の上司となるウォルドさんだ。

彼の説明はとても分かりやすい。サイコミユ兵器やサイコフレームの知識に疎い私に合わせて、噛み砕いて教えてくれたりする。だが、とにかく覚える事が多いので、頭がパンクしそうだ。元々座学というものは好きではない方なので、これが講師役が彼でなかったら眠ってしまったらだろう。私はブラックコーヒーを一口飲み、部屋の大型モニターに再び視線を向けていく。

「ウォルドさん、このスラスターの推力に対して…普通のパイロットスーツで耐えられるんですか?」

モニターに映し出されている改装後の予定スペックを眺めながら、私は率直な疑問を彼へと投げかけてみる。私の質問に対して、彼はモニターを操作して次のスライドを私に見せてきた。私の疑問の答えは、どうやら既にあるらしい。

「こちらです、少尉。ガンダム専用のパイロットスーツも現在開発中で、機体よりは先に出来上がる予定です。見た目はあまり普段のものと変わりませんが、耐G負荷軽減性能を重点的に強化させています。」

「へえ……。」

デザインは、確かに普段着用しているパイロットスーツとあまり変わらない。色が白になっていたり、細部の形が少し違うだけで、どうやら中身が全く別物のようだ。これも実際に着用してみない事には分からないものの、私の不安が一つ減ったので安堵の息を漏らしている。

実際には、どれくらいのGが身体にかかるのかも、私がテストを重ねていってデータを得る事で分かるので、パイロットスーツの性能もそれに合わせて改良していくのだろう。一層、気を引き締めないと。

「…では、休憩にしましょうか。」

「はい、ありがとうございますっ。」

かれこれ、講習も1週間が過ぎた。そろそろモビルスーツを動かしたい欲に駆られていくものの、シュミレーターを動かす事しか、ここでは許されていない。そんな私のフラストレーションも理解してくれているようで、時計を眺めながら彼が休憩を提案してくれた。私はつつい弾んだ声で返事してしまったが、私の分かりやすい態度を怒る訳でもなく、彼は笑って頷いてくれている。そういう所は、私にとって有り難かった。

部屋を出て廊下を真っ直ぐ進み、角を2回程曲がった先には、喫煙スペースがある。私は迷わずにそこへ入っていくと、懐から煙草のケースを取り出し、1本手に取ってライターで火をつけていく。私の好きな銘柄は、割と辛味を覚えるくらいのキツめの煙草だ。だが、このくらいの方が頭がスッキリとして気分が良い。ゆつくりと口に啜えて蒸かしながら、煙を吐いて宙を眺めていく。

「あつ、お疲れ様です少尉。」

と、一人ぼっちの喫煙所の中に、見知った顔が入って来た事に気付く。声をかけられると、其方に顔を向けた。

「…お疲れ様。ガンダム、どう？」

そこに居たのは、ガンダムのメカニックチームのリーダーだった。彼も煙草を取り出しながら、私の問いかけに微笑みながら答えてくれる。

「ええ、順調です。皆の頑張りのお陰で、あと3日もあれば稼働出来るんですよ。」

「そんなに短縮したの…っ？皆、ちゃんと休んでる？」

あと1週間の所を、3日にまで縮めるというのは、物理的に出来るのだろうか。そんな疑問を抱きながら驚きの表情を浮かべる私に対して、彼も煙草を軽く蒸かしてからにこやかに口を開く。

「実は、チームの人数を更に増やして、3交代制で24時間作業にかかってるんです。それで何とか縮める事が出来ました。」

「…ありがとね。」

まさか、そんなにグラナダの職員がガンダムにリソースを割いてるとは初耳だった。確かに、それだけ日夜問わず作業を続けられるなら、ここまで日程が短縮出来た事も納得していく。それと同時に、彼らの頑張りを無駄には出来ないという気持ちが大きくなり、今度は私がちやんと仕事を果たす番だと意気込んでいく。

本当なら作業を進めているメカニックマン全員に労いたい所ではあるものの、今は皆を代表して彼へと感謝の意を表していき、お互いに目を細めながら笑い合った。

「さて、と…では格納庫に戻ります。」

「ん…、頑張つて。」

彼は一足先に、煙草を1本吸い終わった所で襟を正し、喫煙所を出て行った。私もそろそろ戻ろうかと思ひ、吸い終えた煙草を口から離し、灰皿に押し付けて火を消していく。最後に灰かに香る煙草の匂いと、喫煙所の扉を開いた事が入ってくる新鮮な空気とが入り混じり、私は現実へと戻されていった。

※

悪い予感というものは、つくづく馬鹿に出来ないと感じていく。『空襲警報、空襲警報ッ！作業員は、直ちにシェルターへ避難して下さいッ！』

それは、ガンダムの改装作業も大詰めを迎えている時だった。

突如として工場内に響き渡る、緊迫したアラート音とアナウンスの声。グラナダ工場内が、混乱と悲鳴の渦に巻き込まれていく。建物の外では、ミサイル攻撃が着弾したと思われる爆発が何度も繰り返し聞こえてきていた。

「くそ……！」

時間帯にして、日付けが変わった深夜での奇襲攻撃。私はベッドから飛び起き、悪態を吐きながら下着姿から素早く着替え始め、パイロットスーツに身を包んでいく。先に完成していた、ガンダム用のスーツだ。ファスナーをしつかりと閉じ、ヘルメットを手につくと、部屋を飛び出して格納庫へと駆け出していく。状況を把握したい所ではあるものの、十中八九狙いはガンダムだと思いながら、せめて動く事を願わずにはいられない。

格納庫に到着すると、この空襲の中メカニックマン達は作業を続けていた。その光景に一瞬目を見開きながらも、ガンダムの足元に佇むウォルドさんを見つけ、すぐに駆け寄っていく。

「ウォルドさん、状況はっ!?!」

私の声と足音に気付いた様子で、彼はこちらに振り返りながら、緊張の色を滲ませた表情で口を開いてきた。

「少尉、現在所属不明機多数からの攻撃を受けている所です。モビルスーツだけでなく、艦砲による攻撃も…。恐らくは…また海賊かと。」
海賊。また奴らがガンダムを狙ってやって来たと言うのか。確かに、母艦は取り逃したので再度襲撃される事も頭の片隅にはあったが、それにしても月面の工場に直接手を伸ばすなど、そんな無鉄砲なやり方が罷り通るのだろうか。ルナツーの連邦軍も黙っていないだろう。

だが、現にこうして今は一方的に攻撃をされてしまっている。連邦軍のパトロール艦隊が到着するまでの時間を稼がなければならない。やるべき事はハッキリとしていた。

「そんな……、守備隊はっ、ガンダムはどうなんですか?」

「ジエガン部隊が防戦に出撃していますが…こちらは5機。対する海賊は、こちらの倍以上…確認されているだけでも、15機の熱源を感

知しているようです。」

圧倒的に不利な戦況に、私は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、拳を握り締める。こうなれば、ガンダムを出すしかない思いながら、すぐにコックピットへとリフトを使って上がろうとしていく。

だが、その前に彼に制止されてしまった。

「ウォルドさん…行かせて下さい…！」

「ダメです、少尉…っ。装甲は装着されていますが、まだ細かな調整が済んでいません。少尉は、コックピットで待機ですっ。」

彼の言葉を受けて、複雑な心境になるものの、少しばかり光が見えたような気がした。言い換えると、それは最後の調整が済めばガンダムを動かせるという事でもある。それくらい、ほぼ作業が済んでいる事を窺い知る事が出来た。

ガンダムは元々の灰色の配色から、青と白のカラーリングに変更されている。これは私の提案で、きちんと反映してくれた事に内心では嬉しくなっていく。これが有事の状況でなかったら、もつとゆつくり喜びを噛み締めていたのだが、今はそんな事は言っていられない。

今も忙しなく、メカニックマン達がガンダムの周囲を行ったり来たりと動いている。私も、彼らを信じるしかない。

「……分かりました…っ。」

私は彼を真っ直ぐに見つめながら、しつかりと頷いていく。初期設定も改めてやっておかなければいけないと思いながら、リフトを動かしてコックピットへと上がっていく。

既にハッチは開いており、すぐに私はシートに座り込んでヘルメットを被り、ボタンを押してハッチを閉じた。全天周囲モニターのスイッチを入れると、格納庫内の様子がぐるりとモニターに映し出されていく。次に、コンソール画面を操作しながら初期設定の項目を押して、現在の設定を確認している最中、再びミサイルが工場付近に着弾して轟音と振動が響いてきた。

「ッ……、好き放題やりやがって……！」

元々襲撃など想定していないようで、防空能力というものは無いに等しい工場施設だ。迎撃に出ているジェガンが全てらしく、艦砲射撃

やミサイルの波状攻撃はやられ放題である。狙いがこのガンダムである以上は、この格納庫への直撃は避け、私達を無力化して奪う事だろう。一刻も早く出撃しないと、どんどん工事への被害が拡大してしまうと、私は焦燥感に駆られながら舌打ち混じりに設定を済ましていく。

出撃許可が下りたのは、それから30分程経ってからの事だった。『少尉、スラストとバランス、サイコミュ受信装置の調整が完了しました。ですが、まだテストすらしていない機体です…くれぐれも無理はしないように。』

ヘルメット内のスピーカーから、通信を介してウオルドさんの声が響いてくる。私も通信を繋ぐスイッチをONにしてから、「了解」と短く返事をした。

『向かって右のブロックに移動して、武装の換装を済ませた後に、カタパルトで出撃して下さい。君の無事を祈っています。』

それだけを言って、彼との通信は切れた。これで全ての作業が終了したので、メカニックマン達も順次格納庫から移動してシエルターへと退避していくのが見える。後は、私が海賊を撃退して皆を守る番だ。

ガンダムを操縦し、ゆつくりと脚を動かして歩き出しながら、指示の通り格納庫の隔壁を開いて右ブロックへと進んでいく。その先は、巨大なロボットアームが左右に備え付けてある場所で、所定の位置に機体を移動させると、ガンダムの為に製造された武装がロボットアームを介して姿を現した。

右側から現れたのは、ジエガンやジムIIIといった量産型の装備するものより一回り大きなビーム・ライフル。左側からは、専用の白いシールドがそれぞれアームによって伸ばされてきて、機体のオート操縦によってマニピレーターが自動でライフルを握り、シールドが左腕に装備されていく。これで、準備は整った。更に機体を進めていき、カタパルトに両足を乗せて固定させると、自動で格納庫のハッチが開放されていき、外の景色がモニター越しにハッキリと見えてきた。IFFの反応を見るに、既にジエガン部隊の何機かは撃墜されて

いるようで、此方が完全に劣勢となっている。ぐずぐずしている暇はないと、機体の姿勢を少しだけ屈ませ、発進態勢を整えた。

「…シーナ・ランチェスター…ガンダム、行きますっ。」

操縦桿を思い切り前に突き出し、カタパルトを射出させていくと、瞬間的にかかる加速Gに少しだけ表情を歪ませながら、月面へとその身を飛翔させていく。カタパルトから射出された後に、ペダルを踏み込んでスラスターを全開にさせていくと、更に凄まじい加速Gが私の身体に負荷をかけていく。明らかに改装前よりも推力が上がっている事を体感していきながら、然し身体への負荷はそれ以上のものを感じる事は無かった。

「凄い……………」

私はボソリと独り言を呟く。ガンダムの見違えるような運動性能もそうだが、パイロットスーツの耐G負荷軽減装置の凄さに言葉が自然と漏れてしまっていた。これなら、より操縦に集中出来る。

と……その時だった。私の頭の中を擦るような、微弱な電流が駆け抜けていったような、そんな感覚を感じ取ると同時に、操縦桿とペダルを無意識に操作していく。次の瞬間、機体の側をビームの閃光が過った。

「ッ…………。よし…………！」

今の感覚は、フィン・ファンネルを操作したあの感覚に似ていた。姿勢制御しながら見据えた先には、ザクイーイーやバウ、ドライセン、ギリ・ドーガなどの、恐らくは鹵獲したであろうネオ・ジオンのモビルスーツで押し寄せる海賊達の機体が飛び交っている。

私の存在に気付いた海賊達は、生き残っているジェガンへの相手を程々に、ほぼ全機でガンダムに向かって迫ってきた。半包围して捕えるつもりなのか、それとも罠り殺しにするつもりなのか。どちらにしても、私は全て撃ち落とすのみだ。

「…そこッ！」

1対13。圧倒的劣勢。四方八方からビームやミサイルが放たれるものの、持ち前の勘の良さに加えて、サイコミュによって敵意を敏感に感じ取れる今の私には、海賊達の攻撃を避けられるという“確信

“が芽生えていた。小刻みにスラスターを噴射して姿勢を絶えず変え、ギリギリの位置でビームを避け、ミサイルを頭部のバルカン砲で迎撃していく。攻撃を掻い潜り、まるで背中にも目があるかのように回避していく最中、射線を確保してビーム・ライフルを構えていく。トリガーを引いた瞬間、機体に射撃の反動を感じる程の高出力のビーム砲が放たれ、1機のバウに攻撃が命中していく。それだけではなく、ビームは機体を貫きながらも尚減衰する事なく宇宙を駆け、その後ろに居たギラ・ドーガにまで命中したのだ。2機のモビルスーツは、その圧倒的な火力を受けて胴体が真っ二つとなり、直後に爆発して機体が粉々に散っていった。

「…凄い…っ、これ…。」

このガンダム専用に作られた、ハイパー・ビーム・ライフル。その威力は正に桁違いと言う他無い。今度は真後ろからビーム攻撃がやって来ると、またあの頭に閃光が走るような感覚に襲われ、スラスターを噴射しながら緊急回避をしていく。それと同時にビーム・ライフルを構え、私は再びトリガーを引いた。

普通のモビルスーツでは出来ないような挙動と姿勢制御、細かなスラスターの噴射の連続に、動揺を見せていたのは海賊達だった。私のビーム攻撃を避ける暇もなく、ビーム砲がザクIIIIのコックピットに命中し、胴体を裂かれながら爆発していった。これで、残りは10機。

私は無意識の内に行っていたが、これがフル・サイコフレームの恩恵である。敵意を受信し、攻撃を避け、私の思考を駆動系にダイレクトに伝播させ、機体制御と私の意識を融合させていく。正に、人馬一体という言葉その通りとなっていた。

「待ってて…今助けるよ…。」

今度はこちらが仕掛ける番だと言うように、再びペダルを踏み込んで操縦桿を最大に押し込み、スラスターを全開にして凄まじい加速を海賊達に見せつけていく。前方から迫り来る敵の攻撃を簡単に避けながら、半包围されていた中を強行突破し、その向かう先には生き残りのジェガン2機が居た。彼らはバウ2機に足止めされているよう

で、このままでは撃墜されてしまうだろうと見て取れた。

そのまま一直線に突貫していくと、ハイパー・ビーム・ライフルを背面腰部に装着して仕舞い込み、空いた右手をファンネルラックへと伸ばしていけば、ラックの装甲の一部が開き、中からビーム・サーベルの柄が飛び出てきた。マニピレーターで握り締めて振り抜くと、ビームの刃が展開されていき、敵がこちらに気付く頃には既に目と鼻の先までガンダムが迫っていたのだった。

「もらった…ッ！」

速度を維持したまま、ビーム・サーベルを横一閃に振り抜く。バウは分離する暇もなく、胴体を真つ二つに斬られて程なくして爆発した。私はそのままの勢いで、もう一機のバウへと急襲していく。

流石に隣で襲われた様を見て、ジエガンから意識を私の方に向けてきたのが分かり、向こうもビーム・サーベルを展開して同じように振り抜いてきた。それに合わせるようにこちらも振り抜くと、お互いのビームの刃がぶつかり合い、鏝迫り合いとなりながらビームの閃光が迸る。

『ガンダムを奪えば、たんまりと報酬がもらえんだ！大人しくやられてろよッ！』

「はあっ？…ふざけんなよ、海賊風情が…ッ。」

機体同士の距離が密接した事により、ミノフスキー粒子の影響も薄れ、敵との通信が繋がる。そこで聞こえてきたのは、報酬という言葉だった。

私はそこに引つ掛かりを覚えたものの、今は命のやり取りをしている真つ最中。余計な事を考えている余裕はない。鏝迫り合いとなっている状態で、私は自身の思考をサイコフレームへと伝えていき、直後ガンダムの右脚が大きく動いてバウの胴体を横から蹴り飛ばしていった。

『がっ、あ…ッ…!?お、女の…癖に…ッ!!っ?』

最後に聞こえてきた、女だからと甘く見ている発言に、私は怒りを覚えていく。それ自体がサイコフレームにも伝播していくと、衝撃を受けてよろめいているバウに対し、ビーム・サーベルを大きく振り

被った。

「墜ちろッ!!?」

怒りをぶつけるように言葉を吐き捨て、それと同時にビームの刃が一直線に振り下ろされ、バウの頭部から股までを一気に切り裂いていく。縦に真つ二つとなった機体は、少しばかり火花を散らして宇宙を漂った後に、私の目の前で爆発した。女を甘く見た報いだと、私は内心蔑んだ眼差しで爆発の光を見つめていく。

『あ、ありがとうっ、助かった…!』

目の前の脅威が一旦去った事で、近くに居るジエガンのパイロットから通信が入った。声からして私よりは年上の男性だが、そんな事はお構い無しに指示を飛ばしていく。

「動けるなら退避してっ、後は私が受け持つから!」

それだけを言い残すと、ビーム・サーベルをファンネルラック内へ再び格納していき、スラスターを全開にして海賊達の只中へ向けて突撃していく。

後方を一度だけ確認すると、2機のジエガンが戦闘宙域から離脱していく姿が確認出来た。私はホッと安堵の表情を浮かべながらも、すぐに意識を正面に向けていく。残る敵の数は、モビルスーツが10機に、その母艦が1隻。推進剤も大型化した専用プロペラントタンクを装備している事で、戦闘中に切れる心配はない。後は、私の体力と精神力の問題だ。

「まだ…行けるよ、ガンダム…!」

自分を奮い立たせるように、操縦桿を握り締めて独り言を呟いていく。腰部からハイパー・ビーム・ライフルを再び取り出して構え、いつでも撃てるようにトリガーへ指をかけた瞬間、この戦況が一変する出来事が起きるのだった……

第3話 『誕生』

「これはこれは、ようこそおいで下さいました閣下。社員を代表して、深く感謝を申し上げます。」

「ふん……。これも私の仕事だ、貴様らとの繋がりを密にせねばな。」

ここは、月面都市フォン・ブラウンに根差すアナハイム・エレクトロニクス本社。社長室の中には、アナハイムの社長と向き合っソフアーに腰掛ける、桃色の髪を靡かせたスーツ姿の女性が居た。

彼女の名は、カトレア・ペンタス。小惑星イサベルのネオ・ジオンを率いる指導者である。両者がこうして対面で会う事は、今回で2回目だった。

「貴様らの力もあり、我がキュベレイは完成した。礼を言うぞ。」

私は腕を組みながら、僅かに目を細めてアナハイムの社長を見つめる。私の感謝の言葉に対して、恰幅の良い社長は満面の笑みを浮かべながら、仰々しく言葉を返してくる。

「いえいえ、とんでもないっ。閣下の助けになるのでしたら、この程度の事など朝飯前で御座いますから。」

この言葉を受けて、私もフツ…と笑みを浮かべるのみに留め、小さく頷いていく。調子の良い事を言っているが、この男は我々との繋がりも保ちつつ、連邦軍にも多大な支援を施しているのだ。正に企業利益を優先する思考、狡賢いやり方だと感じていくが、その強かさは個人的に嫌いではなく、寧ろ参考にしたい程だった。

愛機であるヤークト・キュベレイは、ベースとなったオリジナルのキュベレイを継承しながら進化を果たした機体である為、大部分はイサベル内のモビルスーツ建造工廠で製造する事は出来ていた。然し、ゼータ・プラスの主兵装であるビーム・スマートガンの流用や、サイコフレームの導入と調整等、アナハイムの知恵と技術を借りた事でより完成度が増した事は事実であり、資金面の支援についても大いに助けになっているのである。

何故こんなにも我々に肩入れをするのか、その理由を問う事はしない。イサベルのネオ・ジオンは大いなる目的の為に軍備増強が必要で

あり、アナハイムにその分の見返りを支払う事で、武器や弾薬、モビルスーツなどの軍需品を流してもらっているのだ。今はこの関係性が保てるのであれば、それ以上余計な詮索はする必要がない。私はそう判断しながら、ソファアールから立ち上がっていく。

「おや、閣下。もう行かれるので？」

「ああ、次の作戦があるからな。今後よろしく頼むぞ。」

私の言葉を受けて、アナハイムの社長は深々と頭を下げながら私を見送った。それをチラリと横目で眺めつつ、ヒールを鳴らして社長室を後にしていく。次の作戦の為に、イサベルへと戻らなければと思いつつ、その姿はエレベーターの中へと消えていった。

※

遙か彼方から、ビームの閃光が無数に放たれ、其れは薙ぎ払うように海賊達のモビルスーツを次々に喰らっていった。

「ツ——!?!、これって……。」

私は呆気にとられながら、ガンダムのコックピット内でその光景をただ眺めていく。ビームの威力、そして軌跡の長さから、これは艦砲によるビーム攻撃だとすぐに分かった。このマゼンタ色のビームは、連邦軍のビームの証。識別信号を確認すると、これは馴染み深いルナツーからの警戒パトロール艦隊の識別だ。そして、呆気にとられているのは、海賊達も同じのようであった。

正に一瞬の出来事……海賊達に回避行動を取る余裕は無く、初撃の奇襲だけで5機のモビルスーツが爆散した。迎撃しようと此方へのロックを外し、攻撃が来た方向へと皆機体を向けていくものの、次の艦砲射撃は海賊達のモビルスーツには向けられず、別方向に放たれた。その軌跡の先には、海賊達の母艦がある。緊急回避を試みようとしていたようだが、安易と逃す程連邦軍は甘くはない。数多のビーム砲が降り注ぎ、艦の側面や主砲に当たっていくと、最後はメインエンジンの直撃して母艦が内側から爆発していった。爆発の衝撃波がある程度距離のあるこの場所にまで及び、機体が僅かに軋むのが分かる。

る。

さあ、残りの5機は私が始末しようか。

「余所見なんて…ッ！」

運が良いのかどうなのか、全機連邦軍の増援に意識を向けている。ガラ空きとなった背に向けて、私は思考を飛ばしてファンネル達を一斉に差し向けていく。

「行け、フィン・ファンネルツ。」

6基のフィン・ファンネルが次々と海賊達のモビルスーツに襲い掛かり、ビーム攻撃が四方八方から撃ち込まれていった。直ぐに反応して回避する機体も居れば、反応が遅れて頭部やコックピットに直撃し、爆散していく機体も居る。自分で手を下している筈のだが、自分では直接的に手にかけている実感が無い所に、私はサイコミュ兵器の空恐ろしさを感じてしまう。オールレンジ攻撃を掻い潜り、隊長機と思われるギラ・ドーガが、此方へ肉薄しようとして一直線に突っ込んで来た。

『この、化け物め…ッ!!?』

ノイズ混じりではあるものの、敵のパイロットの吐き捨てた言葉が通信を介して響いてくる。この私が、化け物?と、思わず首を傾げてしまいたくなるが、向こうからすればファンネルが如何に脅威であるかの現れであろう。なら、化け物らしく引導を渡してやるまでだ。

「墜ちろッ!!?」

ハイパー・ビーム・ライフルのトリガーを引き、高出力のビームが放たれると、ギラ・ドーガの右腕に直撃して小さな爆発が生じた。突貫してきた敵の勢いは、此方の攻撃を受けた事で殺されてしまい、体勢を崩して無防備な姿を一瞬晒している。その一瞬こそが、正に命取りとなるのだ。

ライフルの攻撃が本命ではなく、真の狙いは確実に敵にトドメを刺す事。今度は此方がスラスターを全開にして一気に距離を詰めていき、左腕をファンネル・ラックへと伸ばしてビーム・サーベルを引き抜くと、勢いそのままにギラ・ドーガのコックピットへとサーベルを突き刺した。

ビームが機体の装甲を溶解させていき、バチツ、バチツ、と火花が飛び散りながら、一瞬だけ聞こえた敵のパイロットの断末魔は、瞬間にビームの中に溶けていってしまう。そして、ギラ・ドーガの胴体を蹴り飛ばしながらサーベルを引き抜くと、程なくして最後の1機も目の前で爆散していった。

「はあっ……はあっ……、ほんつと……勘弁してよね……ッ。」

ヘルメットのバイザーを上げ、滴る汗を指で拭っていきながら、殺した海賊達へと言葉を吐き捨てていく。全く、グラナダ工場を直接狙って襲撃して来るなんて、普通の神経とは思えない。これが普段使っているジムIIIだったなら、私が殺されていたかもしれない。ただだけに、ガンダムの性能に今回も助けられたと感じていく。

『聞こえるか、少尉。生きてるか?』

「ッ——！は、はい、無事です！」

突如としてヘルメット内のスピーカーから響いてきた聞き馴染みのある声に、私は直ぐに反応を示して答えていく。この通信相手は、私が所属する警戒パトロール艦隊のモビルスーツ隊を指揮する隊長：私の上司の声だ。余りにもここ数週間で目まぐるしく事態が変わっており、このハキハキとした声も随分と懐かしいような印象さえ受けてしまう。

『それなら良かった、周囲の索敵と警戒は我々が引き受ける。お前は工場に戻れ。』

「はっ……、了解です。」

短いやり取りで通信は終わったが、私は励まされたように感じ、活力が戻ってくるのを体感していく。人の言葉というものは、何とも不思議な力を持っているものだ。隊長の言葉が終わったと同時に、私の眼前にはクラップ級が数隻現れ、続々とジムIIIやジェガンが進進してはこの宙域の警戒活動を開始したのが見える。これでようやく戦闘が終わったのだと、肩の荷が降りたように息を吐いた。

私はこの場を警戒パトロール艦隊へと引き継ぎ、ガンダムと共にグラナダ工場の格納庫へと帰還していく。

「まずは……シャワー浴びたいな。」

※

グラナダ工場襲撃事件から、早2週間が経過した。その間、連邦軍が常に警戒活動が続いているおかげか、海賊達からの攻撃は無く、その姿も現れなくなった。だが、ガンダムが存在している限り、隙を見て襲撃される事は想定しなければいけない。

新型ガンダムのテストパイロットであるシーナ・ランチェスターは、上司であるウォルド・シャウラと共に、ある場所に訪れていた。此処は、連邦軍の宇宙拠点の一つであるルナツー。その中の司令官室に、揃って出頭して話を受けている。

「シーナ・ランチェスター少尉、ウォルド・シャウラ技術顧問。君達と技術チームには、ある任務に就いてもらう。」

司令官の話を受けて、つい2人揃って顔を見合わせてしまう。このタイミングで私達に任務と来れば、ガンダムに絡んだ一連の襲撃事件についての任務ではないかと、容易に想像がつく。だが、ルナツーの司令官が続けて発した言葉に、私達は目を見開いて驚いてしまった。「参謀本部からの情報によれば、ネオ・ジオン残党が大規模攻勢を仕掛けてくる可能性がある。一連の海賊組織による襲撃は、作戦を遂行する為の目眩しだったようだ。そこで、君達ガンダムチームにはロンド・ベルの部隊に帯同してもらい、実戦でテストを実施しながら、ネオ・ジオン残党の作戦を阻止、殲滅を行ってもらおう。」

「……私は大丈夫です、が……」

まさかネオ・ジオンが絡んでいるとは思っておらず、驚きはしたものの、私は軍人なので直ぐに事態を理解して受け入れていく。敬礼をしながらも、民間人の立場である上司のウォルド・シャウラへと視線を向けてみる。アナハイム職員が連邦軍の作戦行動に常駐するなど、私自身は聞いた事が無いからだ。それに、身の安全が保障出来ない状況に身を投じる事に、彼は納得するのか心配になる気持ちもある。

だが、彼の返事は単純明快だった。

「了解しました、私もチームもご一緒させて頂きます。まだまだガン

ダムは調整作業の真っ只中ですからね。」

答えはYES。何の躊躇いもなく、彼はルナツー司令から告げられた突然の命令にも、穏やかな表情で即答していた。寧ろ私が動揺してしまつたくらいだ。

「さて、2人の意思も確認出来た所で……これが作戦命令書だ。君達が乗艦する事になる艦と、出港日が記載されている。所定の日時までにガンダムと物資の搬入を済ませてくれたまえ。」

私と彼は揃つて司令から命令書を受け取り、敬礼をした後に司令官室を後にした。目の前でいきなり読む程無礼でもなければ、速読出来る程命令書の中身が薄い訳でもない。これは自室でしつかりと目を通さなければならぬ重要なものだ。

2人揃つて廊下を歩いている最中、思わず私の方から彼へと疑問を投げかけていく。

「…シャウラさん、何で引き受けたの？民間人なんだから、別に拒否したつて構わないのに…。」

これは彼の意味を疑問視してしまう行為だが、私にはどうしても確かめておきたかった。危険を承知でこの作戦を引き受けた真意を。

「…私達は技術屋だ。未完成なモビルスーツを君に託す訳にはいかないのだよ、少尉。それに……、君に死なれたら寝覚めが悪いからね。」

彼は何かを言おうとして、然し言葉を飲み込みながらも、少し間を空けながら答えてくれた言葉を受け止めていく。私からすれば、彼は父親と言つてもおかしくない年齢だけに、娘のような年頃の私を氣遣つての発言だろうと感ずる。だが、彼の眼差しから感じるのは、それ以上に何か固い決意のようなものもあるように見えてならない。それが何なのか、私には察する事は出来ないが。

だが、これで私の疑問はある程度は晴れた。私は私のやるべき事をやるだけだと、気持ちを切り替えていく。

「…私が必ず皆を守るから。」

「ふふ、期待しているよ少尉。我々も全力で君をサポートしていくわ。」

私達は最後に笑い合いながら、グラナダへ帰る為の輸送機へと搭乗

しにスペースドックに向かった。

※

ラー・ネイジュ。

ロンド・ベルの艦隊を指揮する、ブライト・ノア大佐が乗艦するラー・カイラム級機動戦艦の姉妹艦であり、ラー・カイラム級の中では先日処女航海を終えたばかりの最新鋭戦艦だ。その艦は現在、ルナツのスペースドックに停泊中であり、シーナ・ランチェスター始め、アナハイムのガンダムチームが皆世話になる艦でもある。

命令書の通りに出航日前に、ガンダムと補給資材を艦に搬入を終えると、私は艦長室へと出向いていた。

「シーナ・ランチェスター、入ります。」

艦長室のドアをノックし、ボタンを押して扉を開き、中へと入室していく。ラー・ネイジュの艦長は書類を読んでいたようで、私が入つて来ると書類を机の上に置き、視線を此方へと向けてくれた。艦長が口を開くまで、私は敬礼をしながらジッと見据えていく。

「ご苦労、少尉。楽にしまえ。」

艦長の言葉を受けて私は敬礼を解き、足を揃えて直立になりながら机の前で佇んでいく。艦長も帽子を脱いで机の上に置くと、ウォルド・シャウラと同じくらいの年齢だと思えるような見た目と、顔に刻まれた皺、色素が薄くなつてきて白ずんだ金髪をオールバックで固めている髪が露わとなり、つい観察するように眺めてしまう。表情は柔らかいものの、その眼差しには年齢を感じさせないような強い意思、或いは威圧感のような凄みを感じ、自然と私の気も引き締まってくる。

「私の名はレイ・アンダーソン。このラー・ネイジュの艦長を務めている。君の力には期待しているよ、少尉。」

「はっ…、全力を尽くして任務を全うしますっ。」

口調は柔らかく、微笑みを浮かべながら告げられても、やはり背筋が勝手に伸びるような凄みが艦長から感じられる。艦長に選ばれる

という事は即ち、私には想像もつかない実績や戦績を積んで来たのだろうと容易に理解出来る。私の言葉も、自然と力が入ってしまった。

そんな私の様子を見てクスツと笑みを溢した艦長は、この艦について簡単に説明をし始めてくれる。各部署について、その位置関係について、搭載されているモビルスーツ部隊について：等。私はその中でも試作機で構成されたモビルスーツ部隊に配置されるようだった。

「聞いている通り、主力部隊はジェガン部隊となるが、君が所属する事になる部隊は、ある種実験的な意味合いが強い部隊だ。連邦軍内での次期主力モビルスーツ選定において、その評価試験も兼ねた実戦運用も我が艦は担っている。…これは余談だがね。」

艦長は、何処か困ったように笑みを浮かべている。そんな事情は確かに一兵士である私には関係の無い話ではあるものの、知っていて損はない。これから背中を預ける事になる部隊の内情は、これから先の戦闘において重要となるからだ。私は少しだけ笑みを浮かべながらも、艦長の言葉を遮らないように頷くだけに留めておいた。

「では、出航まで身体を休めておいてくれたまえ。…と、整備長が君に話があると言っていたな、最後にモビルスーツデッキに寄って行ってくれ。」

「了解しました…では。」

私は再度敬礼をした後に、一步下がってから踵を返し、艦長室を出て行った。整備長はまだ会った事は無いものの、モビルスーツデッキに行けば自ずと分かるだろうと思ひ、私は極低重力となっている艦内を、壁に設置されている移動用ハンドレバーを利用して素早く移動していく。

長い廊下を通過し、何度か曲がり角を曲がり、居住区画から鉄と油の臭いが漂うモビルスーツデッキに出た。扉を開いて中へと足を踏み入れると、既にメカニックマン達は整備作業や調整作業の真つ只中であり、皆ツナギをオイルで汚しながら忙しなく仕事をしている。工具の駆動音、ロボットアームの作動音、メカニックマン達の掛け声がデッキ内に響き、ある意味複雑なハーモニーを奏でていた。

「すみません、整備長って今何処に？」

私は手が空いてそんなメカニックマンを呼び止め、整備長の所在を訊ねてみる。彼は「あそこに居るよ。」と言いながら、ある人物を指差してくれた。

その人物は、メカニックマン達に囲まれつつも、携帯端末を手に機体の調整作業を行っているナイスガイな中年男性だった。並のパイロットよりも体つきが大きいので、それだけメカニックの経験が豊富なのだろうかと思わせてくれる。

「あの、整備長っ。」

私が側まで歩み寄り、割と大きな声を張りながら彼を呼ぶと、整備長は此方に振り向いてくれた。

モヒカンヘアーは中々の厳つきがあるものの、表情はとてもハンサムで爽やかな笑みを浮かべており、人の良さというものが滲み出ているようだった。

「おお、君があのだガンダムのパイロットか？話は聞いてるぞ、シーナ少尉。凄まじい活躍だったそうじゃないかっ。」

「あ、ありがとうございます……！」

丁度整備長と私は、ガンダムの前に立っている。整備長の言葉を受けながら、私はゆっくりとガンダムを見上げた。

私の力というよりも、正直な所を言えばガンダムの性能のおかげだと言うのが正しいだろう。素直に喜んでいいのか微妙な所ではあるが、私は一先ず感謝の言葉を返していく。

「それで、私に用件が……？」

「そうだった、少尉。コイツの名前を登録してもらいたいんだよ。」

コイツ、と言われて指を刺されたのは、ガンダムだった。私は「ああ……。」と、納得したように言葉を漏らす。

ガンダムとは、あくまでも通称に過ぎない。正式な名前でない、整備する側にとっては色々と不便な所があるらしい。仮に違うガンダムがこの艦で運用された場合、整備記録の照会や整備パーツの管理等、ごちゃ混ぜになってしまう危険性があると、整備長は語る。

「直ぐに決めるのが難しいって言うなら、考えてからでも構わないぞ？」

「……いえ、決まりました。」

私の即答に、整備長は一瞬目を丸くしながらも、次の瞬間にはまた朗らかな笑みを浮かべていた。すると、彼が手に持っていた携帯端末を私に差し出してくる。画面上では、機体名の部分が空欄となっていて、手入力で名前を打ち込む状態となっていた。私は端末を受け取ると、小気味良くガンダムの名前を入力していく。

「……これをお願いします。」

私が整備長に返した端末の画面には、『Luminous Gundam』と表示がされている。彼は何度か頷きながら、満足したような笑みを浮かべて登録を済ました。

「光の満ちるガンダム……。いいじゃないか、少尉。君が俺達の光になっってくれよ?」

「……はいっ。」

——この日、名もなき灰色のガンダムは、宇宙世紀の只中において、微かな光を齎すガンダムとして産声を上げたのだった。

第4話 『邂逅』

『少尉、もつと視野と意識を広く持て!』

「はあ…ツ、はあ…ツ、はい…!」

目まぐるしく変わる状況、モニターに次々に現れるモビルスーツが複雑な軌道を描き、模擬戦用のレーザーライフルでルミナスへと攻撃を仕掛けて来る。シーナ・ランチエスターが所属する、ラー・ネイジュ艦載の味方機達に揉まれる形で、暗礁宙域内で模擬戦闘訓練が行われていた。

「そこ…ツ!」

『甘い甘い!』

ルミナスも模擬戦用のレーザーライフルを装備しており、お互いに照射したレーザーはシールドで防ぎ合って決定打とはならず、スラスターを噴射して距離を取っていく。ガンダム1機に対して、向こうは8機。あまりにも不利な模擬戦だが、私の実力を測りつつ鍛え上げる意味では、この模擬戦を組み立ててくれた部隊長に感謝しかない。

『背後がガラ空きだぞ、そりゃツ!』

「チツ…!」

暗礁宙域という名の通り、大小様々な隕石デブリや、1年戦争の爪痕を残す戦艦やモビルスーツの残骸などが散らばっており、視界としては最悪と言っても過言ではない。真後ろにあったデブリの影から、1機のモビルスーツが飛び出してきてはビームサーベルを展開し、ルミナスの背中に向けて斬りつけて来た。

直ぐに此方も反応していくと、ルミナスの左腕部に内臓されているビームサーベルを抜き、振り向き様に左手で握られたビームサーベルで罅迫り合いの形になりながら受け止めていく。だが、これで終わりではなく、残る7機による波状攻撃はまだまだ続いているのだ。

「この……ツ!」

ルミナスの推力とパワーの高さに頼りながら、罅迫り合いとなっていた状態から押し切って機体同士の距離を取り、回避運動を繰り返す

ながらレーザーライフルの光線を掻い潜っていく。

が、そう長くは保たない。隊長機がデブリの影から出現した瞬間に気付いて狙撃したのはいいものの、その隙に別方向から放たれたレーザーの光線が、ルミナスの脚部にヒットしてしまった。これで、今日3回目の撃墜扱いである。

「はあっ……はあっ……、あー……もうッ。」

『ご苦労、少尉。一先ず母艦に帰投するぞ。』

「……了解。」

隊長の指示に、苛立ちを隠せないまま返答していく。模擬戦なのでファンネルが使えず、サイコフレームの機能を意図的に遮断している状態というハンデはあるものの、やはり負けるといえるのは正直悔しい。自分の力量がまだまだ Rond・ベル の中では下位なのだと思いきらされていく。

「……これが、精鋭の実力って奴か。」

私の呟きは、マイクを切っているので誰に聞かれるものでもなく、ヘルメット内をただ木霊していく。パイロットの練度の高さも勿論敬服に値するものの、加えて連邦軍の新型量産機のパフォーマンスには驚くばかりだ。

R G Z―94『プロトタイプ・リゼル』。連邦軍の次期主力量産型モビルスーツとして先行開発が進められている可変モビルスーツであり、その試験運用機としてロールアウトされた8機が、此処ラー・ネイジユに搭載されている。目的はルミナス同様、実戦でのデータを収集する事にあるようだ。本格的に量産体制に入る為に、どんなパイロットでも扱えるように操縦性やシステム面の調整等、この試験運用の8機から戦闘データをその都度吸い上げてアナハイムの開発部へフィードバックしているらしい。

可変機という事もあり、圧倒的な機動性に翻弄されてしまった模擬戦となった。私自身、可変モビルスーツとの戦闘経験が浅い事もあり、満足のいく戦い方が出来なかった不完全燃焼さもある。複雑な感情を抱きながらも、私の先に行くプロトタイプ・リゼル8機を後ろから眺めながら、私達の部隊は母艦であるラー・ネイジユへと帰還した。

『次、隊長機のラプター1が戻ってくるぞ!』

『メカニックマン、準備急げ!』

『もたもたすんなよ、まだまだ帰って来るんだからな!』

ラー・ネイジユのモビルスーツデッキでは、模擬戦闘訓練から帰還してきたリゼル達と、ルミナスガンダムを受入作業が忙しく進められていた。ガイドビーコンに沿って隊長機のプロトタイプ・リゼルがデッキ内に着地すると、スラスターを切って所定の位置へと機体を移動させていく。格納が完了してメカニックマン達が機体へと次々に集まっていくと、メインジエネレーターのスイッチが切られ、コックピットハッチが開放されてパイロットが中から出てきた。

『どうだった、隊長?』

真つ先に寄って来たのは、このラー・ネイジユのメカニックマン達を統率する整備長だ。整備作業は部下達が既に開始しているものの、自身は模擬戦での機体の使用感や不満点などを直接パイロットから聞き出そうとしている。

ノーマルスーツ越したが、きちんと音声はヘルメット内のスピーカーを通して聞こえているようで、隊長と呼ばれた男性が気さくに言葉を返していく。

『問題ない。反応も素直で扱い易いが、もう少しスラスターの推力とジェネレーターの出力を上げてほしい所だ。』

『おいおい……あんまり上げ過ぎたら、新兵には扱えないピーキーな代物になっちゃうぞ?』

『分かっているさ。だが今は……ネオ・ジオンと正面からやり合う事態も差し迫ってる。勝てるように調整してくれ。』

『……はいはいっと。全部のリゼルも同じく調整しとくよ、隊長。』

2人はニツとヘルメット越しに笑い合いながら、グータッチをするように拳同士を突き合わせ、それぞれその場から離れていく。隊長は艦長への報告の為にモビルスーツデッキから艦内通路へと入っていき、整備長は帰還したりゼル達の調整作業を部下達に指示を飛ばして、まるで戦時下のように迅速に作業が進められていった。

そんな最中、最後の1機がモビルスーツデッキに着艦しようとするアラーム音が鳴り響き、ガイドビーコンが放たれる。最後の1機は、シーナ・ランチェスターの操るルミナスガンダムだ。

『ガンダムが来るぞ、準備急げよ！』
『分かってますよー！』

整備長の言葉を受けて、ガンダムを担当するメカニックチームが受け入れ準備を整えていく。と、次の瞬間にはガンダムは無事に着艦し、ゆっくりと歩を進めながら割り当てられた格納スペースに収まっていく。リゼル達とは違い、フィン・ファンネルも格納出来るように、事前に増設工事がされてあるスペースなので、まず間違う事は無い。メインジェネレーターが切られてコックピットハッチが開放されると、中から華奢な女性パイロットが姿を現した。

『お疲れ様、少尉。』

『…どうも。』

『…そんな浮かない顔をするな、君の操縦センスは侮れないと隊長も言っていたよ。』

降りてきた私に声をかけて来たのは、このガンダムの開発主任であり上司でもあるウォルド・シャウラだった。互いにノーマルスーツ越しではあるものの、私の表情が分かりやすく曇っているのはハッキリ見て取れるらしい。

慰めと事実を織り交せて励まそうとしてくれるものの、やはり悔しいものは悔しいのだ。操縦センスが良くても、撃墜されてしまえばそんなものは無意味なのだから。今の私には、もつと腕を磨かないといけないという気持ち広がっていた。

『…ルミナスの調子は大丈夫、反応も良かった。サイコミュとサイコフレーム周りの調整は、今回の模擬戦じゃ何とも言えないけど…。』
『心配するな、少尉。君の戦闘データをこれから吸い上げて、それを基に我々が調整を施していくからね。』

私は彼の言葉を信じて頷いていく。私はテストパイロットとして、ルミナスの感触を素直にメカニックチームへと伝えなければならぬ。そして、彼らの仕事を信じて、私はルミナスに乗り続ける。これ

から始まる任務で、私達が作り上げて来たガンダムの力を以て、敵の作戦を挫かなければならない。どんな規模の作戦になるかは分からないものの、1人の軍人としてやり遂げなければ。

私はしっかりと頷くと、モビルスーツデッキを後にし、艦内通路へと入って自室へ向けて移動していった。

※

同時刻。暗礁宙域の只中に、隕石を改造したネオ・ジオンの秘密基地が存在しており、その中にはある作戦に向けた準備が進められていた。

「お待ちしておりました、閣下。」

「久しいな、大佐。」

漆黒のキュベレイが秘密基地内のドッグに入っていくと、中では熱烈な歓迎を受けていた。キュベレイから降りてきたのは、イサベルのネオ・ジオンを率いるカトレア・ペントスその人である。基地内の兵達は皆出迎えに来ており、中でもこの基地の司令官の男性は、満面の笑みで迎え入れてくれていた。

大佐と呼ばれるその人物は、元々はイサベルに身を置いていた人物だったが、この秘密基地を運用するにあたり必要な人材として派遣されているのである。こうして顔を合わせるのには、実に3年ぶりの事だった。

「で、作戦の進捗状況はどうか？」

「はっ…。現在特殊工作部隊が先行して、廃棄資源衛星の確保に動いております。しかし、連邦政府は果たして話し合いに応じるでしょうか…？」

「応じるさ…、自分達の保身しか考えられん腐った連中だからな。」

一抹の不安を過らせる大佐に対して、私は自信に満ちた微笑を浮かべながら語りかけていく。1年前に起きたシャアの隕石落とし、それ以前にも幾度も行われた戦争も、地球連邦政府の腐敗が大きな原因とも言える。地球に籠って甘い汁を啜る連中は、この地球圏にとって1

番不要な存在だ。私が次代の地球の支配者として、腐敗した膿をまずは出し切らねばならない。

最も分かりやすいやり方は、シャアのように地球を人の住めない星となるまで破壊するやり方だ。敢えて、私はこのやり方を踏襲するつもりである。勿論、本当に破壊してしまつては地球に住む人々の心を掌握する事は難しくなるので、脅しの為のカードであるが。

「艦隊の状況はどうか？」

「はっ、陽動部隊と実行部隊…共に出撃準備は整っております。問題は、ロンド・ベルがどう出てくるか…であります。」

「心配するな、陽動には私も出る。計画の邪魔はさせんよ。」

私の言葉に、大佐は何か言いたげな表情を浮かべている。わざわざ閣下自身が出撃なさらなくても…と、その目は私に語りかけていた。だが、その言葉が大佐の口から出る事は無い。彼はよく知っているからだ、私の実力を。

彼は次第に元の表情に戻っていくと、私を真っ直ぐ見つめながら次の言葉を口にした。

「では…廃棄資源衛星を確保次第、スパイを通して政府閣僚らにコンタクトを図ります。陽動部隊は、予定通り出撃させます。」

「ああ、任せたぞ。」

まだ作戦は始まつてすらいないが、確実に近付いて来ている。私が地球をこの手に掴むその時が。今はまだ、種を蒔いているに過ぎない。その芽が芽吹き、花が咲くその時を待ち侘びながら、私は大佐と共に秘密基地内の作戦指揮所へと向かつて歩いて行った。

さて、ロンド・ベルよ。私の計画を挫けるものなら挫いてみるがい。

※

U.C. 0094 2月2日。時刻にして深夜だが、艦内の全員が眠りに就いている訳ではない。ブリッジクルーム、メカニックマンも、パイロットも、皆交代で休息と仮眠を取りながら、通常警戒体制

で暗礁宙域内を航行している。ラー・ネイジュの通信オペレーターであるエヴァ・ヒギンズ少尉も、深夜帯での交代でブリッジに詰めているメンバーの内の1人だ。

現在ブリッジに詰めているのは、副長のエリス中佐、航海長のサンドラ少佐、砲術長のアレン少佐、そして私の4人。各々計器を確認したり、外の様子を時折眺めたりして過ごしている。無言という訳でもないが、仲良く談笑する事もなく、皆一様に緊張感を持ちながら席に座っていた。

「この辺りは1年戦争の名残が強い…、デブリに巻き込まれないように。」

副長席に座るエリス中佐の凜とした言葉が、ブリッジ内に静かに木霊する。操舵を担当する航海長のサンドラ少佐は、ただ静かに頷いていた。

副長の言葉に、私も視線を外に向けてみる。暗礁宙域というだけあり、確かにサラミス級やマゼラン級、ムサイ級の残骸があちこちに漂い、行手を複雑に阻むような印象を受ける。更には撃破されたモビルスーツのパーツや残骸も散らばっており、凄惨な戦闘を私達に訴えてきている。生まれた年が違えば、私もこの戦争の只中にあつたのかも知れないと思うと、背筋が凍るような思いに駆られてしまう。

「エヴァ少尉は、幽霊は信じるタチかい？」

砲術長のアレン少佐が、外の景色に目をやっている私に向けて話しかけてきた。一体何のことやら。

「さあ…どうでしょうか。幽霊より、人間の方が恐ろしいですよ。」

「ははっ、違うない。」

私より10コ程年上のアレン少佐は、笑みを浮かべながら頷いている。私の答えに満足したのか、それ以降は会話は無い。

幽霊は、正直信じていない。確かに、この暗礁宙域で戦死した人々の数は計り知れないので、霊が漂っていても不思議ではないと思える。だが、そんなものを気にしていたら仕事なんて出来ないのも事実。私が再び視線を通信計器に戻したその時だった……

「ツ——、レーダーに感あり！」

私の隣の席…センサー長が普段は座る計器に反応があった。私は直ぐに計器を確認すると、強い熱源反応が2つ。このパターンと識別信号は、ネオ・ジオン艦艇だと直ぐに分かった。私の叫ぶような声に、瞬時にブリッジ内に緊張が走る。

「エヴァ少尉、報告をつ。」

副長のエリス中佐が、私にレーダーが感知した熱源の詳細を訊ねてくる。私はセンサー長の席に移動してモニターを確認すると、ムサカ級2隻が暗礁宙域内を航行しているのが分かる。直ぐにその事実を、半身を副長へと向けながら報告していった。

「高熱源反応2…ムサカ級2隻です！距離10,000!」

私の報告を受けて、副長は直ぐに椅子に備え付けてある受話器を取ると、艦内スピーカーモードを押して声を張り上げた。

「総員、第1種戦闘配備ツ。繰り返す、第1種戦闘配備ツ。総員、ノーマルスーツ着用!」

因縁深い場所での遭遇戦は、静かに運命の日へのカウントダウンを刻み始める…。

※

「副長、状況は?」

副長による第1種戦闘配備発令のアナウンスから数分もしない内に、ノーマルスーツを着込んだ艦長のレイ・アンダーソンが、いの一歩にブリッジへと入って来た。まずは状況把握をと思い、副長のエリス中佐へと問いかけていく。

「はっ、艦長…。前方10,000の距離にムサカ級2隻を捕捉、距離を保ちながら出方を伺っています。」

「了解、ありがとう。」

丁度報告を受けている際にセンサー長もブリッジに入ってきたので、これでブリッジクルーは全員揃った事になる。副長からの報告を基に、瞬時に頭の中で遭遇戦のプランを組み立て、艦長は各員に指示

を飛ばし始めた。

「戦闘ブリッジに移行する。ミノフスキー粒子、戦闘濃度散布。エヴァ少尉、モビルスーツ隊の発進を急がせるように。」

艦長の言葉は丁寧で、且つ鋭さを持った、誰の耳にもしっかりと届く声量で、ブリッジクルーは各々がやるべき役割を果たそうと気を引き締めていく。

艦長からの言葉を受け、副長とエヴァ少尉がそれぞれ艦内の各部署へとスピーカーを起動して指示を出し始めていった。

「ミノフスキー粒子、戦闘濃度散布。対空戦闘、準備急げ！」

「ブリッジより、モビルスーツ隊各員へ。敵戦艦2隻を捕捉、モビルスーツ隊は順次発進せよ！」

艦内にアラート音が鳴り響き、各部署へと指示が飛ばされ、皆忙しなく行動を起こす。それは、モビルスーツデッキも同様だった。

メカニックマン達はジェガン部隊、リゼル部隊、そしてガンダムの発進準備に取り掛かり、パイロットは各々パイロットスーツを着込んで、コックピットへと乗り込んでいく。シーナ・ランチェスターも素早くルミナスへと乗り込むと、シートベルトを締めてメインジェネレーターを起動させ、モニター画面を映し出してから機体設定をコンソールパネルで確認していた。

「…今日も頼むよ、ルミナス。」

ガンダムが意思を持って何かアクションをしてくる訳ではないものの、既に2度の戦闘を経験して潜り抜けた相棒だ、親しみや情が沸くのも必然と言えるだろう。私はコンソールパネルから手を離し、操縦桿を握りながらそっと呟いていた。まだサイコミュを完全に制御出来ている訳ではないものの、そんな事は言っていられないので、今回もとにかく自分出来る最大限のパフォーマンスを発揮するのみだ。

私は一番ひよつ子なので、出撃の順番としては一番最後となる。モビルスーツデッキ内では、2つのカタパルトデッキに出撃準備が整った機体が移動していき、それぞれジェガン部隊とリゼル部隊が次々に出撃していくのが見える。

『よう、新入り。あんまビビんなよ?』

モビルスーツ部隊を纏める隊長機：リゼル部隊の1番機である、ジェラルド・ゴードン大尉の駆るラプター1が発艦し、残るモビルスーツも続々と出撃していく中、ラプター隊の8番機であるローマン中尉が軽口を叩いてきたのがスピーカー越しに聞こえてくる。模擬戦闘訓練では、ガンダムに肉薄してきて白兵戦を挑んできたパイロットだ。この調子の良い口調は、個人的には嫌いではなく、出撃前のピリついた神経を程よく解してくれていた。

「中尉こそ、無闇に突っ込んでやられないで下さいよ?」

『はっ…、言ってくれるじゃねーかよ。』

中尉は笑ってくれた。願わくば、お互いに無事に帰還出来る事を祈るばかりである。またこうしてふざけた会話が出来るように。

私の前を中尉のリゼルが発艦していき、いよいよ次のカタパルト射出は私の番となった。ガンダムをゆっくりと動かしていき、カタパルトに両足を乗せると、装置に機体がロックされた事がコックピット内のコンソールパネルに表示され、射出位置に自動で移動されていく。次いで、ブリッジから現在の状況についてリアルタイム通信が入り、正面モニターに通信オペレーターの顔が映し出された。

『シーナ少尉、現在我が艦はムサカ級2隻と睨み合っている状況にあります。本艦は、モビルスーツ隊発艦後に援護射撃を行います、モビルスーツ隊は上方から攻撃を仕掛けて下さいっ。』

ハキハキと喋る、とても可愛らしい子だった。こうしてブリッジクルーと喋るといのは実際初めてなので、通信オペレーターが自身と同じような年代の女の子だと分かり、私も少しだけ気持ちが悪くなつた。時間があればゆっくり喋ってみたいと、そんな事を思いつつ、私は「了解。」と、一言だけ返していく。

さて、発進準備は整った。カタパルトのコントロールは私に委ねられたので、ガンダムの姿勢を屈ませてから操縦桿を目一杯押し込み、声を張り上げた。

「シーナ・ランチェスター…ルミナス、行きますっ!」

カタパルトが勢いよく射出され、それに合わせて加速Gが一気に私の身体へと負荷を掛けてくるのを感じながら、少しばかり表情を歪ませて暗礁宙域へと飛翔していく。カタパルトデッキから射出されたガンダムは、メインスラスターとプロペラントタンクのスラスターを噴射し、先に出撃したりゼル部隊：ラプター隊に合流すべく、デブリ帯の海を掻い潜りながら上昇していった。

チラリ、と後方を確認すると、直掩部隊のジェガン数機がラー・ネイジュ周囲を警戒しているのが見えて、私は改めて意識を前方に向けていく。

『少尉、来たか。我々の役目は敵モビルスーツの注意を引き付け、母艦に近付かせない事だ。いいな、深追いは禁物だぞ。』

ラプター隊の後方に到着し、編隊を維持しながら合流すると、早速隊長からの指示が通信で飛んでくる。直ぐに返事を返しながら横に目を向けて見ると、直掩部隊とは違う攻撃隊に参加するジェガンの姿も確認出来た。彼らとはまだ直接的に接した事は無いものの、同じ味方として連携していきたい所だ。

その時だった。私の脳に何かが過ぎるような、電流のようなものを流されたような、以前も感じた事のある感覚が走った。そしてほぼ反射的に、デブリ帯に隠れて見えないラー・ネイジュへと視線を向けてしまう。次第に、この感覚が私に告げようとしている事が、徐々に脳内でハッキリと輪郭を帯びて見え出して来た。これは、攻撃を仕掛けるという意思のように見える。

「……来る、艦砲射撃が……」

それは、フルサイコフレームを介してサイコミュが受信した、明確な意識の形。ニュータイプとして目覚め始めた私に向けて、ルミナスは教えてくれているのだ。敵だけでなく、味方の意識までもを。

「主砲、発射用意。目標、右翼のムサカ。」

ラー・ネイジュのブリッジでは、シーナ・ランチエスターが感じ取ったその通りの動きが為されており、艦長の静かで厳かな命令がブリッ

ジ内に響いていく。復唱するように、艦長席の隣に位置している副長が、大きな声を張り上げて命令を飛ばす。

「主砲、発射用意。目標、右翼のムサカ！」

副長の命令に反応しながら、砲術長がコンソールパネルを操作し、ラー・ネイジユの主砲を操作して照準を定めていった。ミノフスキー粒子が戦闘濃度まで散布されている宙域内では、長距離によるレーダーのロックオン機能は使い物にならず、距離と動きを予測しながら手動で合わせて撃つしかない。故に、砲術長という立場は責任重大なのである。

照準を定めたアレン少佐が、コンソールパネルを見つめながら声を張り上げる。

「主砲発射用意、対空戦闘、共に準備よし！」

少佐の言葉を受けて、今度は艦長が張り詰める空気を震わせながら、鋭く檄を飛ばすように命令を下した。

「——撃ち方始めッ。」

※

「閣下、敵艦を捕捉しました。」

「やはりな…そろそろだと思っていたが。」

同時刻帯。暗礁宙域内を航行しているムサカの中では、ブリッジにて会話をしている人物が2人。片一方はムサカの艦長、そして隣に並び立つのはイサベルの権力を統べるカトレア・ペントス。2人が見つめるブリッジのメインモニターには、距離凡そ10,000の位置で航行している連邦軍の戦艦1隻が表示されていた。識別には登録されていないものの、姿形からラー・カイラム級機動戦艦である事は分り、つまりはロンド・ベル所属の艦艇だと推察出来る。

この時点で、カトレア・ペントスにはある程度の確信があった。例のガンダムが、あの艦に居るという事を。これだけ距離が離れていても、独特のプレッシャーを頭だけでなく全身で感じていたからだ。

「私が出るしかないかも知れん。ミノフスキー粒子散布と、モビル

スーツ隊の発進を急がせろ。」

「はっ…。閣下、どうかお気をつけて。」

艦隊の指揮は艦長に任せ、私はブリッジから出てモビルスーツデッキへと向かって通路を移動していく。その動きに合わせて通路で控えていた私の参謀であるギムレット・クルスが近付いて来た。彼の表情は普段と変わらず、何処か心配するような眼差しで私を見つめてくる。言いたい事は、口を開く前からある程度予想出来るだけに、私も緊張感を保ちつつリラックスした様子で彼の言葉を待った。「閣下が出撃なさらなくとも……。今回は陽動が主任務です。時間を稼ぐだけならば…。」

予想通りの言葉を受ける私の表情は、少しばかり変化を見せ、目を細めながら自信を覗かせる微笑を浮かべる。

「ギムレット……。お前はガンダムを侮っている。あれは、私でなければ相手は務まらないよ。」

ロンド・ベルの部隊だけなら、確かにムサカ2隻によるギラ・ドーガ部隊だけで相手は事足りるだろう。ましてや、今回は殲滅ではなく時間稼ぎだ、最後まで相手にする必要もない。

だが、向こうにはガンダムが居る。海賊達を退けてきた、確かな腕を持ったパイロットが操るサイコマシンだ。下手をすると此方の戦力を想定以上に削がれる事態になりかねないと、私は危惧していた。ならば、サイコマシンには同じサイコマシンで相手をしなければならぬだろう。私の言葉に、彼は渋々と言った様子で頷いていた。

「艦隊の指揮は任せるぞ、ギムレット。」

「はっ…。承知しました。」

私達は、その言葉を区切りとして、別々の方向に進んでいく。彼はブリッジに、そして私はモビルスーツデッキに。丁度その時、艦が大きく揺れるのを感じた。

『敵艦発砲、回避運動！』

アラート音に続き、ブリッジからの艦内アナウンスが響き、たった今艦砲射撃を回避した事が分かる。ロンド・ベルに先手を打たれた形になったものの、私は慌てる事なくモビルスーツデッキに向かって進

んでいく。敵との距離はまだあり、艦砲射撃が直撃する可能性は低いと分かっている為、心にも思考にもゆとりが持てる。

モビルスーツデッキに出る扉を開くと、デッキ内では忙しなくモビルスーツ隊の発進準備が進められていた。私の姿を見たパイロットや整備兵達が、慌てて皆敬礼をするものの、「いい、持ち場に戻れ。」と言葉を飛ばし、迅速に行動するように促していく。敵は既にモビルスーツ隊の発進を済ましただろう、となれば1分1秒たりとも無駄にする事は出来ない。

モビルスーツデッキ内の奥：漆黒の機体が、静かに私を待っていた。愛機ヤークト・キュベレイのコックピットへと上がって行くと、側には整備兵の姿があり、緊張気味に私へと敬礼をしながら整備状況を伝えてくれる。

「閣下、機体の準備は万全整っております！」

「ああ、ありがとう。貴様らも待避急げよ。」

私の言葉を受けて、整備兵は感激したように目を輝かせながら、再び敬礼をして待避区画へと向かって移動していった。その後ろ姿を確認しつつ、私もキュベレイのコックピットへと乗り込んでいく。

私はノーマルスーツは着ないまま、軍服姿で乗り込み、シートベルトを締めてコンソールパネルを操作していく。既にメインジェネレーターは起動しているので、直ぐにメインモニターを起動させ、モビルスーツデッキ内の様子が全天周囲モニターに映し出されていき、先発隊がカタパルトデッキへと次々に移動していくのが見える。私の出番は彼らが出撃した後だ、今はゆっくりと待つ他ない。

『閣下、敵艦より高熱源体の射出を確認。数は14、艦隊上方から接近中：：会敵予想時間は約10分後です。』

機体設定の確認を済ましている最中、コンソール画面にリアルタイム通信が表示され、そこには参謀であるギムレットの顔が映し出されながら、現在の状況について報告をして来た。彼の後ろでは、ブリッジクルーや艦長が忙しなく指示を飛ばし、迎撃に集中しているのが分かる。

「モビルスーツ隊に伝えろ、ガンダムとの交戦は極力避けるように：

とな。」

『はっ…、承知致しました。』

私の短い命令を受けて、彼は敬礼をした後に通信画面を切った。ギラ・ドーガの部隊も、カタパルトの準備が整い次第、次々に射出されて迎撃に向かつて行くのが分かる。モビルスーツの総数としては此方が有利だが、後はパイロットの技量と戦術次第…と言った所だろうか。

兎も角、実行部隊が廃棄資源衛星を確保すれば、今回の作戦は終了となる。そこまで時間を稼ぐ為にも、私も少々力を振るわなければならぬ。ガンダム相手とは言え、負けるつもりは更々無く、どの程度の力があるのか確かめたいという気持ちが強いくらいだ。

高揚感にも似た感情を抱きながら操縦桿を握ると、丁度ギラ・ドーガ部隊の発艦が終わり、残すは私のみとなっていた。ゆっくりとカタパルトデッキへと機体を進ませていき、所定の位置で立ち止まると、デッキ内の左右の壁からロボットアームが伸びてきて、キュベレイの股下に太いケーブルが接続されていく。コンソールパネルにも接続が完了した表示がされると、私は機体をゆっくりと浮かし、ケーブルが目一杯伸び切る位置まで前進させ、操縦桿を前へと強く押ししながらペダルを床まで踏み込み、キュベレイのストラスターを全開にさせた。ある程度の推力を超えれば、ケーブルがオートパージされ、その反動で機体を射出する仕組みのカタパルトである。

『閣下、(武運を)キュベレイが出るぞ！』

カタパルトデッキ内に響く、発艦をコントロールする兵士からの言葉に、私はコックピット内で僅かに微笑を浮かべていた。

「カトレア・ペントラス…ヤークト・キュベレイ、出るぞ。」

私の静かな言葉と共に、機体からケーブルが勢いよくパージされ、凄まじい加速Gを感じながら暗礁宙域の海へと飛び出して行く。そして、操縦桿を操作しながら、先に出撃した先発隊のギラ・ドーガ部隊とは合流せず、別方向へと加速しながら宇宙の闇に溶け込んでいっ

た。

狙うのは、あくまでもガンダムである。そのプレッシャーを探し出すように、モビルスーツによる遭遇戦が予測される地点より更に上方に位置付けながら、機体が隠れる大きさのデブリに紛れてスラスタを切った。ミノフスキー粒子が濃い戦闘宙域において、デブリに紛れていけば、相当接近されない限り察知される事は無い。

そこから凡そ10分後……暗礁宙域の中で、細かなビームの閃光や爆発が起こり始めたのが、モニターに鮮明に映し出されていく。私は目を凝らし、そしてサイコミュによる感応波のキャッチに意識を向けながら、モビルスーツ戦の行方を追った。

「……そこか。」

私は、つい笑みを溢してしまう。まだキュベレイのセンサーは、機体の識別が出来る程に敵を捉えている訳ではないものの、サイコミュを通じてハッキリと感じ取っていた。ガンダムの存在、その位置を。

私はゆっくりとスラスタを噴射させ、デブリの影から機体を現し、一気にスラスタを全開にして戦闘宙域の只中へと接近していった。ガンダムから発するプレッシャー……パイロットの感応波を目指して。

「見せてもらおうか……ガンダムの性能とやらを、貴様の力を。」

『邂逅』（2）

「…社長、いよいよ始まった模様です。」

月面都市フォン・ブラウンに本拠地を置く、巨大軍産複合企業アナハイム・エレクトロニクス。その社長室内では、社長秘書の女性が静かに言葉を紡ぎ、椅子に座る社長を見つめている。手に持っていた端末を社長へと手渡していくと、その画面には暗礁宙域内で戦闘が勃発している事の報告が表示されていた。ロンド・ベル所属の新鋭艦と、ネオ・ジオン残党との戦闘だ。

「そうか…始まったか。ふふ……。」

端末を受け取り、秘書からの報告を受けた恰幅の良いアナハイムの社長は、何処か楽しみな様子で笑みを溢している。それはまるで、ゲームをプレイしていて結果が出るのを心待ちにしているような……そんな、邪悪さを滲ませた子供のような笑みだった。社長の笑みを、秘書は顔色一つ変えずに見つめているのが、何とも歪な様相を呈している。

「社長の夢は、どちらに傾くのでしょうか？」

「さあな、それは私にも予想がつかんよ…。だからこそ面白いんじゃないか。」

秘書が口にした、社長の夢。連邦軍にも多大な軍事支援を施しながら、ネオ・ジオンにも技術と資金を提供するダブルスタンダードを行ってでも実現したい、その夢にどれ程の価値があるのだろうか。それは、人により評価は分かれる所だろう。

そんな社長の思惑を知ってか知らずか、2人のニュータイプが戦場にて相見える事となる。

シーナ・ランチェスターと、カトレア・ペントス。この2人の出会いが齎すものは、果たして……

※

マゼンタ色のビーム攻撃が、暗礁宙域の海を駆け抜けていく。距離

がかなり離れていても、そこは流石のロンド・ベルと言った所で、ムサカの側面を掠めるような艦砲射撃をお見舞いしていった。続け様に、対艦ミサイルの波状攻撃が2隻のムサカへと向けて発射されていく。その様子を、ラー・ネイジユから発艦したモビルスーツ隊が、上方から眺めつつ攻撃の機会を伺っていた。

「…凄い…敵も流石…」

先手を打ったのは此方だが、迎撃するムサカも侮れない。対艦ミサイルが迫り来る中、対空迎撃の弾幕を張ってミサイルを撃ち落としていく。ガンダムのコックピットからその様子を見つめながら、シーナ・ランチェスターはボソツと呟いていた。

だが、呑気に観戦している場合ではない。コンソールパネルには、高熱源体が複数射出された事をセンサーが捉えていると表示されている。恐らくは、ムサカ艦載機のモビルスーツ隊だろう。その予測は程なくして答え合わせがされるように、ガンダムのセンサーがモビルスーツを捕捉すると、ネオ・ジオンのギラ・ドーガ部隊が迎撃に此方へ向かって来ている事が分かった。

「隊長！」

『分かっている、少尉。』

私が通信で声を張り上げるとほぼ同時に、言わんとしている事は全部察していると言うように、隊長は言葉を被せてきた。

『お客さんだ、行くぞっ。』

隊長の掛け声と共に、攻撃隊から『了解』と返事が来ると、リゼル部隊は全機ウェイブライダー形態へ変形し、ギラ・ドーガ部隊へと凄まじい勢いで急襲していった。その後続くように、ジエガン部隊と私のガンダムがギラ・ドーガ部隊との距離を詰めていく。

『少尉、お前は援護だっ。』

隊長からの指示は、とてもシンプルなものだった。機動性に優るリゼルを全面に押し出し、私は援護射撃に徹するというもの。このルミナスのハイパー・ビームライフルの射程なら、ギラ・ドーガの有効射程外からアウトレンジで狙撃する事も可能な為、合理的な判断と言えるだろう。

「後ろは任せてください……っ！」

私は全機に告げるように言葉を発すると、直ぐにハイパー・ビームライフルを構えて照準を合わせていく。リゼル数機が自由自在に変則的な軌道を描き、ギラ・ドーガの部隊を翻弄しているのが見て取れると、1機のギラ・ドーガが死角から迫ろうと一瞬機体の動きを止めた隙を捕捉する。

敵は墮とせる時に墮とす……戦術の基本だ。私は躊躇う事なく、操縦桿のトリガーを引いた。ライフルのマズルに光が収束していき、圧縮されたビームの粒子が解き放たれると、凄まじい弾速でビーム砲の光が戦場を貫いていく。ガンダムに狙われたギラ・ドーガに回避する時間など無く、ガラ空きの背中を私に見せながら、バックパックごとコックピットを撃ち抜かれて爆散していった。これで、撃墜スコア1である。

『いい判断だ、少尉。』

ウェイブライダー形態のままギラ・ドーガに肉薄し、すれ違い様にモビルスーツ形態へと変形しながら、ビーム・サーベルを振り抜いて敵の胴体を両断して見せる隊長は、激しい戦闘の最中でも私に声をかけて来てくれた。他のリゼルも、敵に囲まれないように上手く距離を取りながら、ライフルによる牽制攻撃を織り交ぜて応戦している。

流星は精鋭部隊だけはある……と、内心思いながらも、私は浮かれる事なく自分の仕事をこなそうと直ぐに意識を研ぎ澄ましていく。だが、流星に数的優位に立つネオ・ジオン側に、徐々に押され始めて来た。明確に敗北濃厚な訳ではないものの、向こうも流星の手練れなので、安易と墮とせるものでもない。

『新入り、そっちに行ったぞ！』

「くっ……！」

リゼル、ジエガン部隊を突破して、後方から援護射撃を加える私の元に、3機のギラ・ドーガが接近して来た。援護射撃をしている余裕は無くなり、直ぐにサイコミュへと意思を繋げていく。

「やってやる……。行け、フィン・ファンネル！」

3機同時に相手をするには、これしかない。私は6基のフィン・

ファンネルを背部ファンネル・ラックから射出すると、サイコミユを通じてファンネル達に操作に意識を集中させ、ギラ・ドーガ達へと襲い掛らせていった。

先ずは1番近付いてきた敵に向けて、ファンネル達が四方八方からビーム攻撃を加えていく。この攻撃は流石に不意打ちだったようで、防御の為にシールドを展開しようとした腕を撃ち抜き、怯んだ隙を見逃さずに次々に胴体へとビームを撃ち込み、程なくして機体が爆散していった。

「次…、ぐっ…！」

一瞬の隙だった。爆発の光を確認している間に、1機のギラ・ドーガに肉薄され、ビーム・ソードアックスを振り被られた姿が間近に迫っていたのだ。ここまで接近されてしまえば、ファンネルは使えない。流石は手練れなだけはある、オールレンジ攻撃への対処も叩き込まれているようだ。

直ぐに左腕に内臓されているビーム・サーベルを展開し、左手一本で敵の斬撃を受け止め、ビームの刃同時がぶつかり合い、バチツ…バチツ…!と、激しい鏝迫り合いとなった。スラスターを噴射しながら押し切ろうとするものの、ギラ・ドーガも1歩も引かず、正に膠着状態となってしまう。

その隙を見逃さず、もう1機のギラ・ドーガが私の死角から急接近し、同じくビーム・ソードアックスを展開して来た。コックピット内にも、5時方向から敵が接近して来ているアラート音が鳴り響いている。

「——舐めんなッ!!」

私は鏝迫り合いの状態のまま、背後から迫る敵には照準を合わせたリせず、感覚だけで右手に握るハイパー・ビームライフルを後ろへと向け、迷いなくトリガーを引いた。牽制攻撃ではなく、明確な撃墜の意思を乗せた攻撃である。

敵意を敏感に察知し、私に瞬時に伝えてくれる、ルミナスのサイコミユだからこそ成せる芸当。まさかの攻撃に驚いたのは、背後を獲つたと確信して接近して来たギラ・ドーガだ。予想外の事に回避する事

も出来ず、ビームの閃光でコックピット付近を撃ち抜かれ、火花を散らしながら宇宙の海に漂っていく。誘爆はしなかったものの、パイロットはビームの粒子に身体を焼かれ、蒸発した事だろう。

『くそっ、ガンダムめ…ッ！』

残りの1機となったギラ・ドーガのパイロットの声があるが、至近距離であるが故に通信に混在して来て、私の耳に入ってくる。やはり、ネオ・ジオンにとってガンダムは畏怖の象徴であり、憎むべき対象という事がありありと伝わって来た。

だが、お喋りをするつもりは無い。降り掛かる火の粉は払い除けるのみだ。全身のサイコフレームに私の思考が伝播していき、素早く右脚部を動かすと、鏝迫り合いとなっているギラ・ドーガの横っ腹を思い切り蹴り飛ばしていく。

『うっ、ぐ…ッ!?!』

苦しげな呻き声があった通信で聴こえてくるものの、僅かに機体同士の距離が開くと、私は意識を集中させてスラスタを全開にし、一気に肉薄して敵の右腕をビーム・サーベルで斬り落としていった。直ぐに反撃に転じようと左手を動かす素振りが見えるものの、それよりも先にハイパー・ビームライフルのマズルをギラ・ドーガの胴体へとゼロ距離で押し当て、ガンダムのデュアルアイが光を放つ。

「墜ちろッ!!」

そのままトリガーを引くと、強烈なビームの閃光が放たれ、ギラ・ドーガの腹部をビーム砲が貫通していく。あまりの威力の高さを物語るように、上半身と下半身が衝撃で吹き飛び、真っ二つになりながら宇宙の藻屑と化していった。

「はあっ……、はあっ……、皆は…っ。」

3機撃墜を確認し、張り詰めた緊張感が少しだけ緩んで呼吸を整えつつも、休んでる暇など無いと思いを再び張り直す。フィン・ファンネルを機体へと戻し、ファンネルラックに全て再接続させると、援護に戻ろうとスラスタを噴射して姿勢と機体の向きを変えていく。敵をなんとか食い止めながら撃墜しているものの、コックピット内のレーダーマップを確認してみると、味方にも被害が出始めているのが

分かった。

ジェガンが1機、それにリゼル部隊も1機撃墜され、リゼル2機が中破している。このままでは押し切られるのは目に見えており、流石に私も後方で援護し続けるのをやめ、前線に合流すべきだろうと思い始めていく。そして、操縦桿を握り締め、ペダルを踏み込んでスラスターを全開にしたその時だった……。

「……ッ！」

刹那……嫌な感覚が私の脳裏に走り、全身に悪寒のようなものが突き抜けていく。言い知れぬ其れは、言わばプレッシャーとも呼ぶべき……そんな感覚だった。私はほぼ無意識に、自身の勘が私の身体を動かしていき、操縦桿を目一杯引いて機体のスラスターを逆噴射していき、姿勢を変えて回避運動をしていく。

すると、私の目の前を数本のビームが通り過ぎていった。あのまま突っ込んでいけば、間違いなく直撃していただろう。だが、この嫌なプレッシャーの感覚は消えずに、更に増大して私に重く押し掛かって来た。あのビームがプレッシャーの正体ではない……更に、その上から……。

「……黒い……モビルスーツ……っ?」

頭部を僅かに上に向け、デュアルアイのメインカメラが捉えたその姿がモニターに映し出されると、そこには全身が黒く塗装された正体不明のモビルスーツが居た。大きく張り出した肩の装甲は、一部が赤く塗装され、只者ではないオーラを放っている。プレッシャーの正体は、このモビルスーツだった。

「……そこを退けッ！」

攻撃を受けたからには、反撃するしかない。正体不明機を敵だと断定しながら、ハイパー・ビームライフルのマズルを黒いモビルスーツへと向けていく。果たして通信が届いているのか不明だが、容赦はしない。私は操縦桿のトリガーに指をかけて引こうとした瞬間、またあの嫌なプレッシャーが電流のように脳裏を駆け抜けた。

「ッ——、くそ…ッ！」

右から、左から、上から、下から…ありとあらゆる方向から、ガンダムに向けてビームの雨が降り注ぐ。サイコミュが敏感に感応波を捉えているので、どの角度からどのタイミングで攻撃が放たれるか、ある程度予知出来るので、小刻みにスラスターを噴射しながら回避していく。が、この攻撃は明らかにオールレンジ攻撃だった。回避し続けていく中、あの黒いモビルスーツは微動だにせず、ただ黙って私を見下ろしていた。

(あの機体のパイロット…私と、同じ…！)

敵のビームの1発が、ガンダムの肩装甲を掠めていき、直撃コースに入ったビームをシールドで防御していく。考えている暇など無いと、その瞬間に我に帰り、私は舌打ちをしながらファンネルに思考を飛ばした。

相手も同じファンネルを使うなら、こちらも応戦するまでの事。

「——ファンネル!!」

ファンネルラックから6基のフィン・ファンネルが射出され、黒いモビルスーツに向けて四方八方から攻撃を仕掛けていく。だが、向こうも此方と同様に…いや、ガンダム以上に軽快な回避運動を披露しながら、ファンネルのビーム攻撃を舞うように避け始めていった。その姿を目の当たりにした私は、驚きの色を隠す事なく目を見開いてしまう。

「何なんだ…コイツ…ッ。」

舌打ち混じりに、とんでもない強敵と遭遇してしまった事実には怖気付いてしまいそうになりながらも、意識は途切れさせる事なくサイコフレームへと思考を飛ばし続け、紙一重の機体制御でオールレンジ攻撃を掻い潜っていく。同時に、フィン・ファンネルの操作にも思考を巡らせなければならぬ現状に、頭がパンクしてしまいそうだ。

お互いにファンネルの攻撃を避け続けている最中、先に動き出したのは黒いモビルスーツの方だった。このビームの雨の中を、一直線に此方へ向けてスラスターを全開にして迫って来ており、その思い切りの良すぎる行動にもまた驚いてしまう。

「この……ッ！」

この突貫は、明らかに接近戦を仕掛けて来ている。ファンネルの操作から一旦意識を逸らすと、直ぐにファンネルラック内に内蔵されているビーム・サーベルに右手を伸ばし、タイミングを合わせて敵モビルスーツ目掛けて振り抜いていった。

だが、私のサーベルは当たらず、何も無い虚空を斬る。直前に敵がスラスターの角度を変え、姿勢を逸らして避けたのだ。そのままガラ空きとなったガンダムの胴体へと敵から蹴りをお見舞いされ、背後にあつたデブリに勢いよく機体が叩きつけられてしまう。

「ぐっ——あ……ッ……!!」

凄まじい衝撃がコックピットにも響き、私はシートの上で身体を揺さぶられ、ヘルメット越しに頭を激しくシートに打ち付けてしまった。視界が一瞬ぼやけ、意識が飛んでしまいそうになりながらも、苦痛の声を無理やり掻き消すように、ギリ…ッ、と歯を食いしばって耐えていく。軽い脳震盪を起こしてしまったようで、目の焦点も若干合わない。

早く、ファンネルを操作しないと…。ライフルを構えて、反撃をしなければ……と、そう思いながらも、指先にまだ力が入らず、思考が定まらない。後詰であるガンダムが押さえ込まれている事は周囲も認識しているようで、第2派のギラ・ドーガ部隊が前線を突破し、後方に位置するラー・ネイジュへ向けて迫って行くのが見えた。だが、それを追撃するだけの余力が、私には無い。

黒いモビルスーツは両手にビーム・サーベルを握り、2本のサーベルを構えながら、トドメを刺そうとスラスターを全開にして此方に突っ込んで来る。

「——ッ。」

刹那、私は死を覚悟した。

……だが、敵のビーム・サーベルが私に届く前に、横から何かがあつ込んで来た。それは敵のモビルスーツに抱き着きながら、私との距離を離そうとするかのように、スラスターを全開にししながら目の前から押し退けていく。

『少尉ッ、早く母艦の援護に行け!!』

「ッ——、隊長…ッ!？」

その正体は、隊長機のプロトタイプ・リゼル。黒いモビルスーツの両手を押さえ込みながら、身動きを取れなくしてくれていた。だが、私も隊長を援護しなければ、彼の身が危ない事は分かる。ガンダムの操縦桿を握る手に無理やり力を入れながら動かそうとした際、再び隊長からの言葉が私の耳を突き刺していく。

『モタモタするな、少尉ッ!』

「で、でも…隊長…!」

『早く行けッ、お前が艦を守るんだ!!』

私は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、奥歯を強く噛み締めながら、絞り出すように「……了解…ッ。」と言葉を返すと、ファンネル達を呼び戻してファンネルラックに収容し、その場から全速力で離脱して母艦へと向かう。

隊長の気持ちを踏み躪る訳にはいかない。目的を履き違えてはいけない。私は、私の仕事をしなければならぬのだから…。

「…どうか、無事で…ッ。」

そう呟く私の言葉は、距離が離れた隊長の機体に届く事は無く、ヘルメットの中だけに木霊していた。遙か先に行く、第2派のギラ・ドーガ部隊の背を目指して、私はペダルを限界まで踏み抜きながら、自身の身体とガンダムに鞭打って更に増速していく。

(間に合って……、ガンダム……!)

※

何故だろうか。カトレア・ペンタスは考える。

私の攻撃は完璧だった筈だが、初撃は回避されてしまった。ファンネルの操作にも弛みは無かったが、あのガンダムはほぼ全て避けていた。それだけでなく、向こうもファンネルで反撃をして来たではないか。油断していた訳ではないが、仕留め切れなかったのは素直に私の落ち度である。

それに、あのガンダムから発せられたプレッシャーは異常だった。あれ程のプレッシャーを私に与えてきた存在は、私の今までの経験上初めてだったので、感心を通り越して驚きすらある。これは、あのガンダムとパイロットに対する認識を改めて考えなければならぬだろう。

「ふん……、邪魔をするな。」

だが、先ずは目の前の敵を処理するのが先だ。私のキュベレイに密着しながら、両腕を押さえ付けて身動きを取れなくしている、この連邦の機体を墮とさなければならぬ。

『ネオ・ジオンが…今更何を企んでいる…ッ!』

機体同士が密着しているので、敵のパイロットの通信が直にコックピットへと伝わってくる。少しばかり歳の食った、男の声だ。

私は表情を変えずに、馬鹿正直に答える事などせず、軽蔑するように呟いていく。

「雑兵風情が……。このキュベレイに触れた事、死んで詫びてもらおう。」

操縦桿のスイッチを押し、キュベレイの肩のバインダーが僅かに開いていくと、左右から何かが開き出されていく。言うなれば、其れは……隠し腕とも呼べるものだった。新たに増えた2本の腕の先端には、大型のビーム・サーベルが装着されており、敵モビルスーツの頭上で2本の巨大なビームの刀身が展開されていく。通信越しに、敵のパイロットが息を呑む様子が聞こえてくる。

そして私は、2本のサーベルを突き立てるように、敵のモビルスーツを串刺しにしていた。

『ぐっ…、ああ…ッ!!』

コックピット付近を貫通したであろうビームの刃は、機体の肩部から胴体にかけて左右から突き刺し、敵にトドメを刺した。パイロットの断末魔の叫びが一瞬だけ聞こえた後に、キュベレイを掴んで離さなかったマニピレーター拘束が解かれ、敵のモビルスーツは火花を散らしながら宇宙を漂っていく。

だが、これで終わりではない。このカトレア・ペンタスに触れ、キュ

ベレイに触れた事は、万死に値するのだ。徹底的に破壊するのみである。

「行け、フアンネル。」

私の言葉に即座に反応するように、周囲に漂っていたフアンネルの子機達が姿勢を変え、既に再起不能となった敵モビルスーツに向けて、一斉にビーム攻撃を行っていった。頭部を撃ち抜き、腕を撃ち抜き、脚を撃ち抜き、胴体を撃ち抜き……そして、程なくして機体は爆発を起こし、粉々に散っていった。爆発の衝撃波を機体で感じつつ、サイコミュが敵パイロットの残留思念を拾い上げる。『平和な世界を見たかった…』と。

「……………」

平和な世界など、有りはしない。多かれ少なかれ、人が生きている限り争いは起こるものだ。だが、この私が地球の統治者となれば、連邦政府の腐敗の膿を出し尽くし、より善い世界へと導こう。正しい統治者による、正しく管理される世界へと。私は僅かながら残留思念を残した敵パイロットの魂に、心の内でそんな事を語りかけていく。

すると、直後に後方から発光信号が上がった。ロンド・ベルの先発隊と交戦中のギラ・ドーガ部隊から発せられたものであり、その色は緑と赤。《作戦目標達成。後退セヨ》の意味だ。信号弾を目にした私は、コックピットの中で僅かに微笑を浮かべる。

「…………ふふっ…。長居は無用だな。」

私は操縦桿を握り直し、機体をロールさせながらスラスターを噴射させ、母艦であるムサカへ向けて帰還していった。

名残惜しくは、この手でガンダムを仕留められなかった事だが……いずれ相見える事だろう。ガンダムが存在し続ける限りは。

※

「ラプター5、ブレイズ2、レーザー信号途絶！」

「モビルスーツ部隊、突破されました！」

「先行する攻撃隊、半包围されつつあり！」

ラー・ネイジユのブリッジ内では、各クルーによる報告が忙しなく飛び交い、険しい表情の艦長がそれらを受け止めていた。その視線は、この戦闘宙域を映し出しているグリッドマップに注がれており、正面モニターに大きく表示されている。レーザー信号が光の点として表示され、それらが常に動き続け、敵味方識別で色が分かれながら、時折消えていく。信号が途絶したという事は、熱源の消滅……つまり、モビルスーツが大破した事を意味していた。

形勢としては、徐々にネオ・ジオン側に傾きつつある。加えて、此方のモビルスーツ部隊が突破され、10個の高熱源体……恐らく敵のモビルスーツ隊が、このラー・ネイジユに向けて接近して来ている。艦長のレイ・アンダーソンは、鋭い眼差しのまま指示を出し始めた。

「対空戦闘、弾幕ッ。」

「弾幕展開つ、敵を寄せ付けるな！」

艦長の指示を受け、副長がそれに合わせるように声を張り上げると、砲術長がすぐさまコンソールパネルを操作し、対空機銃と迎撃ミサイルの斉射を開始していく。機銃に限らず艦の武装は、今となっては遠隔で操作する事が可能であり、回線が繋がっている事でブリッジから直接操作する事が出来るのだ。

自動で機銃が敵モビルスーツを追い、弾幕を展開していくものの、そう簡単に当たるものではない。加えて、迎撃ミサイルは10機のギラ・ドーガに向けて放たれたものの、殆どのミサイルを敵はビーム・マシンガンの弾幕で撃ち落としていき、結局は10機の内2機を仕留めるに留まった。後は、直掩のジエガン部隊に任せつつ、機銃による弾幕を張り続けるしかない。

「味方に当てるんじゃないぞ、ムサカ動きにも注意せよつ。」

艦長の指示がブリッジに響きながらも、ふとした瞬間に艦全体に激しい振動が襲い掛かった。弾幕の雨を掻い潜りながら、艦の下から攻めてきたギラ・ドーガの攻撃が、外壁装甲に着弾したのだ。

「第8ブロックに被弾、損害は軽微！」

「隔壁閉鎖、ダメコン急げ！」

エヴァ少尉が損害状況を報告し、それに対して副長が即座に指示を

飛ばしていく。一方、艦長は鋭い眼差しをモニターに向けたまま、戦況の流れに注視していた。このままではいたずらに消耗するだけなので、何処かで撤退の合図を送らなければならなくなる…と。

「敵モビルスーツ、急速接近―」

センサー長の声が耳に届いた時、既にギラ・ドーガの1機が艦に張り付くように距離を詰め、ビーム・マシンガンのマズルをブリッジへと向けていた。直掩機は他の敵機に押さえられ、対空機銃も主砲も、これだけ至近距離に入られては迎撃は不可能である。

「クツ……………」

万事休す、覚悟を決めるしかない。艦長は険しい表情を浮かべたままモニターを睨み、ブリッジクルーも皆死を覚悟した事だろう…。

——その時だった。

遥か彼方から、一筋のビームの光がブリッジの目の前を貫き、ギラ・ドーガの胴体を貫通して機体が真っ二つに千切れ飛び、爆散していった。爆発の衝撃波と残骸がブリッジの装甲に激しく当たるものの、余りにも一瞬の出来事に、ブリッジクルーの誰もが目を見開きながら言葉を失ってしまったている。

「な、何が……………」

副長がゆっくりと口を開くも束の間、また次のビーム攻撃が遥か彼方から放たれた。その軌跡は僅かに艦の下へと伸び、死角から攻撃を加えていたギラ・ドーガを的確に撃ち抜き、これも撃破する。

正体不明の攻撃により2機のギラ・ドーガを失った敵部隊は、ラー・ネイジュへの攻撃を中断し、一旦距離を取ろうと僅かに後退した時だった。その攻撃を行った存在が、高速で接近して来てその姿を現した。

『ラー・ネイジュ、援護しますッ！』

それは、白いモビルスーツ。シーナ・ランチェスターの駆るルミナスガンダムだった。彼女が通信を介して発した言葉が、ブリッジの中に響いていく。

「艦長、シーナ少尉の…ガンダムです！」

通信オペレーターであるエヴァ少尉が、喜びと興奮を抑え切れない様子で声を張り上げる。彼女の一言と、ガンダムの存在により、ブリッジに再び闘志の熱が滾り始めた。

「よし…、直掩部隊はガンダムを援護。このまま敵部隊を殲滅する。」

艦長の指示に、ブリッジクルーは皆「了解！」と言葉を返すと、各部署へと指示をそれぞれ出し始め、ラー・ネイジユは防戦から反攻勢を仕掛けていく。直掩部隊のジェガン5機も、突如として援護に現れたガンダムを前に戦意を取り戻し、隊列を組み直し始めた。

『少尉、君の援護に回る。ガンダムの火力を全面に出してくれ！』
「了解っ。」

通信越しに聞こえてきた、味方機からの言葉。ある意味では、ガンダムを主軸とした部隊であるかのようにであり、シーナ・ランチェスターは隊長にでもなったかのような気持ちを一瞬だけ味わっていく。

が、それはそれだ。今はこの第2波の攻撃隊を蹴散らすのが先である。突然の奇襲に対して、未だ動揺が隠せない様子なのは、サイコミュを通じて敵の意識を拾い上げて感じ取れている。畳み掛けるなら今しかない。

「ファンネルで牽制する…ッ！」

私は直ぐにフィン・ファンネルへと意識を向け、6基のファンネルを射出すると、残り8機となったギラ・ドーガの集団へと襲い掛からせていった。敵も慌ててファンネルを撃ち落とそうとビーム・マシンガンで弾幕を張り始めるが、それこそが正に格好の的となる。

「そ…」

ファンネルに意識が向いている敵へ向けて、私はハイパー・ビームライフルを構え、トリガーを引いて狙い撃った。当然、狙撃にまで注意が向いていない敵は回避する時間も無く、機体の脇腹付近をビーム砲で抉られるようにしてまともに受けてしまい、程なくして損傷箇所から爆発して機体は粉々に吹き飛んだ。私の攻撃に続くように、後方からジェガン部隊によるビームの斉射も行われ、次々にギラ・ドーガが被弾して撃墜されていく。

『くそ…ッ、ガンダムさえ居なければ…!』

『隊長、後退の信号弾がッ。』

『…ここまでだ、退くぞ!』

『閃光弾、放ちます!』

数は残り4機となった所で、後方で何かが光るのが見えた。確認しようとして視線を後方に向けようとした瞬間……生き残りの敵が、全機閃光弾を放ってきた。

「うっ…く——!」

完全に油断していた。まともに閃光弾の強烈な光を受け、モニターが真っ白になり、視界が完全に奪われた。それだけでなく、ガンダムのメインカメラまでも一時的に閃光の影響を受けてしまい、僅かな時間の間モニターにノイズが走ったかのように、正確な周囲の映像が出せなくなってしまったのだ。

それから、どれくらい経っただろうか。目がようやくやく見えるようになってきた頃には、既に周囲に敵部隊の反応は無く、見事に撤退したのだと理解していく。悔しさを滲ませながら表情を顰めるものの、先ずは母艦と自身が無事である事を喜ぶべきだろう。

『ムサカ級2隻、モビルスーツ隊と共に後退する模様っ。全機、母艦に帰投せよ。繰り返す、全機帰投せよ!』

程なくして、ヘルメット内に響くエヴァ少尉の通信を聞き、私はようやく安堵したように息を吐いた。良かった、これで一息吐けると。

攻撃隊は無事だろうか、隊長やローマン中尉は平気だろうか…と、そんな心配事が頭を過りながらも、精鋭である彼らならきつと大丈夫だろうと樂觀し、私はラー・ネイジユへと帰還した。

※

「社長、観測評価の報告です。」

暗礁宙域でのロンド・ベルとネオ・ジオンの遭遇戦が終わり、戦いの気配が徐々に消えていった頃、その戦闘の行く末はアナハイムにも届けられていた。

社長室では、秘書の女性が端末を持ちながら、椅子に座る社長へと報告をしている。

「ほう、それで？」

「ロンド・ベル、ネオ・ジオン…共に消耗しながらも、双方決定的な打撃を与える事は出来ず、ネオ・ジオン側が戦闘宙域より離脱した模様。尚、ガンダムとキュベレイも戦闘を行ったとの報告が。」

「そうかそうか……！で、確認はされたのかな？」

「…残念ながら。」

そこまで聞いた所で、アナハイム社長の溜息が溢れ落ちる。秘書の表情は変わらず、社長を見つめながら端末の画面を閉じ、次の言葉を待っていた。

「…仕方ない、まだチャンスはあるだろう。ご苦労だった。」

社長からの言葉を受け、秘書は「失礼します。」と一言呟き、社長室を後にしていった。社長の一瞬だけ高揚した気持ちは、手に握っているカップのコーヒーのように冷めていき、また溜息を溢す。

わざわざガンダムをフルサイコロフォームの実験機に仕上げ、キュベレイの改装にも多大な援助を施したのだ。望む結果が出ない事には、その努力も裏工作も全てが無意味になってしまう。密かなる望みと野心を消す事なく滾らせながら、社長は冷めてしまったコーヒーを飲み込んでいく。

「…ふふ、楽しみだねえ。」

社長の眼差しは、月から見える青い地球へと向けられ、目を細めながらほくそ笑んでいた……。

第5話 『秘密会談』

「……………」

「シーナ少尉、其方は任せました。」

「……了解。」

暗礁宙域での戦闘から数日が経過し、ラー・ネイジユは修理と補給の為、サイド5に属するコロニー“アーダン”へと向けて航行していた。そこで資材を搬入し、ラー・ネイジユの外壁と武装の修理を行うと同時に、失った機体とパイロットの補充も予定されている。

シーナ・ランチエスターを始め、他パイロット数名は、機体の整備と調整作業が終わった後に、先の戦闘で戦死した部隊のパイロットの遺品を整理する為、手分けして個室やロッカーの整理を行っていた。私に任せられたのは、モビルスーツ部隊を指揮していた隊長：ジェラルド・ゴードン大尉の遺品整理だ。ジェガン部隊のパイロットと廊下で分けられると、私は大尉の部屋へと入っていく。

「失礼致します…。」

相手は亡くなっており、部屋には誰も居ない。だが、敬意を込めて部屋に入る前に姿勢を正して敬礼をし、中に入ってしまった。大尉の部屋は整理整頓が徹底されており、これと言って乱雑に置かれてある物もない。遺品整理する側としては楽だが、何とも言えない気持ちになっってしまう。

制服、私服、小物類、日用品と、大尉が残した物を手に取っては、持参した段ボール箱に詰め込んでいく。これらは全て宇宙葬にする際に、棺に納めて放出する為に必要な遺品となるのだ。思ったよりも部屋に残してある物は少なかった。段ボール箱にはまだまだ余裕があった。次は、パイロットルームのロッカーを整理しに行かなければならない。

大尉の部屋を後にし、私は段ボール箱を携えて廊下に出ると、ロッカーへと向けて進んでいく。本来であれば女性が男性のパイロットルームに入る事は無いものの、現在は通常警戒体制で航行している為、パイロットルームに誰か居る事は無い。加えて、遺品整理の為に

入らなければならない事は、誰もが承知しているので問題は無いのだが。

「……………っ。これって…」

隊長のロッカー前に立ち、そつと開けてみると、ロッカーの扉の裏側に写真が貼り付けてあった。柔らかな笑みを浮かべる女性と、女性に抱かれる子供のツーショット写真が。人生経験に疎い私が見ても、この写真は隊長の妻子だと直ぐに分かる。

私は写真を手に取り、数日前の事をつい思い出していた……………。

…

『ガンダム、収容完了！』

『了解つ、整備作業開始！』

『アナハイムチーム、出番だぞ！』

『損傷箇所の子エックと、推進剤の補給だつ。』

『戦闘データ、急いで吸い上げろよ！』

コックピットの外…ガンダムを格納したその足元では、ラー・ネイジユのメカニックマン達と、アナハイムから移って来た技術者達が、工具やコンピューター端末を手にして忙しなく動き回っている。私はメインジェネレーターを切り、モニター画面の接続を切ると、コックピットハッチを開いてデッキ内へと出ていく。モビルスーツデッキ内は無重力空間となつているので、そのまま空間を漂いながらヘルメットを脱ぐと、汗を手で拭いながら壁際の通路へと辿り着き、待ち構えていた人物へと話しかけていく。

「……………不甲斐ない戦いだつたよ、ほんと。」

「そう嘆く事はないよ、少尉。君のおかげで助かつた…お疲れ様。」

目を伏せながら呟く私に対して、慰めの言葉を掛けてくれたのは、ガンダム開発責任者であるウォルド・シャウラだ。彼はどんな状況でも私を励ましてくれるので、私もつい弱音を吐いて甘えてしまっている。

聞きたい事は山ほどあるものの、私は顔を上げていくと、真っ先に味方機の状況について彼へと訊ねた。

「…ウォルドさん、皆は…。隊長は、無事なの？」

私の問いかけに対して、彼は一瞬押し黙ってしまう。とても嫌な予感がした。

「…未帰還機が4機。それには、ジェラルド隊長も含まれている。」

一瞬、私の視界が歪んでブラックアウトしそうになる。頭から血の気が引いて、心臓が痛い程に早鐘を打ち始め、どっ…と冷や汗が全身から噴き出してしまう。

……私のせいだ。

私が未熟だったから、隊長が犠牲になってしまった。私なんかを庇って、盾になってくれて…私が隊長を殺したようなものだ…と、次々にネガティブな考えが思考を埋め尽くしていき、私は言葉を失って目の焦点も合わなくなっていく。

「……シーナ少尉。」

暫くの沈黙の後、彼から掛けられた言葉にハッ…としたように我に帰ると、複雑な表情を浮かべながら彼を見つめていく。私が何を考え、何を思っているのか、言わずとも彼にはお見通しらしい。

「……すみません。調整…お願い、します。」

消えてしまいそうな声で、私は彼へガンダムの整備作業をお願いしていく。今はとにかく、1人になりたかったのだ。心の整理をつけたかったのだ。

その場を去る私を、彼は引き止める事はしない。艦内通路へと続くドアを開き、中へと入っていく私を、彼はただ黙って見守ってくれていた。

…

……熱い雫が、手にしていた写真へと雫れ落ちていき、それは次第に雫の雨となって写真を濡らしていく。

もう枯れ果てたと思っていた私の涙は、抑え切れない感情の濁流と共に溢れ出し、写真を握り締めながら嗚咽を必死に堪え、その場から膝から崩れ落ちてしまう。

「すみ、ません……ッ、うっ……あ……ッ……！ごめん、な……ッ……う、う……!!？」

誰も居ない部屋に、ただ私の咽び泣く声だけが静かに響いていく。私をもっと上手くやれていれば、隊長は家族と一緒に幸せに暮らせる未来があった筈なのだ。何と言って、妻子に謝ればいいのか。きつと許してはもらえないだろうが、この戦いを生き延びる事が出来たなら、きちんと謝罪したいと私は思ってしまう。

暫くの間、私はその場から動けずに、写真を手にしながら何度も自責の念に駆られていた。

※

「閣下、よくぞご無事で……！」

「心配は無用だ、貴様らもよくやってくれたな。」

「あ、ありがたきお言葉……っ。」

小惑星イサベルの中では、暗礁宙域から撤退してきた陽動部隊と、廃棄資源衛星を確保した工作部隊とが一同に会し、無事に任務を達成できた喜びを分かち合っていた。私がムサカから降りて来ると、艦隊ドッグのフロアを埋め尽くす程の兵達が出迎えて来れており、私は僅かに笑みを浮かべながら兵達へと声をかけていく。周りからは「閣下！閣下！」と、私を呼ぶ歓喜の声が鳴り止まず、改めて私の身に何か

あればイサベルは崩壊するだろうと思ってしまう。

そんな兵達の奥に、見慣れた人物が立っていた。

「閣下、準備は出来ております。」

私の参謀である、ギムレット・クルス。彼は先にムサカから降りて、イサベル内の通信施設の調整を行っていたのだ。その彼がこうして艦隊ドッグに再び姿を見せているという事は、通信相手との回線が開いているという事。後は私が向かうだけという事だと分かる。

彼の言葉を受けて、私は小さく頷いた後に、マントをはためかせながら執務室へと向かって行く。

「ギムレット、あのガンダム…計画の最大の障害となるだろう。」

廊下を歩きながら漏らした私の言葉に、隣を歩く彼は僅かに目を見開きながら、信じられないと言った具合に問いかけてくる。

「…失礼ですが、戦闘記録は私も拝見しております。閣下の足元にも及ばない技量と私は認識しましたが…。」

「その油断、命取りとなるぞ。それに、あのプレッシャー…私しか分からないのも無理はない。あのガンダムなのか、パイロットの力なのか…そこまでは分からないがな。」

そう。

私の感応波にダイレクトに割り込んで来るような、あの感覚。それに、時折見せていた…装甲の隙間から漏れ出ていた赤い光。あのガンダムは普通じゃない事は直ぐに分かったものの、パイロットによるプレッシャーなのか…ガンダムが発するプレッシャーなのか、私にはまだ判断がつかなかった。そもそも、サイコミュ兵器同士の戦闘というのも、今回が初めてだったのだから。

そんな私の言葉を受けて、彼も納得したように引き下がる。実際に戦闘をした私が言うのだから、これ以上意見を言う必要はないと判断したのでろう。そこから私と彼の間には会話は無く、2人の足音だけが廊下に響いていく。

「…苦勞。」

執務室に到着すると、衛兵として控えている2人の兵が私に向けて敬礼をしてきた。私は軽く手を上げ、声を掛けて兵に労いの意を伝え

ていくと、兵は執務室のドアを開いていき、私とギムレットは中へと入って行った。執務室は豪華絢爛という言葉がピッタリなように、床一面は真っ赤な絨毯が敷いてあり、天井には豪華なシャンデリアが幾つも吊り下げられている。だが、シャンデリアは全てが点灯している訳ではなく、等間隔で灯りが点いている。全てを点灯してしまうと、私には明る過ぎて寧ろ眩しいのだ。

「閣下、こちらに。」

部屋の奥には、入り口に向かって正面に執務机が備えられており、普段私が座る席だ。彼は椅子を少しだけ引くと、私が座れるようにエスコートしてくれている。このやり取りも今となつては当たり前となつているので、私も小さく頷きながら椅子に腰掛けた。

すると、執務机の上に空間投影型のモニターが出現する。その画面には、幾つもの人物の顔が映し出されており、リアルタイムで通信が繋がっている事を示していた。画面の向こうに居る面子は、皆地球連邦政府の高官達である。

「さて…、ようこそ集まつてくれた。まずは礼を言おう。私はイサベルのネオ・ジオンを統帥する、カトレア・ペントスだ。」

私の挨拶の言葉に、政府高官達は口々に挨拶を返してきて、頭を下げてくる。この連中が、地球に引き籠もり、宇宙を我が物顔で支配し、私腹を肥やしてきた膿なのだと思うと、笑顔を浮かべてやる事すら苛立たしくもある。そんな中、連邦軍の上層部も顔を出しており、将軍と呼ばれる厳つい老齢の人物が口を挟んできた。

『…閣下は、本気であるの衛星をこの地球に落とすと申されるのか？』

将軍の一言に、政府高官達の表情が凍り付く。軍人としては至極当然の質問だろうが、政治家にとつては余りにも早すぎる本題の投下に、目が泳いでいるのが見て取れる。私はそんな空気の中を気にする事なく、スツ…、と目を細めながら口を開いていった。

「勿論だ。貴様らの返答次第だがな？」

本題に入ってしまったからには仕方ないと言うように、私の言葉に反応して高官達も口々に意見や質問を述べ始めた。

『閣下、地球は現在…大変な状況にあります。シャアの隕石落として

地球環境の破壊が進み、連邦軍も大きな痛手を被りました。今、衛星を再び落とされてしまえば…地球は本当に人の住めない星になりま…す…っ。』

『返答次第という事は、落とさない選択肢もある…という事でしょうか…？』

『我々軍は断じて容認出来ない。もし落とすのであれば、貴公らネオ・ジオンを根絶やしにするまでだ。』

『將軍、抑えて…！』

『しかし大臣、このまま奴らを野放しにするのは危険ですぞ！』

『…申し訳ない、閣下。話を進めましょう…、閣下の要求は？』

將軍のみが私に明確に反抗の意を唱えているものの、それに賛同する大臣や高官は皆無。それもそうだろう、事勿れ主義と巨大な権利の招いた腐敗は、地球の危機を前にしても一枚岩になれないのだから。穩便に済むに越した事はないという空気が形成されていく中、1人の高官からの問いかけを受け、漸く私も要求を突きつける事が出来た。「我がイサベルに、地球連邦政府の権限を全て譲渡し、連邦軍を解体。我らネオ・ジオンの傘下に入ってもらおう。それが、地球の破壊を免れる為の条件だ。」

私の要求を聞いた瞬間、政府高官達や大臣達の表情が固まってしまった。皆目を丸くし、言葉を失い、まるで魚のように口をパクパクと繰り返し開閉している。きっと頭の中で熟考しているのだろう、自らの利権を手放して良いのか…と。

そんな彼らを尻目に、將軍だけは直ぐに私へと噛み付いてくる。

『ふざけるなッ、そんなものは受け入れられる訳がない!!』

「…そうか、残念だ將軍。ギムレット、衛星を地球に向けて放て。」

『お、お待ちください閣下！直ぐには、返答しかねる問題なので…猶予を…！』

『將軍、君は退席したまえ！』

『我々も地球を預かる身…全てを受け入れる訳には…。』

『いや、然し地球を破壊されては元も子もない…。ここは要求を飲むしか…！』

『この事が世間に露呈すれば、地球から人が居なくなってしまうぞ……。そうなれば、経済も破綻する……。』

『それでは、政府運営も成り立たなくなるぞ……！』

『今の内に家族と資産をコロニーに移した方が……。』

私の一言だけで、政府高官達は慌てふためき、地球というより己の身と地位を守りたいが為の言葉をあちこちで述べ始めた。加えて、私の気を害さないようにと、大臣の1人によって將軍は会議の場から強制的に排除され、SPらによって連れて行かれたのが僅かに見て取れる。

全く、地球を守る責任者を締め出すとは、つくづく呆れたものだと私は感じてしまいがたながら、表情には出さずに内心ほくそ笑んでしまふ。シヤアの反乱があつたからこそ、私はこうして勞せず地球を手に入れられるのだから、シヤアには感謝しなければならぬだろう。

「無論、貴様らにも多少は配慮せねば、交渉とは呼べまい。もし私の条件を受け入れるのであれば、貴様らのポストを用意しよう。イサベルの中枢にな。」

正に救いの言葉、願つてもないチャンス。彼らにとって、自分の身の安全を保証されるだけでなく、新しい仕事と利権を手にする可能性が目の前に放り込まれたのだ。結論が下るまで、その時間は掛からなかつた。

『…閣下の要求を受け入れます。』

全会一致の答えだった。政府高官達や大臣達の表情は皆険しいものの、何処か安堵しているような雰囲気も画面越しに感じ取れる。地球と宇宙を再び破壊し尽くす全面戦争に発展しかねない状況に追い込まれ、それを回避して人類を生かし、命と地位が保証されるなら、それに縋る他ない……と言つた具合に。

彼らが出した結論を受けて、私はここで初めて笑みを浮かべる。慈愛にも見えるその柔らかな瞳の奥では、まるで豚を見るように蔑む感情をひた隠し、ゆつくりと言葉を紡いでいく。

「ふふ……、利口な貴様らに感謝するぞ。では、改めて会談を開き、そこで調印を行うとしよう。」

『畏まりました、場所と日時は閣下のご都合に合わせてますので…っ。』

ある程度話が纏まった所で、お互いに通信を切った。後の調整はギムレットに任せれば大丈夫だろう。私は彼へと顔を向けていくと、彼もまた了承したように頷きを見せている。唯一の懸念があるとすれば、連邦軍…特にロンド・ベルの動きだ。

「ギムレット、あの艦の動きには目を光らせておけ。」

「はっ…、畏まりました。」

あの艦、とは…暗礁宙域にて交戦した、ガンダムの母艦である。もし彼らが、我々の廃棄資源衛星を利用した作戦に勘付いたとすれば、直接衛星を破壊しに動くかもしれない。

尤も、衛星を破壊される前に調印を結んでしまえば、私の勝ちである。そう易々と好きにさせるつもりはない。悉く不安の芽を潰す為にも、諜報活動を徹底するよう、私は彼へ命令を下したのだ。

彼は自らに課せられた仕事をこなす為、私の執務室を出ていく。徐々に訪れた、1人だけの時間。私は小さく息を吐きながら、遠くを見つめるような眼差しで煌びやかな天井を見上げた。

「……お前だけの好きにはさせんさ。」

私の呟きは、宇宙の遥か彼方に向けられていた。

※

サイド5に属する、コロニー“アーダン”。都市部や商業区、住宅街が立ち並ぶ比較的新しいコロニーだが、連邦軍がコロニー発展への資金、資材援助を条件に、連邦宇宙軍の基地や研究施設機能が備わっている場所でもある。ロンド・ベルも何度かこのコロニーを利用しており、主には補給と整備の為に寄港するのが殆どだ。

ラー・ネイジユは現在、コロニーのドッキングベイに停泊し、乗組員が続々と艦から降りている状況で、補給作業と整備には日数が掛かる為、僅かな休息が許されていたのだ。それはブリッジクルーも同様であり、艦長が許可を出してくれたので、通信オペレーターのエヴァ・

ヒギンズ少尉もその内の1人である。

「……あつ、少尉、シーナ少尉!」

そんな彼女が真つ先に駆けつけた先には、この艦では最年少パイロットであり、自分と歳の近いシーナ・ランチェスターの姿があった。どうやら彼女も、一時の休息を許可されたクルーの1人らしい。

艦から降りてコロニー内部へ続くエレベーター前で声を掛け、漸くその背に追いつく。

「……あー……えつと……、確か貴女は……」

小走りに駆け寄ったので若干息が上がりつつも、声を掛けられた彼女は此方へと振り返り、小首を傾げながら見つめてくる。誰だ?という反応だが、それもそうだろう。こうして面と向かって話すのは初めてなので、彼女が私の事を知らないのも無理はない。

私は息遣いを整えながら、ブロンドのボブヘアを手櫛で整えている、黄金色の瞳で真っ直ぐに見つめ返して自己紹介をしていく。

「通信オペレーター、エヴァ・ヒギンズ少尉です。あの……シーナ少尉もこれから街に?」

私が名乗り、目的を問いかけていくと、彼女はようやく柔らかい表情を浮かべながら言葉を返してくれた。

「うん、そのつもり。モビルスーツ隊のシーナ・ランチェスター少尉です、よろしくね。」

サツパリとした笑みと、僅かに覗く白い歯、それに綺麗な栗色の髪がよく映えており、美しいというよりも格好いいという印象を受ける。流石はガンダムのパイロットと言った所だろうか。

お互いが自己紹介を終えた所で、ドッキングベイからコロニー内部の市街地へ通じるエレベーターが到着し、扉が開いた。乗り合わせるのは私とシーナ少尉の2人だけだったので、揃ってエレベーター内へと入ると、扉を閉じて地上のボタンを押し、エレベーターが下降し始めていく。地上まではかなりの距離があるので、片道だけで数分は要する為、必然と2人だけの時間が訪れていたのだ。

「……シーナ少尉、先日は助けていただき……ありがとうございます。ずっとお礼がしたくて……」

先に切り出したのは私からだ。彼女へと身体を向けて、頭を下げながらお礼を述べていく。私の言動に、一瞬彼女は複雑な表情を浮かべていたものの、直ぐに目を細めて柔らかい表情に戻っていった。「…ただ必死に戦ってただけだよ、私は。当たり前前の事をしたただけだから。」

「それでも、少尉のおかげで…私達は生きています。ありがとうございます。います…っ。」

エレベーターの壁に背を預けながら立っている彼女は、私の言葉に再び困ったような表情を浮かべるものの、素直に受け止めようと思っただのか僅かに笑みを見せてくれた。

彼女を困らせてしまう理由は、聞かなくても分かっている。先日戦闘でモビルスーツ隊にも少なからず損害があり、パイロットを何人も失った。宇宙葬にて棺を宇宙へと放出した際の、彼女の悲痛な表情は、遠目から見れていた私にもハッキリと分かったのだから。

「それで、あの…少尉、良かったらご飯とか一緒に…。」

「シーナ。」

「…えっ？」

お礼の為に提案をしようとした所で、彼女が遮るように自身の名前を呟いてきた。私はつい、素っ頓狂な声を漏らしながら、目を丸くしてしまう。

「畏まった言い方、好きじゃなくて。歳も近そうだし…もつとフランクな感じでいいからさ。だから…シーナって呼んで、エヴァ。」

彼女にしてみれば、普通の事を言ったに過ぎないのだろう。だが、私にしてみれば…彼女は眩しい存在とさえ見えてしまうのだ。そんな彼女からお願いに、私は乙女のように頬を朱に染め、嬉しそうにはにかみながら返事をしていく。

「…分かった、シーナっ。これからご飯一緒にどう？」

「いいよ、エヴァ。私で良ければ。」

私達は笑みを浮かべながら、軍人ではなく人間としての時間を堪能していた。悲しい事もあったが、こうして嬉しい事も訪れるのが、人生というものだろう。

エレベーターが地上に到着し、その扉が開かれていくと、私はシーナという友と一緒にアーダンの街へと繰り出していった。

第6話 『平和の流星』

それは、コロニー“アーダン”での補給作業が終了する頃合いの事だった。

『久しいな、大佐。』

ラー・ネイジュのブリッジに居るのは、艦長のレイ・アンダーソン大佐。現在はブリッジに只一人だけの状況で、彼はブリッジの大型モニター越しに、とある人物と通信を取っている。その相手とは、ロンド・ベルを含む地球連邦軍を統括する立場にある、将軍サイモン・マドック少将だ。

色白で白人の肌をしているアンダーソン艦長とは対照的に、浅黒くラテン系の血が入っている肌をしているのが特徴的で、制服組とは言えガツシリとした体格をしているのが、モニター越しでもありありと分かる。

「ご無沙汰しております、少将。」

アンダーソン艦長は敬礼をしながら将軍へと挨拶を返していく。階級は違えど、軍に入った時期はほぼ同じであり、2人の間には友人のような空気が漂っている。軽く笑い合った後に、直ぐに神妙な表情を浮かべる将軍の顔を見ると、アンダーソン艦長もまた真剣な表情を浮かべながら問いかけていく。

「…何やら良くない話のようですか？」

察するように問いかけられた言葉を受けると、苦笑を浮かべながら『分かってしまうかね?』と呟く将軍を見ると、無自覚であつた事が分かる。それ程にまで、芳しくない話をするという事なのだろうか。

『…大佐、今から話す内容は君とブライト司令にしか伝えない極秘事項だ。くれぐれも、取り扱いは気を付けて欲しい。』

アンダーソン艦長はただ小さく頷きながら、ジツと将軍を見つめる。立場上、このような言い回しで任務を告げられる事はあるものの、軍のトップである将軍直々に告げてくるというのは通常考えられない状況なので、嫌でも緊張感が増してしまふ。

それに、ロンド・ベル艦隊司令であるブライト・ノアと、このラー・

ネイジユにだけ伝えるという点を鑑みても、大規模に軍を動かせないかなりの厄介事である事は初めから窺えた。

『これは参謀本部を介していない、私個人の頼みだ。ロンド・ベルに再び負担を強いてしまうが、許して欲しい。』

……数日前に、ネオ・ジオンの要人と政府高官らが秘密裏に会談を開き、地球連邦政府は一方的な要求を飲まされてしまった。詳細については暗号データを送ったので、確認してみてくれたまえ。』

将軍が端末を操作し、話に出てきた暗号データをラー・ネイジユの艦長席宛に転送してきたようだ。艦長席の端末を操作し、受信した暗号データにパスワードを打ち込んで開いてみると、会談とやらの中身が事細かに記されたものが表示される。その内容を読み進めていく内に、アンダーソン艦長の表情は見る見る内に険しいものになっていった。

「…少将、これは本当ですか?」

『本当だ、大佐。このまま何もしなければ、地球連邦政府はジオンの傀儡と成り果てるだろう。』

信じられない……と言ったように目を見開くアンダーソン艦長と、苦い表情を浮かべる将軍。だが、地球を守る為に存在する軍を動かせない理由は、データを見れば自ずと理解できるものだった。

シヤアの反乱の際、連邦とジオン共に甚大な被害を被ったものの、両軍は再起不能な程に壊滅した訳ではない。ネオ・ジオン残党は再集結して組織を立て直しているという話も入って来ており、それだけでなく地球に残るジオン残党軍の問題も連邦軍は抱えている。加えて、連邦宇宙軍の独立外郭部隊であるロンド・ベルの部隊立て直すと、連邦宇宙軍全体の再編計画も進行中という最中に、この秘密会談と来た。

シヤアとは異なる派閥のネオ・ジオンが、アクシズに次ぐ隕石落としを敢行しようとしている。ただでさえ軍全体に余力が無い現状では、イサベルと呼ばれる小惑星のネオ・ジオン勢力に対して、正面からぶつかるのは得策ではない。世界の被害を最小限に留める為、政治家としては已むを得ず要求を飲み込んだという情景が、アンダーソン

艦長の頭にもありありと浮かび上がる。

「…軍人としては、首を縦に振る訳にはいかないですな。」

『その通りだ、大佐。だが知つての通り、政府機能は既に掌握されたも同然だ。軍も表立って総力を結集する事は出来ん…。そこで…君達 ロンド・ベルと、君の艦を主軸に、敵の衛星を破壊してもらいたい。勿論、出来る限りの整備と補給、情報収集に関しては、私の方で手配する。必要とあらば、いつでも言ってくれたまえ。後の責任は全て私が取る。』

將軍は本気だった。自身の進退だけでなく、命そのものを失うリスクすら受け入れている。その表情、真剣な眼差し、覚悟を決めた言葉、全てが重い。だが、アンダーソン艦長の返事は即決だった。

「はっ…、最善を尽くします。」

モニター越しに敬礼をし、任務を了承する旨を返答したのだ。例えば政府が機能しなくなったとしても、地球に住む人々を守るのが軍人の務めである。どんなに困難な任務だろうと、逃げるという選択肢など、最初から存在しなかった。

こうなった以上、廃棄資源衛星を破壊し、一方的な条約の調印を阻止する他ない。クルー達と作戦を練るだけでなく、ブライト司令とも連絡を取り、ロンド・ベルとしてどう対処するかも決めなければならぬだろう。尤も、1年前のアクシズ・シヨックから完全に立て直しが出来ていない以上、満足のいく拠点攻略が出来ない事も、アンダーソン艦長は承知していた。

「…ふう…、やれやれ…。息つく暇も無いとはこの事か。」

將軍との通信は切れ、ブリッジの大型モニターには漆黒が広がっている。アンダーソン艦長は、これから始まる作戦の重責と、クルーの命を守りたい気持ちとを一身に受け止めながら、小さなぼやきを漏らしていった。

※

「…ねえ、エヴァ。まだ買うの？」

「当たり前前つ、次にいつ寄港出来るか分からないんだから。」

「そりやそうだろうけど……。」

アーダンにラー・ネイジュが停泊してから数日が経過し、僅かな休息を謳歌するクルーの中で、シーナ・ランチエスターとエヴァ・ヒギンズの両名は、度々時間を合わせて市街地に出向いていた。

先日ランチを共にした時から、2人の距離は急速に縮まっていたいき、今となつてはお互いに肩肘を張る事も無く自然体で接するまでになつていた。今日はと言うと、エヴァの誘いで市街中心部のブティック通りへと出向いており、お洒落な洋服を色々と見て回っている最中である。

店に入つては洋服を試着し、着比べては別の洋服を探す事の繰り返し。私は大してお洒落というものには興味が無いものの、エヴァはそうではないらしい。気に入った洋服があれば財布と相談しつつ購入しており、今買ったもので3着目だ。

「シーナもお洒落しなよ、すっごい美人さんだからつ。」

「……、私が美人……？冗談はやめてよ、エヴァ。」

私は苦笑いしながら言葉を返すものの、対するエヴァはきよとんとした表情。嘘偽りのない事を言っただけに、私の返答が心底不思議だったのだろう。そもそも色恋沙汰とは無縁の人生を歩んできただけに、自分の容姿が側からどう見えるかなんて気にした事すらなかったのだった。

手持ちの私服と言えば、今着ている無地のTシャツに、適当に見繕ったジーンズくらいなので、如何にお洒落に無頓着なのが分かるだろう。それがエヴァには信じられなく、私をコーディネートした欲望を刺激されている様子だ。

「身長も高いし、スタイル良いし、顔だって良いんだから……ちゃんとした服も持つておいた方がいいよつ。」

確かに、私は他の女性に比べたら幾らか身長は高い方だ。エヴァと比べても、凡そ10cm程は違うだろうか。私としては可憐なエヴァの容姿こそ異性に好かれそうだと思いつつも、今はそんな事を言えるような流れではない。完全に彼女は私の事でヒートアップし始めて

おり、いつにも増して目も輝いているように見える。

それに、彼女が歩み寄って来てくれた事で、戦闘で傷付いた私の心が癒されたのも事実である。エヴァはどう思っているのか分からないが、少なくとも私は彼女の存在に助けられているのだ。少しくらい彼女の言う事も聞き入れるべきだろうと判断すると、「分かったよ、エヴァ。あんたに任せるからさ。」と、観念したように笑みを浮かべながら返事を返した。

「任せてー！」

その一言を皮切りに、先程以上に洋服選びを楽しみながら見てまわるエヴァと、その様子を眺めながら微笑ましそうに見守る私。途中からはまるで着せ替え人形のように、様々な服を持って来ては試着をしていく繰り返しになっていったものの、楽しんでるエヴァを見ると私も楽しくなっていた。戦争なんて無ければ、彼女とこうして普通の人生というものを送れたのかもしれないものの、戦争というものが私達を繋げてくれたので、考えてみれば皮肉なものである。

「どうかした、シーナ？この服あんまり好みじゃなかった…？」

ふと、私が物思いに耽っている姿を見て、小首を傾げながら若干不安そうに訊ねてくる彼女。私は直ぐに思考を戻すと、今はそんなつまらない事を考える必要はないのだと内心自分に言い聞かせていく。

「ううん、何でもないよ。エヴァに任せれば安心だなんて。」

私の言葉に、分かりやすく彼女の表情がパアツ、と明るくなり、服だけでなく靴やアクセサリー類まで選び始めていった。本当に着せ替え人形になったような気分であるが、変わっていく自分を見るというのも存外悪くはない。

気が付けば、彼女が購入した品数よりも、私をコーディネートして購入した品数の方が多くなり、両手いっぱい紙袋を携える結果となっていた。ちよつと買い過ぎだとは思いつつも、エヴァは満足そうな笑みを浮かべながら、「次に外出出来る時は、ちゃんと着てね？」と言ってきたので、これは彼女の言葉を受け入れるしかない。

「…もちろん、エヴァが選んでくれたものだからね。」

私も私で、充実した時間を過ごせた事の満足感と共に、彼女が楽し

めてくれた嬉しさも相まって、自然な笑みを浮かべながら言葉を返していく。こうして彼女と外出する機会があと何回あるか分からないものの、大切に思い出を作っつていこうと思ひ、通りを歩く足取りも自然と軽くなつていた。

……携帯端末が通知音とバイブレーションを放つたのは、丁度そんな時だった。

「……緊急招集だつてさ。」

「……そうみたいだね、行かなくちや……つ。」

お互いの端末に同時にメールが入つてきており、2人一緒に確認すると、艦のブリーフィングルームに至急招集という内容が記されていた。気持ちとしてはあまり見たくない内容であるものの、招集されれば行くしかない。そこはエヴァも同じよう、表情は直ぐに軍人の其れになつていた。

私達は紙袋を携えながら、ブティック通りを小走りで駆け出し、ドッキングベイに通じるエレベーターの通用口へと向かつて行く。

(……次は、みんなを守る……つ。)

私の脳裏には、あの漆黒のモビルスーツの姿が浮かび上がつていた……。

※

ラグランジュポイントIII。地球連邦軍の宇宙拠点であるルナツーと隣接している地域だが、此処に連邦の警戒網を掻い潜り、ネオ・ジオンの艦艇が複数集結していた。ムサカ級2隻、エンドラ級3隻と、それなりの戦力を有した艦隊である。そして、5隻の艦を合わせても足りない程の巨大さを誇る、正に岩の塊と呼ぶに相応しいものがその後ろにあり、ネオ・ジオンの兵達が忙しなく岩の塊に乗り移つて行く。

コードネーム“ピースミーティア”……それがこの岩の塊につけられた名だ。小惑星イサベルに搭載されている核パルスエンジンを独自に小型化し、この廃棄資源衛星に搭載する為の技術班と資材班が集

結していたのだ。無論、作業兵達の安全を確保する為に、護衛の戦艦も来ている。今のところ連邦軍に気取られているような事にはなっていないが、あまり時間を掛けすぎてもいけないというプレッシャーが、作業兵達の間確実に広まっていた。

『班長は…正直どう思いますか…これ。』

核パルスエンジンをピースミーティア内へと搬入し、ノズルを外壁部へと接続させていく作業中に、若い兵士が上官にヘルメット越しに話しかけていく。彼はイサベルで生まれ育った青年で、戦闘経験というものも無く、こうして技術班として初仕事でこの場所に来たのだ。

これ、というのは、正に今行っている核ノズルを外壁部に接続する作業の事を指している。班長は彼より二回り以上歳が離れているので、人生経験や戦闘経験の差から、彼が何を考えているのかがある程度想像出来たようだ。

『余計な事は言うんじゃないぞ、俺以外に聞かれたら懲罰モノだからな。』

『でも、こんなものを地球に落とすなんて…。あの優しいカトレア様が考えるとは到底…っ、』

そこまで言った所で、班長の目が一段と鋭くなり、青年の肩をノーマルスーツ越しに強く掴んだ。幾ら周りに他の兵が居ないからと言っても、それ以上の言葉は立場を危うくすると告げるような、そんな眼差しだった。青年は言葉を飲み込まざるを得ず、苦い表情を浮かべながら口を噤む。

『これが現実だ、作業を進めるぞ。』

班長は肩から手を離し、ノーマルスーツに備え付けられているスラストアを操作しながら、ノズルが接続された外壁部の接続箇所へと移動していく。青年の役割は班長のサポートなので、必要な工具を携えてついて行かなければならない。

(…どうしてなんですか、カトレア様…。平和を願う貴女の気持ちに、これは必要なんですか…?)

青年の脳裏には、幼年期の記憶が過ぎる。まだ幼く物心もついたらばかりの自分に、カトレア・ペントスは遊び相手になってくれた。年齢

もそれ程離れている訳ではないものの、立場の違いというものが理解出来るようになった年齢となった時には、この宇宙と地球の平和について語ってくれた。アースノイドもスペースノイドも分け隔てなく、分かり合える世界を作る為に力を貸して欲しいと、彼女のその言葉を信じて今この場に居るというのに、やっている事は地球の人々を殺戮する手伝いだ。

口に出す事はなく、モヤモヤとした気持ちを抱きながらも、青年は班長の背を追いかけて移動していく。願わくば、この岩が人々の住む場所ではない何処かに落ちて欲しい…と。軍人としての気持ちと、1人の人間としての気持ちの狭間で揺らめきながら、数時間後には問題なく核ノズルが外壁部との接続を完了させ、エンジンとの同調作業が開始されていった。ここから先は別の技術班の作業となるので、青年の所属する班の任務は終わり、母艦であるエンドラ級軽巡洋艦へと戻る小型艇に乗り込んでいく。

『よし、全員乗り込んだな。ランチ出すぞ。』

操縦士からの船内アナウンスが流れ、小型艇はピースミーティアの外壁から離陸していった。ふわり…と浮かび上がり、スラストターを噴射させて宇宙の海を進み始める。丁度青年が座る席の小窓からは、青い星が見えていた。

(…ごめんよ、僕にはどうしようもないんだ。許してくれ……。)

青年は心の内で、地球に謝罪の言葉を静かに送る。

無力な自分への言い訳のように。

第7話 『ピースミーティア攻防戦』

「ブリーフィングを始める。」

アンダーソン艦長の言葉が、静寂に包まれたブリーフィングルームに木霊する。

此処は、ラー・ネイジュの中にあるブリーフィングルーム。ブリッジクルーの面々、モビルスーツパイロット達、機関長、整備長らが出席しており、壁には大型のモニターが設置されていて、その横に艦長のレイ・アンダーソンが佇んでいる。本来であれば副長のエリス・ノートレス中佐も補佐として横に立っているのだが、今回は彼女も最前列の席に着席しており、その光景だけで大多数の出席者は普通と違う違和感というものを感じていた。

だが、そんな事を詮索しても仕方ない。その違和感の理由は、これから艦長から説明される作戦内容で明らかになるのだから。

「まず、これを見て欲しい。」

アンダーソン艦長がモニターに触れると、画面が変わっていき、地球を取り巻く各コロニーサイドや月の位置関係が示されたマップが表示された。この場が集まったクルーにとっては見慣れた宇宙の地図であり、もつと言えば小さな子達が学校で習う地図でもある。その中において、サイド5の宙域に赤いシグナルが点滅していた。シグナルの上には『ラー・ネイジュ』と表示されているので、現在の艦の位置を示しているものだと一目で分かる。

「これが、現在の我々の位置だ。本来であれば再び暗礁宙域へと向かい、ネオ・ジオンの残存勢力の搜索と追撃に出る所だが……、我々は此処に向かう。」

暗礁宙域は、此処コロニーアードンからは割と近場だ。そもそも暗礁宙域とは、サイド5に属する宙域：所謂“ルウム戦役”の古戦場跡を指すものである。デブリが密集しているので素早い動きが取れない場所であるものの、姿を隠したり気配を消すにはうってつけの場所でもあるので、通常であれば交戦したネオ・ジオン勢力がまだ留まっている可能性があるのだ。

然し、アンダーソン艦長が示した場所はまるで違っていた。新たな赤いシグナルが点滅した場所は、地球を挟んで反対側……ルナツーと地球、サイド7宙域の3地点の間にある、ラグランジュポイントII I。その中心地に、シグナルは点滅している。

「諸君も知つての通り、我々はネオ・ジオン軍の大規模反抗作戦を未然に防止、或いは武力を用いて阻止する事を任務としている。これは、その本丸だと思ってもらいたい。」

そう言うと同時に、ラグランジュポイントII Iと表示されている場所に、黒い何かの塊が追加で表示された。そこに記されているのは、“Peace Meteor”という名称。そのまま素直に読むとするなら、平和の流星……又は、隕石だ。

その言葉を見て、ブリーフィングルームに招集された1人であるシーナ・ランチェスターは、言い様のない不思議な感覚のようなものを感じていた。

(……隕石……)

連想されるのは、1年前のアクシズ・ショック。ネオ・ジオン総帥のシャア・アズナブル大佐が引き起こした、ファイスルナと小惑星アクシズを地球に落とした、一連の反乱作戦の名称である。自身もあの場に居合わせ、サイコフレームの奇跡とも言える超常現象を目の当たりにしただけに、どうしても今回の任務と重なって思い出してしま

う。そして、私を感じている事は、現実の事としてアンダーソン艦長から告げられた。

「廃棄資源衛星……情報によると、コードネームはピースミーティア。この衛星を地球に落とそうと企て、ネオ・ジオンが集結しているとの事だ。この衛星を破壊し、奴らの企てを阻止するのが、今の我々に託された任務と心得て欲しい。」

アンダーソン艦長の言葉は、真っ直ぐで重く、非常に簡潔だった。聞きたい事、疑問点は多々あるものの、それらを代弁するかのよう

先ずは副長のエリス中佐が口を開いた。

「……艦長、敵の規模や衛星の大きさは分かるのですか？」

この質問で、誰もが最初から感じていた疑問が解けた。エリス中佐にすら、今回の任務は伝えられていなかったのだ。それ程急な任務なのだろうとも言えるし、極秘任務だろうとも言える。

副長の質問を受けて、アンダーソン艦長はモニターに触れていき、次の画面へと移していった。先程までの地球と月周辺を取り囲む各コロニーサイドの全体マップから、ラグランジュポイントIIIを拡大したマップに切り替わる。そこには、ピースミーティアを中心として、敵の凡その数と配置が表示されていた。

「衛星の大きさは、小惑星アクシズの片割れより一回り小さい程だと考えてくれ。現在までに観測されている艦隊は、グワダン級1、ムサカ級3、エンドラ級5だ。」

そう言うと同時に、マップ上に敵の艦を模したCG像が浮かび上がり、かなりの戦力が集結している事を示していた。エンドラ級はともかく、ムサカ級やグワダン級を相手に立ち回りつつ、この巨大な衛星を破壊するとなると、正直言ってラー・ネイジュ1隻では不可能ではないかと思ってしまう。

私がそう感じている事は周りも同じようであり、あちこちでざわつきが起こり始めた。モビルスーツ部隊のパイロット達は態々死に飛び込むようなものだと考えているようであり、怪訝な表情を浮かべている。無理もないが、場の空気を一度静めるようにアンダーソン艦長が咳払いをし、ざわつきが落ち着いたのを確認してから言葉を続けた。

「ロンド・ベルも全隊を動かせる状況には無く、ブライト司令もそれは承知している。この衛星を取り巻くネオ・ジオンは、シャア一派とはまた別の組織との情報だ。ルナターの連邦軍も迂闊に出払う事は出来ない。」

：よって、我々への増援はクラップ級3隻が限界だ。厳しい状況に変わりないが、衛星の破壊に関しては極秘裏に特殊部隊エコーズが衛星内に潜入し、破壊工作を行う。我々の任務は、敵戦力を引き付け、エコーズの侵入経路を確保、及び退路の維持と援護にある。」

私は目を僅かに見開いた。正に活路を見出した、という感覚だった。

た。噂でしか聞いた事がないが、連邦宇宙軍の中に存在すると言う特殊部隊エコーズ。彼らも同時に作戦に参加すると聞いただけで、グツと勝算が増した気がした。心強い味方を得た事で、ブリーフィングルーム内の空気も変わり、全員の目には闘志が漲る。

静かな闘志を燃やすクルー達の熱量を身に受けながら、アンダーソン艦長は最後に僅かに笑みを浮かべ、締め言葉を送った。

「……ラー・ネイジユ、出航準備だ。諸君の奮起に期待する、解散つ。」

※

同時刻、ラグランジュポイントII。ピースミーティア周辺に集結しているイサベルのネオ・ジオン艦隊の中に、カトレア・ペンタスが座乗するグワダン級旗艦『アグライア』が居た。ルナツールの連邦軍が表立って阻止作戦を展開して来ない事を分かっているのも、これだけ堂々と艦隊が集結する事が出来ており、ピースミーティアへの核パルスエンジン搭載も滞りなく遂行する事が出来た。

「……ふふ、私の計画もここまで順調だな。」

アグライアのブリッジから艦隊を眺めるカトレア・ペンタスは、微笑を浮かべながら呟く。陽動部隊として暗礁宙域で戦闘を繰り広げたムサカ級2隻は、修理と補給の為現在は小惑星イサベルにて待機中なので、現状では即応出来る戦力としては目の前に集結した艦が全てである。

これが仮にピースミーティアが無く、連邦政府との密約も無く、ただ真正面から連邦軍と事を構えたとすると、間違いなく我々が塵芥のように擦り潰されるだろう。それ程に艦隊規模としては心許ないが、それも間も無く気にする必要は無くなる。条約の調印さえ済んでしまえば、地球は私の手に委ねられたも同然となるのだから。

「連邦政府の代表団が、間も無くサイド7宙域に向けてシャトルで宇宙に上がってくる模様です。」

「そうか……。」

アグライアの艦長が私に向けて報告をして来ると、その内容に微笑を浮かべる。要求通り、護衛のモビルスーツや護衛艦をつけず、代表団のみでサイド7へとやって来るようだ。

今回調印式を行うのは、サイド7に属するコロニー“ロウグ”。連邦にもジオンにも与せず、戦争行為を禁じ、中立を宣言しているコロニーの1つだ。このコロニーを指定したのも、中立故に…である。戦闘行為そのものを禁じている為、連邦もジオンも軍事力を以て侵攻する事が出来ない。よって、高度に政治的なやり取りを確実に行うにはうってつけの場所なのだ。

「閣下、連邦軍に動きが。」

ふと、私の耳に下士官からの報告が入る。その言葉を聞くと、少しだけ怪しげな笑みを自ら浮かべた。

下士官からの報告内容は、サイド5宙域に連邦の補給艦数隻と、クラップ級が3隻集まっているというものだ。先の戦闘でロンド・ベルの戦艦がサイド5に寄港した事を考えると、恐らく増援部隊であると推測出来る。

……やはり動いた。正規軍でないとすれば、恐らくはロンド・ベルだろう。本来はこんな感情を抱くべきではないのだろうが、私は気分が高揚してしまっていた。アナハイムの思惑に乗せられている事は癪に触るものの、あのガンダムを倒せば私の計画は完全なものになるのだから。

「ロンド・ベルなら放っておけ。此処で奴らを迎え撃つ。」

「然し、閣下……。」

「進路が此処に向けられているのなら問題はない、イサベルが探知されていらないならどうとでもなる。……迎撃体制を取らせろ、良いな？」

下士官はこれ以上の進言は失礼に当たると考え、敬礼をしながら了承の意を私に伝えてきた。その姿を見届けながら、私は艦長に「後は任せるぞ、艦長。」と言い残し、モビルスーツデッキへと向かう為にブリッジから艦内通路へと出ていく。

……そう、どうとでもなるのだ。小惑星イサベルはこの地球圏に確

かに存在しているが、まず探知される事はなく、目視もほぼ不可能だ。唯一探知される可能性があるとするれば、艦隊がイサベルの艦船ドッグに入港する所を追跡されるくらいだろう。私達の家があれば、私達はいつでも立ち上げられるのだから。

ふと、通路の奥の扉が開き、軍服を派手な装飾で飾り、髪を紫色に染めたモヒカンヘアーの奇抜な風貌をした人物が近付いてきた。私よりも一回りも二回りも大きな体軀をしており、私は僅かに見上げる形になりながらその人物を見つめ、向こうは私の前で止まると姿勢を正して敬礼し、ニヤニヤとした怪しげな笑みを浮かべて見つめ返してきた。

「ご無沙汰しております、カトレア閣下。リベリオ・ビアンキ、只今戻りました。見目麗しい閣下を再びこの目で見る事が出来て、生きる喜びを噛み締めている所存であります。」

「ん……ご苦労、リベリオ。連邦の偵察部隊の始末、見事であった。」
リベリオと呼ばれた男は、私の言葉を大事に受け取るように、仰々しくその場で頭を下げながら「勿体なきお言葉です、閣下。」と呟いた。頭を下げた事でその表情は窺い知る事は出来ないものの、きつとあの薄気味悪いニヤけ面を浮かべている事だろう。

「此度の作戦、私の部隊も戦力として閣下の為に戦います。」

そんな私の考えなどお見通しと言わんばかりに、何処で覚えてきたのか爽やかな表情を浮かべながら彼は顔を上げた。追加戦力の話は既に耳に入っていたので、私はただ小さく頷くに留める。

これで挨拶は終わり、私はモビルスーツデッキへ向けて進み始め、彼は艦長に挨拶をするようにブリッジに向けて進んでいく。

「……連邦なんて、アタシがぐつちやくちやにブチ殺してやりませんか……。くっ、ふふ、ソフフフ……。」

去り際、すれ違った瞬間に彼が私の耳元で囁いてきた言葉……これが彼の本性だ。薄気味悪い笑い声を静かに通路内に響かせながら、彼はブリッジに通じる扉を開き、その姿を消していく。

「……俗物が。」

彼が居なくなつた通路に、軽蔑するような私の言葉が静かに木霊す

る。

リベリオ・ビアンキ……小惑星イサベルのネオ・ジオン軍内において、特殊な立ち位置に存在する将校。彼自身、独自のモビルスーツ部隊を編成しており、指揮官でありながら彼もまたパイロットとして最前線に赴く兵士でもある。その主任務は、所謂汚れ仕事だ。

彼自身、そして彼の部隊に所属するパイロット達は、皆戦争というものに取り憑かれた戦争狂徒だ。戦いの中でしか生きられず、戦いこそ自分の存在を認知出来るという者達が集まっている。イサベルに留まっている事は極稀であり、基本的にはモビルスーツを用いたテロ活動や暗殺任務、戦争を意図的に勃発させる為の火種を地球やコロニーに巻く…等、表には出せないような事を喜んで行う連中である。

一抹の不安はあるが、今は確かに戦力が欲しい。外道な連中を戦いに加える事のリスクは、この戦いに勝つ事で拭い去るしかないのだ。

(後は…、私の問題だな。)

モビルスーツデッキに通じる扉を開きながら、懐からタブレットケースを取り出し、白い錠剤を1錠取り出して口に含み、喉を鳴らして飲み込んでいく。今の私には欠かす事の出来ない薬であり、これが無ければキュベレイの実力を引き出す事が出来ない。少しだけ頭から血が引いていくような感覚を覚えつつ、然し薬が直ぐに身体に浸透して通常感覚に戻っていくと、ゆっくりと息を吐いて瞼を閉じた。私には、この感覚が未だに苦手だ。

モビルスーツデッキ内へと足を踏み入れ、無重力の空間に身体を浮かしていきながら、直立でデッキ内に格納されているキュベレイの足元へと向けて降りていく。傍らには、キュベレイを整備している整備兵達が忙しなく作業を進めていた。

「敬礼はいい、作業を進めるのだ。」

私が来た事で皆一斉に作業の手を止め、その場で敬礼しながら私へと視線を集めてきた。仕方ない事とは言え、私からの命令が無ければ、彼らはずっとこのまま敬礼を続けて微動だにしない。

私は作業に戻るように彼らへと命令を下すと、皆返事を返してから敬礼を解き、再びキュベレイの整備作業に戻っていく。私は私でコッ

クピット周りやサイコミュ受信機の調整を行う必要があるのですが、そのまま地面を蹴って無重力空間を跳躍し、一気にコックピットへと上がっていった。

「あつ、閣下……お待ちしてありましたっ。」

コックピットの中には既に若い整備兵が居て、パネルやモニターの整備作業を行っていた。私が来る事は知っていたようで、直ぐに作業の手を止めてコックピットから出て、手を翳しながら中へと入れるようにしてくれた。

私は「ご苦労。」と労いの言葉をかけて微笑を浮かべると、コックピットのシートに座り、サイコミュ受信機の調整作業を始めていく。(……負けはせんよ、絶対な。)

私の脳裏には、あのガンダム姿がハッキリと浮かんでいた。

※

「ウォルドさん、話って何？」

ラー・ネイジユがアーダンを出航してから、何やらモビルスーツデッキが慌しい。通常の整備作業ではなく、見た事のない武装や追加装甲が次々と運ばれており、メカニックマン達は忙しなくあちこち動き回りながら作業をしていた。

そんなモビルスーツデッキに、シーナ・ランチエスターは上司であるウォルド・シャウラから呼び出されていたのである。

「見ての通り、ルミナスの追加パーツと武装だ。次の作戦までに何とか間に合ったので、グラナダから補給艦に載せて運んで来てもらったのだよ。」

「これ……全部が……っ？」

驚いた。

これだけのパーツ全てがガンダムの為だけのものだと知り、目を見開きながら見渡していく。丁度私と彼はモビルスーツデッキの壁際にある通路から全体を見下ろす形となっているので、ルミナスガンダムへ追加装甲を装備していく様がハッキリと見れていた。それなり

に整備についても、モビルスーツ工学についても勉強はしてきたつもりであり、これだけのパーツの数を追加装甲として装備するならば、全身を覆う程になるのではないかと思ってしまう。

そんな私の考えは表情や眼差しに表れていたようで、彼は横から私に端末画面を見せてきた。

「……ルミナスガンダム…H.W.S.？」

端末画面に表示されていた文字を、私はそのまま口にしていく。首を傾げる私に対して、彼が簡潔に説明をし始めてくれた。

「H.W.S.（ヘビー・ウエポン・システム）は、ルミナスガンダムの拡張装備構想の1つで、元々はアムロ大尉のヒーローガンダムに搭載する予定だったものをルミナス用に作り替えたのだ。言わば設計の流用にはなるが……そのお陰で、装備の製造期間を大幅に短縮出来た。」

詳しい装備の中身はその端末に全て入っている、よく目を通して見て欲しい。」

「ヘビー…ウエポン、システム……。」

私は更に驚いてしまった。この装備のインパクトについてもそうだが、あの憧れのアムロ・レイが手を加えたものを自分が使えるという事に。私は食い入るように、端末画面に表示されている仕様について確認していく。

まず目を引くのは、その見た目だ。胸部、フロントアーマー、脚部それぞれに追加装甲を施し、分厚い鎧を身に纏っているような重厚な印象を受ける。胸部装甲にはミサイルランチャー、フロントアーマーにはマニピレーターが内蔵されており、脚部装甲は追加スラストが展開可能となっている。加えて、背面バックパックユニットに大型のハイ・メガ・シールドを装着する事で、それ自体が追加スラストの役割も果たし、スペック上は通常のルミナスより機動性は上がっているようだ。また、バックパックユニットに装着したハイ・メガ・シールドの両端には、新たにルミナス用に設計されたハイパー・バズーカを左右それぞれ1挺ずつ装備する事が出来、キャノンのように背面からバズーカでの砲撃が可能となっている。通常武装のライフルも変

更が施され、ハイパー・ビームライフルそのものに追加装甲を施した、ハイパー・メガ・ビームライフルへと換装されるようだ。

……と、端末に表示されている仕様を見るだけで凄まじい情報量だが、これは全て頭に叩き込まなければならぬ。操縦する上で、機体の何処に何が装備されているのかを正しく把握し、その仕組みを理解する事が、自身の生存率を上げるのだから。

「換装作業は明日までには終わるだろうから……」

「分かっているよ、ウォルドさん。ちゃんと読んでくし……明日はH.W.S. のテストって訳でしょ？」

「……その通りだ、少尉。」

私の言葉を受けて、彼は小さく息を吐きながら笑みを浮かべている。今でも私はガンダムのテストパイロットという立場に変わりはないので、新しい装備が出来たらテストをするのが仕事だ。今はその延長線で、そのままテストを実施しつつ戦闘任務に従事しているという訳だが。

(……見ていて下さい、アムロさん。ガンダム……乗りこなしてみせます。)

簡単にやられるつもりは無いし、簡単に死ぬつもりも無い。アムロ・レイが設計を施したガンダムに、泥を塗るような真似は出来ないのだから。

重厚な見た目が変わりつつある愛機を見下ろしながら、私は憧れの英雄へと心の内で誓った。

※

「社長、報告です。」

「ん、読み上げてくれ。」

「はい。現在ラー・ネイジユはラグランジュポイントIIIに向けて航行中、ガンダムの追加装備の換装作業を進めているとの事。また、ピースミールティアのネオ・ジオン軍も艦隊の布陣を展開し終え、ロンド・ベル艦隊を迎撃する模様です。接触予定時刻は72時間後……、

以上です。」

「そうか……、楽しみだねえ……。それと、例の機体の方はどうかね？」
「はい、現在シーナ少尉の戦闘データを解析し、機体システムに組み込んでいる最中です。本体は数日あれば可動試験まで持っていけますが、“付属品”については現在も製造中で……2週間程あれば。」

「結構結構、いずれ必要になるかもしれないからね。私の夢の為に……な。」

「……仮に、カトレア・ペンタスとシーナ・ランチエスターで成し得なかった場合は、如何なさるおつもりですか？」

「問題はないさ、カトレアの代わりなど幾らでも用意出来るだろうか。それに、連邦が出来ないと言うのであれば、そのノウハウをアナハイムで利用してみるのも……また一興じゃないかね？ふっ、ふふ……。」

「……畏まりました、社長。引き続き機体の製造に注力するよう、現場に指示を出します。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

『ピースミーティア攻防戦』（2）

『これより、地球の大気圏を離脱する為に最終加速をかけます。シートベルトは外さないよう、しっかりと締め下さい。』

ダカールにある民間シャトル打ち上げ場から、1機のシャトルがマストライバーで射出された。民間機とはカラーリングが異なる、地球連邦政府専用機だ。第1加速はシャトルに外付けされている大型ブースターでシャトルを空に上げ、成層圏付近まで上昇した所で、最終加速をかける為に4基あるサブブースターが点火され、機長による船内アナウンスから程なくして重量のあるシャトルは地球の大気圏を離脱した。

シャトルに外付けされているブースターユニットがパージされ、宇宙デブリとして宇宙の海へと漂っていき、その直後にシャトル本体のブースターが点火され、巡航速度で航行を開始していく。同時に、ここでようやくシートベルト着用サインが消え、乗り合わせた政府要人達やSPらがシートベルトを外し、各々寛ぎ始めた。

この政府専用機を目指す先は、サイド7に属するコロニー“ロウグ”。イサベルのネオ・ジオン勢力要人との会談場として指定され、地球の主権や利権をイサベルに譲り渡すという、謂わば奴隷服従の条約を結ばされる為に向かっている。

「…副首相、将軍から3度目のメールが届いておりますが。」

今回条約締結の代表団を率いる、団長のミコラ・イエルネハルト副首相は、側近の官僚から連邦軍の総司令であるサイモン将軍よりメールが届いていると聞き、小さく溜め息を吐いた。

「はあ……、またかね。大人しくしてもらいたいののだが…。」
内容は見なくても分かる、とでも言いたげな表情を浮かべながら、官僚から差し出された端末を取り、メールの中身を確認している。

「現在、廃棄資源衛星の破壊作戦を展開中です。条約の調印の再考を、再度御願ひ申し上げます。」

「作戦と言えるだけの戦力など、今の連邦には動員出来ないだろうに

…。これで彼らを刺激してみる、衛星が落とされて地球は破壊されてしまう。」

将軍からのメールを読み終えた副首相は、端末画面を閉じて官僚へと返していき、不満を口にしていた。副首相だけではない、この場に居る代表団全員が同じ気持ちなのだ。もう一度人類を滅ぼす全面戦争や、地球を滅ぼす悪魔のような隕石落としなど、二度とあってはならないのだから。それに比べれば、地球の100億の人間を生かし続けられる選択肢を選ぶ事によって、政府の要人達の地位や名誉を失う事など、些細な問題に過ぎない。

そう思わない一部の利権にしがみつく閣僚達や、あくまでもネオ・ジオンに敵対する将軍一派等、中々一枚岩になり切れない現状にもどかしさを感じつつ、副首相は窓の外に視線を向ける。

「……仮に衛星を破壊出来た所で、それで終われば苦労はない。奴らの切り札が衛星だけとは、私には思えんがね…。」

副首相のぼやきを、隣の席に座る官僚は黙って聞いていた。口を挟む権限も無ければ、そこまで深く洞察する理由も無かったからである。だが、時間の針はそれぞれの事情や思惑など配慮する事もなく、無情にも進み続けていく。

ふと、副首相の目が遠くを一点に見つめる。その視線の先には、宇宙に浮かぶ星々の光ではない、人工的な光が水泡のように点いては消えるを繰り返していた。それは、爆発の閃光。

(……始まったか。)

副首相の視線に気付いた周囲の要人達が、次々に窓の外へと視線を向けていき、機内の空気がざわつき始める。何故戦闘が行われているのか、誰も理解出来ない。それもその筈で、将軍からのメールは副首相とその官僚しか知らず、まさか軍の一部が衛星を破壊しようという行動を起こしているなど想像も出来ないからだ。

だが、このシャトルの進行方向は戦闘宙域からは大分離れている。まず戦闘に巻き込まれる心配は無いが、それでも代表団は爆発の光から目が離せないでいた。

(無駄な犠牲を増やさない為にも、条約の調印を急がねばな……。)

副首相の胸の内には、連邦とジオン双方の将兵達の命を救いたいという思いが広がっていた…。

※

時間は少し遡り、政府専用機のシャトルが宇宙に向けて打ち上げられた頃。ピースミーティア周辺に敷かれたネオ・ジオン軍の警戒宙域に差し掛かる場所に、ラー・ネイジユを旗艦とするロンド・ベル艦隊は接近していた。

「艦長、ロビンソンより入電。『今宵の月は満月』…です。」

ラー・ネイジユのブリッジクルーである、エヴァ・ヒギンズ少尉が、アンダーソン艦長に向けて暗号通信の内容を告げた。ロビンソンとは、今回随伴艦として行動を共にするクラップ級巡洋艦の内の一隻を指すコードネームであり、“今宵の月は満月”という暗号文は、ロビンソンが運んできた連邦宇宙軍特殊作戦群『エコーズ』部隊の、作戦準備が完了した事を示すものだった。

この報告を聞き、アンダーソン艦長は艦長席に備え付けてある通信用の受話器を手に取り、ラー・ネイジユ艦内だけではなく、クラップ級2隻の艦内にも同時にアナウンス出来るように通信のスイッチを入れた。

「…ラー・ネイジユより達する。これよりフェイズ1に移行、作戦行動を開始する。我々の行動によって、地球の未来が決まると言っても過言ではない。全クルーの奮起に期待する。」

作戦行動開始。この合図により、ラー・ネイジユとクラップ級2隻の艦内は一気に慌しくなった。

フェイズ1では、3隻の艦砲射撃による敵艦隊への牽制と攪乱攻撃を敢行し、ミノフスキー粒子を戦闘濃度まで緊急散布する事が必須となる。先制攻撃で敵部隊の動揺を誘い、体勢が整う前にモビルスーツ部隊を全機発艦させる狙いがあるのだ。加えて、エコーズ部隊がピー

スミーティアへと取り付き、衛星内に侵入出来るように、目眩しも兼ねた派手な牽制攻撃を仕掛ける必要がある。

「対艦、対空、対モビルスーツ戦闘準備良好し！」

「ロビンソン、ネルソン、共に準備完了です！」

「主砲、対艦ミサイル、照準合わせ。目標、敵艦隊中央！」

砲術長のアレン少佐、通信オペレーターのエヴァ少尉、副長のエリス中佐がそれぞれ声を張り上げ、全艦射撃準備が整った事を確認し、最後に航海長のサンドラ少佐が艦長に向けて報告を飛ばす。

「敵警戒宙域、突入しました！」

これで全ての準備が整い、アンダーソン艦長が声を上げた。

「機関停止、慣性航行。主砲、対艦ミサイル、撃ち方始めッ。」

命令が下ると同時に、3隻の艦から一斉に主砲のビーム攻撃と対艦ミサイル攻撃が敢行された。目標は彼方に展開されている、ネオ・ジオン艦隊中央。マゼンタ色のビームの軌跡が無数に放たれ、エンドラ級やムサカ級に襲い掛かっていく。そして、時間差で対艦ミサイルが敵艦隊に降り掛かっていき、向こうは対空機銃で迎撃しているものの、何発かは命中した様子で迎撃の弾幕が緩んだのが分かった。

「ミノフスキー粒子、戦闘濃度散布ッ。モビルスーツ隊、発進急げ！」
数十秒間に及ぶ艦砲射撃が一旦止み、エリス中佐から艦内部署へと命令の通信が飛んでいく。先制攻撃の役割を果たし、後はモビルスーツ部隊を滞りなく発艦させる事に注力しなければならない。ミノフスキー粒子の散布により遠距離誘導攻撃のリスクは低下したものの、ネオ・ジオン艦隊もモビルスーツ戦に移行する為に、艦載モビルスーツ部隊の発艦を急ぐだろう。ここからは、正に時間との勝負となる。

時を同じくして、場所はラー・ネイジユのモビルスーツデッキ。エリス中佐の命令はデッキ内に響き渡り、既にコックピット内で待機していたパイロット達は、一斉にメインジェネレーターのスイッチを押して機に火を入れた。ルミナスガンダムに搭乗するシーナ・ランチェスターも、その内の1人である。

『第1、第2デッキ、ハッチオープン。モビルスーツ隊、順次発進せよ』

！』

次いで、通信オペレーターであるエヴァ少尉のアナウンスがデッキ内に響き、カタパルトデッキのハッチが開放され、射出準備が整った事を全パイロットに告げてきた。一方で私は、モビルスーツ部隊による作戦内容を頭の中で思い返していた。

(……絶対に失敗は出来ない。やるよ、ルミナス。)

今作戦の要は、正にガンダムに委ねられている面が大きい。新たに装備されたH・W・S。(ヘビー・ウエポン・システム)による、高機動且つ高火力を最大限発揮しなければならないからだ。

私が担う役割は、敵艦隊への強襲と可能な限りの撃滅、そして敵エース機の排除にある。他の敵モビルスーツ部隊はジェガン部隊とリゼル部隊が引き付ける事になっており、彼らが押し切られる前に敵艦隊の数を減らし、エコーズの作戦遂行と退路確保を援護しなければならない。

あの黒いモビルスーツ……、情報によるとキュベレイタイプの子機体という事を知り、操縦桿を握る私の手には、無意識に力が入ってしまったっていた。一筋縄では行かないことは分かっているものの、負ける訳にはいかない。必ず仕留め、地球に落とされる前に衛星を破壊しなければと、決意を新たに固めて小さく息を吐く。

『よう、新入り。お前は後ろを振り返らずに、思いっきり暴れて来い。ケツは俺らが支えてやるからよっ。』

ふと、私の思考を遮るように、ヘルメット内のスピーカーから男性の声が響く。この軽い口調は、元ラプター8のローマン中尉。現在はジェラルド隊長の後任として、ラプター1の地位に昇格し、モビルスーツ部隊の隊長を務めているのだ。

彼の言葉は、ピリついたこの空気の中ではふざけているようにも受け取れてしまうが、私としては程よく肩の力が抜けて寧ろ有難い。フツ、と笑みを溢すと、メカニックマンの誘導に従ってカタパルトデッキへ機体を移動させていきながら、新隊長へ言葉を返していく。「頼みましたよ、ローマン隊長。」

私の言葉と同時に、今度は別の人物の通信が割り込んできた。コン

ソール画面に映像も映し出され、そこには見慣れた女性兵士の顔が現れる。

『シーナ少尉、進路クリアです。ご武運を……!』

通信オペレーターのエヴァ・ヒギンズ少尉だった。その表情は緊張感を持ちつつ、私の身を案じるような眼差しを向けてきている。作戦内容を知っているだけに、気が気でないのだろう。

私は彼女を安心させるように、ヘルメットの内で僅かに微笑を浮かべる。

「…必ず帰って来るよ、エヴァ。」

ガンダムの両足がカタパルトに接続され、ハッチの向こう側には宇宙の海が広がっている。射出されれば、暫く私は単独行動だ。操縦桿を引き、ガンダムを屈ませて射出体勢を整え、射出タイミングがこちらに譲渡された事がコンソール画面に表示されると、私は一気に操縦桿を目一杯押し込んだ。

「シーナ・ランチエスター、ルミナスガンダム…行きますッ!」

凄まじい加速Gを身体に感じながら、勢いよくガンダムがカタパルトで射出され、打ち出された瞬間に操縦桿のボタンを押してプロペラントタンクのスラスターを起動させ、足元のペダルを踏み込んでスラスターを全開にしながら宇宙の海へと飛翔していく。H・W・S.によって機体重量は大幅に増加したものの、宇宙空間において重量増のデメリットは大きな問題にはならず、ガンダムは追加スラスターとハイ・メガ・シールドのブースターによって圧倒的な推力と機動力を得たのだった。

「ぐっ……う……ッ……!」

通常のルミナス以上の、暴力的な加速力。いくら耐G負荷軽減装置が内蔵されている専用パイロットスーツとはいえ、それでも内臓を圧迫される程のGが身体にかけられ、つい歯を食いしばりながら声を漏らしてしまう。数日前のテスト飛行以上にペダルを踏み込んでいるのは、一刻も早く敵艦隊の直上に向かう為である。

私の軌道は、かなりの大回りとなるルートだ。敵に察知される事なく、敵艦隊の直上を取る為には、このルートが最も確実なものだ。その間、味方部隊は敵部隊の波状攻撃に晒される事になる。

(このくらいいの…Gなんて…ッ。)

私はガンダムに鞭を打ち、更に上昇していく。その姿はまるで流星の如く、宇宙の空に消えていった。

※

「艦隊、迎撃！モビルスーツ隊の発進を急がせろ！」

ロンド・ベル艦隊から先制攻撃を受けたネオ・ジオン艦隊は、対艦ミサイル群を機銃の弾幕で迎撃しつつ、艦のメガ粒子砲で反撃の艦砲射撃を行っていた。だが、距離が相当離れている事と同時に、ミノフスキー粒子を戦闘宙域に散布された事で、精密射撃というものは至難の業と化しており、艦砲射撃は命中する素振りすらない。

だが、これで良いのだ。あくまでも牽制射撃であり、自軍のモビルスーツ部隊を発艦させる為の時間稼ぎなのだから。現在の戦闘において主役は艦隊戦ではなく、艦載モビルスーツを如何に有利な状況で運用出来るかという部分が大きいので、今は一刻も早くモビルスーツ部隊を展開する事が重要となる。旗艦アグライアの艦長は、各部署へと通信を介して命令を飛ばしていき、迫り来るロンド・ベルのモビルスーツ部隊を迎え撃つ態勢を整えようとしていた。

「閣下、すぐに敵が来ます。急ぎ発艦を…！」

『慌てずとも良い、露払いはリベリオ隊に任せておけ。』

艦長の言葉に、ヤークト・キュベレイのコックピットにて待機しているカトレア・ペントスは、通信を介して返事をして来た。艦長は直ぐに「畏まりました…閣下。」と言葉を呟くと、意識を直ぐ前方に向けていく。

リベリオ・ピアンキ率いるモビルスーツ部隊は、アグライアから見て左翼に位置しているムサカが母艦となっている。こちらが指示を飛ばす前に、どうやら彼らのモビルスーツ隊は素早く発艦中らしく、

複数の移動熱源が Rond・ベル艦隊の方向へと向かって行っているのを捉えていた。どの艦の艦載機よりも早く発進を終えている時点で、如何に戦争に慣れ親しんでいるのかがよく分かる。

「…遅れを取るなよ、発進遅いぞー」

リベリオ・ビアンキの黒い噂は、イサベルに居る者なら誰もが知っている。彼だけに手柄を取られてしまえば、他の将校達の評価にも影響してしまう。何よりも、イサベルを導くカトレア・ペンタスの求心力を落としかねない。

艦長の言葉が示すように、アグライアのモバイルスーツ部隊の発艦は、リベリオ隊に比べてゆったりとしたものに映るのも無理はない。彼らが異常に早いのである。“穢れた戦争屋部隊”と揶揄されるリベリオ隊の独壇場にされてしまつては、イサベルの正規軍の面子が保てない。

(閣下…どうか(無事で。))

アグライアのカタパルトデッキから次々とモバイルスーツ部隊が発艦していき、その中にはカトレア・ペンタスの駆る漆黒のキュベレイも含まれていた。彼女の機体が発艦していく様子を戦闘ブリッジから見守る艦長は、ただ祈るように胸の内で言葉を漏らすのだった。

そんな艦長の想いは、カトレア・ペンタスに密かに届いていた。彼女の駆るヤークト・キュベレイに搭載されているサイコフレームを介し、彼女自身のニュータイプとしての力を以て。

「……ふふ、勿論面子は保つとも。リベリオの好きにはさせんよ。」

ミノフスキー粒子が濃くなつた戦闘宙域において、遠距離通信は最早使い物にならない。コックピット内で呟いた言葉は誰の耳にも届かず、ただヘルメットの中で反響していた。

さて、Rond・ベル艦隊から発艦した移動熱源は、隊列を組みながら此方へ向けて直進して来る。その数は30を超えるものであり、直掩機を除けば全モバイルスーツ隊が押し寄せて来ているのだと見て取れる。だが、此方はその倍のモバイルスーツを揃えており、余程の事が無ければ総崩れになる心配はないだろう。リベリオ・ビアンキに加え

て、私も居るのだから。

雑魚共の相手を私がする必要は無いが、押し寄せて来るモビルスーツ部隊に意識を凝らしてみる。まだ会敵まで僅かに時間はあるものの、薄らとニュータイプの感応波を捉えられる距離ではある為、いち早くガンダムを捉えようと思つての事だった。

(……奴が居ない……?)

先行するリベリオ隊とロンド・ベルのモビルスーツ隊が、離れた場所ですでに戦闘を開始した模様だ。ビームの閃光が入り交じり、小規模な爆発があちこちで発生し始める。

だが、私は奴の感応波を捉えられないでいた。キュベレイの姿勢制御システムを噴射し、今一度意識を凝らしてサイコミュを目一杯働かせてみる。

(………、何処に居るのだ……ガンダム。)

——やはり、感応波が感じられない。戦闘が始まった事により、敵味方が入り混じりながら様々な意識が飛び交い、キュベレイのサイコミュが捉えて私の意識に混入して来る。だが、あの特有のプレッシャーが何処にも感じられないのだ。

奴が現れない筈はない。この戦場に必ず居る筈だ。直掩部隊に控えている可能性もあるものの、向こうは出し惜しみをしていられる状況には無い筈なのだから、艦隊の護衛につけていけると言うのは甚だ疑問符が浮かぶ。

私は様々な思考を巡らせながら、あらゆる可能性を脳裏に過らせていく。

「……まさか、ピースミーティアを直接……」

……有り得ない話ではない。だが、本来ガンダムの火力で出来る筈はない。

私の脳裏を過つたのは、ガンダム単体によるピースミーティアの破壊だ。武装を極限まで強化し、破壊工作の為の機材を携えて、単機で衛星内に潜り込んで破壊する……という事は考えられるが、果たして連中はそこまでの博打を打つだろうか。

「……待っている、ガンダム。私が殺してやる。」

いや、この状況だからこそ博打を打つに相応しい。私の直感がそう囁いており、直ぐに操縦桿を引いて機体の姿勢を変えていき、スラスターを全開にしてピースミーティア方向へと駆けていく。

漆黒のキュベレイは、その姿を宇宙の暗闇に紛れさせながら、ただガンダムのみを目指して更に加速していった。

※

旗艦ラー・ネイジユのモビルスーツ隊を指揮するローマン中尉は、今回の作戦において全モビルスーツ部隊を指揮する大隊長の役割も兼任しており、2隻のクラップ級のジエガン部隊にも指示を飛ばしていた。

「敵が出てきたぞ、各機散開！」

彼の駆るプロトタイプ・リゼルの頭部には、1本のブレードアンテナが装備されており、これが隊長機としての証となっている。その他に武装面でも違いがあり、他のリゼルは中・遠距離用の試作メガ・ビーム・ランチャーを装備しているが、隊長機は取り回しがし易いZガンダム系統の試作ビーム・ライフルを装備している。

そんな彼のリゼル目掛けて、敵のモビルスーツ隊の1機が接近して来た。

「ギラ・ドーガか…っ、そこだ！」

通常のカラーリングとは異なり、赤と黒に塗装されたギラ・ドーガ。塗装だけではなく、その機動力も通常のものとは違い、初撃のビーム・ライフルによる攻撃は躲されてしまった。

だが、これは想定内。イサベルのネオ・ジオンの実力を甘く見ている者はロンド・ベルには居らず、ジェラルド隊長がやられた時点で相当の手練揃いなのは嫌でも分かる。スラスターを噴射して敵との距離を保ちつつ、次は腕部に内蔵されたグレネードランチャーを発射し、ギラ・ドーガの軌道を塞ぐ形で攻撃を仕掛ける。対するギラ・ドーガはグレネード弾をビーム・マシンガンで迎撃して撃ち落としていたものの、その間隙だらけとなっていた。すかさずスラスターを全開に

して距離を詰め、ビームサーベルを引き抜いて斬り掛かる。

「そらッ、脇腹がガラ空きだ！」

敵が気付く頃には既に防御出来る距離ではなく、ビームサーベルの刃がギラ・ドーガの胴体に突き刺さり、そのまま横に薙いで胴体を真っ二つに両断した。僅かに無線に敵パイロットの断末魔の叫びが混じるものの、直ぐにそれはノイズに掻き消され、程なくして目の前で爆散していった。

ギラ・ドーガの残骸が機体に打ち付けられ、爆風で機体を押されながらも、姿勢制御スラスターを噴射して周囲をスキャンしていく。他の敵味方機は乱戦の様相を呈しており、一進一退の攻防と言う表現が適切だろうか。

味方機の援護に回ろうと機体の向きを変えた瞬間、高熱源体が接近している事をセンサーが捉え、アラート音がコックピット内に響き渡った。方角は11時方向、それもかなりのスピードである。

「くっ………！」

——熱源の正体はビーム砲だった。直ぐに回避運動を行って直撃を避けるものの、あとコンマ数秒遅ければコックピットに直撃していた射角だ。これだけ正確な射撃を行える時点で、並のパイロットでない事は直ぐに分かる。視線をビーム砲が飛んできた方向へと向けてみると、異形のモビルスーツがそこには居た。

ギラ・ドーガをベースにした機体である事は分かるものの、両腕に大口径のビームランチャーが装着されており、背部バックパックに何か巨大なものを背負っている。それが何なのか分からないものの、言い知れぬ圧迫感のようなものを感じていた。全身のカラーリングが赤と黒に塗装されているのは、先程までのギラ・ドーガと共通しているもので、この機体が隊長機ではないかと見据えていく。

『あらあ？アタシの攻撃を避けれるなんて……いい腕してるじゃない♡』

ミノフスキー粒子が薄くなっている領域に位置していたからなのか、敵のものと思われる無線がヘルメットのスピーカーに響いてきた。ねっとりとした、気色の悪い男の声。一言で言うなら、オカマと

いう奴だろうか。

怪訝な表情を浮かべながら、ローマン隊長は無言で異形のギラ・ドーガを睨みつけ、いつでも撃てるようにビーム・ライフルの銃口を向けていく。

『アタシの可愛い部下達を殺した報い、アンタの命で償って貰うわよお…♡ アタシのギラ・ドーガカスタムで…嬲り殺してあげるわ！』

「くそ……、来やがれ……！」

異形のギラ・ドーガが両手にビーム・サーベルを展開し、スラスタを全開にして此方へと突っ込んで来る。その動きを迎え撃つように、ローマン隊長はトリガーを引いたのだった…。

『ピースミーティア攻防戦』（3）

ピースミーティアを巡る戦闘が始まって30分が経過し、連邦、ネオ・ジオン共にモビルスーツを消耗し始めていた。ロンド・ベルの第1次攻撃隊30機の内、プロトタイプ・リゼル1機とジェガン6機が撃墜されており、対するイサベルのネオ・ジオン軍60機の内、ギラ・ドーガを13機とりべリオ隊の機体が2機撃墜されていた。

未だ数的有利はネオ・ジオンに分があるものの、組織戦としてはロンド・ベルに分があり、どちらも総崩れまでは至らずに持ち堪えている。だが、状況は徐々に数に勝るネオ・ジオンが押し始めており、モビルスーツ隊の動きに合わせて艦隊も前進を開始していた。勢いを維持しながら、このままロンド・ベルを包囲して殲滅する狙いがあるようである。

「ブレイズ5、レーザー信号途絶……！」

「左翼のジェガン部隊が押されつつあり、敵が半包囲を仕掛けて来ますー！」

ラー・ネイジュの戦闘ブリッジ内で、戦況の推移を見守るアンダーソン艦長の表情は固い。通信オペレーターのエヴァ少尉の言葉と、その隣に座るセンサー長のマインズ大尉の言葉を耳に入れながら、ブリッジの大型モニターに目を向けていく。

左翼側は随伴艦であるクラップ級『ネルソン』のジェガン部隊が受け持っており、そこが集中的に狙われているようだった。

「艦隊直進、直掩を増援に回す。何としても衛星に取り付くのだっ。」
アンダーソン艦長は艦長席から命令を飛ばしていき、3隻の艦を進ませて正面からネオ・ジオン艦隊を突破する策に打って出た。通常であればモビルスーツ隊を下がらせて一時後退し、態勢を整える時間を作るのが定石であるが、今回の作戦はエコーズ部隊がピースミーティア破壊を行う役割と、シーナ少尉が敵艦隊に奇襲を仕掛けて一気に叩く役割とが連動して行われており、ロンド・ベル艦隊はその為の囷として前線を支える役割が課せられている。複合的な作戦故に、今後退する事は出来ないのだ。

「モビルスーツ部隊、突破されました！」

センサー長のマインズ大尉の声に反応し、アンダーソン艦長はブリッジ正面に映る宇宙の海に目を向けていく。肉眼でも薄らと視認できる程、複数のギラ・ドーガが味方部隊の攻撃を掻い潜り、防衛ラインを突破して艦隊に迫り来るのが見えた。

「対空迎撃、弾幕。直掩部隊を迎撃に当たらせよつ。」

「対空砲火、斉射開始！味方機に当てるんじゃないぞ！」

素早い艦長の言葉に反応し、副長のエリス中佐が命令を飛ばしていくと、3隻による対空機銃の弾幕が張られ始めた。全方位に向けて機銃掃射が行えるよう、艦の武装は装備されているものの、どうしても死角になる場所は存在する。それを補うのが直掩機の役割であり、艦に敵を寄せ付けないよう迎撃を開始した。

迫り来るギラ・ドーガは8機。どれも随伴艦のクラップ級2隻に向けて襲い掛かっており、ラー・ネイジユには攻撃の手は加えて来ていない。先ずは比較的墜とし易い方から沈めようとする意図が感じられるが、此方もそう簡単に沈められる程やわではない。直掩部隊のジエガン隊が応戦に当たり、ラー・ネイジユの機銃がギラ・ドーガの動きを妨げるように弾幕を展開していく。同時に、直掩部隊から距離を取り、弾幕が届かない位置にてクラップ級を狙撃しようと試みるギラ・ドーガの存在も、ラー・ネイジユの砲術長アレン少佐はバツチリと捉えていた。

「主砲、発射！」

ラー・ネイジユの艦後方に装備されている主砲が動き出し、狙撃体勢に入ったギラ・ドーガ目掛けて照準を合わせると、アレン少佐が発した掛け声と共にトリガーのスイッチが押され、主砲のビーム砲が放たれた。マゼンタ色の鋭く巨大なビームの光は、凄まじい速度でギラ・ドーガに襲い掛かり、機体の右半身をごっそりと抉るように直撃し、直後に爆散して粉々に散っていった。

ホツとしたのも束の間、これで敵の攻撃は終わった訳ではなく、まだまだ敵部隊は艦隊に襲い掛かって来ている。ロビンソン、ネルソン共に対空機銃を斉射し続けており、直掩部隊のジエガン隊も果敢にギ

ラ・ドーガ達へと肉薄し、艦隊に寄せ付けまいと奮闘していた。

だが、前線のリゼルとジエガン部隊を突破したギラ・ドーガの数は更に増し、次第に艦にも損害が出始める。

「ロビンソン、右舷被弾っ。損傷は軽微の模様…ネルソンに被弾、主砲損傷！」

エヴァ少尉の報告を受け、厳しさを増してきた事をアンダーソン艦長は感じながら、ギラ・ドーガの攻撃はラー・ネイジユにも及び始め、対空機銃と直掩機の弾幕の隙を縫い、無誘導型のシユツルム、ファウストの弾頭がラー・ネイジユの船体に直撃した。

「くっ……、損害を報告せよ……！」

「左舷第8ブロックに被弾、隔壁閉鎖！」

「左舷対空機銃、複数損傷っ。」

「ラー・ネイジユ、損傷は軽微っ、まだ行けます！」

(…まだまだ、まだ耐えなければ…。シーナ少尉が来るまでは……)

各部署からの損害報告を頭の中で整理していきながら、アンダーソン艦長はジツ…とブリッジの大型モニターを見つめていく。この戦闘宙域の全体マップが表示されており、熱源の点が各地に散りばめられているが、まだ敵艦隊に大きな動きはない。シーナ・ランチェスターのルミナスガンダムが強襲すれば、必ず敵艦隊の隊列に乱れが出る筈である。そうなれば、作戦はフェイズ2に移行出来るのだ。

フェイズ2は、文字通り敵艦隊の防衛ラインを穿つ強行突破である。ガンダムが奇襲を仕掛け、敵の意識が乱れた隙を突いて艦隊を正面からぶつけていき、挟撃の形を仕掛けながらエコーズ部隊の退路を確保する…というものだ。かなりの力技となるだけに、今損害を増やす訳にはいかない。艦隊を預かるアンダーソン艦長としては、耐えるしかないこの時間が1番神経を擦り減らす状況となっている。

「機関部への損傷は何としても防げっ、弾幕を途切れさせるな！」

アンダーソン艦長は声を張り上げる。ガンダムが現れるその瞬間を、今か今かと待ち侘びながら。

※

「ほおら、まだまだ行くわよオ!!」

赤と黒に塗装された魔改造ギラ・ドーガを駆り、連邦の新型機と一騎討ちでビーム・ソードとサーベルをぶつかり合わせ、緊迫した接近戦を展開している者が1人。

女のような口調でギラ・ドーガを操縦する男こそ、悪名高いリベリオ・ビアンキその人である。

『くっ……、オカマなんかに負けるかよ……!』

「誰がオカマですってエ!?!」

敵も中々腕が良い。かれこれ5分は対峙しているものの、致命傷を負わないように上手くこちらの攻撃をいなしている。流石ロンド・ベル、精鋭部隊の名は伊達ではないと感心しながらも、これだけ接近していればミノフスキー粒子の影響もほぼ受ける事なく、互いの無線が混在してお互いに罵り合いながら鏖迫り合いを繰り返していた。

「おっと……!」

と、敵の機体と距離が離れた隙に、向こうがシールドをこちらへと向け、内臓されたビームガンを小刻みに撃ってきた。こちらも耐ビームコーティングが施されたシールドを咄嗟に構え、初撃を受け止めながら防いでいくと、2発目、3発目はスラスターを噴射して回避していき、敵との間合いを取って一旦仕切り直しをしていく。

距離が出来た事で、敵もこちらの動きを探るように射撃の手を止め、然し銃口は向けたまま対峙している。これで少しは息継ぎが出来そうだ。

「ふうん……、連邦の新型……中々良いじゃない。それに、貴方の腕前も素敵♡」

『お前みたいなおカマに褒められても嬉しくねえよ……っ。』

一々癪に障る敵パイロットである。頭部にブレードアンテナが付いている辺り、恐らくは隊長機であろう。つまりは、お互い責任を背負ったパイロット同士という事になる。こんな熱い展開、リベリオ・ビアンキにとっては興奮以外の表現が見つからない。

このギラ・ドーガは、リベリオ用にチューンが施された特注品の機

体である。両腕部に可変式ビーム砲を外付けしており、脚部も追加装甲とスラストを増設し、航行距離と戦闘可能時間を伸ばす為に大型プロペラントタンクも2本装備している。1番目を引くのは、バックパックに装着された巨大な武器だ。1本の鉄の棒のようなものを背負っており、そのままでは何に使用するものか誰も分からないだろう。だが、この巨大な棒状の“何か”こそ、リベリオ・ビアンキが愛用して止まない武器である。

「貴方は強いから、本気出しちゃおうかしら…♡」

リベリオは気味の悪い声を発しながら、両手に展開していたビーム・サーベルを一旦格納し、背中に背負った何かに両手を伸ばしている。ギラ・ドーガのマニピレーターがしっかりと棒を掴むと、勢いよく振り抜いて見せた。

『なっ……。』

無線越しに、連邦のパイロットが言葉を呑むのが聞こえてきた。その反応に満足そうにニヤニヤと笑みを浮かべ、正体不明の武器を展開していく。

棒状の先端からビームの光刃が伸びると、それは形を徐々に変えていき、独特な姿になっていった。言うなれば其れは、死神が手にする大鎌のような形状。黄色に輝く巨大なビーム・シザースだった。

リベリオのギラ・ドーガカスタムは、このビーム・シザースを振り回す事を前提にして改造を施されている。その為、携帯武器は格納できるビーム・サーベル2本と、このビーム・シザースのみだ。それ程までに、大鎌で敵を刈り取る事を拘りとしている。敵の断末魔の叫びを聞きながら、この手で直接死を与える為に。

「さあ、行くわよ!!」

ビーム・シザースを構えたりリベリオは、足元のペダルを床まで踏み抜き、スラストを全開にしてプロトタイプ・リゼルへと突貫していく。バックパックのビーム・シザースが無くなった事で、漸くスラストを全開にする事が出来るようになり、先程までとは違い明らかに機動性が上がった事が敵にも感じ取れているだろう。

実際、あまりの速度の違いに敵はトリガーを引く事を止め、直ぐに

ビーム・サーベルを展開して受け止めようとしていた。良い判断である、トリベリオは感心するものの、それでも勝つのは自分だと確信していた。

『ぐ……い！』

「ほらほらほらア!!」

縦横無尽、力技でビーム・シザースを振り回していき、斬り掛かる度に向こうもビーム・サーベルを振り翳して光刃同士がぶつかり合い、弾きながら刃を交わしていく。ビームの光刃がぶつかる度に、辺り一面に飛び散るようにビームの奔流が迸り、眩い光をビリビリツ、バチツ、バチツ、と放っていた。

敵も上手くないしながら受け流しているものの、次第にこちらが押し始め、ほんの一瞬敵の機体がよろめいたのを見逃さず、ニヤリとした笑みをリベリオは浮かべる。

「貰ったわよオ!!」

ビーム・シザースを真上から振り下ろしながら、リゼルを一刀両断にしようとした鎌の光刃を突き立てていく。だが、敵のパイロットも咄嗟の機転が働いたようで、スラスターを噴射しながら機体をグルンツと回転させ、致命傷を避けるように右脚部を振り上げてきた。

驚いたのはリベリオである。咄嗟にこんな動きが出来るなんて、相当技量が高くなければ出来ない事と分かっているからだ。振り下ろしたビーム・シザースの光刃は、蹴り上げてきたリゼルの右脚部に突き刺さり、結果的には胴体には届かず足だけを斬り裂く事となってしまった。

『やられるかよ……い！』

「ちよこまかと、ウザったいわね……いさつきと死になさい!!」

斬り裂いたリゼルの右脚部は宇宙を漂い、少し離れた場所で爆発した。次は必ず胴体を斬り裂こうと思いつながら、小賢しい動きをしてくる敵を睨みつけ、リベリオはビーム・シザースを再び構える。対するリゼルは、右手にビーム・ライフルを握り、左手にビーム・サーベルを構えながら、少しでも距離が離れれば射撃でこちらを仕留めようとする形を取っていた。

だが、形勢はリベリオに依然有利に働いている。リゼルは右脚部を失い、スラストターの推進力も機体制御のバランスも悪化しているのだ。幾らしぶとく抵抗しようがリベリオの勝ちは見えていたのだ。

『くそ…ッ、エネルギー切れか…！』

敵はひたすらこちらと距離を取り、ビーム・ライフルによる射撃を繰り返していたものの、軌道は分かりやすく、避ける事はギラ・ドーガカスタムの機動性なら容易い事だった。そして、突如として射撃の手が止まる。混在してきた無線も示すように、どうやらライフルのエネルギーを使い果たした様子だ。

これにはリベリオもニンマリと表情を歪める。質量、リーチ共に勝るこちらが、接近戦では特にアドバンテージがある状況なのだから。この好機を逃す手は無く、すかさず間合いを詰めていき、ビーム・シザースを勢いよく振り払っていった。

「罨り殺してやるわよオ♡」

またも敵パイロットは微細なスラストター制御の技を披露し、姿勢を変えながらシールドで大鎌の光刃を防ごうとして来た。だが、ビーム・シザースの巨大な光刃には、そんなもので防げる筈はなく、左腕ごとシールドを真っ二つに切り裂いていく。

これで敵の武装は右手に持つビーム・サーベル一本となり、左脚部だけが残っている状態だ。対してこちらは擦り傷程度の損傷しか負っておらず、文字通り殺すのは容易い。

『チッ……、オカマ風情が…ッ！』

あくまでも敵は最後まで抵抗するつもりのようなのだ。片腕片脚になっても、ビーム・サーベルを構えながらこちらへ斬り掛かろうとしている。その意気込み、闘志、殺気、全てがリベリオの興奮を昂らせていき、最高の断末魔を聴く為はどう斬り刻もうかとニヤニヤしながら思索していく。

——リベリオ・ビアンキの戦闘が想定外の終わりを迎えたのは、丁度そんな時だった。

「ッ——、高熱源体………新手!?!」

ギラ・ドーガカスタムのコックピット内にアラート音が響き、真上から高熱源体が急速接近している表示がコンソールパネルに出されている。振り向いた時には、既に遅かった。

振り返った先には、自身の部隊を載せているムサカ級巡洋艦『バルバロイ』を含んだ、イサベルのネオ・ジオン艦隊が居る。その内の1隻であるエンドラ級軽巡洋艦『ナルアドラ』に、突如としてビーム攻撃が降り注いだのだ。初撃でナルアドラのブリッジが撃ち抜かれて吹き飛び、瞬く間に第2射、第3射とビーム砲が撃ち込まれていき、メインエンジンやカタパルトデッキにも直撃すると、程なくしてナルアドラは弾薬庫に誘爆して凄まじい爆発を起こして四散していった。

ナルアドラの対空迎撃は全く機能しておらず、周りに控えていた直掩機達も迎撃した素振りが無い。誰もあの攻撃を予知出来ておらず、察知する前にやられてしまったのだ。

「チッ…、敵艦隊の増援ね…！」

リベリオは悟った。あそこまでの威力、そして超長距離から放ったと思われる射程…間違いない戦艦のメガ粒子砲だと。ロンド・ベルの増援か、はたまた正規軍の一部が行動を起こしたのだと考えるのが自然であり、ヘルメツトの中で舌打ちをしてしまう。

今この状況で、母艦であるバルバロイを失うのは大きな痛手となる。それだけは何としても避けなければいけない。そう考えている間に、中破状態の敵モビルスーツが突如として変形していった。

『お前に構ってる暇はないんでね…！』

「なっ…、戦闘機…!?!」

そう、正に戦闘機のような形状に変形したのだ。可変モビルスーツだとは想定していなかったので、僅かに攻撃のタイミングが遅れてしまう。

その隙に、敵はスラスターを全開にし、凄まじい速度でぐんぐん離れて行ってしまった。可変機の数に追いつける程、このギラ・ドーガカスタムの推進力は高くはなく、仮に追いつこうとしても敵艦隊の真正面に突っ込んでしまう方向なので、迂闊に深追いも出来ない。

「……ああもうツ、イライラする!!全機、雑魚の相手は後回し!バルバロイの救援に行くわよ、急いでツ!!」

リベリオ・ビアンキの興奮は、一気に冷めていくばかりか、母艦を墮とされてしまうという焦燥感に塗り替えられていき、無線で怒声を張り上げるのだった。

だが、この時の彼は1つの誤解をしている。増援部隊の、その本当の姿に。

※

ここは、酷く静かだ。

遠くに幾つもの弾幕の閃光、ビームの軌跡、爆発の光が起こっては消えていくものの、その音や衝撃はこちらには一切届かず、まるで映画のワンシーンを観ているような気分だった。

だが、微かにだが戦場に響く想い、叫び、魂の慟哭のようなものは、不思議と距離を感じさせずに私の脳裏に響いてくる。ある者は敵への憎悪を、またある者は戦いを楽しむ愉悦を……そんな多種多様な心の色を、サイコミュが捉えていたのだ。

ある種、雑念とも言えるような感応波に臆する事なく、否定する事もなく、ただ静かに息を吸い、静かに息を吐いていく。何度か繰り返していく内に、自身の呼吸音だけが耳に染み込むように聞こえており、心なしか心臓の鼓動も普段以上によく聞こえている。ミノフスキー粒子の影響であろう、敵味方の無線も一切入って来ない。コックピットのモニターから見える宇宙が、いつにも増して綺麗に見えるような気がした。

「…………ふう…………、ん…………。」

もう一度息を吸い込み、ゆつくりと息を吐いていく。深呼吸を何度か繰り返して、平常心を保っていく。震えそうになる手を落ち着かせ、私は静かに目を閉じた。

……ふと、私の肩を誰かが叩いたような気がした。それが何なのか分からないものの、不思議と嫌な感覚ではなく、寧ろ懐かしいような、

温かさを感じるような、そんな穏やかな感覚だった。

(…………行くよ、ルミナス……)

——次の瞬間。目をカツ、と開き、気合いを込め、操縦桿を目一杯押し込みながら、足元のペダルを床まで踏み抜き、ガンダム全スラストを全開にした。全身の装甲の隙間からは、埋め込まれたサイコフレームの赤い光が迸り、H・W・S。(ヘビー・ウエポン・システム)の追加スラストの効果もあって、一瞬意識が飛んでしまいかねない暴力的な加速Gをその身に受けつつ、シーナ・ランチェスターはただ1点のみを見つめてガンダムに鞭打つ。

「見つけた……ッ。」

位置関係として、前線を押し上げる為に直進して来た、ネオ・ジオン艦隊の真上から迫る形となり、ガンダムのセンサーはハッキリと艦影達を捕捉していた。まずは、1番防御が手薄な艦から攻撃しようと思うと、新たに装備されたハイパー・メガ・ライフルを構え、照準を合わせていく。

通常であれば、スラストを全開にして加速しながらの射撃は、加速Gの強さに加えてセンサー類もブレてしまうので、精密射撃というものとは不可能に近い。だが、このルミナスガンダムは別だ。全身のサイコフレームに私の思考が正確に伝播し、まるで自分の手足のように思い通りに操れるのだ。スラストを全開にしながらの精密射撃も、既にテスト済みである。

「——ッ！」

息を呑み、一瞬意識を研ぎ澄ませながら、私はトリガーを引いた。ハイパー・メガ・ライフルのマズルから光が漏れ出し、高濃度のビーム粒子が圧縮されていくと、溜め込んだ粒子を一気に開放するようにビームの巨大な閃光が放たれ、まるで流星の如く戦場を貫いた。

通常のルミナスガンダムのハイパー・ビームライフルに比べ、一回りも二回りも巨大なビームの閃光。その反動も凄まじく、関節部を強化しているルミナスガンダムですら、一瞬腕ごと吹き飛んでしまうのではないかと思ってしまうような衝撃を感じる。だが、その反動以上の見返りは十二分以上であり、捕捉していたエンドラ級のブリッジを

正確に撃ち抜き、ブリッジが粉々に爆散しただけでなく、艦底まで一気にビームが貫通したのだ。1機のモビルスーツが持つには、余りにも過ぎた火力である。

ここで攻撃の手を止める事はせず、ガンダムに更に鞭を打ちながら、私は再びトリガーを引いていく。2発目のビームは艦尾のメインエンジン付近に、3発目はモビルスーツの発進カタパルトに直撃させていき、程なくしてエンドラ級は凄まじい爆発を起こして跡形もなく四散していった。

「うッ……く……、まだまだ……!」

先ずは1隻撃沈。凄まじい加速Gの負荷に耐えながらの射撃は、肉体的な負担が強く、つい苦しげに息を漏らしてしまう。それだけでなく、エンドラ級を撃沈した際に、とても不快な感覚が私の身体に降り注いだのだ。

それは、ニュータイプの感応波を持つからこそ感じられた、様々な人々の残留思念。エンドラ級と共に爆散し、死んでいった無数の人々の想い。それをサイコミュが敏感に拾い上げ、私の身体に流れ込んでくる。この不快感に耐えようと歯を食い縛り、精神的にもかかなりの負荷が掛かりながら、私は次の目標へと照準を定めていく。

「次は……、お前だ……ッ!」

狙いを定めたのは、撃沈したエンドラ級の直ぐ後方に位置するムサカ級。流石に今の奇襲攻撃でこちらの現在地が露呈してしまったので、ネオ・ジオン艦隊による対空迎撃の弾幕が展開され、メガ粒子砲が次々に放たれていく。

だが、まだまだ距離は離れている為、対空機銃の弾幕はガンダムまで及ばず、メガ粒子砲のビーム攻撃も避けるのは容易い。尚且つ、回避運動をしながらでも、ガンダムは正確に目標を撃ち抜けるのだ。直掩部隊もこちらに向けて迫って来ているが、会敵する前にムサカ級を沈められる自信はある。

「沈めッ!!」

迎撃を掻い潜りながら、私は再びハイパー・メガ・ライフルを構え、躊躇う事なくトリガーを引いた。再びあの凄まじい反動がガンダム

に響くものの、暴力的なビームの閃光が放たれ、ムサカ級のブリッジ脇を掠めながら艦の中央部に直撃し、艦底まで貫いていく。然しそれだけでなく、射線上に居た直掩部隊のギラ・ドーガ数機が、ビームが僅かに掠めただけで機体がごっそりと抉り取られ、次々に爆散していったのだ。

余りの威力に自分自身空恐ろしさを感じつつ、思わぬ事態に一瞬目を見開くものの、直ぐに意識を集中させて再びトリガーを引いている。確実にムサカを沈めようと、主砲、メインエンジン、モビルスーツデッキに次々と巨大なビーム攻撃を加えていき、艦をビーム攻撃で穴だらけにされたムサカは、成す術も無く塵芥の如く爆沈していった。

「はあっ…、はあっ…、まだ来る…！」

流星にこれ以上自由にさせてはもらえないようで、ネオ・ジオン艦隊の直掩部隊がこちらに接近して来た。既に15機程のギラ・ドーガ部隊が有視界領域に侵入しており、皆私へ向けて敵意と殺意を放っているのが、感応波を捉える事で感じ取れる。私は一度足元のペダルを緩め、スラスターを緩めていくと、意識をギラ・ドーガ部隊の迎撃に向けていく。

サイコミュが受信した敵意の感応波が、私の脳裏を駆け抜けていき、直ぐに思考をサイコフレームへと飛ばし、回避運動を行っていた。ガンダムが居た場所には、次々にギラ・ドーガ達から放たれたビーム攻撃が降り注ぎ、それらは止む事なく回避し続けるガンダムへ向けて放たれ続けられた。

「墜ちろ…ッ!!」

ガンダムのスラスター推力に意識が飛ばされないよう耐えながら、背部バックパック部分に装備されているハイパー・バズーカを作動させ、まるでキャノン砲の要領で弾を発射していく。突然の予想外な攻撃に対応が出来なかったギラ・ドーガ2機は、迫り来るバズーカの弾に対して回避運動が間に合わず、盾を構えて防御の姿勢を取るものの、着弾した瞬間に凄まじい爆発が発生し、腕だけでなく胴体にまで爆発の影響が及び、火花を散らしながらギラ・ドーガ2機は爆散して

いった。

『くそ、ガンダムめ!』

『悪魔が……!』

『困んで一気に叩くぞ! 奴に反撃させる暇を与えるな!』

ミノフスキー粒子が薄くなつて来ているのか、次第に敵の無線も混在し始めている。どうやら間髪入れずに集中砲火を浴びせ、私に身動きを取らせないようにしながら嬲り殺す腹積りらしい。

だが、そんな事などさせはしない。

「避けれるもんなら…、避けてみるツ。行け、フィン・ファンネル!」

ギラ・ドーガ部隊がガンダムを包囲し、ビーム攻撃をあちこちから加えていく最中、私は回避運動をしながら背部ファンネルラックから6基のフィン・ファンネルを射出した。残るギラ・ドーガは13機、一気に蹴散らして対艦攻撃に戻り、本隊との挟撃体制に入らなければならぬのだから。

『うわあぁッ、——』

『しまッ、——』

私の思考に敏感に反応するファンネル達は、敵の包囲を崩そうと飛び交い、まずは1時方向のギラ・ドーガ2機に襲い掛かっていく。ガンダム本体を撃ち落とそうと躍起になっていた所を、機体の斜め下から撃ち込まれたファンネルのビーム攻撃に対処出来ず、2機はいとも簡単にコックピットを撃ち抜かれ、目の前で爆散していった。

「次……ッ!」

ファンネルだけではない。

6基のフィン・ファンネルに連動するように、こちらもハイパー・メガ・ライフルを構え、今度は飛来するファンネルの迎撃に意識を向けて動きを止めたギラ・ドーガ目掛けて、トリガーを引いてビームを発射していく。

アラート音に気付いた頃には、時既に遅く、ギラ・ドーガはまともに回避する暇もなく胴体を撃ち抜かれ、真つ二つに千切れながら爆発

したのだ。

『くそッ、たれがア!!』

「ッ……い」

私が次の目標に向けてライフルを向けた瞬間、真後ろから別のギラ・ドーガがガンダム目掛けて突貫して来た。敏感に敵意を察知出来ているので、私は直ぐに左腕に内蔵されたビーム・サーベルを引き抜き、振り向き様にサーベルを振り抜いていく。

向こうもビーム・ソード・アックスを展開し、両者の光刃がぶつかり合い、火花を散らしながら鏢迫り合いとなった。

『死ねッ、ガンダム!!』

あろう事か、ギラ・ドーガの左手にはシュツルム・ファウストが握られており、このゼロ距離で発射するつもりらしい。そんな事をすれば、ガンダムだけでなく自身の機体すらも爆散する可能性すらある。相打ち上等の覚悟で、ガンダムを討ち取ろうという明確な意思が、ハッキリと感応波として感じ取れる。

「やらせない……、つての……!!」

——正に紙一重のタイミングだった。

新たに装備されたフロントアーマー内部からマニピレーターが飛び出るように伸びて、その先に握られたビーム・サーベルが瞬時に展開され、鏢迫り合いをしながらも隠し腕によるビームの光刃で、シュツルム・ファウストを握り締めるギラ・ドーガの左腕を切断していった。

すかさず、もう一方のフロントアーマーからマニピレーターを伸ばし、隠し腕を更に増やしてビーム・サーベルを展開させると、ギラ・ドーガの胴体に2本のサーベルを突き刺していく。

『くっ……そ……、うッ、ああああッ——』

敵の断末魔の叫びを聞きながら、隠し腕を格納しつつビーム・サーベルを引き抜き、最早抵抗する事も無くなったギラ・ドーガを蹴り飛ばしていく。程なくして機体が爆発すると、その衝撃波を利用するようにスラスタを噴射し、また別の敵機へと狙いを定めながら肉薄していった。

「私の邪魔するなら、墮とす…ッ！」

ガンダムのデュアルアイが一際強い光を放ち、残るギラ・ドーガ達を威圧していく。この場は既に、ガンダム1機の独壇場と化し始めていたのだった……。

『ピースミーティア攻防戦』（4）

「高熱源体接近……ッ、艦隊直上……真上ですッ！」

それは、ロンド・ベル艦隊のモビルスーツ部隊を迎撃し、半ば押し返す事に成功しつつあった矢先の事だった。

アグライアの戦闘ブリッジに詰めている通信オペレーターの下士官が、突如として正体不明の熱源が接近している事を叫んだのだ。これに一番驚きの表情を浮かべたのは、アグライアの艦長である。

「なっ——」。

次の瞬間、信じられない光景がブリッジの窓一面に広がる。艦隊の前線を支えている最右翼のエンドラ級『ナルアドラ』に、マゼンタ色の高出力ビーム攻撃が降り注いだのだ。一撃でブリッジを撃ち抜かれ、間髪入れず2発目、3発目とビームが降り注ぎ、ナルアドラは穴だらけになりながら凄まじい爆発を起こし、粉々に散っていった。その余りの一瞬の出来事に、艦長含め誰もが呆然としてしまい、現実を受け入れる時間を要してしまふ。

そして、艦長は吠える。敵が何であれ、次の攻撃を許してはならないと。撃たれる前に撃ち落とさなければ、死ぬのは自分達になるのだと。

「全艦に告ぐ、迎撃始めッ！とにかく弾幕を展開しろッ、撃ち続けるんだッ!!」

艦長の命令はすぐさま無線通信によって艦隊全てに行き届き、残る艦はビーム攻撃がなされた地点を中心として、艦の主砲や対空機銃で弾幕を張り始めていく。果たして届いているのか、弾幕が当たっているのか等は関係なく、ただひたすらに撃ち続けるのだ。敵に攻撃させる時間を与えない為に、自分達の生存率を少しでも上げる為に。

だが、それは徒労に終わる事となった。

「ふ、再び……高熱源体接近……ッ!!」

「馬鹿な……ッ!?!」

下士官の悲鳴にも似たような叫びと共に、艦隊直上から再びマゼンタ色のビーム攻撃が降り注いだ。次なる目標にされたのは、轟沈した

ナルアドラの後方に位置していた、ムサカ級『ローレンス』。恐ろしい程に正確な攻撃は、ローレンスの主砲、機関部、ブリッジに直撃し、いずれも艦底まで貫通している。明らかに戦艦クラスの威力だが、アグライアのセンサーが捉えていた熱源の大きさは、戦艦とは比べ物にならない程小さく、また動きも素早い。

(……ガンダムだ……。あの白い奴だ……。っ。)

アグライア艦長は、弾薬庫に誘爆して艦が崩壊するように爆散していくローレンスを見つめながら、確信を持って険しい表情を浮かべる。

前線部隊と共に出撃した観測機からは、ガンダムの存在を報告されておらず、この戦場に居るのかも不明だった。その時点で一抹の不安を覚えていたが、最悪の形で現実となってしまった訳である。

「直掩部隊を全て迎撃に当たらせろ、急げッ！」

ネオ・ジオン艦隊を守る直掩機のギラ・ドーガ部隊は、全機正体不明の熱源……ガンダムに向けて上昇していく。

一方、同時刻のロンド・ベル艦隊旗艦『ラー・ネイジユ』のブリッジには、アグライアとは対照的に静かな歓喜が沸いていた。

「エンドラ級1、ムサカ級1、撃沈！」

通信オペレーターのエヴァ少尉の言葉に、ブリッジ内の空気は一変した。それと同時に、母艦を墮とされた事を知ったギラ・ドーガ部隊にも動揺が見られ、不利だった戦況を徐々に押し返し始めている。直掩部隊の奮戦もあり、艦隊に張り付いていたギラ・ドーガの半数以上は撃破し、残る敵を殲滅するのも時間の問題と化している。

アンダーソン艦長も僅かに笑みを溢し、活路を見出したように声を張り上げた。

「フェイズ2に移行するッ。全艦、機関最大！このままネオ・ジオン艦隊を挟撃する！」

既にエコーズは敵衛星内に侵入しており、内部の防衛部隊を排除しながらポイントに進んでいる筈だ。囷と退路確保を役目とする艦隊の大仕事だが、今正に正念場を迎えている。

アンダーソン艦長の命令と共に、ラー・ネイジユ、ロビンソン、ネルソンの3隻は最大戦速をかけていき、ネオ・ジオン艦隊へと突き進んでいく。敵艦の意識は突如として出現したガンダムに向けられており、こちらへの砲撃は明らかに減少していた。この隙を逃す事はなく、アンダーソン艦長の「全砲門、撃ち方始め!」の命令と共に、3艦の主砲と対艦ミサイルが一齐に発射され、残存するネオ・ジオン艦隊へと攻撃を加えていった。

「敵艦隊、混乱に陥っている模様!」

まだ残存艦艇の数はネオ・ジオンが上回っているものの、艦隊の動きは明らかに乱れが生じており、対艦ミサイルの迎撃も満足に行えないまま、次々にこちらの攻撃が直撃していくのか見える。

このまま押し切ろうと、次の攻撃命令をアンダーソン艦長が下そうとした瞬間――

「艦長つ、敵衛星に動きが……!」

センサー長のマインズ大尉が発した言葉に、アンダーソン艦長だけでなくブリッジ内の誰もが言葉を飲んだ。エコーズが起爆装置を作動させるにはまだ早過ぎる、そして目視でも衛星に大きな変化はない。

だが、ラー・ネイジユが捉えていた衛星の動きは、外壁部の動きだった。

「あれは……ッ。」

副長のエリス中佐も、目を丸くしながら驚愕の表情を浮かべ、思わず副長席から立ち上がってしまった。戦闘ブリッジの窓を見つめるアンダーソン艦長も目を見開きながら、絞り出すように言葉を発する。

「……点火してしまったのか……!」

――そう、ピースミィティアの核パルスエンジンに火が点いたのだ。凄まじい推力を発生させながら、巨大な岩の塊はその身を前へと進め始めていく。

こうなれば、ネオ・ジオン艦隊の迎撃をある程度甘んじて受けつつ、何としても破壊する為に衛星へ取りつかなくてはならない。例え艦

を失う事になるとしても、だ。

「敵艦隊を突破し、衛星に取りつくツ。モビルスーツ隊にも、敵艦への攻撃に集中しよう通達せよ！」

アンドンソン艦長の命令にブリッジ各員が返事をする、各部署への伝達を行っていき、ロンド・ベルは決死の突撃を敢行していく事となる。

モビルスーツ隊に向けた伝達はエヴァ少尉が行い、それはシーナ・ランチェスターの駆るルミナス・ガンダムにも届いていた…。

※

『ブリッジより、モビルスーツ隊各機へっ。これより本艦は、敵艦隊を強行突破し、エコーズ部隊の作戦支援と核ノズル破壊に向かう。モビルスーツ隊は艦隊の突入を援護し、敵艦隊への対艦攻撃に移行せよ！』

ギラ・ドーガの直掩部隊との戦闘を繰り返している最中、エヴァ少尉の通信がヘルメット内に木霊する。この通信が入る前に、最もピースミーティアに近い場所に居るので、核パルスエンジンが起動した事は、シーナ・ランチェスターが誰よりも早く察知していた。

「くそ…ッ、艦隊の援護に…！」

直掩部隊の凡そ半数以上を撃破し、このまま殲滅して対艦攻撃に移行するだけとなると、フィン・ファンネルの再充電の為に6基のファンネル達をファンネルラックへ戻し、ハイパー・バズーカの砲撃でギラ・ドーガをすれ違い様に撃ち落としていく。

残り半数以下となった時点で、直掩部隊はガンダムに無闇矢鱈に肉薄する事はせず、距離を取りながらビーム射撃による攻撃でひたすら牽制して来ていた。時間稼ぎのつもりだろうが、そんなもので止まるガンダムではない。ルミナスガンダムは伊達ではないのだから。

「ッ……、下がった…？」

ビームサーベルを展開し、斬りかかろうとスラストターを噴射しようとした瞬間、ガンダムに群がっていたギラ・ドーガ達の動きに変化が

生じた。

直掩部隊は一気に距離を取り始めたばかりか、背を向けてスラストターを全開にしながら逃げ始めている。分かりやすい撤退の様子に、一瞬呆気にとられながら目を丸くしてしまった。だが、次の瞬間……。

「……!!」

私はほぼ反射的に操縦桿を引き、明後日の方向に機体を旋回させながら盾を構えた。それは正しい行動であり、遠方から高出力のビーム砲が撃ち込まれ、耐ビームコーティングを施したシールドに直撃していく。シールド表面のコーティングがビーム粒子を弾き、拡散しながら無力化していくものの、その衝撃は操縦桿と共にサイコフレームを通じて私の身体に押し寄せてくる。

だが、私が感じたのは衝撃だけではない。言葉では表せないような、不思議な感覚。脳裏に電流が走ったかのような感覚と共に、不気味なプレッシャーを私はひしひしと感じていた。このプレッシャーを、私は知っている。

「……キュベレイ……!」

ガンダムのデュアルアイが、その機影を捉える。有視界領域ギリギリの場所に、微かにシルエットが浮かんでいた。黒い流線形のボディに、スナイパーライフルを彷彿とさせる長砲身のビーム砲、そしてスカートのような形状のファンネルポッド、間違いなく目標のモビルスーツである。先程のビーム攻撃も、あの機体から放たれたものだった。

私とその名を呟き、操縦桿を握る手に力を込めた瞬間、キュベレイが早速動いた。

「くっ……!」

敵パイロットが放つ感応波を敏感に掴みながら、次なる攻撃を予知していき、回避運動を行っていく。向こうが放ってきたのは、ファンネルによるオールレンジ攻撃だった。

一足先に回避を取れた事で、四方八方から次々に撃ち込まれるファンネルのビーム攻撃を躲していき、私はスラストターを全開にしてキュ

ベレイへと突っ込んでいく。オールレンジ兵器相手に遠距離戦は自殺行為であり、接近戦に持ち込もうという意図を持った行動である。私はビームサーベルを振り抜き、キュベレイに肉薄しながらビームの刃を振り下ろしていった。

対するキュベレイもすぐさま応戦し、向こうもビームサーベルを展開してこちらの攻撃を受け止めていく。ビームの光刃同士がぶつかり合い、バチツ、バチツ、と火花を散らしながら、鏝迫り合いとなつて拮抗状態が生まれていった。

「なんでこんなモノを地球に落とすんだよ…ツ、そんなに人殺しがしたいのか…!」

押し切られまいとスラスターを小刻みに噴射しながら、鏝迫り合いの状態を敵パイロットに訴えかけていく。衛星を地球に落とす為のスイッチを、ネオ・ジオンは押したのだ。地球に住む100億の人々を皆殺しにする為に。そんな大量殺戮を行える精神の凶太さを持つた者に対して、私は叫ばずにはいられなかつたのだ。

これだけ密着していれば、ミノフスキー粒子の干渉も無く、敵に無線が通じている筈。返答は、そう時間を置かずに返ってきた。

『……貴様らは正しいのか?』

若い、女の声。然程自分と大差ないような年齢を思わせる、凜とした声。だが、そこには確かな威圧感が存在していた。質問に対して質問で返された私は、若干苛立ちを覚えつつも、まさか相手が女だとは予想外だったので返答に時間を要してしまう。

「は…っ? 何言つて…、」

『何も知らん俗物が…、消えろツ。』

私の脳裏に、再び電流のようなものが走った。敵パイロットの放つ感応波を感じ取り、次の攻撃が来る事を知ると、咄嗟にスラスターを噴射してキュベレイとの距離を取っていく。

次の瞬間、キュベレイの肩部バインダー内から隠し腕が伸び、新たなビームサーベルを振り抜いてきたのだ。光刃の切っ尖は胸部装甲板を掠めていき、僅かにビームによる融解の跡がついた。判断があと1秒遅れていれば、間違はなく串刺しになっていただろう。

「この…ッ！」

すかさずこちらも反撃していき、右腕部の装甲を開いていくと、内蔵されているビームガトリングガンを展開し、キュベレイに向けて近距離でトリガーを引いた。ガトリング砲が高速で回転していき、細かなビームの弾丸を次々に撃ち出し、弾幕を張りながらキュベレイへと襲い掛かっていく。

が、向こうもニュータイプ。こちらの思考はお見通しと言わんばかりに、まるでガトリング砲が撃ち込まれるのが分かっていたかのよう
に回避して見せたのだ。私はつい舌打ちをしてしまう。

「まだまだ…！」

然し、H・W・S.の真髄はここからだ。胸部装甲が開き、中から姿を現したのはミサイルランチャー。肩部に増設されたミサイルランチャーと共に一斉発射され、合計15本のミサイルが飛翔していき、不規則な軌道を描きながらキュベレイを追尾して襲い掛かっていく。

これだけでなく、ミサイルを撃ち終えた後にシールドを構えると、内臓されているグレネードランチャーを発射し、キュベレイが回避するであろうポイントに予測射撃をしていたのだ。それでも避けられた時の事を考え、私はハイパー・メガ・ライフルを最後に構えていき、トドメを刺せるようにと目を凝らす。

『ふん……。』

一瞬、敵パイロットの声が無線に混じって聞こえてくると、私の予測を上回る行動を取った。追尾していたミサイル群達を、周囲を飛び交うファンネル達の迎撃だけで、全て撃ち落として見せたのだ。それだけでなく、迫り来るグレネード弾も、腕部に内蔵されているビーム・ガンの射撃で撃ち落とし、凄まじい加速を見せながら急旋回をしてくる。

『貴様如き、私の敵ではない…！』

今度はキュベレイが攻撃を仕掛けてくる。迎撃が終わったファンネル達を再びガンダムへと向け、乱れ撃つように四方八方から発射してきた。

私は舌打ちをしながら、サイコフレームに思考を飛ばしていき、明確な殺意を感じ取りながら小刻みに回避運動を繰り返していく。だが、時折シールドを構えないと直撃を防げなくなる程に、ファンネルの波状攻撃は熾烈を極めてきた。

その時である。

「ッ———！！」

ファンネルの攻撃を回避する事に集中していたガンダムに向けて、キュベレイが持つ長砲身のビーム砲が光を放ち、コックピットのモニターには迫り来るビームがハッキリと見えていた。不思議な事に、その瞬間は周りの景色がスローモーションに見えており、このままでは直撃する事は分かり切っていた。だが、回避しようにもその先にファンネルのビームが放たれており、どの角度にどう行動しようとも必ず機体に直撃してしまう。

肉を切らせて骨を断つ…と言うのは簡単だが、当たれば間違いなく腕や足だけでなく、下手をすれば胴体に直撃する事も免れない。甘んじて攻撃を受け止めるべき場面ではないのだ。

(ガンダム……！)

…私の想いが、サイコフレームに伝播していき、全身の装甲の隙間から漏れ出す赤い光が、更に輝きを放っていく。それはフィンファンネルに仕込まれたサイコフレームも同様であり、ある種の光の波…サイコウェーブが辺り一面に放たれた。

そして、フィンファンネル達がファンネルラックから射出されると、ガンダムの周囲をぐるりと取り囲み、ビーム粒子を常時放ちながら薄いビームの壁を形成していく。

『つ……、小癩な……！』

フィンファンネルによるビームバリアは、キュベレイのファンネルのビーム攻撃だけでなく、長砲身のビーム攻撃も全て弾いていき、消滅させていった。向こうも驚いているようだが、実際に操る私も驚いている。

まさか防御の思考が、こんな形で展開するなんて……と。

『フアンネルッ！』

敵のパイロットと私の言葉が、一言一句違わずに重なり合い、お互いに叫んでいく。ビームバリアを展開し続けながら、残る3基のフィンファンネルをキュベレイへと放っていくと、それに応戦するように向こうもフアンネルを放ってきた。

フィンファンネルと、キュベレイのフアンネルによるドッグファイト。お互いのニュータイプとしての感応波をぶつけ合うように、超機動でフアンネル同時が撃ち合いを披露していく。

「墜ちろッ！」

『やらせはせんよ……！』

フアンネルを操りながら、お互いに操縦桿を押し込み、ビームサーベルを再び展開して肉薄していく。何度もサーベル同士がぶつかり合い、その度にスラスターを小刻みに噴射しながら姿勢制御を行い、絶対に死角に潜り込ませまいと激しい斬り合いを演じていた。

と、その時である。お互いの機体に無線が割り込んできたのは。

『エコーズ部隊、爆破装置設置完了！』

私にとっては待ちに待った無線であり、同時に敵パイロットにとっては聞きたくない無線だっただろう。

すると、キュベレイの肩部バインダーから僅かにビーム粒子が漏れ出し、装甲が開いた。

「……………ッ！」

これは不味い、離れないといけないと、私のニュータイプの勘が叫んでいる。ビームサーベルを格納し、フィンファンネルによるビームバリアを再び形成した瞬間、キュベレイの肩部バインダーが光を放った。

それは、高出力の拡散メガ粒子砲。左右のバインダーからそれぞれメガ粒子砲を撃たれ、ビームバリアにぶつかっていく。最初は防いでいたものの、次第にバリア以上の粒子量を持つ攻撃に耐えきれなくなり、最後はバリアが破られてフアンネル達も散り散りに周囲を漂う。機体へのダメージは無いものの、姿勢制御に僅かに時間を要してしま

い、その間にキュベレイはガンダムと距離を取って正反対の方向へと飛んでいってしまう。

キュベレイが向かう先は、ピースミーティアだ。

「あいつ…破壊させないつもりか…ッ！」

このまま野放しにしては不味い。もしエコーズ部隊を壊滅させ、起爆装置を破壊されてしまえば、衛星は地球へ落下してしまう。その前に核ノズルを全て破壊するか、キュベレイを仕留める以外に選択肢はない。

…私の決断は早かった。仮に核ノズルを破壊出来ても、満身創痍となったロンド・ベルにあのキュベレイが襲い掛かって来れば、甚大な被害を及ぼされるのは目に見えている。フィンファンネル達をファンネルラックに再接続させると、私は足元のペダルを目一杯踏み込み、操縦桿を前に押し込みながら、スラスターを全開にしてキュベレイの背を追いかけて行く。核ノズル破壊は艦隊に任せ、私はキュベレイを仕留める方を選んだのだ。

(やらせない…絶対…ッ！)

※

おかしい。この状況は想定外だ。

ピースミーティアはあくまでも撒き餌であり、脅しの道具。いざとなれば本気で落とせると言う姿勢を見せるのが意図だったが、地球に落とすのは最初から想定していなかった筈。それなのに、ピースミーティアの核パルスエンジンに勝手に火がついた。

(何が起きていると言うのだ…っ。)

ヤークト・キュベレイを駆るカトレア・ペントスは、密かな焦りを覚えていた。ピースミーティアもそうだが、母艦であるアグライアに通信が繋がらない事も、焦りに拍車を掛けていく。

ミノフスキー粒子は既に薄まり始めており、通信が繋がらない事は考えられない。あるとすれば、アグライアに被害が出て通信機器が故障した…というものだろう。ピースミーティア内に突入すると、先に

侵入している連邦軍の特殊部隊を始末する為、モビルスーツが通れる通路を高速で飛行していく。

「アグライア、応答せよ……アグライア……駄目か。」

まだ特殊部隊の姿は見えない。それに、やはりアグライアに通信は通じず、ノイズ音だけが返ってくる。連邦政府代表団を迎え入れる為に、腹心であるギムレット・クルスもサイド7に居る為、状況確認する手段が今現在私には無い。

だが、核パルスエンジンに点火してしまったのなら、もうこの動きを止められないのだ。想定外の状況ではあるが、ピースミーティアを破壊されてしまえば、私の全ての計画が水泡に帰してしまう。それだけは何としても避けなければならない。

と、その時だった。

「……見つけたぞ。」

次の隔壁へと通じる扉にマニピレーターを近付け、回転式スイッチを握り締めて何度か回転させていくと、開いていく扉の向こう側に、お目当ての連邦軍特殊部隊のモビルスーツが姿を現した。

まるで戦車のような、それでいて連邦のジム系統の見た目をしている奇妙なモビルスーツは、こちらの存在に気付くや否や、戦車からモビルスーツ形態へと素早く変形していく。普及されているモビルスーツより一回り小さいサイズの其れは、すぐにこちらへと腕部に装備されているミサイルコンテナを構え、無数のハンドミサイルを発射してきた。

「甘いな……っ。」

キュベレイのモノアイが一際強く発光すると、飛来してくるミサイルの弾道を見切り、素早くスラスターを噴射して一直線に敵モビルスーツへと突貫していく。ミサイルは発射直後はふわりとした放物線を描いていたので、こちらへ誘導される前にミサイルの背後を取るように通り過ぎて行き、目標を見失ったミサイル達は隔壁の壁に激突してそれぞれ爆発していく。

爆風も追い風となりながら更に加速をかけていくと、戦車のようなモビルスーツに肉薄し、素早くビームサーベルを展開して振り抜い

た。どうやら接近戦は不得意のようであり、易々とその胴体にサーベルを突き刺し、敵の動きを完全に止める事が出来たのだ。

「…次。」

サーベルを引き抜き、鉄屑と化した敵モビルスーツを蹴り飛ばすと、残る敵機の排除に動き出していく。この1機だけでないのは、私のニュータイプとしての勘が囁いているのだ。間違いなく近くに他の機体が居る、と。

私はキュベレイのセンサーによる熱源の索敵を行いつつ、敵の感応波を感じ取れるようサイコミュを通じて意識も研ぎ澄ましていく。そして、キュベレイを次の隔壁へと向けて進ませた瞬間だった。

「ッ……いー」

突如として、踏み出した先の床が爆発し、爆発の衝撃で一瞬機体がよくめいてしまう。姿勢制御をしようと操縦桿を動かした瞬間、今度は別方向からロケット弾が飛来し、キュベレイの頭部に直撃したのだ。ロケット弾が着弾と同時に炸裂し、爆風と共に強烈な閃光を放った事で、メインモニター画面が僅かな時間の間ノイズが走り、正確な外部の映像を出せない状態に陥ってしまう。

これはモビルスーツの火力ではなく、人間による携帯火器の火力。敵モビルスーツだけでなく、どうやら特殊部隊の隊員が各地に潜伏し、トラップを仕掛けつつキュベレイ相手にゲリラ攻撃を加えているようだ。

「ええい…、俗物が…いー」

キュベレイのモニターが一時的に使い物にならずとも、歩兵であれば消し去るのは容易である。バインダーに内臓された拡散メガ粒子砲の砲門を開き、粒子を圧縮させた後に私はトリガーを引いた。砲門からメガ粒子砲が放たれると、区画内のあちこちに着弾していき、無差別に辺り一面を焼き払っていく。複数の歩兵達は、メガ粒子砲の直撃を受けて身体が蒸発したり、床や壁に着弾して弾け飛ぶ残骸にぶつかって千切れたり、正に人の死に方ではない凄惨な状況となっていた。

モビルスーツからすれば、歩兵は蟻のような存在であり、1人1人

を殺していくのは非効率だ。こうした面の攻撃を用いる事で、一気に制圧するのが効果的である。メインカメラが回復し、機体周辺に生体反応が無くなった事を確認すると、キュベレイの脚部に目を落としていく。

(……対モビルスーツ用地雷か。)

右脚部の装甲の一部が剥がれ、砕けており、爆発による煤がこびり付いているのが見える。

このピースミーティアに防衛部隊は駐屯させていたが、彼らにトラップの類を持たせたり、仕掛けさせたりはしていない。これはエコーズが仕掛けたものだと言え想像出来るものの、起爆装置に至るまでに各所に設置されていると考えるのが妥当だ。

「…来たな、プレッシャー。」

余計な事に時間を取られたツケが、直ぐに跳ね返って来る。隔壁の扉が開かれていき、振り返った先には因縁の相手が居た。

『これ以上、好きにはさせない…ッ。』

白と青のツートンカラーが施されたガンダム。何度も私の行手を阻む邪魔者であり、最大の障壁であり、私と同じくアナハイムの掌上で踊らされる道化だ。

そんな敵パイロットの女の声は、ミノフスキー粒子の影響が薄れている事もあり、ハッキリとコックピット内に響いてくる。その台詞はこちらが言うべきものだと言えよう。クスツと笑みを溢していくと、両腕にビームサーベルを構えて対峙していく。これだけ狭い場所では、ファンネルを操るスペース的な余裕はなく、自ずと接近戦を繰り広げる事になるのだ。その事は向こうも分かっているようで、同じようにビームサーベルと盾を構えてくる。

「貴様と私とでは、覚悟が違う。何も背負わぬお前に、私が負ける道理は無い。」

『…ふざけた事を…ッ。』

先に動いたのは、挑発に乗せられたガンダムの方だった。シールドに内臓されたビームガンを発射して牽制を加えながら、こちらに向かってスラスターを全開にして突っ込んで来る。その分厚い装甲を

身に纏いながらも機動性を上げているのは、アナハイムがロンド・ベルに塩を送ったと見て間違いないだろう。若しくは、あの小太りなアナハイムの社長の悪戯かもしれない。

だが、こちらも一歩も退く事はせず、小刻みにスラスターを噴射しながら必要最小限の挙動で回避していき、突っ込んで来るガンダムに向けてサーベルを振り下ろしていく。

「このキュベレイを舐めるな…ッ！」

『あんたこそ、ガンダムを舐めんな…ッ！』

お互いの意地がぶつかり合うように、互いのサーベルがぶつかり合い、弾き飛ばし合い、ビームの火花を散らしていく。もらった、と確信を得ながら振り下ろすサーベルの刃は、ガンダムのシールドに阻まれて横に真つ二つに切り裂き、お返しのように振り抜かれたガンダムのサーベルが、キュベレイの肩部バインダーの一部に当たり、装甲を融解させながら切り裂いていった。

お互いがお互いに舌打ちを繰り返し、激しい息遣いを交じらせ、気迫の籠る声を張り上げ、その思いがサイコミュを通じて機体に伝播していくと、お互いに振り翳しているサーベルが徐々に巨大化していく。その事実には、命の奪い合いを行う両者に気付く余裕はなく、接近戦において重装甲が仇となったガンダムに僅かな隙が生まれた。

「墜ちろ…ッ!!」

この隙を逃す事なく、両肩バインダーから隠し腕を展開させると、大型ビームサーベルを振り抜いてガンダムに斬り掛かっていく。これだけ接近していれば、まず避ける事は不可能だ。

『チツ…舐めんなッ!!』

だが、敵のパイロットは致命傷を避けるように、僅かに機体を屈ませながらスラスターを噴射し、コックピットを串刺しにしようとしたビームサーベルの攻撃を紙一重で躲すと、サーベルの刃は背部バックパックのファンネルラックに直撃し、ガンダムが装備するファンネル達が爆発していった。

だが、まだ終わりではない。このまま至近距離でメガ粒子砲を発射し、今度こそガンダムを亡き者にしようとするトリガーに指をかけた瞬間

……。

『死ぬのは、あんただ…ッ！』

「！！」

サイコミュが敏感に感じ取った、明確な攻撃の意思と殺意。背筋に冷たいものが走ると同時に、操縦桿を引いてガンダムから離れようとする。

然し、もう遅かった。私の視界の端で、ガンダムのフロントアーマー内から隠し腕が伸びたのが分かるものの、完全に回避するには距離が近過ぎる。2本のビームサーベルが展開され、咄嗟に距離を取ろうとスラストを逆噴射しているこちらに対して振り抜かれ、キュベレイの両脚部に命中してしまったのだ。

太腿と脹脛を繋ぐ関節部を切断され、両脚を失ったキュベレイは、一瞬の出来事に対処する術を失い、床にその身を伏してしまう。

『これでトドメ…ッ!!』

ガンダムは、床に倒れたこちらに対して、ビームサーベルを逆手に握り直して突き立てようとしている。確実にコックピットを焼き切るつもりのようなのだ。

「俗物が……ッ！」

だが、こちらはまだ死ぬつもりはない。キュベレイのコックピットブロックに埋め込まれたサイコフレームが共振し、私のニュータイプとしての感応波を限界まで取り込んで行くと、それが物理的なパワーとなってサイコフィールドを形成していく。それは一種の壁となり、ガンダムに当たりながら僅かに機体を押し返したのだ。

まだ手段はある。この隙を活かし、ファンネルポッドから2基のファンネルを射出すると、すかさずガンダムに向けてビーム攻撃を加えていった。この攻撃を避け切れず、1発はガンダムの右腕部関節に直撃し、もう1発は胴体を掠めて背部プロペラントタンクの1本に直撃すると、タンクの凄まじい爆発によってガンダムが地面に倒れていった。

『ぐッ……、くっ、そ…!!』

これで時間は稼げた。後はファンネルを用いてこちらがガンダム

にトドメを刺す番となる。右腕を失い、その分厚い追加増装を施された状態では、直ぐに起き上がる事も容易ではないだろう。

「死ね、ガンダム…ッ!!」

更にファンネルを2基射出し、4基のファンネルを閉所空間でなんとか操りながら、ガラ空きとなったガンダムの背に向けて一斉に発射していく。

……これで終わりだ。アナハイムの悪巧みも、ガンダムとの因縁も、私の呪縛も…何もかも。

『…ガンダム!!』

だが、敵はまだ諦めていなかった。

「なっ——」

私は言葉を失った。4基のファンネルから放たれたビームがガンダムの背面に直撃する間際、まるで弾かれるようにビームが湾曲し、あらぬ方向へと飛んでいってしまった。それぞれのビームは壁や床に当たり、この攻撃は失敗に終わる。

まさかI・フィールドを展開したのだろうかと一瞬考えるものの、そうではない事に気付かされる。先程私がしてみせたように、奴もサイコフレームの超常的な力を発揮させ、サイコフィールドを発生させてビームを弾き飛ばしたのだ。それだけでなく、追加増装をパージさせて本来のガンダムの姿となると、目の前でゆっくりと立ち上がっていく。ガンダムの全身を覆う装甲の隙間から、サイコフレームの光が煌々と漏れ出しているのが分かり、私は小さく舌打ちを漏らしてしまう。

「……やらせるものか…!」

まだまだ、まだ終わらない。終わらせる訳にはいかない。

キュベレイの生き残っているスラストを全開にさせ、両脚を失っている状況で機体を無理矢理飛ばすと、両腕と隠し腕のビームサーベルを全て展開し、4本のサーベルを構えながらガンダムに向けて突貫していく。文字通り、これが最後の一撃となる覚悟で突っ込んでいっ

た。

『勝つのは…あたしだッ!!』

対するガンダムも、左腕に仕込まれたビームサーベルを握り、サーベルを展開させて真っ直ぐに突き立てて来た。その狙いは私自身：キュベレイのコックピットである。

互いのビームサーベルが交錯し、ぶつかり合う瞬間：目を疑う光景が眼前に広がっていった。

『——ツ!?!』

光。眩い程の光。

お互いのコックピットから広がるそれは、キュベレイとガンダムを包み込み、そして戦場ではない別の光景を2人に見せていくのであった……。

『ピースミーティア攻防戦』（5）

私は走る。ひたすらに走る。

「シーナ、早くっ！」

最愛の母の声を追いかけて、全力で走っていく。

私の周りには、子供や大人、老人、様々な人々が同じように走っており、皆必死の形相をしていた。ある人は手ぶらで何も持たず、またある人は大きなボストンバックやスーツケースを携えて、ある場所を目指して走り続ける。

「はあ…ッ、はあ…ッ！お母さん…！」

人々の波に揉まれながらも、母を追いかけて私は必死に走り続けていく。逸れないように、その姿を見失わないように。

そして、人々の荒い息遣いや足音を掻き消すように、私達の頭上から連続で金属音と爆発音が鳴り響いた。それが何なのかを正しく表現したのは、一緒に走っていた1人の男性だった。

「ジオンの…モビルスーツだ…っ！」

緑色の、18m程の巨大な鉄の塊。人型のそれは、手に持ったライフルを構え、あちこちに無差別に攻撃を加えている。ライフルのマズルが何度も火を噴き、巨大な弾丸を連続で発射していたのだ。撃ち出された弾丸を失った巨大な薬莖は、排出口から次々に飛び出では辺りに降り注ぎ、家屋の屋根を破壊したり地面に穴を空ける程の衝撃を与えている。あんなものが人間に当たれば簡単に死んでしまうと、幼いながらに容易に考えつく。

『住民の方は、急ぎシェルターに避難するように！繰り返す……』

私達が走っている最中も、ジオンのモビルスーツによる攻撃は続けられており、加えて防災放送によって避難を促すアナウンスも、繰り返し流され続けていた。そして、ジオンのモビルスーツを迎撃しようと、コロニーの研究施設からロケット砲やミサイルを積んだトラック、そして戦車が出てきては、モビルスーツに向けて攻撃を始めていく。

攻撃を避けたモビルスーツは、スラスターを噴射してジャンプし、

迎撃に出て来た車両群に向けて進んでいった。私はその姿を、つい立ち止まって睨みつけてしまう。

(ジオン……、あんなのが来なかったら、めちやくちやにならなかったのに……!)

今日は、通っている学校の体育祭があったのだ。それが、この襲撃騒ぎで今朝から避難警報が出され、楽しみにしていた体育祭どころではなくなってしまったのである。

一瞬にして奪われた日常。その怒りの矛先を遠ざかるジオンのモビルスーツに向けながら、ギリギリと奥歯を噛み締めていく。

「シーナ、何してるのっ、早く!!」

立ち止まってしまったせいで、母との距離が離れてしまった。人波が壁となり、そう容易に母の元には戻れないだろう。母も流れを途切れさせてはいけないと進み続けているので、その声だけは聞こえたが、姿は徐々に見えなくなっていく。

私は直ぐに避難に走る人々の波に戻ろうと、踵を返した時だった。

ドンツ、という重低音の金属音と火薬が弾ける音が聞こえたかと思えば、私の真後ろから弾丸が飛来し、それは避難していた人々の人波の只中に着弾したのだ。

「う、あッ、あああああ——ツ!!?」

ほんの一呼吸にも満たない時間が過ぎ、凄まじい爆発が着弾地点で発生すると、私は爆風によって身体ごと吹き飛ばされてしまい、地面を何度も転がりながら倒れ伏してしまう。目を瞑りながら、身を丸めて頭を腕で覆い、しばらくの間は目を開けることも立ち上がる事も出ず、ただ爆音によって生まれた耳鳴りが消えていくのを待つしかなかった。

…それから、どのくらい時間が経ったのだろうか。数分なのか、数十分なのか、何時間も経っているような気もする。耳鳴りはようやく治り、目をゆつくりと開けていくと、視界が僅かに歪んで霞んでいるのが分かる。恐らくは爆風で吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた際

に、頭を打ってしまったからだろう。ズキズキと頭が痛む感覚もあるが、手で触れてみると幸いにも出血はしておらず、私は身体に力を込めながらよろよろと立ち上がっていく。

「…………お母、さん…………？」

見つめる先には、爆発によって出来たクレーターのような穴。焼け焦げ、煤けた臭いを放っており、その中に混じるように肉が焼ける臭いも鼻腔を刺してきた。

そして、大行列だった避難民達の人波は、ただの1人も立っている者も無く、肉片や服の切れ端が辺りに散乱している。一瞬で大勢の人々が死んだ事を突き付けられ、そして自身の母親の姿も大量の死骸の中に含まれているのだと分からされた。

「お母さん…………お母さん…ツ、やだ、お母さん…………ツ!!」

爆心地となった道を歩きながら、見慣れた服の切れ端と共に、焼け焦げて黒ずみ、千切れ飛んだ右腕が転がっている事に気付く。それは紛れも無く、母の手だった。

私は泣いた、泣き叫んだ。母の右腕をその胸に抱きながら。

「あつ…ああ…ツ、ああ…あああああ——
—ツ!!!」

U.C. 0079。

この日、サイド7にジオンのザクが侵攻した事で、ごく普通の暮らしを送っていた少女シーナ・ランチェスターの運命は大きく歪み、そしてニュータイプへの革新に至る第一歩となっていたのである。

※

「今度の被験体はこいつか。」

「はい、博士。」

とある手術室に、1人の少女が運び込まれてきた。

その少女は麻酔を施されているのか、規則正しい寝息を立てており、手術台の上に複数の大人の手によって乗せられていく。艶のある長い黒髪は束ねられていて、これから始まる手術によって失われると

思うと、若干名残惜しいような気もしてくる。

「今までの被験体の中では、ニュータイプ適応値が最高の値を示しています。何より、整形手術も必要最小限で済む程度に、顔のパーツも似通っています。」

「…確かに、あのお方と瓜二つになる下地は整っているな。」

メスを握る博士と呼ばれた人物は、手術台の上で眠る少女の顔をジツ、と見つめていく。

この少女の素性は、戦災孤児だ。もつと正確に言うのなら、少女の両親はあの『ブリティツシユ作戦』で地球に落とされたコロニーに住んでいたのである。偶々この少女はサイド3のエリート養成学校に留学していたので、毒ガスによる虐殺からは逃れられたが、その後に残っていたのは孤独と絶望であった事は容易に想像がつく。

資料によれば、彼女は天才的な頭脳を遺憾無く発揮して飛び級しており、専門はモビルスーツ工学。留学先のサイド3にて齡10歳ながら学徒動員され、その頭脳を買われてグラナダのモビルスーツ開発工廠にて働いていたとされている。その後、ジオンの敗北と共にアクシズに逃れ、こうしてイサベルへとやって来てくれた。ニュータイプ研究所としてはこの上ない逸材なだけに、今回こそは完全な人工ニュータイプとして慎重に強化を施していきたい所である。

「では、手術を開始する。」

少女の身体に、メスの刃が入れられていった。

：

ぼんやりと目を開けたその先は、見知らぬ部屋の天井だった。ゆつくりと身体を起こしていくと、まだ麻酔の余韻が残っているようであまり身体の節々の感覚を感じない。だが、今の自分が“違う誰か”に変わった事は何となく分かる。

「起きたかね、被験体H・K・62。」

私が起きたベッドの脇には、軍服を着た男性が情報端末を片手に佇んでいた。

この人を私は知らない。だが、ジオンに関係する人である事は、軍服のデザインですぐに分かる。

「貴方は……？」

頭と顔に包帯を巻き、目と口しか出ていない私の問いかけに、軍服を着た人物は淡々と答えてくれた。

「私の名はギムレット・クルス。この小惑星イサベルを預かる者だ。君にはこれから身体機能強化訓練と、精神感応波強化訓練を受けてもらう。まずは手術の傷を治し、身体の調子を整えたまえ。以上だ。」

彼はそれだけを言い残すと、くるりと踵を返し、部屋を後にしようとする。だが、何かを思い出したように足を止めると、こちらへ半身だけ振り返りながら顔を向けてきた。

私は包帯だらけの顔を僅かに傾け、彼をジッと見つめ返す。

「……カトレア・ペントラス」。今日から君の名前となる、しつかり覚えるように。」

私は小さく頷く。彼に言われてから気付いたものの、私は自分の本当の名前を忘れていた。思い出そうとしても、思い出せないでいる。だが、こうして生きているのなら、名前なんて些細な問題だ。私はそう考える事にして、その名前を何の躊躇いも不安もなく受け取り、口に出してみた。

「……カトレア・ペントラス……」

綺麗な名前だと、私はそんな事をまず思った。

この名前が小惑星イサベル、果てはネオ・ジオン全体に轟く事になるとは、この時の私には知る由も無かった。

※

ビームサーベルが交錯し、弾き合い、互いの機体に直撃する事は無かった。だが、決死の覚悟で突貫してきたキュベレイは、勢いそのま

まにガンダムに体当たりをお見舞いし、互いにそのまま地面へと崩れるように倒れていく。

このまま密着しながら、どちらが先にサーベルの刃を突き立てるのかという場面において、不思議な事に両者の機体はサーベルのビーム粒子展開を停止させ、あろう事か機体のメインジェネレーターすら切れてしまった。

ガンダムのデュアルアイと、キュベレイのモノアイの光が、ゆつくりとほぼ同時に消えていく。

「…………カトレア…ペンタス…。」

ガンダムのコックピット内。メインモニターが消えて薄暗いコックピットの中において、キュベレイが衝突して機体が倒れた衝撃を受けながらも、シーナ・ランチェスターは全く別の事を考えるように小さな呟きを漏らす。

あの不思議な光景が脳裏を駆け巡り、敵パイロットの過去を知ってしまい、私の中にあつた燃え滾る戦意が失われ、別の感情が胸の内に広がっていた。あまりにも悲しく、憐れで、彼女も戦争の犠牲者なのだ。作り物のニュータイプになる事を強要され、人格や記憶さえも操作され、本心ではない所で今まで祭り上げられていたのだと。そんな彼女を、私は殺す事なんて出来るのだろうか。

「…………今、行くよ…っ。」

ガンダムのコックピットを開き、私は操縦席から立ち上がると、ガンダムのすぐ側に倒れている黒いモビルスーツへと近付いて行く。敵同士だろうが、同じニュータイプ能力を持つ者として分かり合えるなら、戦わずに済む道もある筈だ。

そう信じてキュベレイのコックピットブロックに辿り着くと、装甲に埋め込まれている強制開放のスイッチを押し、外からコックピットハッチを開いていった。念の為パイロットスーツに携帯している拳銃をホルダーから抜き、構えながらコックピット内を覗き込んでいく。

「っ…………、気を失ってる…？」

コックピットの中に居たのは、目を閉じてぐったりとした敵パイ

ロットの姿。操縦桿から両手が離れており、意識を失っている様子なのが分かる。

こんな敵を殺せる程、私は人間を捨てていないつもりだ。出来る事なら、生きてままラー・ネイジユへと連れ帰り、今回の事について色々話を聞きたい。

そう思いながらコックピットへと足を踏み入れ、敵パイロットのシートベルトを外し、身体を起こしてやっている最中だった。

「う……、ぐ………ッ……」

「あ……、目が覚めた……」

苦しげに声を漏らしながら、敵パイロットが臃げに瞼を開き始めたのだ。だが、次の瞬間……

「ッ、俗物が……」

「うわッ!」

敵パイロットは目をカッ、と見開き、私の胸を両手で押して突き飛ばしたのだ。咄嗟の事に対処出来なかった私は、そのままコックピットから放り出されていくものの、すぐにパイロットスーツに内臓されたスラスターを噴射し、無重力空間の中で姿勢を制御していく。

「私に触れるな……ッ!!」

敵パイロットがコックピットから姿を現すと、今度は向こうが拳銃を引き抜き、躊躇う事なく私に向けて発砲して来た。然し、私には不思議と恐怖心というものは感じなかったのである。ニュータイプとしての感応波なのか、彼女から明確な殺意というものを感じない。それを示すように、弾丸は私を掠めながら、壁や床に当たっていく。

きつと彼女も私と同じく、あの不思議な光景を目の当たりにしたに違いない。今の迷いのある射撃でそれを感じ取ると、私はスラスターを再び噴射しながら彼女へと向かって進んでいった。

「寄るな……ッ、来るなど言っている……ッ!!」

2発、3発、4発……続け様に拳銃から弾丸が放たれるものの、私の身体に当たりはしない。仮に当たったとしても、私は止まる事はしないだろう。私は両手を広げながら、真剣な眼差しを向けて彼女へと近付いていく。

「くっ……！」

弾を撃ち尽くし、拳銃を投げ捨てた彼女は、キツと私を睨みながらコックピットから離れ、隔壁の奥へと逃げるように去って行ってしまふ。

私は「待つて、逃げないで！」と叫びながら、直ぐにその後を追いかけて行くが、その背には直ぐに追いついた。袋小路となっていて、逃げ場は無かったのだ。

「…連邦に捕まるくらいなら、自らここで死ぬ…ッ。」

「早まらないで、カトレア！」

私が彼女の名を叫んだ事で、身構えていた彼女はあからさまに驚いた表情を浮かべ、目を見開いて動揺を示していた。それもそうだろう、彼女は私に名前を教えた訳ではないのだから。

この動揺を見て、私は畳み掛けるように叫んでいく。

「カトレア、私と一緒に来て！あなたの過去は全部見たよ…見たから、放っておけないの…！あなたの苦しみは私も理解出来るから…、だから…私も一緒に証言する…！あなただけを悪者にはしない…!!」

彼女…カトレア・ペントスは顔を俯かせ、目を伏せながら黙ってしまふ。出来る事なら助けてやりたい、命を失わせたくない、私の身勝手な願いをぶつけられ、戸惑っているのだろう。その気持ちはニュータイプでなくてもありありと感じ取れる。

そしてカトレアは、ゆっくりと顔を上げた。

「…シーナ…ランチェスター…。私は…。」

やはり、彼女も私の名前を知っている。私の過去も全て見たのだろう、敵意や殺意というものは一切感じなくなっていた。そして、私に歩み寄ろうとしているのが見えると、こちらも彼女へと近付いていき…

「うっ…ぐ…ッ、ああッ…!!あああああああああ——ッ
!!!」

守るイサベルのネオ・ジオン軍は、窮地に立たされていた。旗艦アグラリアのブリッジ内は、戦況報告を行う声が絶えず飛び交っている。「第2次防衛ライン、突破されました！以前ロンド・ベル艦隊、中央突破をかけて来ます！」

「戦力の半数を喪失！艦長…これ以上攻め込まれたら保ちません！」
「艦長、ここは撤退して立て直しを図るしか…っ！」

ブリッジクルー達の気持ちはよく分かる。艦長に必死に撤退を進言するには十分過ぎるほど、防衛網をズタズタにされているからだ。だが、ロンド・ベルも無傷ではなく、攻撃の手をなんとか削ぎ落とされている状況であり、艦隊同士の消耗戦が繰り広げられていた。

「まだまだ、閣下がお戻りになるまでは防衛ラインを死守だ…！最終防衛ラインに戦力を集中させるッ、リベリオ隊も呼び戻せ！」

通常であれば、戦力の半数を失った時点で撤退は免れない。全滅するリスクを犯してまでも、この場に留まるのは危険過ぎる。

だが、現にピースミーティアは存在し続けている。そして、ガンダムとキュベレイが交戦状態に入り、その決着が着くまでは持ち場を離れる訳にもいかない。イサベルの主導者を見捨てられる程、アグラリアの艦長は忠義を忘れてはいないのだ。何としてもロンド・ベルを押し返し、カトレア・ペンタスの帰還を待つ覚悟を決めると、艦長の姿を見たクルー達もまた覚悟を決め、各々通信を飛ばしていく。

「アグラリアより、モビルスーツ隊各機へ！最終防衛ラインまで後退せよ！繰り返す…！」

「最終防衛ラインは死守だ、リベリオ隊も加われ！」
「ロンド・ベル艦隊を包囲し撃滅せよ！」

戦況はどちらに転ぶか分からない。だが、全員が必死の覚悟で戦闘を繰り広げている。ガンダムの艦隊奇襲による戦力低下が今になって響いているが、何としても押し返そうとしている最中に、それは伝えられた。

「か、艦長…！至急伝です！」

それは、1人の通信オペレーターから告げられた。こんな戦闘状況下において通信を送ってくるなど、何処の誰だと怒りを滲ませながら

一瞬考えてしまうものの、艦長は務めて冷静に「すぐに読み上げろっ」と伝えていく。オペレーターは小さく頷くと、「読み上げます!」と声を張りながら、急遽送られてきた通信内容を読み上げ始めた。

「発、イサベルネオ・ジオン軍参謀長ギムレット・クルス大佐。宛、旗艦アグライア艦長殿。戦況の変化により、連邦政府代表团との交渉は決裂…。直ちに全艦隊を戦闘宙域より撤退させ、ピースミーティアの地球落下作戦を実行せよ。尚、カトレア・ペンタス閣下より、不測の事態が起きた際の決定権は譲渡されている為、閣下への確認は不要である。……以上です!」

「なん…だと…っ。」

この命令には、艦長だけでなくブリッジクルーの全員が驚愕の表情を浮かべていた。イサベルのNo. 2であるギムレット大佐からの指示と合わせて、連邦政府との交渉が決裂したという内容に驚いているのだ。

本来であれば、ピースミーティアの威嚇を以て地球の主導権を譲渡される筈だったものが、決裂となれば実力行使で奪い取るしかない。それはつまり、地球への隕石落としての再来だ。だが、閣下自身はそれを心から望まれていない事を知る艦長は、複雑な思いに駆られる。果たして本当にピースミーティアをこのまま落とすべきなのか、一瞬判断に迷いが生じてしまう。

「艦長…！指示を!」

下士官からの声にハッ、と意識を戻すと、艦長は迷いを振り切って考えを纏めていく。閣下がガンダムに負ける筈はない、安全宙域にて閣下の帰りを待つしかない、上官である参謀長の命令には従わなければならない…と。

「っ……、艦隊反転…！ピースミーティアの核パルスエンジンに点火し、戦闘宙域より離脱するッ。点火後、信号弾を上げよッ!」

命令を下したと同時に下士官が強く頷くと、遠隔操作のスイッチが押され、程なくしてピースミーティア後部に設置された核ノズルに火が灯り、巨大な衛星はその身を地球に向けて進ませ始めていく。地球は目と鼻の先だ、ロンド・ベルの抵抗次第ではこのまま地球に落ちる

だろう。

ピースミーティアを防衛していた部隊を撤退させる為、アグライアから全部隊撤退を告げる信号弾が放たれた。通信を介して指示を出すよりも、強力な光量を放つ信号弾の方が、隅々まで瞬時に指示を伝達する事が出来る。そして、信号弾を見つめるのはネオ・ジオンだけではない。

「艦長…、信号弾確認！ネオ・ジオン軍が撤退していきます！」

中央突破を図る Rond・ベル艦隊も、アグライアが打ち上げた信号弾の光を見つめていた。ラー・ネイジュのブリッジ内では、通信オペレーターのエヴァ中尉が声を上げ、アンダーソン艦長が何度も頷いている。

「よし…、このまま敵衛星を破壊するつ。ロビンソンは急ぎエコーズを回収、ネルソンは負傷兵を收容し、この宙域より離脱せよ！動けるモビルスーツは、破碎後の衛星の残骸を可能な限り破壊するよう通達！」

アンダーソン艦長の命令は直ぐに各員に伝達され、中破したクラップ級ネルソンを先に離脱させる決断をした。衛星内部は既にエコーズの手によって爆薬が仕掛けられているので、後は時間が来れば内部から爆発し、衛星は幾つもの破片に粉碎される筈だ。そして、衛星が地球の引力圏に到達する前に、核ノズルを破壊して勢いを殺す必要がある。

ここから先は更に時間との勝負となる。問題なのは…、

「…ガンダムの機影は捉えているかね？」

アンダーソン艦長の問いかけに対して、通信オペレーターのエヴァ少尉は、複雑な表情を浮かべながら首を横に振っている。

「いえ…、キュベレイと交戦後に衛星内へと侵入してから、機影は確認されていません…っ。」

ルミナスガンダムの力が一層必要となる局面において、シーナ少尉の姿が見えない事は、一抹の不安を誰もが覚えてしまう。だが、今はやれる事をやるしかない。ガンダムの無事を祈りながら、ラー・ネイ

ジユはピースミーティアの最後部である核ノズルへ向けて、機関出力を最大にしていた。

「主砲発射準備、目標は敵衛星の核ノズル。ミサイルも全弾撃ち尽くしても構わない、全て叩き込む！」

アンダーソン艦長の命令に、緊張感を持ちながらしつかりと頷いたのは、砲術長のアレン少佐だ。コンソールパネル上で指先を素早く動かし、ラー・ネイジユの甲板前方と後方の全主砲が左舷へと向けられ、ピースミーティアと相対速度を合わせながら照準が合わせられていく。

「主砲発射準備完了、ミサイルも全砲門開きました！」

アレン少佐が声を張り上げると、アンダーソン艦長が右手を上げ、そして素早く振り下ろしながら命令を下していった。

「全砲門、撃てッ！」

ラー・ネイジユの艦首から複数の対艦ミサイルが発射され、狙い澄ましたように核ノズルの連結シャフト目掛けて突き進んでいき、見事に命中して次々に大きな爆発を起こしていく。続けて4基8門のメガ粒子砲が一斉射されていくと、シャフトの先にある核ノズル本体へと直撃していき、4基あるノズルの内の1つが巨大な爆発を起こして粉々に砕け散っていった。これで残る核ノズルは3基となり、地球の引力圏に突入する前に全基破壊出来れば、地球への被害を防ぐ事も現実味を帯びてくる。

「核ノズルの破壊を確認。目標、未だ健在！」

「攻撃の手を緩めるな！次弾ミサイル装填、主砲の照準も修正しろ！ノズルはあと3基だ、急げ！」

副長のエリス中佐の命令は、アンダーソン艦長よりも鋭く、ブリッジ内に限なく響き渡る。攻撃の指揮は彼女に任せる事にした艦長は、通信オペレーターのエヴァ少尉へと視線を向け、ある事を問いかけた。

「エヴァ少尉、爆破予定時刻まであとどの位だ？」

エヴァ少尉は少し慌てた様子でコンソールパネルを操作し、ブリッジ正面の大型スクリーン端にカウントダウンのタイマーを表示して

くれた。これで全員が確認出来るようになり、皆の気持ちが更に引き締まり、独特の緊張感がブリッジ内に漂う。

「爆破予定まで、残り400秒ですっ!」

400という数字が、ブリッジ正面のモニター脇に表示されている。それは1秒ずつ数を減らしていき、刻一刻と爆破予定時刻へと近付いていく。

アンダーソン艦長が気にしているのは、衛星内へと突入したガンダムの行方：シーナ少尉の安否である。この質量の衛星を破砕する程の火薬量を炸裂させようと言うのだ、いくらガンダムと言えど爆発に巻き込まれば木っ端微塵になってしまうだろう。

「まだか…、シーナ少尉…。」

尚も砲撃は続行しており、次々に対艦ミサイルが発射されてはノズルの連結シャフトに命中していき、主砲のメガ粒子砲がノズルにダメージを与えていく。アンダーソン艦長の呟きは、熾烈な攻撃を加えている最中、誰の耳にも入る事はない。だが、艦長と同じか…：それ以上の気持ちを抱く者が2人居た。

(シーナ…：お願い、帰って来て…：!)

1人は通信オペレーターのエヴァ・ヒギンズ少尉。絶えず戦況の移り変わりや通信を報告しながらも、心中は穏やかではなかった。今すぐにもブリッジを飛び出して彼女を迎えに行きたい、助けに行きたいという気持ちを抑えながら、オペレーター席に座り続けている。

対して、もう1人はモビルスーツデッキに居た。

「整備長、準備は出来てるかっ!？」

「ちよつと待て隊長!今ビームライフルの調整が終わるところだ!」

「早くしてくれ、頼むっ!」

ラー・ネイジュのモビルスーツ部隊を指揮する、ラプター1ことローマン隊長だ。中破したプロトタイプ・リゼルを修理に回し、現在は予備機のジェガンの発進準備に取り掛かっている最中である。

ローマン隊長は素早くジェガンのコックピットに乗り込み、メインジェネレーターを起動させると、全天周囲モニターのスイッチを入れ

て格納庫内の映像をモニターに映し出していく。だが、整備長からはまだカタパルトデッキへ移動させる許可が出ず、武装の調整が済んでいない事を告げられると、焦りからつい表情を歪めてしまう。

「くそ…、新入りが頑張ってるって言うのに…！」

焦りの原因は、シーナ・ランチェスターだ。いくら火力と機動力が向上した新装備のガンダムとはいえ、単騎で艦隊戦を行った上にキュベレイを相手にするのは、骨が折れる事だろう。早く出撃して援護に向かいたい所ではあるが、敵衛星の爆破予定時刻も迫ってきている。モビルスーツ部隊を率いる立場としては、衛星の破壊に注力しなければならず、様々な状況と感情の板挟みとなりながら、コックピットの中でつい愚痴を溢してしまっていた。

『よし、完了だ！隊長、いつでも良いぞ！』

ビームライフルの調整が完了したのは、衛星の爆破予定時刻の2分前だった。整備長やメカニックマン達を見送る形で、カタパルトに接続された機体がカタパルトデッキへと移動していき、敵衛星を正面に見据える形で発進準備を完了させていく。

「生きて帰って来いよ…新入り…ッ。ラプター、出るぞ！」

ジェガンを屈ませ、操縦桿を目一杯押し込んでいくと、カタパルトが打ち出されて機体を勢いよく射出していった。艦から発艦すると同時に、スラスターを全開にさせ、ローマン隊長は一直線にピースミーティアへ向けて飛翔していく。

やはりリゼルに比べると、ジェガンの動きは鋭さや軽快さと言うものは劣ると感じるものの、パイロットの操作に忠実に追従してくる安心感が高い。流星は正式採用された量産型モビルスーツなだけはあると思いつながら、核ノズルへ攻撃を加えていく母艦の砲撃を横目に、既に展開しているモビルスーツ隊へと合流していった。

「いいか、あと1分で衛星はバラバラになるッ。デカイ岩は艦に任せ、俺達は俺達に撃ち落とせる破片を処理するぞ！」

プロトタイプ・リゼルのラプター隊、ジェガンのブレイズ隊、双方のパイロット達から『了解！』と返事が返ってくると、各機はビームライフルやシールドを構え、衛星の行方を固唾を飲んで見守ってい

た。

そして、カウントダウンは終わりを迎える。

『3…2…1…、ゼロ！』

ミノフスキー粒子が薄くなった事で聞こえてきた、ブリッジからの通信。エヴァ少尉の声をパイロット達が聞いて間も無く、ピースミールティアの各所から爆発の閃光が迸り始めた。エコーズ部隊が仕掛けた爆薬は相当な火薬量だったようで、数度の爆発を経て衛星が真つ二つに割れ始めていく。

当然、細かな破片も凄まじい勢いで飛散し、周囲に展開しているモバイルスーツの装甲やシールド表面を叩いてくる。すると、細かな破片の次に質量のある岩があちこちに飛び出していく、次々と地球に向けて進んでいく。ここからはモバイルスーツの出番だ。

「各機、迎撃開始ッ！」

ローマン隊長の命令を受けて、周囲に展開しているモバイルスーツ達は武器の引き金を引き、ビームの閃光やミサイルの軌跡が宙域に飛び交っていく。複数のビーム攻撃が残骸の岩に直撃していくと、更に細かな破片に爆散していく、大気圏に突入した際に燃え尽きるサイズにまで砕かれていった。

更に巨大な質量を持つ破片は、ラー・ネイジユの主砲で撃ち落とし、いき、ミサイルや機銃の掃射で破碎作業を進めていく。離れた場所では、エコーズ部隊を回収したロビンソンも破碎作業に加わり、巨大な破片に向けて主砲やミサイルでの攻撃を行っていた。その最中、ローマン隊長の操るジェガンだけ、次々に破壊されていく衛星の残骸の只中へ突入していく。

『隊長、危険ですよっ!?!』

「うるせえッ、いいから破片を撃ち落とし続けろ！」

同じラプター隊の隊員から制止の言葉をかけられるものの、ローマン隊長は止まる事は無く、スラスターを全開にしながらデブリと化した残骸の中を進んでいく。攻撃ではなく、ジェガンの索敵センサーを最大限作動させながら、ある熱源反応と通信波を探していた。

「何処だ…ガンダム…っ。爆発に巻き込まれたなんて言うんじゃねー

ぞ……！」

血眼になって探しているのは、ガンダムである。必ず何処かに存在していると信じて、コックピット内のモニターのあちこちに目を移していき、索敵を続けていく。然し、ジエガンのセンサーが映し出すものは、爆発によつて熱を持った衛星の残骸ばかり。諦める訳にはいかないものの、1秒毎に焦りやフラストレーションが溜まり始めてしまう。

「何処に居んだよ、新入り……ッ！」

思わずジエガンのコンソールパネルを叩いてしまい、悔しさに表情を歪ませてしまうと、一瞬だけ目を閉じてしまう。まだ希望を捨ててはいけない気持ちと、諦めて破片の攻撃に戻らなければいけないという気持ちの闘ぎ合いが、隊長の心を締め付けていく。

……そして、気付けば十数分が経過していた。結果的にローマン隊長はその場から動かず、索敵を続けていたのだった。地球に被害を及ぼす恐れのある破片達は余す事なく撃ち落とし、ロンド・ベル艦隊の攻撃は止まっている。不気味な程の静寂が宙域を支配しながら、ローマン隊長は虚しさを滲ませ、再びコンソールパネルを殴り付けてしまう。

「ちくしょう……、くそつたれ……ッ！お前まで死んじまうなんて……ッ！」

その声は、コンソールパネルを殴りつけた事で通信スイッチがオンとなり、ラー・ネイジュのブリッジにも繋がっていた。ローマン隊長の悔しさを滲ませた悲痛な叫びは、エヴァ・ヒギンズの胸を押し潰していく。

(そんな……、シーナ……ッ……)

彼女だけでなく、艦長や副長達も、居た堪れない悲痛な面持ちで言葉を失っていた。

涙が溢れそうになる。

叫んでしまいたくなる。

エヴァの肩は僅かに震え、指先も震えており、悲しみだけが彼女の思考を染め上げていく。胸を突き上げる濁流のような感情の衝動に

駆られている、そんな時だった。彼女の耳に、ノイズ混じりの酷く聞き取り辛い音声が届いたのは。

『……だ……』
最初は何か分からず、聞き間違いの可能性も考えたものの、ノイズは徐々にクリアになっていき、音声も聞き取れるようになってきた。

『ラー……、こちら……、応答……』。ラー・ネイジユ、こちらシーナ・ランチェスター……！』

「ツ——！か、艦長……！シーナが……少尉が、生きてます……！」

涙が止まらなかった。堰き止めていた涙が溢れ出してしまいながらも、エヴァは自分の任務を全うするように、艦長へ報告をしていく。通信波もハッキリと探知しており、間違いなくルミナスガンダムが生き残っている事を示していた。

「直ぐに発信源を特定し、モビルスーツ隊にも状況報せつ。急ぎ少尉を回収せよ……！」

アンダーソン艦長の表情も、緊張感の中に安堵を示すものが浮かんでいる。仲間が1人でも多く生還してくれる事は、指揮官としてこの上ない喜びなのだから。

※

ピースミーティアの夥しい残骸の只中に、頭部と胴体、脚部の一部だけが残っている機体が漂っていた。正確には、ある方向に向けて生き残っているスラスターを噴射しながら移動をしている其れは、辛うじてメインジェネレーターが起動してくれたお陰で、こうしてデブリの中を進めているのだ。

「ラー・ネイジユ、こちらシーナ・ランチェスター……応答して……！こちらガンダム……！」

その機体は、ルミナスガンダム。キュベレイとの死闘を終えた後に、衛星を破壊する爆発に巻き込まれながらも、辛くも残骸からの脱

出に成功していたのだ。その代償に、武装の全てを失い、頭部のセンサー機能の大半が潰え、両腕と左脚部を失い、機体の姿勢制御スラスターが数基だけ生き残っている状態になっており、正に満身創痍と言う表現が正しい。コックピットの中では、意識を失ったままのカトレア・ペンタスを抱きながら、シーナ・ランチエスターは操縦桿を握り締め、太陽と地球、星座の位置関係を確認しながら、ゆっくりとガンダムを移動させていた。その間、通じているかどうかとも怪しい通信回線を開き続け、必死に声を張り上げていく。

「誰か、聞こえてないの…ッ！こちらガンダム…！」

救難信号は出し続けているので、その内何処かに拾われるだろう。だが、叫ばずにはいられなかった。自分達はまだ生きているのだと、この宇宙に示すように声を出し続けていった。

その答えは、程なくして目の前に現れる。

「……あれは……。」

太陽の光を背に、1機のモビルスーツがこちらへと接近して来る。逆光でハッキリと視認は出来ないものの、そのシルエットはとも見慣れたものであった。

『新入り、迎えに来たぞー！』

「…ローマン隊長…！」

こちらに接近して来たのはジェガン、声の主はモビルスーツ部隊の指揮を務めるローマン隊長だった。何故ジェガンに乗っているのか、その疑問はあるものの、今はそんな事はどうだっていい。

まだ私は生きている…生きているんだ。

「……行こう、カトレア。」

私は通信を切り、意識を失っている彼女に向けて呟いていく。その眼が開くまで、彼女の側から離れないと固く決意して。

程なくしてガンダムは、ジェガンに牽引される形でラー・ネイジユへ帰還するのだった。

第8話 『アンバークイーン』

ピースミーティア破壊任務が完了してから1週間が経過し、ラー・ネイジユは補給と修理の為、とある宙域へと向かい航行を続けていた。そこは、地球と月の軌道に挟まれるようにして存在している、ラグランジュポイント1：通称“L1宙域”と呼ばれる場所だ。本格的な修理や補給を受ける場合は、月のアナハイム・エレクトロニクスの工場に寄港するか、ロンド・ベルの本拠地であるサイド1“ロンデニオン”に入港する必要があるものの、そこに向かえない事情がある。

「…ごめん、ルミナス…。」

「またそれか…。いい加減メソメソすんのはやめな、少尉。」

ラー・ネイジユのモビルスーツデッキの最奥…。破損した機体を一時的に置く区間に、シーナ・ランチェスターと整備長の姿があった。

キュベレイとの死闘と、ピースミーティアの爆発に巻き込まれながらも脱出に成功したガンダムは、見るも無惨な姿という表現が出来る程の損傷を全身に受け、現在は修理不可という事でこの場に置かれている。横たわるガンダムに歩み寄りながら、その頭部に手を置き、シーナ・ランチェスターは悔しさを滲ませながら呟いていた。

「でも…。アムロ大尉のように…。私は…。ウオールドさん達が頑張ってきた事を、私は…。」

「…生きてるだけでも立派なもんさ。機体は直せばまた乗れるけどよ、お前さんの替えは無いんだぜ。」

整備長の言う事は尤もだ。パイロットの命こそ大事なのだと言う事を。だが、憧れのアムロ・レイが設計を施したガンダムであり、ウオールド・シャウラ達アナハイムのガンダムチームが、寝る間を惜しんで作り上げたガンダムを、このような形で大破させてしまった責任に、どうしても苛まれてしまう。ウオールド・シャウラからも「気にする事はない、君が無事で良かった。」と声を掛けてもらった事を思い返し、その優しさに報いたいと言う思いで胸が締め付けられる。

そんな私が、心の底まで腐り切らずに済んでいるのには、2つの理

由があつた。それは、ラー・ネイジュがL1宙域に向かつている事に
関係している。1つは、ガンダムの修復に必要な資材を迅速に受け取
り、修理する中継基地があるという事。もう1つは、そこで不足して
いる医療備品や機器も調達出来るので、捕虜のカトレア・ペントスを
治療出来るという事だ。

「…医務室に行つて来ます。」

カトレアの事を思い浮かべると、その姿を確認しないと気が済まな
い程、私は気が気ではなかつた。彼女は未だ意識が戻らず、医務室の
ベッドに寝かしつけられている状況だが、私は毎日その身を案じて会
いに行っている。私はガンダムに背を向け、整備長へと声をかける
と、床を蹴つて無重力空間のデッキ内に身体を浮かしながら、区間の
通路に繋がる出入り口へ向けて進んでいく。

「……氣イ付けろよ、少尉。相手はネオ・ジオンの親玉なんだからな
…。」

整備長の言葉は、既に離れている私に届く事はなく、通路に出ると
一直線に医務室へと向かつて行つた。その途中、通路の向こう側から
見慣れた人物が近付いてくる。

「あつ…、シーナ…。」

「…お疲れ様、エヴァ。」

その人物は、ブリッジクルーの通信オペレーターであるエヴァ・ヒ
ギンズ少尉。このラー・ネイジュの中では、特に距離感が近い友人
だ。私の疲れた表情を目にして、彼女は若干表情が曇る。

「…また捕虜のお見舞い？」

「ん……。」

どこか棘のあるような声色に、私は少し眉を顰めながら頷く。確か
にカトレアは捕虜には違いないが、私にとつてはただの捕虜ではな
く、互いに分かり合えた者同士なのだ。気掛かりになるのは当然の事
であり、それを面白く思っていない彼女の気持ちも理解しているつも
りだった。

だが、分かり合えたと言うのは私とカトレアにしか分からない話
で、エヴァやその他クルーに話しても、信じてもらえないでいる。そ

ここにもどかしさを感じながらも、私にもどうしようもない。

「シーナ……。あの人はネオ・ジオンの偉い人で、あの隕石を地球に落とそうとした張本人なんだよ……。それに、ゴードン隊長を殺したのだって……」

分かってる。全部分かっているのだ。分かっているものの、そんな怒りや憎しみだけではダメなのだ。その境地に達している私にしてみれば、彼女が抱く敵愾心や嫌悪感は、また新たな憎しみを増やしてしまうだけなのだ。

それを上手く言葉に出来ない私は、そつと手を伸ばして彼女の肩を優しく叩く。

「……あの人は私に任せて。」

それだけを言い残して、私は彼女から離れて通路の先へと進んでいく。彼女はまだ何か言いたげにしながらも、口を噤んで私の背を見つめていた。心の中でエヴァに対し、ごめん……と呟くと、程なくして目的地である医務室へと到着する。

ドア横のスイッチを押し、扉がスライドして医務室内の景色が目に映ると、毎日変わり映えのしない真っ白な部屋を見て何処か安心感さえ抱いてしまう。そのまま中に入ると、椅子に座る白衣を纏った人物へ声をかけていく。

「シーナ・ランチェスター、入ります。」

「今日も来たのか、熱心な事だね。」

短く切り揃えられた短髪に、大きな丸メガネを掛け、アンニユイな雰囲気を漂わせる中年男性。この男性こそ、ラー・ネイジュの医療を担う専属軍医である、Dr. モーリス少佐だ。彼は首にかけた聴診器を外して机に置くと、敬礼をしている私を見上げて僅かに笑みを浮かべ、頷いてくれている。

私とカトレアのニュータイプ能力、その本当の力について信じてくれているのは、アンダーソン艦長やウォルド・シャウラの他には、このDr. モーリスしか居ない。だからこうして医務室への入室を許可されており、私の行動や立場を守ってくれている。

「あの、彼女の意識は……」

私はチラツとベッドへ視線を向けながら、彼へと問いかけていく。ベッドの上では静かに目を閉じて眠るカトレア・ペンタスの姿があり、規則正しい呼吸を繰り返していた。

「まだ戻らない。まあ、強化人間としての副作用のようなものだ…目覚めるまで待つしかない。」

「…そうですね。」

強化人間。人工的にニュータイプを作り出す事を目的とした、人間の倫理から逸脱した実験体の事を指す言葉である。Dr. モーリスも強化人間についての見識はあるようで、私が見たカトレアの過去についても、すんなりと信じてくれた。

彼によれば、強化人間にはその力の代償として、一定の周期で脳を焼かれるような激しい苦痛が襲うのだと言う。死を覚悟する程の激痛は、投薬によってある程度コントロールが可能であり、適切なタイミングで薬を服用して痛みを感じないようにしているらしい。彼女が私の目の前で激痛に苛まれ、意識を失ったのは、恐らく薬を服用するタイミングを逃したまま出撃した事により、あの場で激痛に襲われたと推測出来る。

「…早く…目を開けなよ、カトレア。」

私はベッドに歩み寄り、彼女の桃色の髪をそつと撫でながら、憂いを含んだ眼差しで見下ろして呟く。彼女の負った肉体的な怪我は、ラー・ネイジュの限りある医療資源で最低限の処置が施されているものの、精神面はどうしようもない。目覚めたらきつと独房に入れられてしまうかもしれないが、どんな手を使っても彼女を守ろうと、私は心に誓っていた。

「…心配するな、少尉。アンダーソン艦長は話の分かる人だ。それに…そう簡単に彼女の処遇も決まらないだろうさ。」

「…どういう事ですか？」

彼の言葉に、私は首を傾げながら問いかけていく。そう簡単に決まらないとは、一体…。

「彼女は確かに敵だが、向こうのネオ・ジオンの内情を1番よく知っている。こちらに協力してくれるなら、悪いようにはされないだろう。」

なるほど、彼の言葉を聞いて私は納得した。ピースミーティア戦で撤退した敵の行方について、未だにロンド・ベルは尻尾を掴めないでいる。その足取りが分かれば残存勢力を掃討する事が出来て、本当の敵というものも見えてくるだろう。問題は彼女がこちらに協力してくれるかだが、そこは私が説得するしかない。

「それに…、医者としては彼女を救ってやりたい。強化人間なら尚更にな。」

彼はそう言うと、柔らかな笑みを浮かべながら私を見つめた後に、再び机に向かって書類の整理を始めた。彼の言葉に嘘偽りはないと、私には分かる。ニュータイプに全てを見通せる力というものは無いものの、何となく彼の信念というものが見えたような気がしていた。

「私は薬を保管庫から取ってくる、ここは任せたよ少尉。」

暫くすると、Dr. モーリスは椅子から立ち上がり、私に彼女を見ているように伝えて医務室を出て行った。私は小さく頷いてその背を見送ると、ゆっくりと彼女へと顔を向けていく。

「っ——！」

目を丸くして驚いてしまった。私が振り向いた時には、彼女は薄らと目を開き、私を見ていたのだ。すぐに彼女の手を握ると、顔を覗き込むようにして声をかけていく。

「カトレア、大丈夫…っ？聞こえる？」

私の問いかけに対して、彼女はゆっくりと頷きながら手を握り返してくれた。私同様に、彼女も敵意というものを失っているのが分かる。

「…大丈夫だ、シーナ・ランチエスター。…私…捕まったのだな。」

彼女は医務室の天井を眺め、そして部屋の中をゆっくりと見渡しなから、此処が何処なのかを把握した様子だった。諦めにも見えるその表情は、私からすれば憑き物が落ちたような、そんな印象を受ける。私はホッと一安心すると、ベッド脇に寄せていた椅子に座り、ジッと彼女を見つめていく。

「そう、ここはロンド・ベルのラー・ネイジユ艦内。カトレアにとって敵の艦になるけど…」

私は彼女の処遇を決定出来る立場ではないので、そこまで言った所で口を噤む。それを決めるのは艦長なので、私が何か口走って変に期待を抱かせてもいけないのだ。そんな私の心情を汲んだのか、彼女はフツ、と笑みを溢して口を開いていく。

「…私は罰を受けるに値する事をしてきたのだ、甘んじて受け入れよう。」

「でも、あんたは……！ずっと操られて来て……っ、」

私の言葉を遮るように、握っていた手を離し、彼女は人差し指を伸ばして私の唇に押し当てて来た。「まだ話は終わっていない、黙っていてくれ」……とでも言うように。

「……罰は受ける。だが、それは……私達を操って争いを生み出してきた存在を消してからだ。」

彼女の言葉を受けて、私は目を見開きながら息を呑んだ。彼女だけでなく、私も操られていたと言う言葉に。私と彼女を駒にして、この戦争を仕組んだ存在があるというのだ。今となつては彼女は利用されただけの存在だと分かっているのです、私は信じる事が出来る。

「……それって誰なの、カトレア。」

私は核心に迫る質問を投げかけていく。この医務室にも監視カメラは設置されているので、その存在に気付いている彼女は、私の腕を掴んで引き寄せ、耳元に口を近付けて囁くように伝えてきた。

「…小惑星イサベルを影で支配する、ギムレット・クルス……。そして……アナハイムの社長だ。」

「っ………、社長が……！」

私は驚きを通り越して動揺してしまった。だが、そんな私の様子を見ても、彼女は尚も言葉が続けていく。

「ギムレット・クルスは、私を生み出したイサベルのニュータイプ研究所所長だ。そして、アナハイムの現社長は……ダイクンの提唱した新たな人類の革新を熱烈に信奉していて、人工的にニュータイプを生み出すギムレットと急接近したのだ……。私が知っているのは此処までだが、奴らは決して戦いを止める事はないだろう。私もお前も生きている限り、な……。」

小声だが、その言葉はハッキリと私の耳に入っていく、自身が置かれている状況というものが覚えてきた。ネオ・ジオンの内情は分からないものの、アナハイムは意図的に戦いを引き起こしている事は分かる。その為に私をテストパイロットとして招き、ガンダムのパイロットに仕立て上げ、カトレアと戦わせて来たのだ。私とカトレアが戦う事で、人類の革新へ至る何かを掴み取ったのか、或いは……。

「…遅かれ早かれ、この艦もお前も…また戦いに巻き込まれるだろう。私も知り得る情報はお前達に与える…。だから、お前も私に協力して欲しい…。これ以上…私やお前のような存在を生み出さない為にも、彼奴らを倒す力を貸してくれ…シーナ。」

間近で彼女と目を合わせ、彼女の真剣な言葉を真正面から受け止めていく。勿論互いにしか聞こえない程度の囁き声なので、監視カメラに声を捉えられている心配は無い。

私の答えはもう決まっている。小さく頷き、「…分かったよ、カトレア。」と呟くと、もう一度彼女の手をしっかりと握り締めていく。後は、艦長がどのように判断を下すのかだが……。

『目標捕捉、各員は所定の持ち場にて待機せよ。繰り返す、各員は所定の持ち場にて待機せよ。』

すると、私達の会話を遮るように、艦内アナウンスが医務室の中にも響き渡った。副長のエリス中佐が発したアナウンスは、このラー・ネイジユが目指していた場所に辿り着いた事を意味している。

「…この艦は何処に向かっているんだ？」

2人だけの会話は終わったので、お互いに体を離していく、普通の声量で彼女が私に問いかけてきた。私もそれに応えるように口を開いていく。

「…アナハイムのドック艦、アンバークイーンだよ。」

※

小惑星イサベルには激震が走っていた。

ピースミーティアによる地球掌握作戦の失敗以上に、指導者であるカトレア・ペントスが戦死したと発表されていたからだ。

「…我々は、これからどうやって…。」

イサベルの軍司令部、その会議室に集まったネオ・ジオンのトップ達の表情は固い。ある者が弱音にも似た言葉を吐くものの、それを咎めたり訂正を求める声も上がらない。それもそうだ、カトレア・ペントスのカリスマ性に縋り付き、ここまでイサベルを纏め上げてきた存在を失ったのだから、誰しも茫然自失になるのは当然と言えよう。

そんな重い空気に楔を打ち込んだのは、カトレアをイサベルの指導者に祭り上げ、強化人間になる事を強要した、ギムレット・クルスだった。

「お集まりの諸君…。先ずは黙祷を捧げようではありませんか。先の作戦に散っていった兵達と、偉大なカトレア閣下の為に…。」

彼は悲しみに満ちた表情と声色ながらも、しっかりと前を向いているように言葉を発していく。将軍達や参謀本部の軍人達は、皆ハツとしたように表情を引き締めると、直ぐに起立して各々目を閉じながら黙祷を捧げ始めた。ギムレット・クルスも、同じように目を閉じて黙祷をしていく。

暫しの静寂が過ぎ去ると、ギムレットは続けるように言葉を発していった。

「亡きカトレア閣下の意志を継ぎ、地球を我らイサベルの手中に収める為にも、我らは今こそ結束しなければならぬ。閣下を死に追いやった連邦軍を、決して許してはならないのです。」

この言葉に、何人かは力強く頷いていき、打倒連邦軍を掲げて闘志を燃やしていく。それとは逆に、慎重になるべきだという意見も出始める。

「待ちたまえ、ギムレット参謀長。我々も戦力をズタズタにされている…これ以上連邦軍と事を構えても、返り討ちに遭うのが関の山ではないのか？」

ある将軍から発せられた言葉は尤もな事だ。エンドラ級とムサカ

級が撃沈され、モビルスーツも総戦力の半数を失った事で、現行戦力ではイサベルを防衛する事で精一杯だろう。この將軍の発言にも賛同を示す者達が一定数現れ、会議の場は抗戦派と慎重派で二分されていく。

「貴様、そんな弱腰でどうする！建造途中のコロニーの1基や2基を奪取して、地球に落とすべきだ！」

「弱腰などではない、現実を踏まえての発言だ。今は強行策よりも、着実に戦力を整えて反攻の機会を伺うべきだと言っている。」

「もつと弱腰なのは地球連邦政府だ！今のうちに畳み掛けねば、我らの勝機は無くなるのだぞ！」

「そうだ、コロニーを落とすしかない！」

「地球連邦政府と連邦軍に鉄槌を！カトレア閣下の仇を！」

「もつと冷静になれ、お前達！コロニーを奪取すると言っても、ロンド・ベルとルナツールの連邦軍が黙っていないぞ！今の戦力では焼け石に水だ！」

紛糾する会議室の空気を鎮めたのは、またしてもギムレット・クルスだった。

「皆、静粛に！」

彼の声に、皆一様に静まり返る。ギムレットは軽く咳払いをした後に、言葉が続けていく。

「心配には及びませんが、現行戦力でコロニーを奪取する事は可能です。こちらをご覧ください。」

そう言うと、彼はポケットから会議室の空間投影モニターのスイッチを取り出し、スイッチを押してモニターを起動させた。スクリーン画面にはイサベルの現在地と、地球圏の各ラグランジュポイントや、コロニー郡達の位置関係を示す地図が映し出されている。

「ピースミーティアの威嚇を以て条約を締結する為に、地球連邦政府の代表団がサイド7“ロウグ”に入港した事は、皆ご存知の通りです。その代表団は、輸送船の推進剤と食料の補給を終え、地球への帰

還コースに乗る為に、L3宙域の中継ポイントを通ります。」

彼の説明が進んでいくと、サイド7と地球を結ぶように赤いラインが表示され、その中でもラグランジュポイント3の一部に赤いシグナルが点滅している。ここが所謂中継ポイントと呼ばれる場所だ。

「サイド7に潜伏している諜報員の情報によると、代表団を乗せた輸送船は昨日出航し、2日後にはL3宙域に入ると見られます。そこで我々は、この政府代表団の輸送船を強襲し、これを拿捕。地球連邦政府に対し、彼らの身柄と引き換えにコロニーの譲渡を認めさせるのです。」

この説明に、出席していた誰もが息を呑む。ここまで正確な情報を持っているのは、他ならないギムレット・クルスのみなので、これが成功すればイサベルの勝利も引き寄せる事が出来ると想像に難く無いからだ。

然し、慎重派の懸念も未だ拭い去る事は出来ていない。先程真つ先に発言した將軍の1人が、再び口を開いていく。

「…疑問がある、ギムレット参謀長。輸送船の護衛の規模はどの程度なのか、それに地球連邦政府が交渉に応じなかった場合はどうするつもりなのか。」

この疑問は想定内のようで、ギムレットは顔色ひとつ変えず、スクリーンに映し出された画面を変え、別の情報を表示していく。

「輸送船の護衛には、ルナツーの連邦宇宙軍艦隊の一部が随伴すると見られる為、これを撃破する戦力を充てる。この作戦は、リベリオ・ビアンキの部隊に任せようと考えています。」

その名を聞いた瞬間、会議室内が一瞬騒つく。リベリオ・ビアンキという名を聞いて、誰もが嫌悪感を抱いてしまうからだ。一部では味方を粛清していると噂も流れている部隊なので、良く思わないのが普通である。

だが、その腕は確かだ。このイサベルにおいて、最も実戦経験と技量が高いのがリベリオ部隊である。彼らに任せる事で、確実に輸送船を拿捕出来るだろうと言う安心感を、この場の誰もが感じていた。

「次に、地球連邦政府が交渉に応じなかった場合についてですが…こ

れを使います。」

そう言つてスクリーンの画面を切り替えると、そこに映し出されていたのは、この小惑星イサベルだった。その一部が赤く点滅しており、それが何を意味しているのか、この場に居る誰もが瞬時に理解した。

「ッ……、参謀長……それは諸刃の剣だ……ッ。」

慎重派の將軍の表情は強張り、心なしか声も震えている。その兵器の存在は誰もが知っているが、誰もが忘れていた……否、忘れようとしていたのである。

この小惑星イサベルが隠し持つ、秘密の兵器について。

「確かに……これを使用すれば小惑星イサベルの秘匿性は破られ、連邦軍に位置を露呈してしまうでしょう。だが、この一撃で決すれば良いだけの話。」

「然し……、ここには民間人も多く住んでいるのだぞ……！」

「我々が勝利し、地球を手に入れば問題はない。そうでしょう、將軍？」

「く…………。」

小惑星イサベルは、惑星全体がミノフスキー粒子の転用による光学迷彩で覆われており、そのお陰で地球圏に到達しても今まで連邦軍に察知されないで居たのだ。常時展開し続けるだけのエネルギーを生させる為には、巨大な核融合炉が複数基必要となり、イサベルの最深部にそれは設置されている。この核融合炉のエネルギーを全て攻撃に転用した兵器が、このイサベルには備わっているのだ。

だがそれは、攻撃の為に光学迷彩を解除しなければならぬというデメリットを孕んだものであり、正に將軍の言うように諸刃の剣となる。その兵器の詳細なデータが、スクリーン上に映し出されていく。

「惑星間長距離レーザー掃射砲……ネメシス」。この一撃を地球に撃ち込み、地球連邦政府に条約の締結を迫るのです。」

会議場が静まり返る。あのカトレア・ペントスでさえ使う事を躊躇した兵器を、この男は躊躇いなく使おうと言うのだ。その本気度を前にして、誰も逆らう事など出来なくなっていく。

ギムレット・クルスの目指す未来にとって、最早小惑星イサベルの存亡など、取るに足らないものと成り果てていた。どんな犠牲を払ってでも地球の実権を握り、この地球圏を支配しようという野心の前には、どんな障害をも排除する強い意志に満ちている。カトレア・ペンタスが目指していた、地球と宇宙の人類が共存する未来とは違う、地球人類を抹殺してでも覇権を手に入れようとする悍ましい野心が。(…ギムレット・クルス：奴は危険な存在だ…。カトレア閣下という光に隠れて、虎視眈々と機会を伺っていたのか…)

そのなりふり構わない彼の姿勢に危機感を抱いたのは、常に意見を言い続けていた、慎重派のダリオン將軍だ。この流れで行けば、自ずとギムレット・クルスがイサベルの指導者の実権を握り、カトレア・ペンタスの敵討ちを大義名分として強行策に出る事だろう。そうなる前に、同じく慎重派の仲間を募り、せめて民間人だけでもイサベルから逃す算段を立てなくてはならない。

「では皆さん、異論が無ければ次の議題に移りたいと思うが…如何ですかな？」

ギムレット・クルスの言葉に、誰も口を開く事はなく、コロニー奪取に向けた作戦指揮は彼に一任する事が決まったのだった。

※

ラビアンローズ級3番艦、『アンバークイーン』。第一次ネオ・ジオン抗争にて大破したラビアンローズに代わり、主にロンド・ベル部隊への補給と整備を担当している、アナハイム・エレクトロニクスが所有する自走ドック艦だ。船体は主に黄色に塗装されており、花卉のような船体中央には、巡洋艦や戦艦を係留・固定出来る巨大なドッキンググアームが複数備えられている。

L1宙域に進出して来たアンバークイーンのドッキングベイに向けて、ラー・ネイジユは相対速度を同調させ、接舷しようとしていた。「アンバークイーンよりガイドビーコンキャッチ。ドッキングベイへの接舷航行に入りますっ。」

「よし、慎重にな。」

操舵を務める航海長のサンドラ少佐の報告に、アンダーソン艦長は穏やかな声色で声をかけていく。ラー・ネイジユは何度か艦首の逆噴射スラストを噴射し、ゆっくりとドッキングベイに近付いていくと、最後は艦の自動操舵で接舷していき、僅かな振動が艦全体に響いていった。接舷が完了するとブリッジ内に安堵の空気が流れ、アンバークイーンのドッキングアームが次々と動き出し、ラー・ネイジユの船体をしっかりと固定していく。

「接舷完了しました、艦長。」

副長のエリス中佐の報告に小さく頷くと、アンダーソン艦長は席から立ち上がり、館内アウンスを行う為にマイクを手にとっていく。

「艦長より達する。本艦はアンバークイーンへの接舷が完了した。補給物資の搬入を進めつつ、手の空いた者から休息を取るように：以上だ。」

アンダーソン艦長のアナウンスは艦全体に響き、モビルスーツデッキの全ハッチが開いていくと、早速補給物資の搬入作業が開始されていった。

ドッキングベイ内から、アンバークイーンの乗組員達が搭乗しているプチモビルスーツが複数出てくると、補給物資コンテナをマニユピレーターで掴みながらモビルスーツデッキへと入って来て、次々にデッキ内へと搬入していく。搬入されたコンテナはラー・ネイジユのメカニックマン達によって開かれていき、仕分けをしながら各部署へと運ばれていく最中、また別のプチモビルスーツ達が現れると、彼らはラー・ネイジユの外壁の補修作業を始めた。

修理と補給作業が同時進行で進められていく中、アンダーソン艦長とエリス副長、モビルスーツ部隊指揮官のローマン中尉に加え、ガンダム開発責任者のウォルド・シャウラと、ガンダムのパイロットであるシーナ・ランチェスターの5名は、アンバークイーン側からの要請を受けてドック艦に乗艦しようとしていた。ラー・ネイジユとアンバークイーンを結ぶ通路が接続されると、エアロックが作動した後ハッチが開き、アンバークイーン内部へと皆入っていく。そこで

は、アンバークイーンの現場責任者であるシュミット艦長が出迎える為に出て来てくれていた。

「任務ご苦労だったね、アンダーソン艦長。それにエリス副長も。」
「恐縮です、シュミット艦長。修理と補給、ありがとうございます。」

シュミット艦長とアンダーソン艦長。所属は違えど年齢はあまり変わらず、技術畑出身のシュミット艦長の方が、僅かに身体の線が細い程度である。然し、この2人の付き合い自体は長く、アンダーソン艦長が現役のモビルスーツ乗りだった頃から、シュミット艦長は技術アドバイザーとして幾度も戦場を共にしていた仲なのだ。その繋がりでも、エリス副長も彼には度々世話になっているので、敬礼で返しなからも表情は穏やかであり、和やかな空気の中両艦長は握手を交わしていく。

(…なんで私まで呼ばれたんだろ。)

その光景を眺めながら、シーナ・ランチエスターは神妙な表情を浮かべていた。艦長と副長が呼ばれたのは分かる、モビルスーツ部隊の責任者であるローマン隊長も分かる、アナハイムの職員であるウォルドも分かる。だが、ガンダムのパイロットとは言え、ただの一兵卒のパイロットがこの場に居るのは不自然だろうと、彼女は内心思っていた。

「アンダーソン艦長、エリス副長、それにローマン隊長は、私と共にブリッジに来てもらいたい。…君がシーナ少尉だね、活躍は予々伺っているよ。」

3人に声をかけた後に、シュミット艦長は私の前に歩み寄り、にこやかな表情を浮かべながら言葉をかけて来た。一瞬目を丸くするものの、直ぐに表情を引き締め直し、「はっ…、ありがとうございます。」と返事を返していく。まさか直接話しかけられるとは予想外だったので驚いてしまうものの、そんな私の様子を横目で見つめるウォルド・シャウラは、微笑を浮かべていた。

「ウォルド・シャウラ技術顧問に、シーナ・ランチエスター少尉。兩名には別の方が呼びだ、案内に従って応接室に行ってもらいたい。」
シュミット艦長からの言葉を受けると直ぐに敬礼をしていき、程な

くして通路の奥からやつて来た案内役の女性職員に促され、私と彼の2名は艦長達とは反対方向に案内されていく。この2人組で呼ばれると言え、やはりガンダム絡みの事なのだろうと、容易に想像が出来た。

「…ウォルドさん、何か聞いてる?」

「分からんな……。」

彼の表情を見ても、本当に何も聞いていない様子で、不思議そうにしているのが印象的だ。こんな表情を見せる事など殆ど無いので、私はどこか得したような気持ちになりながら、案内役の女性職員の背を追って廊下を進んでいく。

暫くしてとある部屋の前に到着すると、女性職員は私達に一礼してその場を去っていった。ここから先は任せる、という事なのだろう。彼が小さく頷いたのを見ると、私は一息吐いてから表情を引き締め、ドアを数度ノックした後「失礼します。」と一声発し、ドアを開けて応接室へと入っていった。

「やあ、久しぶりだね少尉。それにウォルド君も、元気そうで何よりだ。」

(ッ)——— (!!)

私は思わず立ち止まってしまいがちながらも、何とか平静を保ちながら応接室に入り、彼と横並びになりながらその人物を見据えていく。

そこに居たのは、アナハイム・エレクトロニクスの社長だった。

「社長…、驚きました。何故こちらに?」

私より先に社長へ向けて言葉を返したのは、隣に立つウォルド・シャウラだった。私と同じく驚いた表情を浮かべているものの、その驚く理由はお互い全く違っている。

(こいつが…私とカトレアを……)

私はと言うと、決して表情や態度には出さないものの、黒幕の1人と言われている小太りの男を前にして、心の内では沸々と燃え滾るような感情の波が起り始めていた。そんな私には視線を向ける事なく、社長はウォルドに向けて言葉をかけていった。

「この艦は我がアナハイム・エレクトロニクス所有のドック艦だよ、現

場視察も社長の仕事のひとつという訳だ。社員達の頑張りもキチンと把握したいからね。」

尤もらしい理由を述べながら、恰幅の良い社長は人当たりの良い笑みを溢していく。今の私にとっては、この笑顔が心底不気味に思えてしまい、次は何の企みを考えているのか問い糺したいくらいだ。

「さて、我が社の実験機であるガンダム：殆ど再起不能な状態にまで大破したらしいね。」

「……………私の技量が足りず、申し訳ありませんでした。」

社長の言葉に、私は少しだけ唇を噛み締めた後、謝罪の言葉を発していった。陰の思惑がどうあれ、ガンダムを大破させてしまった事實は変わらない為、自分の責任としての謝罪である。悔しさを滲ませる表情を浮かべる私に対して、社長の笑みは変わらず言葉を続けていく。

「いやいや、戦闘記録は見せてもらったよ少尉。寧ろあの状況で生き残れた事自体……正に奇跡と言う他ない。ガンダム：いや、サイコフレームが君を救ってくれたのだと、私は思っているよ。」

てつきり責任追及をされるのではないかと思っていたものの、社長の言葉は予想に反し、どこか満足したかのような言葉だった。私は一瞬目を丸くしながら、返す言葉が見つからずに口を閉ざし、小さく頷くに留めてしまう。

確かに爆発に巻き込まれた際、私は無我夢中だった。カトレアと戦っている時のような、私の意識や意思がサイコフレームと共振していき、物理的なエネルギーとなって一種のバリアーを張ったように私には見えた。そのおかげで爆風や瓦礫を押し除け、衛星の残骸から脱出出来たのだ。

「さて、本題だが……。うちの見立てでは、ガンダムの完全修復には最低でも3週間は必要だ。サイコフレームの再製造に時間が必要だからね。そこで……………」

社長がそこまで言った所で、ある資料を私とウォルドに差し出してきた。その表紙に書かれているのは、『Project Selen e』という言葉。セレーネ計画とは一体何の事だろうと疑問符を浮か

べながらも、資料のページを捲つて中身を確認していくと、直ぐに私は目を見開いてページを凝視してしまう。

「これっ……、ガンダム……。」

開発コード、セレーネ。そう書かれているページには、ガンダムタイプのモビルスーツの設計図が記されていた。見た目はルミナスガンダムに似通っているが、追加装甲や拡張型のオプションパーツ類にまで目を通していくと、別物の機体である事が分かる。

隣に佇むウォールドは、興味深そうに眺めていくものの、その表情は何処か険しい。

「……この機体のテストパイロットを、少尉に？」

「ああ、その通りだよウォールド君。ガンダムの修復が完了するまで、少尉にはこのセレーネのテスト運用をしてもらいたくてね。サイコミュ兵装との連動も確かめねばならん。」

私は軍人として命令に従わなければならない。そして彼もアナハムの社員として、社長の指示には従わなければならないだろう。お互いがお互いの立場を弁え、私から率先して「テストパイロットの任に就きます。」と発言していった。やはりウォールドの表情は険しいものだが、彼の真意がいまいち読めない私には、考えても仕方ない事である。

…それに、上手く使えばこの機体で成し遂げられるかもしれない。カトレアとの約束を。

「少尉なら引き受けてくれると思っていたよ、ありがとう。機体はアンバークイーンの格納庫にある、確認してくれたまえ。」

私は敬礼をし、ウォールドは一礼をしてから社長に背を向けると、2人揃って応接室を出て行く。その足取りは格納庫へと向けられていった。

…新たなガンダム、開発コード“セレーネ”。この機体が巻き起こす新たな争乱を、2人は違った思いで覚悟を決めていた。シーナはまだ見ぬ未来の為に、ウォールドは過去の贖罪の為に……

第9話 『新たなる火種』

宇宙というものは広く、果てしなく広く、そして冷たく暗い場所であるが、実際は隕石やスペースデブリがあちこちに漂う暗礁の海と表現する者も居る程、人類の開発史によって発生した塵の場所と言えらる。大小様々な隕石やデブリを気にする者は、艦を操舵する航海士くらいのものであろう。それ程に、デブリというものは当たり前前に存在しているものだと、宇宙に生きる人々は認識している。

『……………』

ラー・ネイジュへ補給物資を搬入し、外装の補修作業を進めているアンバークイーンの周囲にも、スペースデブリや隕石の類は漂っており、それを特段気にする人物は居ない。どこにでもあるデブリの類は、時折アンバークイーンの近くを通り過ぎて行き、宇宙の海へと漂っていく。

『……………』

だが、この隕石の中に、人の意思を込めた隕石が紛れ込む事もある事にはある。誰もが油断し、気を緩めている時程に、それは起きるのだ。

『……………目標…確認。』

とある隕石群が、他のスペースデブリや隕石に紛れ、アンバークイーンへとゆっくり接近していた。

※

「気分はどうかね？」

「…寂しいものだな、あいつが側に居ないと言うのは。」

「ふふ、随分と彼女も懐かれたものだね。」

ラー・ネイジュの医務室では、Dr. モーリスによる問診が行われており、脈拍や脳波の数値を機械でリアルタイムにモニターしつつ、患者であるカトレア・ペンタスへと問いかけていた。彼は体調の具合について聞いてみたつもりだったものの、彼女からの意外な返答につ

い笑みを溢してしまい、安心したように言葉を返していく。

カトレアの言う“あいつ”とは、毎日見舞いに訪れていたシーナ・ランチエスター少尉の事を指している事は、D r. モーリスは言わずもがな理解していた。つい小一時間前に目を覚ましたばかりだと言うのに、この素直な感情の吐露をさせてしまうシーナ少尉の存在は、やはり今後益々重要になっていくだろうと、D r. モーリスは内心感じていく。これが所謂、ニュータイプの感応波で通じ合えた者同士だと言う事も、より信じてみたくなっていたのだった。

「君の怪我を完全に治療出来る物資も入ってきた事だし、明日には処置を行おうと思う。それまではゆっくり寝ていてくれ。」

敵の総大将とも言える相手に対しても、D r. モーリスの態度は全く変わらない。どんな相手であれ、救える命は救いたいと言う、医師としての使命を全うすべく行動しているのだ。その心遣いが分からない程人間らしさは捨てていないカトレアも、素直に頷いてベッドに横になっている。彼女の顔色も大分良くなってきているので、強化人間の特徴でもある強靱な肉体も相まって、治癒はきつと早いだろうとD r. モーリスは考えていた。

…それは、何とも言えない奇妙な感覚…いや、予感のようなものだった。もつと分かりやすく言うならば、今まで感じた事のないようなプレッシャーの波を、僅かにカトレアは感じ取っていた。何処か上の空のような表情を浮かべ、ベッドに横になっていた彼女は、ふとした瞬間に布団を剥ぎ、包帯だらけの身体を起こしていく。

「お、おい…無理するな…っ！」

そんな彼女の突拍子も無い行動にギョツとしたD r. モーリスは、慌てて彼女の肩を掴みながら制止しようとしてくる。いくら強化人間とは言え、軽症で済んだシーナ少尉と違い、最低限の治療しか受けていない彼女の身体では、無理に動かせば怪我が悪化する恐れすらあるのだ。

そんなD r. モーリスの腕を、彼女はしっかりと握り締め、強い意志を宿した瞳で見つめながら、慌てた様子で告げていく。

「直ぐにここから…ッ、退避しろ……！何が…この場所を狙っている…ッ。」

彼女の言葉を受けて、信じて良いのかDr. モーリスは迷ってしまふ。シーナ少尉に心を開いているとは言え、相手は紛れもなくネオ・ジオンの要人だ。そう簡単に信じてしまつてから、実はこの艦を陥れる策略だと後々気付いても、その時は既に手遅れなのだから。

だが…もう一つの事実として、彼女はシーナ少尉と分かり合えたニュータイプだと言う事。その彼女が警告を発してくる事を無視すればどうなるか、分からない訳ではない。考えが鬩ぎ合っている間も、彼女はDr. モーリスの腕を掴んだまま、ジツと強い眼差しで見つめ続けている。

「…分かった、ブリッジに連絡しよう…！」

Dr. モーリスの選択は、ニュータイプの可能性に賭けたのだつた。

時を同じくして、アンバークイーンの格納庫内で新型の試作モビルスーツ“セレーネ”を確認していたシーナ・ランチエスターも、カトリア同様に奇妙な感覚を覚えていた。

「……っ。」

「…どうかしたか、少尉？」

何処か上の空のように宙を眺める彼女を見て、隣に佇むウォルド・シャウラは首を傾げていた。その視線の先にはセレーネがあるものの、然し違うものを見ているようである。

「……何か、来る……。ウォルドさん、嫌な予感が…！」

とても抽象的な表現に、一瞬彼は困惑の表情を浮かべる。何かが来るとは一体何なのか、嫌な予感とは何なのか、まずはその疑問が頭の中を過つただろう。だが、確認する暇を与えない程、事態は動き出してしまふ。

ドンツ…と、何か当たる音。続けて艦全体が揺れる程の衝撃と共に鳴り響く爆音。あまりの衝撃に身体が宙を舞い、無重力の格納庫内で漂ってしまふ。

「な、何だ…ッ!？」

「攻撃……、敵襲ですウォールドさん……！早くノーマルスーツを！」

嫌な予感が現実として襲い掛かってきた。その事を強く認識した2人は行動を開始していくものの、シーナ・ランチェスターは格納庫から出ようとはせず、迷いなくセレーネのコックピットへ向けて飛んでいく。

「少尉、何を……！」

彼女の行動は分かる。だが、まだ調整も何もされていない試作機だ。いきなり飛び出ていくのは流石に無謀過ぎる。ウォールドは急いで彼女の背を追いかけ、ノーマルスーツも無しにコックピットに乗り込んだ彼女を呼び止めようとしていく。

「緊急事態につき、この機体で出撃します……っ。ウォールドさんは早く退避を……！」

彼女は既にシートベルトを締め、コンソールパネルを起動させ、メインジェネレーターのスイッチを押していた。コックピット内部の造り自体はルミナスガンダムとあまり変わらず、操作系も特段変わった所はないように見える。

然し、幾ら似通っているとは言え、まだ動かした事も実戦経験も無い新型の試作機だ。初期設定もそうだが、機体の制御系の調整も済んでいないだろう。最低限、空間機動の調整くらいはしておかなければ、満足に機体を動かす事すら出来ない可能性もある。だが……そんな事を言った所で、きっと彼女は無茶を押し通して飛び出して行くに違いない。出会った時のような、あの月の海に飛び込んでいった時のように。

「……少尉、君だけに無茶はさせせん。姿勢制御の調整はこちらで行う、君はコックピット周りの調整を急げ……！」

ウォールド・シャウラも覚悟を決め、彼女へ告げた後にコックピットを離れると、直ぐに機体の足元へと降りていき、情報端末をセレーネの脚部にケーブルで接続して、外部から機体調整作業に入っていた。早く退避をして欲しいシーナからすれば、そんな事はせずに逃げてくれと言いたい所ではあるものの、彼の気持ちもまた無碍には出来ないと感じている。

「サイコミュ連動調整…ビームジェネレーター出力上昇確認…武装セーフティロック解除…全周囲モニター起動…パイロット認証、登録…承認クリア…、ツ…：…くそ…！」

手早く、そして正確に、項目を口遊みながら調整作業を進めていく最中にも、正体不明の攻撃は続いていた。また衝撃音と共に爆発が起き、船体が激しく揺れながら、船内には非常事態警報のアラート音が鳴り響いていた。私はつい舌打ちど罵声を漏らしてしまいがら、通信回線コードにアクセスしてチャンネルを開き、直ぐにラー・ネイジュのブリッジへと回線を繋いでいった。

「ラー・ネイジュ、こちらシーナ！状況はっ!？」

突然の通信回線に応えてくれたのは、通信オペレーターのエヴァ・ヒギンズだった。彼女は画面の向こう側で驚いた表情を浮かべ、「シーナ、一体どこから通信して…!？」と、コックピットに乗り込んでいる私に驚愕している発言を漏らしつつも、直ぐに思考を切り替えて状況を説明してくれた。

「現在ラー・ネイジュとアンバークイーンは…複数の所属不明モバイルスーツから攻撃を受けています…！IFFに反応無し、また機体情報も未確認…新型機と思われます…！モバイルスーツ隊にはスクランブルは出してるけど、まだ艦長達と隊長が戻ってなくて…！」

緊迫した現状を前に、彼女の説明も自然と早口で焦りが見られる。それも無理はないだろう、指揮を執る人物達が揃って艦に居ないのだから。

尚の事、やはり私が皆を助けなければいけないと強く感じていくと、画面越しに励ますように彼女へと声をかけていく。

「大丈夫だよ、エヴァ。私がみんなを守るから…！」

力強くハッキリと、画面越しに彼女を見つめてそれだけを言うのと、スイッチを切って通信回線を閉じた。あまりこちらばかりに気を取られ、ブリッジの任務に支障を与える訳にはいかないと言う、私なりの気遣いだった。

コックピット内の調整は完了し、後は機体を出撃させるだけとなるものの、肝心の姿勢制御システムの調整が終わったか分からず、コック

クピットから身を乗り出して下を覗き込む形になりながら、端末を操作しているウォルドへ声を飛ばしていく。

「ウォルドさん、こっちは終わったよ!」

私の呼び方に反応した彼は顔を上げ、同じように声を張り上げて答えてくれる。

「こちらも終わる!格納庫ハッチを開けるから待機しててくれ!」

私は「了解っ!」と返事を返すと、再びコックピットのシートに座り込み、ハッチを閉じて操縦桿を握り締める。セレーネのサブモニターを起動させて格納庫内の様子を隈なくチェックしていくと、程なくして機体から離れていく彼の姿が確認出来た。通路の中に入り、その姿が見えなくなると、格納庫のハッチを彼が開いてくれるのを待ちながら、セレーネの武装についてコンソールパネルを操作しながら確認をしていた。

現在の武装は、右手に握られているハイパー・ビーム・ライフルに、両ファンネルラックと左腕部に収納されたビームサーベル、頭部の60mmバルカン砲と、新たに追加されたバックパックと大腿部のビーム・カノン4門。そしてファンネルラックに装備されているフィン・ファンネルが6基と、多少の違いはあれどルミナスガンダムと基本的には変わらないようだった。私は内心ホッと安心しつつ、後はなるようになるしかないと思い直り、武装を表示していた画面を閉じていく。

「…よろしくね、セレーネ。」

私はルミナスの時のように、操縦桿を握りながら機体へと話しかけていく。勿論返事をしてくれる訳ではないものの、自分の命を託す運命共同体なのだ、戦友のように寄り添う気持ちを持ちながら接したくなる。

程なくして、コックピット内にウォルド・シャウラの声が響く。

『聞こえるか、少尉。今から格納庫ハッチを開く、敵を追い払ってくれ…!くれぐれも無理はしないでくれ、少尉っ。』

「…了解っ。」

ノーマルスーツも無しに、これから宇宙の海に飛び出そうと言うの

だ。勿論無理などするつもりはないものの、最後まで諦めない事も同じように気持ちを固めていき、開放されていくハッチをジツと見据えていく。未だに謎の敵モビルスーツからの攻撃は続いており、ハッチが開いている最中も攻撃がアンバークイーンに着弾し、爆発音と衝撃が機体越しに感じられる。

アンダーソン艦長やエリス副長、ローマン隊長はラー・ネイジユに戻れたのか。アンバークイーンの艦長や乗組員は無事なのか。アナハイムの社長は退避したのだろうか。様々な考えが頭を駆け巡るものの、私は機体を動かして歩みを進めていき、最後にスラスターの駆動チェックを行って発進準備を整えた。

「シーナ・ランチェスター…セレーネ、行きますっ！」

機体を屈ませ、スラスターを全開にしながらアンバークイーンの格納庫を飛び出し、瞬間に戦闘宙域の只中へと突入していく。ほんの僅かな時間の全開推力だったが、これだけで既にルミナス以上の推力を身体で感じていき、ノーマルスーツを着ていないのでGが普段以上に身体を蝕んでしまう。

「ぐっ…うう……目標、捕捉した……ッ！」

激しいGに歯を食い縛りながら耐え、メインモニターに目を凝らし、周囲の索敵を行うと、謎の敵モビルスーツの姿とラー・ネイジユを捉えた。ラー・ネイジユは対空砲の弾幕を展開しているものの、まだアンバークイーンのドッキングアームは解除されておらず、敵からすれば格好の的となっている。対して謎のモビルスーツは、カラーリングは全身黒で統一され、両腕がビーム砲の砲身と一体化している独特の形状をしており、流線形のフォルムはどこかキュベレイを匂わせるような姿をしていた。それも1機や2機ではなく、セレーネのセンサーが捉えているだけでも5機は居る。

「そこ……ッ！」

アンバークイーンへビーム攻撃を加えようとして足が止まった不明機に向け、ハイパー・ビーム・ライフルの銃口の狙いを定め、引き

金を引いた。高出力のビーム攻撃で僅かに反動を感じながら、マゼンタ色のビームが宇宙を駆けると、次の瞬間には不明機の胴体中心に直撃し、真つ二つに裂くようにして貫いていった。程なくして敵機が爆散すると、残る4機の不明機がラー・ネイジユやアンバークイーンへの攻撃の手を止め、こちらを捕捉してくる。

「そうだ……つちに来い……！」

注意をこちらに向けさせる事が出来たなら、後は離れて戦うのみ。私は敵の集団に背中を見せる形になりながら、スラスターを再び全開にして反対方向へと飛翔していく。その姿を見て、不明機達も続々とスラスターを全開にし、セレーネ追撃に向かって来た。

推力はこちらの方が高いらしく、不明機達はセレーネに追いつく事が出来ずに、足止めをしようと思図しているのか腕部ビーム砲をひたすら撃ち込んでくる。だが、そんな攻撃は当たる訳がなく、背後を気にしながら私は一定の距離を保ちつつ、敵機をアンバークイーンから引き離していく。

「好き勝手……させない……ッ！」

ある程度引き離れた後に、いよいよ反撃する時が来た。デブリ帯に敢えて突っ込み、敵を誘い込んだ事で、多数の敵を相手に立ち回りやすい状況を作り出せたのである。まだ姿勢制御の限界がどの程度なのか、駆動系の動きが自身のイメージ通りなのか、その辺りが手探り状態ではあるものの、今はやるしかない。

モビルスーツ以上のサイズのデブリに速度を落とさずに突っ込んで行くと、激突する直前に姿勢を変え、スラスターを逆噴射させて勢いのある程度殺し、セレーネはデブリを踏み台にするように両足で蹴り飛ばして一気にスラスターを全開にしていく。こちらを追っていた不明機達に見れば、セレーネがデブリを利用して急接近して来たので、咄嗟の事に対応する事は難しかっただろう。それを証明するように、すれ違い様にセレーネはビームサーベルを振り抜き、凄まじい勢いで敵機の胴体を両断していった。

「っ……、次……！」

なんだろう、この違和感……手応えの無さは。先程ビームライフルで

撃ち落とした時もそうだったが、今までのモバイルスーツ戦とは何か感覚的に違うと、私の直感が囁いている。

だが、今は降り掛かる火の粉を払うのが先だ。再びデブリの中に紛れ込んで行き、敵機の行動を阻害しつつ狭めていくと、再びモバイルスーツを覆う程の大きさのデブリに身を隠し、密かにビームライフルを構えていく。モニターには当然デブリの姿しか映っておらず、辛うじて左右の端が見える程度だが、サイコミュはハッキリと敵の姿を捉え続けている。

「墜ちろッー！」

ハイパー・ビームライフルを照準補正無しに構え、迷う事なく引き金を引くと、デブリを貫通しながらビームが敵機へと迫り、想定外の攻撃に回避する暇もなく胴体を貫かれていった。

残るは2機。撃破した3機目が爆散していく姿を尻目に、私は更に足元のペダルを踏み込み、デブリの中を意識が保つギリギリの所で回避しながら突き進んで行く。ジグザグな軌道を描く事で、敵機のビーム攻撃を難なく避けれる事が出来ているものの、その分身体にかかるGの負荷が激しい。

(まだ、まだまだ……ッ……！)

残った2機は撤退するかと思いきや、それまでと違って連携を見せながら動きを変えてきた。1機は上昇していき、残る1機は牽制するようにビーム砲を撃ち続けてきている。この攻撃パターンは厄介だと感じながらも、私の狙いは援護射撃を加えてきている機体に定め、一直線に加速して肉薄していった。

照準を定められた敵機は、今度はスラスターを逆噴射しながら距離を取ろうとしていき、同時に迫り来るこちらに腕部ビーム砲で攻撃し続けて来る。周囲のデブリが密集しているので回避するにもスペースが足りず、敵の攻撃をほぼ真正面で受け止めなければならない状況だ。

「この……ッー！」

私は臆する事なく、新兵装のシールドを構えながら、逃げ撃ちをしってくる敵機へ一直線に距離を詰めていく。次々に撃ち込まれるビー

ム砲は、セレーネのシールドに直撃する直前、内部に内蔵されたI・フィールドエネルギーの働きによりビームを無力化し、消し飛ばしていった。それでも敵機は攻撃の手を止めず、ビーム砲を撃ち続けてくる。

距離にして近接格闘の間合いまで詰めれば、ライフルを背面腰部にマウントし、シールドでビーム砲を防御しながらビームサーベルを構えた。

「もらったよ…ッ!!」

こちらがビームサーベルを振り下ろす直前、敵機の左腕からビームの粒子がサーベル状に展開され、セレーネの攻撃に合わせるようにサーベル同士がぶつかり合い、鏢迫り合いの状態となっていく。敵機の見た目からして接近戦は不得意だと思っていたものの、先入観は改めないといけないと感じ、私は舌打ちをしながら敵機を蹴り飛ばそうとサイコフレームに思考を飛ばそうとしていく。

その時、サイコミュが違う方向から来る敵意を察知した。先程上昇していた残る1機が、同じようにビームサーベルを構え、鏢迫り合い状態で身動きが取れないセレーネに向けて頭上から急接近して来ていたのだ。

「くそっ…、舐めんな…ッ!」

目の前、そして頭上。同時に相手をしなければいけない状況を前にして、私は罵声を飛ばしながら諦めはせず、新たな武装を構えていく。バックパックに追加装備されたビーム・カノン砲、そして大腿部のビーム・カノンだ。バックパックのカノン砲2門が頭上から迫り来る敵機へ照準を定め、大腿部のビーム・カノン2門は鏢迫り合い状態のまま目の前の敵機の胴体に砲身を向けた。

「これで、終わりだッ!!」

4つの砲門が同時に光を放ち、マゼンタ色のビームが撃ち出されると、それぞれの敵機にビームが命中していき、頭上と目の前で激しく爆散していった。爆発の衝撃に多少機体が押され、破片が装甲を叩くものの、セレーネ本体は殆ど損傷を受けずに迎撃を完遂させたのである。

静寂がデブリの海を包み込み、装甲の隙間から漏れ出るサイコフレームの光も徐々に光度が落ち着いてくると、一先ずは母艦と合流する為アンバークイーンへ向けて機体を進めていった。

「……何だったんだろう……、あの機体……。っ……。身体が痛いな……。」

アンバークイーンの現在地は捕捉出来ているので、コンソールパネル上でオートパイロットモードを作動させ、方位や座標を入力して操縦桿から手を離していく。機体は自動でスラスターを噴射しながらゆっくりと進んでいき、あとは到着するまで任せつきりとなる。

物思いに耽ろうかとした際、戦闘中のアドレナリンが切れた影響なのか、今更になって身体のうちこちが痛み出している事に気付く。想像以上に無理をして戦闘機動を繰り返したせいか、Gで身体が悲鳴を上げているようだった。先程まで操縦桿を握っていた手も微かに震えている。改めてこのセレーネという機体のスペックが、生身の人間の限界を考慮しない性能を秘めているという事実には恐怖を抱きつつも、同時にパイロットスーツの重要性を再認識していく。

『おい、少尉！無事かっ!』

すると、帰還コースに入りながら飛行を続けていた私の前に、見慣れたモビルスーツ達が迫って来る。ラー・ネイジユ艦載機であるプロトタイプ・リゼルと、ジェガンだった。通信で呼びかけてくれたのは、プロトタイプ・リゼルに搭乗しているラプター隊の隊員だ。

「はい、何とか……。そっちの被害状況は？」

『良かった……。少尉が敵を引き離してくれたお陰で、ラー・ネイジユもアンバークイーンも軽微な損傷で済んだ。みんな無事だぞ。』

その言葉に、私は心底安堵して深く息を吐く。良かった、本当に。気掛かりな点は色々あるものの、先ずは目の前の命が救えた事を良しとしよう。それ以上に、私は休息を取りたかった。

「……良かった……。」

オートパイロットに身を委ね、ラー・ネイジユへと着艦するまでの僅かな間、私は目を閉じながらゆっくりと息遣いを整えていくのだった。

※

時間は少し遡り、所属不明のモビルスーツと試作機セレーネが戦闘を繰り返している様子を、遠巻きに見物している人物が居た。

「：社長、ランチの進路をフォン・ブラウンのスペースドックに固定しましたが：このまま留まって居ては危険です。」

「まあ待ちたまえよ、ユアン・リイ君。寧ろこちらから動き出せば標的になるかも知れん、今はシーナ少尉に任せよう。」

その人物は、アナハイム・エレクトロニクスの社長だった。秘書であるユアン・リイと名乗る女性と共に、アンバークイーンの非常用ハッチから脱出ランチに乗り込み、月の方角に向けて密かに発進していたのである。

だが、社長はランチの動きを止めさせ、離れたデブリ帯に敵機を誘き寄せたセレーネの戦闘を、食い入るように船内モニターで眺めていた。下手をすれば流れ弾が当たるとも限らない場所で動きを止めるのは、常識的に考えれば自殺行為であり、その事をユアンが社長に告げても、社長は動こうとはしなかった。

「流石はシーナ少尉だ、あのじやじや馬を乗りこなすとは：。彼女の戦闘データを組み込んだから当然と言えば当然か：。」

秘書であるユアン・リイは気付いていた。普段は夢の実現に向けて邁進しながらも、常に心に余裕を持って笑顔を絶やさない社長が、今は笑みが消えて険しい眼差しになっている事に。ピースミーティアを巡る戦闘に関しても、ルミナスガンダムとヤークト・キュベレイの戦闘結果を伝えても、どこか気味の悪い笑みを浮かべていた、あの社長が：だ。

その理由は、社長の計画を知っている彼女にしてみれば、ある程度推して知る事は出来る。セレーネが交戦している、あの謎のモビルスーツだろう。

「：戦闘、終了した模様です。」

それから程なくして、爆発の光は収まり、辺りを静寂が包み込んだ。

シーナ少尉の駆るセレーネは、5機の所属不明モビルスーツを相手にほぼ完璧に立ち回って見せて、こちら側への被害を最小限に食い止めた。その事を社長に報告しても、彼の表情は変わらずに険しく、笑顔を見せる事はない。

「ふむ……。ランチを発進させてくれ。」

社長の言葉に小さく頷き、秘書であるユアン・リイはランチの操縦席へと向かい、操縦士にランチを出すように伝えた。秘書が去り、1人となった空間でシートに座りながら、アナハイムの社長はセレーネが戦闘を行ったデブリ帯を窓越しに眺め、思案に耽る。

(…ギムレット・クルスめ…。いよいよ自分の野心を隠し切れなくなってきたか。)

証拠は無い。だが、この襲撃が誰の仕業によるものか、彼には確信があつた。その裏付けを取る為にも、シーナ少尉始めラー・ネイジユのクルー達には、今一度奮起してもらうしかない。

人々の心を増幅し、星をも動かす力を秘めた…。あの奇跡をもう一度。

「…やれやれだね。」

新たなる火種は、着実に地球圏に広がりを見せ始めていた……。

第10話 『世界の歪み』

ラグランジュポイント3。

地球とルナツー、そしてサイド7のコロニー群が取り囲む宙域であり、ピースミーティア攻防戦における戦場ともなった場所である。ここに、1隻の艦が周囲を警戒しつつ、静かに航行を続けていた。

その艦は、小惑星イサベル所属のネオ・ジオン艦艇である、ムサカ級巡洋艦『バルバロイ』。悪名高きリベリオ・ビアンキ率いる、イサベルの中でも精鋭が揃う艦だ。通常のムサカ級と違い、彼らの母艦であるバルバロイは、高速巡航に長けた長距離ブースターに加えて、瞬間的な回避を可能にしたロケットブースターも組み込んでおり、強襲と即時離脱を必須とするリベリオ隊に合わせ込んだフルチューンの戦闘艦に仕上げられている。また、カラーリングも黒と紫に塗り替えてあり、その毒々しい色合いは、見る者に恐怖を与える事だろう。

「リベリオ隊長、間も無く予定ポイントです！」

ブリッジクルーの1人が、艦長席に向けて報告を飛ばす。彼らが帯びた任務の地点は、もう目と鼻の先である。報告を受けたリベリオ・ビアンキは、艦長席にゆつたりと座りながら、ニタニタとした笑みを浮かべて頷いていく。

「んふふ…予定時刻よりちよーっと早かったかしら…？獲物が来るまで息を潜めて待機よ♡」

「了解っ！機関停止！」

リベリオの言葉を直ぐに理解して解釈をすると、全員テキパキと自分の仕事を行っていき、機関が停止して艦全体が待機状態へと移行した。これでセンサーには感知されにくくなり、デブリにも紛れているので肉眼で見えされる心配も少ない。何しろこのカラーリングだ、宇宙の闇に溶け込んでいると言っても過言ではないだろう。

「しかし隊長、あの噂は本当ですかね？本当はカトレア閣下が生きてるとか何とか…。」

待機状態となり、副長である男が話しかけてくる。実しやかに囁か

れる、イサベルに広がる噂話の1つだ。勿論その噂はリベリオも耳にしており、実際に生きているのか死んでいるのか、確証は得られていない。

「…んふふ…、そんなのどつちでもいいのよ…？戦って戦って稼いで稼いで、たあくさん殺せるなら…誰が上に立とうが関係ないじゃない♡」

だが、リベリオの答えは単純明快だった。カトレア・ペントスは確かに鬱陶しい存在ではあったものの、今となっては生きていようが死んでいようが、どちらでもいいのである。手綱を握る主がカトレアからギムレットに変わった事により、間違いなく戦いは広がりを見せるのだから、その分だけ自分達の戦争欲求も満たされて幸せだと、リベリオは考えていた。

そんな彼の戦争に狂った思想に惹かれ、集った仲間がリベリオ部隊である。戦争犯罪を犯して投獄されていた元受刑者や、金にがめつい詐欺集団、戦争こそ生きる場所だと思いつく戦争ジャンキー達など、経歴を辿れば碌でもない隊員達の集まりであるが、そんな彼らを引張るカリスマ性がリベリオにはあった。

「そりやそうだ！俺たちは俺たちの仕事をしましようぜー！」

「そんなでもって、大金稼いで豪遊三昧だ！」

リベリオ隊の士気高揚はとても簡単だ。戦争と金を並べれば、勝手にこうして仲間内で盛り上がっていくのである。知能指数は低いものの、誰もが精鋭と言えただけの実力を兼ね備えており、扱い方を間違えなければ味方として頼もしい戦力となる。

「その意気よ、仕事の時間まで交代で休んでなさい♡」

リベリオの言葉に、ブリッジクルー達は笑みを浮かべながら頷いていく。その姿を見届けると、リベリオは満足そうに笑みを見せ、艦長席を離れて通路へと出て行った。向かう先はモビルスーツデッキ：自身の愛機であるギラドーガ・カスタムに乗り込む為に。

「んふふん…んふふん…♡」

モビルスーツデッキへと向かう最中、彼は陽気に鼻歌を口遊む。出撃前の彼なりの儀式であり、戦闘に意識が集中し過ぎて余裕を欠いて

しまう事がないようにする為の行為である。

余裕が無くなつた際のリベリオは、正に残虐非道を体現したような行動に出してしまう。それは敵味方を問わず、目の前に映るもの全てを破壊する事しか考えられなくなる、正に戦闘狂そのものと化するのだ。故にイサベル内でも彼を忌避する空気が出来上がっており、あのカトレア・ペンタスも軽蔑していた理由に繋がる。

(戦って戦って…殺して殺して…たーくさん稼ぐのよ。みんなを幸せにする為だね…)

そんな彼が仲間から慕われるのは、何よりも部下の事を考え、彼らがこれからの人生を過ごしていけるように支えようという姿勢だ。ただでさえ爪弾きにされ、居場所も行き場もないゴロツキ集団なのだ、リベリオ部隊という場所が無くなれば生きていく事もままならないただろう。そんな彼らの人生を守る為に、手段はどうあれリベリオは戦っている。

通路を抜け、幾つかの隔壁を超えた先に、モビルスーツデッキに面する扉が構えていた。扉の横に設置されているスイッチを操作し、その身をデッキ内へと進めていく。

「おっ、隊長！もう出撃ですかい？」

真つ先に話しかけて来たのは、丁度愛機を整備していたメカニックマンだった。他にもパイロット達があちこちに点在しており、皆出撃準備や機体の調整を行っている。リベリオは笑みを浮かべながら首を横に振り、メカニックマンからの問いかけに答えていく。

「まだよ、でももう少し…♡ギラドローガの調整、どうかしら？」

「いつでも行けますぜ！」

「そう、ありがとう♡」

リベリオはメカニックマンにウインクを送りながら、コックピットへと上がっていく。ブリッジは副長に任せて来たので、後は報告を受けてから出撃するのみである。

「さて、と…。今日はあんまり殺せないのが残念ねえ……」

コックピットに乗り込み、シートに座ってコンソールパネルを立ち上げると、リベリオは改めてギムレットから与えられた任務の内容を

確認していく。

目標は、当該輸送船の捕獲。そして、輸送船に乗船している地球連邦政府の要人達を捕虜にする事だ。この輸送船は無傷で手に入れる必要がある、改めて隊員達には厳命しなければならぬだろう。加えて、輸送船の護衛にクラップ級が2隻随伴していると偵察情報が寄せられているので、この護衛艦隊は殲滅しなければいけない。普段なら皆殺しにしている所だが、殺しと捕獲を同時に行わなければいけない分、普段以上に任務の難易度は高いと言える。リベリオは任務内容を整理しながら、どこか残念そうに言葉を吐いていく。

だが、次の瞬間にはニンマリとした笑みを浮かべ、思考を切り替えていった。この仕事をやり遂げれば、カトレアの下で働いている時以上の金が部隊に入ってくるのだから。それ程、ギムレット・クルスの羽振りの良さは、リベリオ隊にとってはとても魅力的に映る。

「ま、ロンド・ベルの邪魔が来る前に終わらせないといけないわね……」

コンソールパネルに再び触れ、任務内容を表示していた画面を閉じていく。そしてゆっくりと息を吐き、彼は目を閉じた。

(まだまだよ……ここからのし上がって行くんだから……)

彼の理想とする未来には、連邦もジオンも最早重要ではなくなっていた。

※

人間の身体とは何とも脆く、壊れやすいものだ。

「痛ッ！痛いって、ドクター!!」

「我儘を言うんじゃない、少尉。これでも十分優しく巻いているぞ?」

人間が宇宙で暮らすようになって1世紀が過ぎようと言うのに、肉体の脆弱性はそのまま、ちっとも進歩していない。ニュータイプは人の革新と言うが、精神的よりも肉体的に革新して欲しいと、シーナ・ランチエスターは今この瞬間思っていた。

「ほら、処置はこれで終わりだ。2、3日は安静にしているように。」

「…了解。」

全身至る所を包帯で巻かれ、素肌が覗いているのは顔のみと言う状態の私は、ラー・ネイジユの医務室のベッドに縛り付けられている。たった今手当が終わり、モビルスーツに搭乗する事は勿論、日常生活すらも制約を課され、絶対安静をDr. モーリスから言い渡されてしまった。

外傷という外傷は無いものの、内臓へのダメージが大きかった私は、セレーネのコックピットから下ろされた後に、真っ直ぐ医務室に運び込まれたのだった。隣のベッドにはカトレア・ペンタスが居り、同じように横になりながらこちらの様子を眺めている。やれやれ：と言わんばかりの表情を見るに、きつと呆れているに違いない。

「全く、無茶はするなどあれだけ…」

「はいはい、もう分かったから…。いいからセレーネの調整、頼みましたよ。」

「それは勿論だ、少尉。君もゆっくり休んでいてくれ：後はよろしく頼みます、ドクター。」

呆れていた人物はもう1人居る。ガンダム開発チームの主任であり、私の上司であるウォルド・シャウラだ。彼の小言を半ば聞き流しながら、医務室から出ていく彼の後ろ姿を見送る。

「…ふふ、まるで父と子だな。」

声が聞こえたのは、隣のベッドから。カトレア・ペンタスがクスクスと愉快そうに笑みを溢しながら、私とウォルドの関係性を揶揄してきたのだ。揶揄っているのは分かるものの、私は怒りよりも驚きの感情を抱きながら目を丸くしてしまう。

「…：…なんだ、その顔は？」

私の顔を見て、カトレアは眉を顰めながら首を傾げている。自分の言った言葉に対して意外な反応を示されたので、疑問がありありと浮かんでいるのが分かりやすい。今度は私がクスツと笑みを溢してしまいがち、「ごめんごめん」と前置きをして、自分の感じた正直な気持ちを彼女へ伝えていく。

「いやさ…まさかカトレアがそんな事言ってくるなんて思ってたなく

て。ふふっ…。」

僅かだが、カトレアの人間らしい一面を知れたのかもしれない。私の答えを聞くと、彼女は「…私だって人の子だ。」と、まるで私の思考を読み取っているかのような言葉を返してくる。無表情に見えても、確かに彼女にも感情があるのだと感じる事が出来て、私は小さな幸せを胸に仕舞い込んでいく。

「…ありがとね、カトレア。あんたがブリッジに危機を知らせてくれなかつたら、危なかつたと思う。」

隣同士、そして同じ怪我人同士、ある意味仲間意識というのが芽生えてくると、私は素直な感情の発露として彼女へ感謝の言葉を送っていく。ラー・ネイジユに帰還してから知った事だが、被害を最小限に抑える事が出来たのは、彼女がいち早く危険を察知してブリッジに伝えてくれた事が大きかつたらしい。そのお陰で対空戦闘を素早く展開する事が出来て、モビルスーツ隊のスクランブルも迅速に行われたようだ。

自身の安全を優先しての行動かも知れないが、それでもこの艦と仲間を救ってくれた事実は変わらない為、彼女へと顔を向けながら柔らかな眼差しで見つめ、精一杯の感謝を伝えていく。そんな私の言葉を受けて、彼女は目を丸くした後に、ゆっくりと微笑を浮かべながら口を開いた。

「…いいや、実際に皆を救ったのはお前だ、シーナ・ランチェスター。……ありがとう。」

そのありがとのは、彼女の心からの感謝だろう。ニュータイプでなくとも、その柔らかな表情と声色で察する事が出来た。また小さな幸せが胸にじんわりと染み渡っていき、私も微笑を溢していく。

「…君達を見ていると、いずれは人類皆がニュータイプになって…戦争なんか無くなる世界が来るんだと信じたくなるよ。」

私達のやり取りを遠巻きに見守っていたDr. モーリスが、椅子に座りながら話しかけて来てくれた。1人はネオ・ジオンを束ねる女帝、1人は数多の軍人を治療してきた軍医、1人は才能を見出された新米パイロットと、立場が異なる者達がこの場に会しているものの、

その気持ちは同じだった。D r・モーリスの言うように、戦争をこの世から無くしたい…それだけなのだ。

手段は間違つていても、カトレアは自分が地球圏を治める事で、戦争が無い世界を作ろうとした。D r・モーリスは軍医という立場から、1人でも多くの兵士が生きれるように戦争を無くしたいと願っている。私はと言うと…正直2人ほど崇高な考えも無ければ、組織を動かす程の力を持つている訳でもないものの、一兵士として戦争が無い世界にしたいと日々思っている。立場の違いを超え、お互いがお互いを理解し合える世界…ニュータイプの感応波で通じ合える世界になれば、D r・モーリスの言うようにきつと戦争は無くなるだろう。

「…一緒に作ろう、カトレア。あんたと私でさ。」

根拠も確信もない、只の夢物語を語るに過ぎない言葉。人類皆ニュータイプにするなんて、現実的にどうすればいいのか考えもつかない。それでも、D r・モーリスの言葉を頭から否定しては、その先にある未来は諦観と絶望なのは私にも分かる。

だったら、私達がその未来を創る為に一緒に歩んで行こう。こうしてお互いを知り、理解し合えた者同士なのだから。私の気持ちを乗せた短い言葉に対して、彼女はしっかりと頷きながら言葉を返してくれた。

「ああ…そうだな…。人の未来は、人の可能性が創り出すものだ…。」
彼女の穏やかな表情を横目で眺めながら、これがきつとカトレアの本物の姿なんだろうと、私はぼんやりと思っていた。冷酷で厳格なネオ・ジオンの指導者ではなく、生身の人間としての彼女を、私は今日にしている。人格さえも書き換えられた強化人間手術と訓練の過去を垣間見た私にしてみれば、カトレアには人としての人生と幸せを手にして欲しいと願わずにはいられなかった。

※

「整備長、何か分かったかね？」

「おや、艦長…。それがどうもキナ臭くてなあ…。」

追加の弾薬補充と外装修復の為に、ラー・ネイジユは予定日数を超えてアンバークイーンに接舷したままとなっている。勿論、ただ補給と修理を受けているだけではなく、ラー・ネイジユの艦内では新たな懸案事項に対しての調査が進められていた。

モビルスーツデッキに転がっている、黒い残骸の数々。調査対象の残骸であるそれは、シーナ・ランチェスターが交戦し、撃破した所属不明モビルスーツの残骸だ。原型を留めているものは少ないものの、装甲素材やブラックボックスが解析出来れば、どの勢力の機体か判明するかも知れない。調査は艦長命令で整備長に任せていたものの、自分の目で確かめようと、こうしてアンダーソン艦長はモビルスーツデッキに来たという訳である。

「キナ臭い……とは？」

アンダーソン艦長は残骸の前に降り立ち、整備長の言葉に興味深そうに反応を示していく。対する整備長は後頭部を掻きながら、バツの悪そうな表情を浮かべて口を開いていった。

「生き残っていたブラックボックスを解析してみようと思ったんですがね……一定の損傷を受けるとログを全消去するプログラムが組み込まれていたようで。こんなプログラム、見た事ないですぜ。」

「……ふむ……徹底した機密保持……。通常は確かに組み入れないな。」

整備長の言葉を聞いて、アンダーソン艦長は顎に手をやりながら思考を巡らせていく。通常は戦闘データを残し、後の作戦や機体開発に活かすのが常識であるが、それを真っ向から否定するプログラムを組み込んでいるという事は、余程このモビルスーツの情報が外部に漏れては不味い事情があるのだろう。

ブラックボックスから何も情報が取れないと分かれば、後は装甲に用いられている素材についてだ。アンダーソン艦長は整備長に質問を投げかけていく。

「整備長、装甲素材についてはどうかね？」

「それは判明してるが……ガンダリウム合金製さ。」

ある程度予測出来たとは言え、素材名を聞けば特に珍しいものでも未知の物質でもなく、この時代のモビルスーツに使われている素材

だった。アンダーソン艦長は小さく息を吐き、そして頷いていく。

「つまりは、どの工廠でも製造は可能…という事か…。」

悩ましい問題だった。

仮にネオ・ジオンが製造したモビルスーツだとすると、捕虜として収容しているカトレア・ペンタス一派のイサベル軍と、行方不明となっているシャア・アズナブル一派のネオ・ジオン軍の2つが少なくとも存在しており、場合によっては両方を相手にしなければならなくなる可能性が出てくる。

一方で、連邦軍の秘密裏に開発したモビルスーツだとすると、この状況は所謂同士討ちを行っている事になってしまう。加えて、このタイミングでラー・ネイジユを狙って奇襲して来たとするならば、まだ報告をしていないカトレア・ペンタスの存在が外部に漏洩し、抹殺する為に送り込まれた掃討部隊の特務機である可能性もある。

どちらにせよ、今はまだ情報が不足していた。

「…艦長、まだ続きがあるんですがね…」

難しい顔をして思案に耽る姿を目にしながら、まだ報告すべき事項が残っているようで、整備長は神妙な面持ちでアンダーソン艦長へと言葉を漏らしていく。その言葉を聞いてゆっくりと視線を整備長へと戻していく、アンダーソン艦長は彼の話に耳を傾けていった。

「…この機体、コックピットが無いんですよ。」

「…何だと?」

アンダーソン艦長の目が大きく開き、険しい表情を一層強めていく。

「正確に言うなら、人が乗れるスペースが無い…って言うのが正しいですかね。コックピットブロックらしい残骸はありましたが、パイロットが乗り込めるだけの広さは無いですぜ、ありゃ。」

「…無人で稼働し、人のような意思を持った戦闘を行えるモビルスーツ…。そんな事が可能なのか…?」

「現状、そう考えるしかないでしょう。少なくとも…少尉の戦闘機動に肉薄出来る無人機なんて、うちじゃ作れないですよ、艦長。」

問題は、更なる問題と謎を起こして深まっていき、現場だけの判断

でどうにかなるレベルを超えていると、アンダーソン艦長は考えていた。それは技術屋である整備長の立場からも同様のようで、「アナハイムの連中に聞いてみますかい？」と艦長へ問いかけてくる。

「…アナハイムには、ネオ・ジオンと関わりが深い部署もあると聞く。彼らが何処まで知っているか分からないが…頼めるかな？」

アンダーソン艦長の頼みを受けて、整備長はしつかりと頷きながら「了解です、艦長。」と答えてくれた。メカニック方面の調査は整備長に一任する事にして、アンダーソン艦長としては上官に現状を報告しようと考えており、整備長の肩を軽く叩きながらその場から離れていった。デツキの床を蹴って身体を浮かし、艦内通路の出入り口に向けて進んでいく。

(…或いは、カトレア・ペンタスなら何か…。)

ふとアンダーソン艦長の頭を過ったのは、イサベルの指導者であるカトレア・ペンタスの存在。シーナ少尉が視たと言う彼女の過去を信じる前提となるが、カトレア・ペンタスは強化人間手術を受ける以前は、天才的な頭脳でモビルスーツ開発に携わり、ジオンの兵器開発工場で働いていたと聞き及んでいる。もしかすると、彼女があのもビルスーツを設計、或いは開発に携わっていたとしても、何ら不思議ではないのだ。

機体のブラックボックスが全て消去されていても、カトレア・ペンタスが生き残っている限り、モビルスーツの情報は外部に流出する危険がある。それを防ぐ為に、何らかの手段を用いて場所を特定し、このラー・ネイジュとアンバークイーンを襲撃して来たと考えれば…。

「…決めつけるのは良くないな。」

そこまで思考を巡らせた所で、その考えを一旦頭の隅に置き、アンダーソン艦長はフツ…と笑みを浮かべながら言葉を漏らす。先入観や決めつけほど危険なものはないと言うのが、アンダーソン艦長の持論だ。あくまでも可能性の1つに過ぎないので、治療の進行度合いを見ながら尋問を行おうと思ひ、通信室へと向かって行った。

※

「定時報告、レーダー反応無し。有視界領域にも異常無し。」

『了解、指定時間になったら代わりの偵察機を送る。それまで現状のまま距離を保ち、警戒を続けよ。』

ラグランジュポイント3の宙域で、3隻の船が一定の距離を保ちながら航行していた。1隻は地球連邦政府の代表団を乗せた専用輸送船であり、前後を挟むようにルナツーから派遣されたクラップ級巡洋艦が護衛をしている。前衛を務める艦艇と、後衛それぞれが偵察用モビルスーツを発進させており、周辺を索敵しつつ地球へ向けて進み続けている。

ピースミーティアの砕け散った残骸がスペースデブリとなっており、時折船団の行手を阻むものの、その都度偵察機に排除させて航路を確保しながら航行を続けていった。

「ショック…、よくもまあ衛星を粉々に破壊出来たもんだな…。」

前衛を務めるクラップ級より発艦した偵察機のジェガンは、辺りを警戒しつつデブリの海をモニターに捉え、パイロットが独り言をコックピット内で呟いていく。

この衛星…ピースミーティアを破壊したのはロンド・ベルであり、ルナツーに駐屯する連邦宇宙軍の正規軍艦隊は作戦に参加しなかった。通常であれば目と鼻の先にある危機に対処しなければならなかったものの、出撃は上層部からの許可が最後まで下りず、現場の兵士達は複雑な思いを抱きながら戦況をただ眺めている事しか出来なかったのである。隕石落しと言えば1年前のアクシズ・ショックを連想してしまうだけに、2度に渡って地球への落下阻止をやったロンド・ベルには、素直に尊敬の念と称賛を送りたいとジェガンのパイロットは思っていた。

「俺もいつかロンド・ベルに転属願いを出そうかな…。」

現場の兵士達の間でも、日に日にロンド・ベルの存在感は増してきた。このパイロットのように、血気盛んで若いパイロットは、皆実戦経験が豊富な精鋭揃いのロンド・ベルに転属し、地球と宇宙の平

和の為に力を尽くしたいと憧れを抱いているのだ。その一方では、現行の体制に満足して苦勞を嫌がるパイロットも多く居り、そういう兵士達は正規軍から出たがらない。ある意味では多様性とも言える連邦軍内部は、規模が大きいが故にそうした意見や意識の違いが生まれ易く、然し規模が大きいが故に軍としての組織を維持出来ているのだ。

『お前もロンド・ベルに憧れてるクチか？ケルベット。』

独り言はどうやら同僚に聞かれていたらしい。機体間の通信回線が開き、同じく艦隊前方で偵察に出ているジェガンのパイロットから無線が飛んできた。ケルベットと呼ばれたパイロットは、声の主へと返事をしていく。

「そりやそうさ、お前はどんなんだよ？ロイクス。」

『俺か？俺はルナツーでのんびり過ごすさ。ロンド・ベルに居たら命が幾つあっても足りな——…………』

「…おい、ロイクス？」

突然通信が途切れ、ヘルメット内のスピーカーからはノイズ音が響いてきた。直ぐにモニターを確認するものの、爆発の光は無い。僚機が墜とされた訳ではないとすれば、この通信障害の原因は一つしか考えられない。

「…、ミノフスキー粒子が散布されている…!？」

母艦から戦闘状態に入る報告は受けておらず、艦隊方面である後方へ振り返ってみても、爆発の光は無い。つまり、自身が居るこの地点周辺からミノフスキー粒子が散布されている事を示唆しており、敵が潜んでいる可能性が非常に高い。

母艦へ連絡しようと、焦りから通信回線を開いて報告を飛ばそうとする。

「こちら064、ケルベット！敵が近くに潜んでいる、直ぐに迎撃準備を…!」

だが、ミノフスキー粒子は既に戦闘濃度まで散布されており、通信が母艦に繋がることは無かった。その時、機体前方のデブリから何かが現れたのが視界の端に映る。

「あ、ッ——」

ケルベツトは操縦桿を操作してジエガンのビームライフルを構えようとするものの、気付くのが遅かった。現れた何かからビーム砲が放たれ、ジエガンの胴体に命中すると、コックピットを融解しながらビームが貫通していった。

身体がビームの粒子に灼かれて蒸発していく最中、ケルベツトが散り際に思った事は、ロンド・ベルの隊員として戦場を駆ける自身の未来像と、それを実現出来ずに死んでしまう事への無念。

(…皆…悪い…、逃げ——)

意識が途絶えると同時に、ジエガンはデブリ帯の只中で爆散していった…。

『さあ、アンタ達…行くわよオ♡』

『世界の歪み』（2）

『苦勞、アンダーソン艦長。』

ラー・ネイジユの通信室に入ったアンダーソン艦長は、操作パネルのモニター越しにある人物と通信回線でやり取りを行っていた。

「はっ、こちらこそ時間を作って頂きありがとうございます…：ブライト司令。」

その人物は、ロンド・ベルを統括する艦隊司令官であり、旗艦ラー・カイラムの艦長でもあるブライト・ノア大佐だ。階級は同じく大佐であり、年齢はアンダーソン艦長の方が上であるが、艦隊司令官のブライトは上官にあたる為、アンダーソン艦長は敬う言葉遣いを徹底している。

実際、実務面や戦術面、人心掌握術に至るまで、ブライト・ノアという人物は尊敬に値すると、アンダーソン艦長は常々思っていた。流石はニュータイプ部隊の指揮官を歴任してきただけの事はあると、ブライト司令には頭が上がらないのである。

『それで、火急の要件とは何だ？』

ブライト司令は、世間話に花を咲かせる訳でもなく、単刀直入にこちらが要請した話について訊ねてきた。アンダーソン艦長としても、今は直ぐに話を聞いてくれる方が有難いので、小さく頷いた後に話を切り出していく。

「…これはまだ参謀本部に報告していない事なのですが、カトレア・ペントスを捕虜として本艦に収容、治療にあたっているのです。」

『…何だと、それは本当か？』

アンダーソン艦長の報告を受けて、ブライト司令の表情に驚きの色がありありと浮かんでいくのが見て取れる。それもそうだろう、生死不明とされているネオ・ジオンの最重要人物の1人を捕虜にしているのだから。アンダーソン艦長は頷きながら、言葉を続けていく。

「…これは私の勝手な考えになりますが、今参謀本部に彼女を移送するのは危険と判断し、本艦で身柄を拘束したいと考えています。」

その言葉と同時に、アンダーソン艦長はパネルを操作し、ブライト司令宛に秘密暗号データを送信していった。直ぐにデータを確認したブライト司令は、じつくりと内容に目を通していき、険しい表情を浮かべて小さく息を吐いている。

送信した秘密暗号データの中身は、アンバークイーンで補給中に受けた一連の襲撃についてと、シーナ少尉が視た内容を纏めたカトレア・ペンタス関連の事について。そして、連邦軍内やアナハイム社内にも敵が居る可能性があると言を言を加えたデータだ。

「……覧頂いた通りです、司令。」

ブライト司令は暫しの間、データを眺めながら熟考していく。このデータをブライト司令にだけ開示したのも、上官である以上に彼が外部に漏らすような人物でないと信用している事と、ニュータイプ部隊の艦長を歴任してきた経験から適切なアドバイスが貰えると考えての事だった。

そして、アンダーソン艦長が望んでいたものは、時を置かずにブライト司令から言い渡される。

『了解した、アンダーソン艦長。こちらでも出来る限りの調査はしておく、君は君の信念に従って行動したまえ。……最後まで信じてやるんだ、彼女達を。』

「……はっ、了解です。」

モニター越しにブライト司令へ敬礼をし、通信は切られた。やはりブライト司令も気持ちは同じようで、ニュータイプとして覚醒を始めているシーナ少尉と、強化人間であるカトレア・ペンタスの感応波が通じ合った可能性を信じている事が分かり、アンダーソン艦長は安堵の吐息を吐いていく。

さて……当然の事ながら、ここから先は厳しい戦いが予想される。ブライト司令に話を通じた事で、ロンド・ベルとして作戦展開は幾らか出来るようになるだろうが、問題は連邦軍内部だ。あの謎の無人モビルスーツの製造元と所属が判明していない以上、参謀本部を味方と思うのは時期尚早だ。ピースミーティアの一件でも分かる通り、連邦政府と軍の隔たりが顕在化し、理解者でもある將軍は孤立無縁状態と

なっている為、将軍が把握し切れていない場所でスパイが秘密裏に動いている可能性すらある。下手に情報を軍上層部に報告するのは、場合によっては自分達の首を絞める結果になるかもしれないのだ。

「…艦長、如何なさるつもりですか？」

通信を傍らで見ていた副長のエリス中佐が、横からアンダーソン艦長へ問いかけていく。彼女もブライト司令やアンダーソン艦長程ではないにしても、ニュータイプの可能性というものに理解を示している1人だ。エリス中佐は首を傾げながら、ジッとアンダーソン艦長の横顔を見つめて返答を待っている。

「シーナ少尉とカトレア・ペントス両名から、改めて話を聞きたいと思っっているよ、エリス中佐。その上で今後の作戦方針を立てたい。」

「了解です、艦長…ドクターに確認を取ります。」

アンダーソン艦長の言葉を受け、エリス中佐は敬礼をした後に踵を返し、通信室を後にして行った。その後ろ姿を見つめるアンダーソン艦長の頭の中では、ある程度の作戦プランは浮かんでいるものの、やはり情報が不足している事は否めない。謎の無人モビルスーツの件もあるが、同時にピースミーティア戦で撤退した残存艦隊の行方も気掛かりなので、その尻尾を掴む情報をカトレア・ペントスから引き出したいと考えていた。

「…やれやれ…、休む暇はないようだね…。」

艦長のぼやきは、誰も居ない通信室に静かに木霊していく。

※

「なあ、ウォルド主任。あんたはこの機体の事は何か知らないのか？」
ラー・ネイジユのモビルスーツデッキでは、追加の補給物資をアンバークイーンの職員達が搬入する作業が続けられており、その一方でデッキの奥ではある2人の人物が会話をしていた。

このモビルスーツデッキの現場責任者である整備長と、ガンダム開発責任者のウォルド・シャウラである。整備長は、デッキ内に格納されているモビルスーツの1機、コードネーム“セレーネ”の調整作業

を行っていたウォールドに話しかけ、シーナ・ランチェスターが交戦した謎の新型無人モビルスーツについての見解を訊ねていたのだ。

「いえ、私も初めて見るタイプのモビルスーツでしたから…。自律稼働且つ、人の思考を真似て機体を制御するプログラムを実戦レベルで投入するのは…アナハイムでも難しいでしょう。」

「そうか…。じゃあ…何処なら作れそうか見立てはあるかい？」

ウォールド・シャウラが分からないのなら、他のアナハイム職員に聞いても分からないだろう。整備長はそう判断すると、今度は別の質問を投げかけてみる。この質問にはウォールドも少しばかり考え込む仕事草を見せ、難しい表情を浮かべながら口を開いていった。

「…可能性の話にはなりますが、ネオ・ジオン内での工廠…或いは、地球で作られたという線も。」

予想外の答えが返ってくると、整備長は目を見開いていく。アナハイムが技術的に難しいものを、地球で製造出来る筈がないと、そう訴えるような眼差しだった。

「地球って、一体そんなもん作れる場所が…」

「…ありますよ、私の知る限り1箇所だけ。」

ウォールドの声色が低くなる。表情も何処か暗く、その場所を口にする事すら憚れるというのは、整備長にも感じられていた。実際、その場所を聞いた瞬間、整備長の背筋に冷たいものが走る事になる。

「北米大陸…オーガスタ研究所。」

その場所は古参兵なら誰でも聞いた事のある、悪名高いニュータイプ研究所。かつてティターンズに与していた研究施設であり、表向きは閉鎖・解体された場所だと言われている。そんな碌でもない場所を口にしたウォールドは、冷たく暗い眼差しをしていた。

「だけど、あそこは…っ…もう稼働してないんじゃない？」

「…ええ、表向きは。実際はアナハイムの資金と資源が投入され、極秘裏に再稼働していると噂されています。」

整備長の表情は完全に固まってしまふ。アナハイムは兵士達の間

で“闇の武器商人”と揶揄される程、連邦にもジオンにも関係なく兵器を輸出する事で有名だが、まさかニュータイプ研究所すらも手中に収めているとは想像もしていなかったのだ。ウォルドの口振りからすると、この事を知っているのは社内でもほんの一握り程度なのだろうと推察するものの、そうなれば連邦軍とアナハイムが秘密裏に開発をしていたという話にも成り得てしまう。

「…仮にオーガスタで開発されたモンだとしたら、あんたはどうするつもりだ？」

整備長の言葉は、質問というよりも覚悟を問いかけるような口振りだった。ウォルド・シャウラは、果たして自身の会社に弓引く覚悟はあるのかどうかと。

その問いかけに対して、ウォルドの瞳に僅かな光の揺らぎが映る。「私のやるべき事は、ルミナスを完璧に修復させ、セレーネを完璧な状態に仕上げ、シーナ少尉の力になる事。その為なら、どんな障害も乗り越えるつもりだ。」

ガンダム開発責任者としての覚悟だけではない、人としての覚悟もウォルドは整備長へと伝えていった。シーナ・ランチェスターの力になるという事は、即ちこのラー・ネイジユの為に働いてくれる事と同義な為、整備長の微妙な表情は徐々に和らいでいき、普段通りのフランクな態度に戻っていった。

「…悪いな、あんたを試すような事聞いちゃって。とにかくコイツは…とんでもなく厄介な代物だったのは分かった。」

これ以上は聞くべき事はないと言うように、整備長はウォルドの肩を軽く叩き、「引き留めちゃって悪かったな、調整頼んだぜ。主任」と言い残し、他のモビルスーツの整備へと向かって去って行った。

（…：…そうだ、どんな障害も乗り越える…。だが…その力を少尉に与えるのが、私の…）

セレーネの調整に戻ろうとした最中、胸ポケットに仕舞い込んでいた端末の通知音が鳴り響き、ウォルドは端末を取り出して内容を確認していく。それは一通のメールであり、暗号化されたものだった。

「……………」

暗号を解読し、内容を理解すると、無言で端末画面を閉じていく。その内容はとてもシンプルなものだが、彼にとっては心を擦り減らす内容であった。

そして、ウォールドは表情を変え、事なく端末を操作し始めると、周囲のメカニックマン達には聞かれられないように移動しながら、とある人物へ連絡を取り始めた。

「……私だ、今は大丈夫かね？……ああ、向こうもいよいよ本気で潰しに来るようだ……。……そうだ、ん……。グラナダの第4工場を使ってくれ。あそこは表向きは閉鎖されているが、設備自体は生きている……。……ああ、資材は工廠内に搬入させるようにダミーの報告を上げておく……。私の部下達を使ってくれ。では……。頼んだぞ。」

通話が終われば、その相手へと暗号化された秘密データを送信し、端末を閉じて懐に仕舞い込んでいく。ここまで来た以上は、もう事態を止める手立ては1つしかない。自身の人脈、資金、頭脳、そして自らの命を賭ける結果になろうとも、それで多くの命が救われるのであれば、もう迷う事はない。

ウォールドは再びセレーネへ向き合い、コックピットへと向かって行く。特別な思いを抱きながら、シーナ・ランチェスターの新たな愛機を整備していくのだった。

※

「敵がわんさか出てきたわよ、囲んで叩きなさいっ。あんまり時間がかかるとお宝に逃げられちゃうわ！」

『了解っ、隊長！』

ラグランジュポイント3では、戦いの火蓋が切られていた。リベリオ・ビアンキ率いる強襲部隊は、デブリの影に隠れながら連邦の輸送護衛艦隊に接近する事に成功し、前衛を務めるクラップ級へとモビルスーツ部隊が襲い掛かっていく。

敵艦や敵機は、突如として出現したりベリオ部隊に対して、初動が

明らかに遅れていた。それもその筈で、偵察機が見事に全滅し、情報が艦隊に届いていなかった為である。

「お宝以外は皆殺しにしなさい、援軍を呼ばれたら厄介よ！」

リベリオ・ビアンキの駆るギラドーガ・カスタムは、隊長機でありながらも部下達より前に突出しており、最前線で戦闘を繰り広げている。クラップ級からスクランブル発進して来たジェガン部隊に対して、一歩も引かずに攻撃を掻い潜り、自慢の特殊兵装であるビーム・シザースを展開し、接近戦でジェガンを次々と真つ二つに切り裂いていったのだ。

『何なんだ、コイツ……化け物かよ……ッ！』

迎撃に出て来たジェガン部隊が相手にしなければいけないのは、リベリオだけではない。その部下であるギラドーガ部隊も四方八方から襲い掛かって来ており、連邦側は体制を整える前に各

個撃破されている状態だった。加えて、艦隊の間近でモビルスーツ戦が繰り広げられているので、クラップ級も満足に援護射撃を行えず、難しい迎撃戦闘を強いられている。

『貰ったぜえ!!』

ギラドーガの1機が迎撃部隊を突破し、クラップ級に肉薄している。そしてビームライフルを構えると、引き金を引いて発射していった。

ビームの閃光はクラップ級のブリッジを撃ち抜き、乗員達には退避する暇もなく爆発し、10数人が一瞬にして爆死した。ジェガン部隊にしてみれば、これで指揮系統を潰された事になり、動揺が走った事で戦闘機動に更に乱れが目立つようになっていく。

「後始末はアタシに任せなさい、アンタ達は後衛の連中を皆殺しにするのよ！」

『『了解っ!!』』

リベリオの判断は素早かった。指揮系統を潰された前衛部隊は最早死に体なので、過剰な戦力で擦り潰す必要は無くなり、戦力を最適な形に振り分ける事に切り替えたのだ。リベリオの指示を受け、ギラドーガ達は各々スラスターを全開にし、輸送船の盾になろうと前に出

て来た後衛のクラップ級へと向かって行く。

さて、残りはジェガンが数機と轟沈寸前のクラップ級がリベリオ機の目の前に広がっているが、彼の視線は別の方向を向いていた。戦闘中でも常に位置を確認しているのが、お宝と呼んでいた輸送船である。

(よしよし…輸送船は戦闘宙域を離脱しようとしてるわね…、でも…そこを狙い目よ♡)

輸送船は単独で離脱を試みようとしており、クラップ級とジェガン部隊が盾となりながら逃がそうとしていたのだ。怪しげな笑みを浮かべるリベリオは、コックピット内に響くアラート音と同時に操縦桿を引き、不意打ちを狙ってきたジェガンのビーム攻撃を回避していく。

「おっと、危ない危ない…♡お仕置きよッ！」

回避から直ぐにスラスターを全開にし、攻撃してきたジェガンに一気に肉薄していくと、リベリオはビーム・シザースを横に振り抜き、ジェガンの胴体がコックピットブロック事真つ二つに裂けていった。ジェガンのパイロットは断末魔の叫びを上げる暇もなく蒸発し、程なくして機体はギラドーガの目の前で爆散していく。

『畜生…ッ、なんだって言うんだ…コイツは！』

残るジェガンもリベリオから距離を取り、各々がビームライフルを構えて射撃を繰り返していくものの、巧みな操縦と回避運動でどの攻撃も避けられてしまい、まるでダンスをしているかのようにギラドーガはビーム攻撃を掻い潜っていく。

「うふふ、遠距離攻撃だつて出来るのよッ！」

回避運動の最中、ビーム・シザースから離れたギラドーガの左腕が真つ直ぐに突き出され、腕部に一体化されているビームランチャーを構えると、射撃体勢を崩さないジェガンの1機に向けて発射していく。

『なっ——』

回避が間に合わなかったジェガンは、ビームライフルを構えていた右腕に攻撃が直撃し、武器に誘爆して右腕が吹き飛んでいった。損傷

した事でジエガンの動きが一瞬止まり、その隙をリベリオは見逃す事なく直ぐにビームランチャーを発射し、ジエガンのコックピットが撃ち抜かれて撃墜されていく。

リベリオ・ビアンキはニュータイプでも強化人間でもない、唯の人間だ。ここまでの操縦センスの高さは、生まれ持った才能と戦闘への飽くなき探究故に培われたものである。攻撃を避ける度に、そして自身の攻撃が当たる度に、彼のテンションは鰻上りで上昇していく。

「あつはははは!!いいわよオ、みんな死になさあいッ♡」

1機、また1機と、ジエガンの残存部隊がリベリオの手によって墜とされていき、残るは対空迎撃を健気に継続している大破寸前のクラップ級のみとなった。ブリッジが破壊されても艦の機能はまだ生きており、機銃だけでなくミサイルも発射してリベリオ機を撃墜しようとしている。

だが、そんな対空迎撃程度で撃ち落とされるリベリオ・ビアンキではない。飛来してくるミサイル群に向けてビームランチャーを発射し、1発のミサイルを撃墜すると、爆発の衝撃波によつて周囲のミサイルにも誘爆していき、数発のミサイルを一気に撃ち落としたのだ。その隙に機体のスラストを全開にし、機銃掃射の弾幕を掻い潜りながら、クラップ級へと突っ込んで行く。

「おらッ、死ねェ!!」

遂に艦の側面に取り付けば、リベリオはドスの効いた声を発しながらビーム・シザースを構え、クラップ級の船体中央部にビームの刃を突き刺していくと、そのままスラストを噴射しながら艦尾の機関部へ向けて一直線に切り裂いていった。ビーム・シザースの刃はきつちりとクラップ級の艦尾ブースターを引き裂き、距離を取ると同時に機関部に誘爆して爆発を起こしていくと、次々に艦全体に爆発の衝撃が波及していき、程なくして巨大な船体は内側から破裂するように爆散していった。

ある程度距離が離れていても、やはりモビルスーツと比べると爆発の衝撃波の違いを実感する。ギラドローガが僅かに押される感覚があり、姿勢制御の為に何度かスラストを噴射しなければならない程

だ。破片が機体に当たる音と細かな衝撃が止んでいくと、後に残ったのは不気味なまでの静寂である。

「ふう…、アツチも片付いたみたいね…♡」

モニターの奥に目をやると、殿として阻んでいたクラップ級が爆発していく様が見え、部下達も仕事をきつちりとこなしているのが分かる。リベリオはほくそ笑みながら操縦桿を引き、ビーム・シザーを背部バックパックに収納していくと、視線を再び輸送船の方向へと向けていった。

戦闘宙域から離脱していく政府専用機である輸送船。このままでは取り逃してしまう事になるが、リベリオの表情に焦りは無く、その怪しげな笑みは更に深まっていく。

「…そろそろ…、来た♡」

彼の呟きと同時に、輸送船の行手を阻むように複数の爆発が生じた。それは予めこの宙域に仕掛けていた宇宙地雷であり、かなり手前で感知して爆発するよう信管をセットしたものだ。輸送船に直接的なダメージは無いものの、この爆発によって明らかに輸送船の速度が落ち、地雷を回避しようと方向転換しようとしている。

その時だった。輸送船の行手を阻むように巨大な艦影が急接近し、目の前で停止して主砲の砲口を輸送船に向けながら停船信号を送っていた。その艦影こそ、デブリの影に最後まで潜ませていた、リベリオ部隊の母艦バルバロイである。

『隊長…やりましたぜ！』

停船信号を受諾し、輸送船のメインエンジンが停止した事を確認してから、バルバロイのブリッジから歓喜に沸いた通信がコックピットに届く。リベリオもニヤついた笑みを浮かべながら、「んふふ、上出来よ♡」と褒め言葉を送り、輸送船を制圧する為にモビルスーツ数機と隊員数名を向かわせるように指示を出した。

「さて、と…。さっさとイサベルに戻らないとね…♡」

…この時、リベリオを含めまだ誰も知る由は無かった。

輸送船に積まれていた超長距離レーザー通信機器が、ミノフスキー粒子が宙域に完全散布される前に作動していた事を。

※

「…つまり、貴女は直接的にあのモビルスーツ開発には携わっていないと？」

「ああ…、アンダーソン艦長。拝見した残骸の調査資料を見る限りでは…私がペーパープランで設計した機体の1つに、ヤークト・キュベレイのノウハウを組み込んだように思える。…恐らくはギムレットが極秘に作らせたのだろう、この私を欺いてな。」

「ギムレット・クルス…貴女の最側近でありお目付役、そして…」

「…イサベルのニュータイプ研究所長…カトレアを強化人間にした張本人だよ、艦長。」

アンダーソン艦長の姿は医務室にあった。ここでは、アンダーソン艦長、カトレア・ペントス、シーナ・ランチェスターの3名による話し合いが行われており、軍医であるDr. モーリスは席を外している。監視カメラの映像も止めてあるので、表向きは捕虜への尋問だが、実質は秘密の話し合いとなっていた。

その内容は、シーナ・ランチェスターが交戦し撃破した謎の無人モビルスーツ。その正体を突き止める為にカトレア・ペントスへ尋問を敢行したアンダーソン艦長だったが、その読みは多かれ少なかれ当たっていた。そして、2人の話を聞いていく内に、本当の敵という姿も見え始めて来たのだった。

「…アンダーソン艦長、敵はギムレットだけではない。」

カトレアがゆっくりと口を開いていくと、言葉を紡ぎながらシーナ・ランチェスターへと視線を向けていく。本当の敵はギムレット・クルスだけではなく、戦争を起こす事で莫大な利益を上げ、自身の野望を叶えようとする存在が別に居ることを告げようとしているのだ。彼女の視線に気付き、迷う事なくシーナ・ランチェスターは頷いている。

「それは一体…、」

問いかけようとアンダーソン艦長が口を開いた、正にその瞬間だった。

「っ……………」

尋問中にも関わらず、医務室内の内線がけたましく機械音を発したのだ。直ぐにアンダーソン艦長は椅子から立ち上がり、内線の受話器を手に取って応答していく。

「私だ……………分かった、直ぐに戻る。」

短い時間で通話が終わったようで、アンダーソン艦長は受話器を元の場所に戻した。相手はブリッジに居る通信オペレーターのエヴァ・ヒギンズ少尉であり、内容はロンド・ベル艦隊通信を用いた至急電が届いたとの事で、恐らくはブライト司令からの勅令であろうと予想出来る。

アンダーソン艦長はベッドに横たわる2人へと振り返ると、表情を引き締めながら口を開いた。

「話はまた改めて時間を作ろうと思う、私はブリッジに戻らせてもらうよ。」

シーナ・ランチェスターは上体を起こしながら敬礼をし、カトレア・ペントスは小さく頷くに留まる。2人の反応を見届けたアンダーソン艦長は、微かに笑みを見せながら医務室を後に行行った。

残された2人はベッドに横たわりながら、艦長が急遽ブリッジに戻った理由を考え始める。

「…急にどうしたんだろ、艦長…。」

「……………捕虜尋問を中断してでも優先すべき事が発生したのだ、上からの勅令でも来たんだろうさ。」

「…艦隊司令部から、か…。となると…ギムレットが動いたのかな？」

「その可能性は高いだろう…。若しくは、私を参謀本部に移送させるのか…。」

カトレアの言葉に、シーナ・ランチェスターの表情が僅かに曇る。連邦軍に彼女を引き渡してしまえば、最悪極刑が下される事も容易に想像出来る為、それだけは避けたい所だ。だが、軍人であるシーナにとっては、軍に逆らうとはどういう事か、分からない程子供でも無い。

…カトレアの為に戦うというのは、下手をすれば連邦軍とネオ・ジオン双方を敵に回す事にもなりかねない。それでも、私は…。

「……心配するな、シーナ。」

まるで私の考えを見透かしたかのように、彼女は穏やかな声色で言葉をかけてくれた。その表情と声に、私の心のモヤモヤが少しずつ溶けて解けていくような、そんな感覚を感じていた。

「…ん…、そうだね…。でも私は…カトレアには生きて欲しいから。」
私の言葉を受け止める彼女の表情は変わらず、穏やかなままだ。彼女は言葉を返す事はなく、ただ小さく頷くのみ。

彼女はきつと、極刑となつても全てを受け入れるだろう。自分が今まで行ってきた罪への贖罪として。それが分かっているとしても、どうしても私は彼女に生き続けて欲しいと願わずにはいられないのだ。今までもずっと苦しむだけの人生、強化人間として生きなければならぬ定めであっても、僅かでも人並みの幸せを感じて欲しい…と。

2人の間を流れる空気は、甘くも切なく、悲哀と希望とが入り交じるものとなつていく。そんな空気を一変させたのは、突如として流れて来た艦内放送だった。

『ブリッジより各員へ。これより本艦は補給作業を終了し、直ちに発進準備に取り掛かる。第二種戦闘配備発令、繰り返し、第二種戦闘配備。』

ラー・ネイジュは再び、戦禍の只中に飛び込む事になる。様々な人々の思惑、そして想いを乗せて……。

第1話『セレーネの声』

それは、風雲急を告げるものだった。

「司令、レーザー通信を受信しました。」

ルナツー。サイド7から程近い位置に存在している、L3宙域に属する軍事小惑星拠点であり、地球連邦宇宙軍の重要拠点の1つである。その管制レーダー網に、突如としてレーザー通信が届いたのだ。

管制官の士官がルナツーを指揮する基地司令に報告を入れると、司令官は直ぐに士官の座る席へと近付いて来て、状況報告を求めている。

「識別は？」

「はっ…、これは…政府専用機の識別コードです…っ。緊急事態を告げるもので間違いありません！」

士官の報告に、通信管制室内が俄かにざわつき始める。政府専用機というのは、サイド7コロニーを発進した輸送船でまず間違いない。そして護衛の為にクラップ級が2隻出撃した事も、この場にいる全員が認識しているのだ。クラップ級が出撃してから2日は経過しているが、戦闘艦ではなく輸送船から緊急通信が送られて来るというのは、差し迫った危機的状況が発生した事を暗に意味していた。

司令官の判断は素早かった。士官の報告を受けて直ぐに内線の受話器を手に取り、ルナツーの全部署へ緊急のアナウンスを行ったのだ。

「緊急戦闘配備発令。繰り返す、緊急戦闘配備発令。戦闘員は所定の場所にて待機せよ、各艦艦長は至急作戦司令室へ。以上だ！」

「…司令、ロンド・ベルへ救援を求めるのは？」

「ああ、やっておけ。今は面子を考えている場合じゃない。」

士官の問いかけに、司令官は直ぐに返答していく。同じ連邦軍の括りには入っているが、正規軍とロンド・ベルの力関係は非常に微妙な所がある。規模や物量、そして階級社会を重んじる正規軍に対して、ロンド・ベルは外郭部隊として独自の作戦指揮権を有しており、規模

は小さいながらも正規軍には無い柔軟性を持っている。互いに相反するような流れを持つ両者ではあるが、協力体制を敷くようになったのは、あのアクシズ・シヨックを起点に促進されていったのだ。加えて、正規軍もロンド・ベルも1年前の第二次ネオ・ジオン抗争による戦力喪失の影響が続いており、自ずと協力していかなければならない現実もある。特に現場を担う軍人達には、その意識が強い傾向にあった。

「いいか、どんな通信や信号も見逃すな！」

司令官の言葉を受け、通信管制室に詰める士官達は皆忙しなく動き始める。この時既に護衛を担うクラップ級が轟沈しているとは、まだ誰も知る由は無かった。

そして、ルナツーからの応援要請を受けてL3宙域へと向かう事になったのは、一番距離が近いラー・ネイジュとなったのだ。ロンド・ベル艦隊司令本部から至急電が届けられ、先刻アンバークイーンでの補給作業が完了したばかりである。

「艦長より達する。これより本艦はルナツーからの要請に応え、連邦政府専用機の救援と護衛任務に就く。戦闘状況に突入する事も考えられる、皆そのつもりで気を引き締めてもらいたい。……総員、配置につきたまえ。全乗組員の奮闘に期待する。」

アンダーソン艦長の艦内アナウンスが終わり、第二種戦闘配備に移行したラー・ネイジュは、アンバークイーンとのドッキングアーム連結を解除していく。

「ドッキングアーム、解除確認！」

「ラー・ネイジュ、機関始動。微速前進しつつ、ロケットブースターをアイドル状態に。」

アンダーソン艦長の指示を受け、航海長は復唱しながら操作をしていき、ラー・ネイジュはその身をアンバークイーンから離して発進していく。同時に、外付けされる形で艦尾に装備された大型ロケットブースターも起動させ、いつでも噴射出来るように準備を整えていった。

「艦長、アンバークイーンより入電。『貴艦の健闘と無事を祈る』：です。」

通信オペレーターのエヴァ少尉が読み上げた電報を聞きながら、アンダーソン艦長はしっかりと頷いていく。補給と修理だけでなく、様々な追加装備まで提供してくれたアンバークイーンには、心からの感謝を抱き続けたいとアンダーソン艦長は感じていた。そして、ラー・ネイジユはアンバークイーンの管轄する宙域から離脱し、通常航行可能な地点まで進出を果たす。

「このまま最大戦速でL3宙域に向かう。機関最大、ロケットブースター点火せよっ。」

「機関最大、ロケットブースター点火！総員、対シヨック姿勢！」

アンダーソン艦長の命令を受け、副長のエリス中佐が各部署へ一斉に指示を出していく。機関室ではこのアナウンスを受け、機関出力を最大にさせ、同時にロケットブースターのエンジンにも火をつけた。

次の瞬間、身体が吹き飛ばされてしまうのではないかと思える程の加速Gが、艦全体に波及していく。誰もが手近な物に掴まっていたり、シートにしっかりと座っていたり、部品や備品は飛び散らないよう固定していたお陰で、被害という被害は発生しなかった。

『おい、大丈夫か少尉っ？』

そんな中、まだ万全の状態とは言えないものの、シーナ・ランチェスターの姿は医務室には無く、その身はモビルスーツデッキにあった。セレーネのコックピット内で加速Gに耐えていた彼女の身を案じ、モビルスーツ部隊を指揮するローマン隊長が通信を介して問いかけてきてくれた。

「このくらい…、セレーネより全然マシです…っ。」

『ははっ、そんだけ言えりや大丈夫だな！』

……それは、ラー・ネイジユが補給を終え、発進準備に取り掛かっている時だった。

集中治療を受けたおかげで、短期間で身体の損傷を回復させてきたシーナ・ランチェスターに、アンダーソン艦長は任務を託したのである。その任務とは、セレーネの追加オプションを用いた救援任務…少

数のモビルスーツ部隊を先行させ、一刻も早く政府代表団を救出する為の危険な任務だ。

選抜されたのは、セレーネを駆るシーナ・ランチェスターを筆頭に、リゼル隊から2機、ジェガン隊から2機の、計5機による作戦である。『ロケットブースター、出力50%に固定つ。モビルスーツ隊、発進位置へ！カタパルト射出1分前！』

モビルスーツデッキ内に響くエヴァ少尉の声。それと同時にラー・ネイジユのロケットブースターの出力が抑えられ、身体に感じるGの負荷が軽減した事が感じられた。同時に、デッキ内は5機のモビルスーツを発進させる為にメカニックマン達が慌しく動き、先にジェガン2機がカタパルトデッキへと上げられていく。

今回は作戦が作戦なだけに、セレーネだけでなく、ジェガンとリゼルにも特殊な装備が施されていた。高速巡航を可能にする為、急遽ジェガンとプロトタイプ・リゼルのバックパックに連結する形で、ベースジャバーのブースターユニットを取り付けたのだ。これでL3宙域にいち早く到達する事が可能となり、時間との勝負である今作戦において非常に重要な装備と化していた。

『進路クリア、発進どうぞー！』

カタパルトデッキに固定されたジェガン2機は、後付けされた大型ブースターに火を入れ、カタパルトで射出されていき、先行して出撃していった。続いてカタパルトデッキに上げられたのはリゼル2機であり、内1機はモビルスーツ部隊を指揮するローマン隊長のラプター1だ。

『先に行くぜ、少尉っ。』

「無茶はしないで下さいよ、隊長。」

『そりゃこっちの台詞だ…ラプター1、出るぞー！』

通信での掛け合いの後に、ローマン隊長と僚機のプロトタイプ・リゼル2機が射出され、発艦後はウェイブライダー形態に変形してジェガンの後を追いかけて行った。残るはシーナ・ランチェスターのセレーネのみである。通常は両足をカタパルトに固定した状態でデッキに移動していくのだが、この時ばかりは違っていた。

『少尉、聞こえるか?』

「…はい、ウォルドさん。」

『君のパイロットスーツを再調整しておいた、セレーネの推力に耐えられるようにな。だが…君はまだ万全のコンディションじゃない、無理は禁物だ。』

「…勿論分かってますよ、行ってきます。」

カタパルトデツキへと移動していくセレーネは、数日前に戦闘を繰り広げた際と比べて大きく様変わりしており、特に下半身は巨大な塊のような様相を呈していた。それは、コードネーム“セレーネ”の為に用意された拡張オプションパーツであり、強襲任務を想定して設計された高機動強襲装甲だ。特に背部バックパックと両脚部に追加装甲が施されており、E-X-Sガンダムのブースターユニットを再設計・改良したものをセレーネに搭載させている。

(…推力は通常時の1.5倍以上…。パイロットスーツで軽減出来ても、やっぱり負荷は高い…か。)

カタパルトデツキへ移動していく僅かな時間、操縦桿を握り締めながら不安要素を脳裏に浮かべつつ、私はゆっくりと息を吐いていった。そして、デツキに上げられていくセレーネは、機体を固定するドッキングアームに挟まれながら、カタパルトレール上に乗せられていく。

『シリンダー接続、カタパルトロック確認。 ……シーナ、待ってるからね。』

コックピットのコンソールパネル上に、リアルタイム通信画面でエヴァ・ヒギンズの顔が映し出され、不安と責務が入り混じった表情と声色でこちらに語りかけてきた。任務の危険性を承知しているからこそだろう、その気持ちは私もしつかりと理解出来る。

「……また買い物に行こう、エヴァ。」

彼女がカトレアを許していない気持ちも分かる。そんな彼女に気を遣わせている事も理解している。それでも、私はエヴァの良き友人としてこれからも歩んでいきたいと願っており、全ての気持ちを乗せて微笑を浮かべながら返答していった。

私の言葉に、画面越しに彼女も僅かに表情を綻ばせながら頷いている。久々に見た彼女の柔らかな表情に、私は安堵していた。

「シーナ・ランチェスター、ガンダム・セレーネ…行きますッ！」

操縦桿を目一杯押し込み、カタパルトを射出させて機体を発艦させると、勢いよく飛び出した瞬間にブースターユニットに点火し、新たなガンダム：『ガンダム・セレーネ』は宇宙の海を突き進んで行った。バックパックと両脚部に接続・装着された大型ブースターユニットは、リミッターが作動する出力95%を維持しながら、暴力的な加速と推力を発揮して飛翔していく。

「ぐっ……う、う……ッ……!!？」

早速パイロットスーツの耐G負荷軽減システムが発動した事は感じるものの、追加オプシヨンの加速力の凄まじさに圧倒されてしまっていた。これでリミッターを解除すれば、果たして意識を保ってられるのか不安になるレベルである。

身体がシートに強烈に押し付けられ、操縦桿を握る手にも更に力が入り、目を細めながら奥歯を食いしばっていく。それと同時に、まだ完治していない自身の肉体の痛みも感じていた。

（見え、た……ッ。）

当然ながらジェガン、リゼルよりも推力は高く、先行していた4機の機影に早くも追い付いてしまう。だが、それも作戦の内である。

「ガンダム、先行して敵の足を止めます…！」

『無茶だけはするんじゃねーぞ、少尉！』

4機を追い抜く際にローマン隊長と通信を交わすと、更に足元のスラストペダルを踏み込み、一直線にL3宙域へ向けて駆けていく。

私が託された仕事は、輸送船を襲撃した敵部隊の足止めである。敵の規模が分からない以上、単騎で全てを片付けようとするのはリスクが高過ぎる為、ローマン隊長やルナツの艦隊が到着するまで離脱させないよう妨害を行うのだ。

（武装も変わってるし…、手探りになるな…っ）

この高機動強襲装甲仕様では、メイン武装であるライフルは背面腰部マウントに格納されており、代わりにライフルより出力と射程に優れるメガ・ビームランチャーを両手に装備してある。加えて、両脚部を丸ごと覆うように装着されたブースターユニットの側面には、マルチロックが可能なミサイルコンテナが両側面に計4基装備されており、一対多数の戦闘において撃ち負けない武装構成となっている。

だが、まだテストすらしておらず、スペック上の数値しか把握していない状況だ。ウォルド・シャウラやローマン隊長の言うように、無理は出来ない状況である。それでも私は、スラスターとブースターを噴射し続け、まだ見ぬ敵の背を追うようにセレーネへ鞭を入れ続けていく。

「絶対…ッ、阻止してみせる…！」

※

「ギムレット大佐、バルバロイよりレーザー通信回線が届いております。」

「よし、繋げ。」

同時刻、小惑星イサベルの作戦司令室。

イサベルのネオ・ジオン総帥代行となったギムレット・クルスは、カトレア・ペントラスが座る席に腰掛けており、イサベルの実質的な指導者としての立ち位置を確立しつつあった。そんな彼の元に届いたレーザー通信回線は、連邦政府代表団を乗せた政府専用機の拿捕任務を与えていた、リベリオ・ビアンキ隊からの通信である。ギムレットは下士官に通信回線を開く事を命令すると、直後に司令室内の大型モニターにリアルタイム映像が映し出され、そこには怪しげな笑みを浮かべたりベリオ・ビアンキの姿があった。

「首尾はどうだ、リベリオ。」

『それは勿論…(一)覧の通り♡』

こちらの問いかけに対してリベリオはご自慢の怪しげな笑みを更に深めつつ、モニターの前から横に逸れていく。すると、彼の背後に

は手錠で拘束された連邦政府代表団の面々が揃っており、情報通り10名揃って捕虜に出来ている事を確認出来た。

「よくやった、リベリオ。そのままイサベルに連行するんだ。それと……連邦軍に動きがある、用心しろ。」

『分かってますよ、大佐……では、また後ほど♡』

通信回線は切れ、大型モニター画面は暗闇に染まっていく。

流星はリベリオ、と言った所だろうか。悪評ばかりが目立つものの、任務成功率の高さや戦闘技能の高さは、目を見張るものがある。これでイサベル内の保守派の力は衰え、ギムレットを総帥とする革新派に求心力が増える事となるのは、最早明白だ。後は捕虜となった代表団の面々をイサベル内で拘束し、連邦政府に対して有利な立場で交渉を持ち掛ける流れに移行するだけである。

問題があるとすれば……

「ルナツターの艦隊とロンド・ベルの位置はどうか?」

「はっ、ルナツター艦隊は先程出撃した模様です。ロンデニオンのロンド・ベル艦隊に大きな動きはありませんが……1隻のみ突出してL3宙域に接近していますっ。」

「……例の艦か。」

下士官の報告を受けて、1隻のみで突出してくる艦の事に意識を向けていく。これは恐らく、ピースミーティア攻防戦に投入された艦の事だろうと、ギムレットは推察していた。

連邦政府内に忍ばせているスパイからの情報によれば、艦の名前はラー・ネイジユ。ラー・カイルム級機動戦艦の最新鋭型であり、一筋縄ではいかない存在なのは先日痛感した通りである。それに加えて、ラー・ネイジユがガンダムのコア部分を回収した事も把握しているのだ、今回の作戦行動に動員されている可能性も排除出来ない。リベリオ・ビアンキの手腕も戦闘能力も評価しているが、あのガンダムを相手にするのは分が悪いだろう。

(……カトレアを排除し、私が実権をより強力に握る事までは予定通り……。だが、ヤークト・キュベレイとカトレアの実力は本物だった。そのカトレアと同等、或いはそれ以上……)

興味、関心、そして一抹の不安と胸騒ぎ。ギムレット・クルスの計画を妨げるものがあるとすれば、それはガンダムのパイロットだ。カトレア・ペントスは正にギムレットが理想とする強化人間の完成形であっただけに、その彼女が敗れる程の力を持ったパイロットが存在していると言うのは、かなりのプレッシャーとなる。下手をすれば、計画が頓挫する以上に壊滅的な打撃を受けかねない。

加えて、カトレアの遺体を回収出来ない事も、ギムレットの不安要素の1つとなっていた。連邦に回収されていけば、カトレアの機密が遺伝子情報から漏洩する危険もある。そうなれば、連邦軍内部で再び強化人間の研究と製造に着手する恐れがあるからだ。

……流石に生きてはいまい。ガンダムと違い、ヤークト・キュベレイの残骸は正に木っ端微塵だったのだ。あれだけの質量のある衛星の爆発と衝撃に巻き込まれたのだから、当然と言えば当然である。

「MBの配置状況はどうなっている？」

「はっ、現在主要な連邦政府支持派のコロニー郡と地球の主要都市に向けて、輸送物資コンテナにて輸送中。あと2週間程で、全配置完了の見込みです。」

「よし……。製造ラインにも通達せよ、イサベルの防衛にあと数十機は必要だとな。」

「了解です、大佐。」

第2、第3の布石を次々に張り巡らせ、ギムレットは自身の野望を実現する為に歩みを強めていく。地球連邦政府でも、シャア・アズナブルでもない、ましてやアナハイムなどでもない、ギムレット・クルスが統治する新世界の秩序に向けて……

……そんな最中、ギムレット・クルスの思惑に反する勢力が静かに燻り始めていた。

「ようこそ来てくれた、マキネン艦長。」

「いえ……こちらこそ、お招き頂きありがとうございます。」

小惑星イサベルの居住エリア、その地下階層の秘匿されたビルの一室に、軍部の上級将校達が集っていた。

彼らは所謂保守派と呼ばれる、変革よりも秩序を維持する事を求めた非好戦派の面々だ。ギムレット・クルスの半ば暴走とも言える現状を危惧し、そしてカトレア・ペンタスの目指した、地球と宇宙の人類共存思想を受け継ぐべく立ち上げた組織である。この場に最後に招かれたのは、カトレアが座乗していたイサベル艦隊旗艦『アグラリア』の艦長、エドワード・マキネン中佐である。

「では…本題に入ろうか、諸君。」

マキネン艦長が席に腰掛けた所で、この組織のリーダーであるダリオン将軍が口を開いた。

「現在イサベル内部では保守派と革新派で二分されており、ギムレット・クルス率いる革新派が勢いを増している。このまま強硬策に突き進めば、我々だけでなく…イサベルに住む民間人も巻き込まれるだろう。そこで…民間人を中立コロニーに逃す為のクーデターを決行しようと思う。」

そこまで話を進めた所で、ダリオン将軍は室内のモニター画面を起動させ、作戦概要を表示させた。

「イサベルの現在地が…此处、サイド7とサイド6の中間地点に位置している。作戦内容としては、民間人を4番と7番スペースゲートに誘導し、我々が接収した輸送船に乗船させ、サイド6に向けて発進させる。輸送船のコロニー管轄宙域到達まで護衛し、皆を守り切る事が、今回の作戦の達成条件となる。」

「…宜しいですか、将軍?」

作戦内容を静かに聞いていた出席者の1人が挙手をし、内容についての質問を投げかけた。

ダリオン将軍は表情を変える事なく、小さく頷いて質問を促している。

「非戦闘員の数は1000名を超える。それだけの民間人を革新派に気取られる事なくスペースゲートに移動させるのは、かなり難しいのではないか?」

発言をした出席者の疑問は最もな事であり、他のメンバーも小さく頷いて見せている。この質問は想定内だったようで、モニター画面が

切り替わり、別の情報を記した画面に切り替わっていく。

「我々保守派には優秀な技術者も多数在籍している。作戦決行日の00:00時から10分間は、イサベル内の警備システムと監視システムの点検作業が予定されている為、それに乗じてハッキングを行い、システムを完全に無力化する手筈となっている。……当然、このハッキングは長くは保たん。異変を察知した守備隊による抵抗が予想される。」

「……つまりは、10分間の内に民間人100名余りをスペースゲートに移動させ、守備隊からの抵抗を防ぎながら輸送船を発進させる……という事ですか？」

「その通りだ。激しい銃撃戦になるだろうが……民間人を逃す事が最優先だ。」

ダリオン將軍の強い言葉に、室内の空気が一段と重さを増している。それは多少の犠牲は致し方なしと言っているに等しいのだ。

だが、そんな事は百も承知であり、命を投げ出す覚悟がある者だけがこうして集っている。静かに、そして強固な意思を示すように、皆一様に頷いていた。ダリオン將軍は皆をゆっくりと見渡した後に、言葉が続けていく。

「輸送船2隻の護衛には……マキネン艦長、貴官のアグライアに任せようと思う。唯一の戦力となるが……引き受けてもらえないだろうか？」
「……勿論です、將軍。艦隊旗艦の力は伊達ではない事をお見せしましょう。」

「頼もしい限りだ、よろしく頼む……中佐。」

ダリオン將軍とマキネン艦長は固い握手を結び、両者とも表情は固いものの、目の奥に滾る火は同じくらいに熱い。握手を解くとマキネン艦長は再び椅子に座り、ダリオン將軍はモニターを最後の画面へと切り替えた。

「既に民間人達には、我々の組織のメンバーを通じて連絡を完了してある。ハッキングのタイミングに合わせ、スペースゲートに停泊してある輸送船を組織のメンバー達が奪取する手筈だ。つまり……決行日時の変更はもう出来ない。必ず成功させなければならぬのだ。」

……皆、必ずやり遂げよう。」

出席者である組織の幹部達はしつかりと頷いていく。これから始まる、小さくとも大きな意味を持つ反抗作戦に向けて、誰もが強い意志を持って臨もうとしていたのだった……。

『セレーネの声』(2)

「隊長、高速で接近する移動熱源を探知！」

イサベルへ向けて航行を続けるバルバロイのブリッジ内に、レーダーを監視するクルーの言葉が響き渡る。リベリオ・ビアンキの表情は僅かに変化を見せ、言葉を返していく。

「ミサイルかしら？」

「い、いや…この動きは…モビルスーツですぜ！でも速すぎる…!？」

「……ふうん…、補給が終わった機体から発進させなさい。それと、ミノフスキー粒子を戦闘濃度まで緊急散布。私も出るわ」

「りよ…了解っ！」

リベリオの判断はここでも早かった。任務を達成して正直浮かれている部下達とは違い、イサベルに戻るまでは油断出来ないと気を張っていたからである。勿論、先程までのギムレット・クルスとの通信も相まつてだが。

リベリオはバルバロイの指揮を副長に預けると、直ぐに通路に出てモビルスーツデッキに向かって行く。せっかく完璧に仕事が終わわりそうなのだ、こんな場所で潰されてたまるものか。リベリオの胸中は穏やかではないものの、こちらには人質があるので、少なくとも致命打を与える攻撃は出来ないだろうと考えていく。

(…ガンダムだとしても、操ってるのは生身の人間…。試させてもらおうかしらね…♡)

モビルスーツの性能差が、そのまま直接戦いの勝敗に繋がる訳ではない。要は使い方、そして戦術の有無によるものである。リベリオ・ビアンキはそれを証明すべく、ノーマルスーツを着込んでモビルスーツデッキへと入って行った。

既にカタパルトデッキには何機かのギラドーガが上がっていき、順次発進を行っている所である。自身の愛機であるギラドーガ・カスタムは推進剤の補給が終わった様子で、補給パイプが外されている最中であつた。

「隊長、準備完了です！ご武運を！」

「ありがと、敵をぶち殺してくるわね♡」

リベリオは担当の整備兵に感謝の言葉を述べながら、コックピットへと乗り込んでいく。調整も完璧なようで、機には既に火が入っている。後はカタパルトデッキへと移動し、出撃するのみだ。

機体をロックしているアームが解除されていくと、リベリオはギラドーガの操縦桿を操作していき、モビルスーツデッキからカタパルトデッキへ機体を移動させていく。まだ船体に大きな揺れや衝撃が及んでいない為、敵モビルスーツはまだ有効射程範囲には入ってきていない事は分かる。

「ブリッジ、敵との距離は？」

『距離10,000、以前として急速接近中！会敵予想は凡そ3分も無いはず！』

「3分もあれば十分だわ、迎撃用意をときなさい♡」

『了解です、隊長！』

ブリッジとの通信を終え、ギラドーガ・カスタムはカタパルトに固定されていく。後は操縦桿を押し込み、発艦を行うのみとなった。リベリオはヘルメットのバイザーを閉じ、操縦桿をしっかりと握り直す。敵が何であれ、自分達の戦いが出来れば負ける事はないと信じ、リベリオは普段通りに発進の口上を呟いたのだった。

「リベリオ・ビアンキ。ギラドーガ、行くわよっ！」

カタパルトが射出され、リベリオ・ビアンキの愛機であるギラドーガ・カスタムが発艦を完了させると、スラスターを噴射して先に発艦した部下達のギラドーガ部隊と合流していく。部下達は既にフォーメーションを組んでおり、急速接近して来る不明機体に向けての迎撃態勢を整えていた。

『待ってましたぜ、隊長！』

『待ちくたびれましたよ！』

「主役は遅れてやって来るものよ♡さあ、アンタ達！気イ引き締めて

いくよ！」

リベリオ・ビアンキの駆るギラドーガ・カスタムを先頭に、左右にギラドーガ部隊が広がりながら迎撃態勢を完成させ、彼方からやって来る不明機体を捉えようと目を凝らしていく。

会敵予想時間まであと1分。短いようで長いような、神経の擦り減る1分間。モビルスーツらしきものとは情報が無い以上、ミノフスキー粒子散布下では有視界領域に入らない限りは正体を把握出来ない為、誰もが息を呑みながらモニターの隅々に視線を凝らしていた。果たしてどんなモビルスーツがやって来るのか…誰も言葉には出さないものの、ある程度の目星はついている。カトレア・ペントスを打ち破り、ピースミーティア攻防戦において2隻の艦艇と数多のモビルスーツ部隊を単騎で撃破した存在…ガンダムだ。

(…皆強張ってる…まあ、無理もないわね。)

その無言の時間と独特の緊張感は、本来ならばリベリオ部隊には有り得ないものだ。どんな状況でも戦争と戦闘に酔い痴れ、破壊と殺戮を快樂とし、声高らかに笑いながら狡賢く強かに戦う…それがリベリオ部隊なのである。

所がどうだ、今の現状は。誰も一言も発せず、緊張感だけがひしひしとこの宙域を支配し、まるで何かに怯えているかのように神経を研ぎ澄ましている。狡賢いからこそ、誰もが肌でひしひしと感じていたのだ。ガンダムを正面から相手にして生き残れる見込みは無い、と。その事を指摘した所でどうしようもない事は、リベリオ本人も理解していた。だからこそ、利用できるものは最大限利用して生き残らなければならぬのだ。例えそれが、人道に反する行為であったとしても。

『高熱源反応…ッ！』

部下の誰かが咄嗟に叫んだ言葉が、ノイズ混じりにヘルメット内のスピーカー越しに響く。その直後、センサーが熱源を感知してアラート音が全機のコックピット内にけたましく響いた。

「ッ——！！」

刹那、まるで戦艦級のビーム攻撃が戦場を貫いた。

『た、隊ちよ、……………』

それは正確に1機のギラドーガに命中し、コックピット脇を挟るようにビーム粒子が機体の装甲を溶解していくと、リベリオの部下は言葉を発する最中に機体の爆発に巻き込まれて死亡した。

『なっ…、どこから…！』

『畜生、やりやがったな…！』

『撃て、撃ちまくれ！近寄らせるな！』

この先制攻撃で緊張の糸が切れたリベリオ部隊は、弾幕を展開するようにあちこちを攻撃していく。これは不味いとリベリオが思った矢先、次の攻撃が容赦なく降り注いだ。

『助けッ……………』

またも1機、リベリオの部下が高出力のビーム攻撃によって撃ち抜かれ、機体が爆散していく。耳障りなノイズ音がヘルメット内のスピーカーに残り、そしてブツツ…と消えていった。

『各機散開！的を絞らせちやダメよっ！』

瞬く間に2機のギラドーガを正確な狙撃で撃墜された事に動揺が広がっていくと、明らかに部隊の機敏さが失われていつているのが、リベリオにはハッキリと見て取れた。だからこそ、隊長である彼が真っ先に前へと繰り出し、全員を奮い立たせるように声を張り上げる。

リベリオの命令に漸く戦意を取り戻した隊員達は、皆ハツとしたように『了解!!』と返答し、それぞれスラスターを噴射しながら散開行動を取っていった。それと同時に、2機のギラドーガを撃墜した正体の姿も見えてくる。

『…………何なの、あれは…………っ。』

流石のリベリオ・ビアンキも、高速で接近してくる機体を目にして、思わず驚きの声を漏らしてしまっていた。

上半身は確かにガンダムそのもの。だが、下半身はブースターユニットと一体化されており、どちらかと言うとモビルアーマーに近い。そして両手に握られている大口径のメガ・ビームランチャーを見て、先程の先制攻撃の正体を嫌でも理解させられた。

「速い…けどっ！」

異常なまでの推力は、ブースターユニットを見るだけで分かる。ギラドーガのセンサーは敵機を捕捉し切れず、それ以上のスピードで敵機は突っ込んで来ていたのだ。だが、仰々しいユニットと圧倒的な推力の裏には、小回りが効かないという欠点がある事をリベリオは察した。

彼はスラスターを全開にさせて敵機に向けて加速をしていくと、手持ちのビーム・マシンガンを構えていき、距離を詰めながら弾幕を張っていった。敵機は回避運動を行うものの、やはり通常のモビルスーツより運動性能は制限されるようで、回避までのタイムラグが確認出来た。それを目の当たりにした部下達も瞬時に弱点を理解すると、各々が四方から敵機に向けて距離を詰め始め、同じようにビーム・マシンガンで弾幕の雨を降らせていく。

『おっと、危ねえ！』

敵機もただ回避しているだけではない。隙を見てメガ・ビームランチャーを構えると、ギラドーガの1機に向けて放つ。……が、攻撃は間一髪で躲して見せた。

出力、威力、射程、そのどれもが一級品の戦闘力を秘めた武器だが、トリガーを引いてからビームが発射されるまで、バレル内で粒子を圧縮するタイムラグが発生していたのである。歴戦の猛者揃いのリベリオ部隊にとって、超遠距離からの奇襲攻撃こそ防げなかったものの、間合いが取れる近距離戦となれば回避は容易かった。またも弱点が垣間見れると、リベリオ部隊の士気は更に回復し、あのガンダムを仕留めるのは今だという機運が高まっていく。

「行けるわよ、アンタ達！そのまま畳み掛けなさいっ♡」

リベリオも普段の調子を取り戻していき、声にも弾みが出てきた。こうなったらリベリオ部隊はもう止められない。全機が四方を囲みながら、敵機の行手を阻むようにビーム・マシンガンを撃ち込み続けていく。

すると、敵機はブースターを全開にし、凄まじい加速でこの包围を強引に突破してみせた。仕切り直しを狙っての事だろう、こちら側と

距離を取ってメガ・ビームランチャーの発射タイミングを作り出そうという意図が見て取れる。

「時間を与えちゃダメよ、距離を詰めなさいっ！」

下手に距離が空いてしまえば、メガ・ビームランチャーを自由に使われてしまうと察したリベリオは、部下達に素早く指示を出している。ランチャーだけではない、背中に装備されているフィン・ファンネルを使わせない為にも、出来るだけ接近戦に持ち込む必要があるのだ。

だが、そんな彼らの思惑を打ち砕くように、予想外の場所から思わぬ攻撃が飛び出してくる。

「ッ——!?!回避よ、回避!!」

リベリオ部隊に対して正面を向いた敵機は、メガ・ビームランチャーを構える訳でもなく、フィン・ファンネルを射出する訳でもなく……大量のマルチミサイルを発射したのだ。

『なっ、なんだこりや……ッ、うあ——……』

『くそッ、くそおッ!!』

『逃げ切れねえ、ぐああッ——……』

リベリオの叫びも虚しく、不意を突いて発射されたマルチミサイルの嵐はギラドーガ達を飲み込んでいき、次々と撃墜されていってしまふ。辛うじて距離を取っていたリベリオ機は、飛来してくるマルチミサイルを冷静に見極め、ビーム・マシンガンの迎撃射撃で撃ち落とす事が出来たものの、あつという間に半数以上の味方機を失ってしまった。

「……化け物め……ッ。」

リベリオが吐き捨てるように呟いた言葉は、敵には届かない。

生き残っているのは、自身を含めて片手で数える程。とてもではないが、ガンダムを相手に勝てる未来が見えなくなっていた。こうなれば、取るべき手段は最早1つのみ。

「バルバロイ、準備して頂戴！」

※

ガンダム・セレーネは、シーナ・ランチェスターという乗り手を得て、その圧倒的な力を発揮しつつあった。

「当たった…、次…！」

セレーネのセンサー性能に加えて、サイコフレームを通して生身の肌感覚でメガ・ビームランチャーを構え、引き金を引く。一瞬の間にビーム粒子が急激に圧縮され、反動を感じる程の出力が解放されていき、2発目のビーム砲は一直線に宇宙の海を駆けていくと、遙か彼方のギラドーガに命中した。爆発の光を確認すると、センサーが捉えている熱源反応が1つ消失する。

敵機の数は、熱源反応を見る限りでは残り15機。その更に後方に大型の高熱源反応がある。恐らくは輸送船を襲撃した敵艦だろうと推測できる。先ずは前衛であるモビルスーツ部隊を突破し、政府代表団の安否を確認しなければならない。

「行くよ、セレーネ…ッ！」

私はコンソールパネルのスイッチを素早く押し、ブースターユニットを全点接続させると、足元のスラストペダルを床まで目一杯踏み込んでいく。すると、射撃の為に緩めていたブースターが全開に作動し、凄まじい推力を以て暴力的な加速をかけながら、敵モビルスーツ部隊へ向けてセレーネは突撃を敢行した。

「う…：…ぐ、う…：…ッ…！」

ブースターユニットの推進剤は残り40%。長距離巡航で消費した部分が大いなもの、ここから先は推進剤の消費が最も激しい戦闘機動となる。加速の凄まじいGに耐えながら、私は揺らぐモニター画面を睨みつつ、有視界領域に入った敵機の反応を確認していく。流石に先程の長距離狙撃に警戒したようで、15機のギラドーガは散開しながらセレーネとの間合いを取っている。

選択肢は3つ。このままメガ・ビームランチャーの攻撃を行うか、フィン・ファンネルを射出してオールレンジ攻撃を行うか、新装備で

あるマルチミサイルで一網打尽にするか。だが、これだけ散開されてしまえばミサイルは容易に対処されてしまうので、早々に除外されていく。フィン・ファンネルは防衛のカードとして残しておきたいという気持ちもあり、これもまた除外される。そうなれば、答えは1つだ。「ッ……………」

メガ・ビームランチャーを再び構えようとした最中、1機のギラドーガがこちらへと突っ込んで来たのが見えた。背中に巨大な棒状の兵装を背負う独特な風貌のギラドーガは、ビーム・マシンガンを構えてセレーネへと牽制射撃を行ってくる。

この攻撃はブラフではない、確実にセレーネに当てに来ている。サイコミュが受信した敵の感応波から、私はそう感じたのだ。咄嗟に思考をサイコフレームへと飛ばし、回避運動に入っていく。

「くっ、そ……重い……………ッ……！」

両脚部がブースターユニットに接続され、固定されてしまっている。敵機の攻撃に対しての回避動作に遅れが生じてしまっている。横方向へのスラストを噴射するものの、弾幕の雨と化しているビーム・マシンガンの攻撃を避けるだけで精一杯だった。

懐に入り込まれたら不味い。そう感じながらメガ・ビームランチャーを構え、別のギラドーガへ向けてトリガーを引いていく。

「そ……ッ……！」

だが、高出力が故に発射までビーム粒子を圧縮するタイムラグが生じてしまい、タイミングを測られビーム砲の攻撃を躲かされてしまった。私はヘルメットの中で小さく舌打ちをすると、敵意を受信したサイコミュの感応波に反応し、攻撃の手を止めて回避に専念していく。

統率力を発揮し、敵部隊はセレーネとの距離を詰めながら、一斉にビーム・マシンガンの弾幕を展開してきたのだ。懐に飛び込めば有利に戦えると、初手でやられてしまったからである。完全に私の悪手だが、どうにかして状況を打開しなければならぬ。

「くっ……そ……、痛いな、もう……………ッ……！」

縦Gだけではない。横や斜軸にもGが身体に容赦なくかかり、まだ完治していない私の身体は徐々に悲鳴を上げ始めていた。セレーネ

の推力に合わせて調整した、耐G負荷軽減システムを内蔵したパイロットスーツと言えども、生身の身体が万全でなければ意味がないのだ。痛みを顔に響めながらも、それでもスラスターを細かに噴射し、スラスターの噴射推力を自分の思考と感覚でコントロールしながら、ギラドローガ部隊の波状攻撃を紙一重で回避していく。

——そのまま畳み掛けなさい——

「……その気なら……ッ！」

サイコミュが再度受信した敵意、それが脳裏に言葉となって私の思考に入り込んできた。敵は接近して一気に叩くつもりらしく、このままではこちらが捌り殺しにあつてしまう。

だが、これはチャンスでもあると瞬時に判断した。距離を取れば、今度は散開せずにこちらへ近付いて来るだろう……と。それを利用させてもらおうと思った瞬間、私はスラスターペダルを踏み込んでスラターユニットを全開にさせた。

「まだ、保つてよね……セレーネ……ッ……！」

コンソールパネルに表示されているスラターユニットの推進剤残量は、残り18%。恐らくはこの攻撃が最大にして唯一のチャンスかも知れない。

急加速をかけたセレーネは強引にギラドローガ部隊の包囲を突き破り、一気に敵部隊との距離を取る事に成功する。

「そうだ、もつと来い……！」

後方に目をやると、予想通り敵部隊はセレーネの後を追いかけるように追尾して来ていた。常に距離を詰めて接近戦に持ち込もうとする意図がハッキリ感じられると、ある程度引き離れた所で機体を180度急旋回させていく。

敵部隊に対して真正面を向き、コンソールパネルの“WEAPON”を選択すると、新たに追加された装備であるマルチサイルをタップし、照準を合わせ始めた。スラターユニットの両側に備え付けられたミサイルコンテナの発射口が開き、15機のギラドローガを全て

ロックオンしていく。

「これで終わりだッ!!」

操縦桿のトリガーを引き、マルチミサイルが一斉に発射されていく。コンテナ1基につき8発、合わせて32発のミサイルが撃ち出され、ギラドーガ部隊に襲い掛かっていった。

1機：また1機……。モニター上で捉えていた敵機の反応が潰えていき、次々に爆発が起こっていく。マルチミサイルはその物量と誘導性能に物を言わせ、あつという間に敵部隊を屠ったのだ。辛うじてミサイルの弾幕を迎撃し、生き延びる事が出来た機影は6つ。ここまで数を減らす事が出来れば、後はファンネルを用いたオールレンジ攻撃で一気に殲滅するまでだ。

「行けっ、ファンネル……!」

私の感応波をサイコミュを通じてファンネルへ伝達し、背部ファンネルラックから6基のフィン・ファンネルが射出された。ファンネル達は狙いをつけ、残存するギラドーガ達へ向けて複雑な軌道を描いて距離を詰めていく。

これでモビルスーツを排除し、残る敵艦を無力化して人質を救出する。そうすればこちらの勝利だ。ファンネルへ攻撃命令の感応波を送ろうとした、正にその時……

『聞きなさい、ガンダムのパイロット!これ以上攻撃を続けければ、人質を処刑させてもらうわ!』

オープンチャンネルで割り込んできた、敵による無線。それと同時に、セレーネのコックピット内にあるコンソールパネル上に、敵艦からのリアルタイム映像画面が表示され、人質として囚われている連邦政府代表団の面々が映し出されたのだ。

「ッ——」

私は咄嗟にファンネル達への指示を変え、一旦攻撃を中断してギラドーガ達と距離を取る。こんな直接的な脅しをされてしまえば、迂闊に手を出せない。ヘルメット内で舌打ちをすると、どうすればいいか

思考を巡らせていくが……その前に敵が動き出す。

『そうそう、大人しくしてなさいガンダム……下手な真似したら、1人ずつ頭を撃ち抜いてあげるから……♡』

敵の脅しが本気であると、コンソールパネルの映像越しに伝わってくる。10名の人質達を取り囲んでいる敵の兵士達は、皆銃を構えて人質達へ銃口を向けているのだから。

こちらが動けないと分かった以上、ギラドーガ達はセレーネを取り囲むように包囲し、ビーム・マシンガンの銃口を向けてきた。サイコミュの補助が無くても、私には明確に感じ取れている。彼らがガンダムを憎み、恨み、殺しても殺し足りない程の殺意を持っている事が。

『武装を捨てて投降しなさい、分かったわね?』

「……………」

『素直に従うつもりが無いなら……人質が1人死ぬわ♡』

敵の言葉と同時に、人質の中から1人の女性が蹴り飛ばされ、床に倒れていくのが見える。女性の頭部に銃口が突きつけられ、泣きながら命乞いをしているのがリアルタイムで映し出されており、私は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて武装を解除していった。

「ほら、捨てたよ……だから人質には手を出さないで……ッ……!」

『よしよし、いい子ね♡……アンタ達、出番よ!』

敵の一声で生き残りのギラドーガ達はセレーネを包囲し、各機がショックアンカーを射出して来た。身動きの取れないこちらは、頭部、両腕部、そして大腿部付近にアンカーが命中し、拘束されるようにアンカーが巻き付いてしまう。

「く、そ……ッ」

物理的にも精神的にも反撃の手段を封じられ、正に万事休すと言った所か。この拘束をブースターの最大出力で振り切ろうと思えば……不可能ではないだろう。だが、そうすれば確実に人質が殺害されてしまう。何も出来ない状況に、ただ私は奥歯を噛み締めていく。

『ガンダムは頂くわ……♡でも……パイロットには死んでもらうわよ!!』

次の瞬間……ショックアンカーに高出力の電流が流され、セレーネの外部装甲を伝いながらフレームにダメージが及び、電流はコックピツ

ト内部をも侵していく。

「うッ、あ…ッ…！ああ」あアアああ——！！？」

操縦桿から、シートから、足元のスラストペダルから…有りとあらゆる身体と接している箇所から電流が体内に流れ込んで来て、視界が何度も弾けながら内側から焼かれていく感覚に襲われていく。余りの激痛に絶叫が勝手に出てしまいがちながら、思考も視線も定まらず、電流に焼かれる脳裏に駆け巡るのは…カトレアの姿だった。

(…こんな、所で…私は…ッ)

死が目前まで見えた瞬間、予期せぬ事態が起こる……

『なっ……!? ファンネルが…!』

…突如として辺りを漂っていたフィン・ファンネル達が動き出し、電流を流してセレーネを拘束していたショックアンカーを全て撃ち抜いたのだ。アンカーが切れた事で電流の衝撃は止まったものの、感電の影響で思考も視界も未だ定まらず、今どんな状況になっているのかさえ把握出来ないでいる。

フィン・ファンネルは、シーナ・ランチエスターの生存本能だけで自動攻撃したのだ。いや、この場合は防御機構と言うのが正しいのかもしれない。だが、この攻撃を目の当たりにしたりベリオ・ビアンキは、驚きと共に声を張り上げ…人質処刑の命令を下していく。

『抵抗したわね…ッ、処刑よ処刑!!』

「やめ、ろ…ッ…！やめろ…！やめろおおッ!!？」

……私の必死の叫び程、虚しいものはない。乾いた銃声がモニター越しに響き、見せしめに人質の女性が頭を撃ち抜かれ、血と脳髓を撒き散らしながら処刑された。

「あっ……ああ……ッ……」

感電の影響で未だ痺れる手を辛うじて動かし、コンソールパネルに映し出された通信映像画面に触れていく。もう動かない亡骸、凄惨な現場の恐怖で固まる他の人質達、下品な笑いを浮かべる敵兵達……。

悔しさと悲しみに、自然と涙が流れる。ゴードン隊長だけでなく…

私はまた1人、救う事が出来ずに見殺しにしてしまった。その悲しみはやがて怒りに変わり、身体中の血液が沸騰し、涙を流すその瞳に明確な闘志と殺意が宿る。

『さあ、分かったかしら？♡次に動けばまた1人処刑して……』

「ああ……ああ……ッ、あああああああああああ——

!!!」

悲しみと怒りの感情を爆発させ、私は咆哮する。それと同時に……セレーネもまた、私の想いを乗せて超常的な現象を発生させた。

全身に組み込まれたサイコフレーム。その赤い光が一段と輝きを増し、セレーネの全身を包み込んだ後に、その光はまるで衝撃波のようにこの宙域に解き放たれていったのだ。

『なっ……、機体制御が……!』

『くそっ、メインジェネレーターがイカれたのか……!?機体が……動かねえ……!!?』

『隊長、リベリオ隊長!応答して下さい!』

『くそ……通信も繋がらないわね……ッ。システム自体がダウンしてるみたいだわ……ッ、何なのよこれ……!!』

『こ、こちらバルバロイ!機関停止、航行不能!一体何がどうなってんだ……ッ!』

『火器管制も操舵もダメだ、バルバロイのシステム全部がダウンしてやがるみたいだぜ……ッ、ちくしょう……一体何なんだこれは……!!?』

原因不明の状況に、敵は皆狼狽えるばかり。バルバロイの乗組員達も、モビルスーツ隊との通信と艦の制御が遮断され、人質よりも艦の機能回復に意識が逸れていく。

「許さない……お前らみたいなの……人間の屑は……ッ!絶対にッ!!?」

私は推進剤を使い切ったブースターユニットをパージし、セレーネ本体の姿にさせていくと、スラストペダルを床まで踏み込み、動か

なくなった敵モビルスーツへと襲い掛かっていった。

メガ・ビームランチャーを失ったセレーネは、両手にビームサーベルを握り、辻斬りのようにギラドーガ達を切り裂きながら更に増速していく。切り裂かれたギラドーガは、成す術なく機体を両断され、セレーネが過ぎ去った後に次々と爆散していった。メインモニターすら機能を停止した敵達にしてみれば、訳も分からないまま命を絶たれたのである。

「最後の……機……ッ……」

残るギラドーガは1機のみ。私を散々煽った隊長格の機体である。怒りを力に変えて、操縦桿を目一杯押し込み、トドメを刺そうとビームサーベルを構えながら肉薄していき……

「ッ………、視界……が……」

……突如として視界が歪み、手に力が入らなくなる……。

頭の中では今も燃え滾る怒りの感情が爆発しているものの、実際は感電の影響で身体が悲鳴を上げていたのだ。急激に視野が狭まり、暗くなり、程なくして私は意識を途絶えさせてしまう……。

その瞬間、セレーネから放たれていたサイコフレームの赤い光も消え、メインジェネレーターも機能を停止してしまった。

沈黙したセレーネの影響は周囲にも波及し、それまでサイコウェーブの干渉によって機能停止していた敵部隊は、突如としてシステムが復旧し、機器類の機能が回復したのである。

『一体、何がどうなって……。——!!な、なんて事……ッ……』

バルバロイから発艦したモビルスーツ部隊の中で、唯一の生き残りとなつてしまつたりベリオ・ビアンキ。彼が絶句してしまうのも無理はなかった。

ギラドーガ・カスタムのメインジェネレーターが再起動し、機体機能を回復した事により、彼は現在の状況を漸く把握する事が出来たのだ。モニターに広がる光景は、不気味な程に静かな宇宙の海であり、そこには夥しい数のモビルスーツの残骸が漂っている。どれもこれも、可愛い部下達の機体の残骸。あのガンダム1機にここまで壊滅的被害を被つたのは……自身の慢心故の過ちだと、認めざるを得なかつ

た。

『よくも…ツ、よくも…やってくれたわね…！ガンダム…ツ!!』

今度はリベリオ・ビアンキが、悲しみを怒りに変えて声を張り上げる。その言葉はシーナ・ランチェスターには当然届かないものの、彼は動かなくなつたセレーネに向け、ビーム・マシンガン銃口を向けて構えていく。

『ツ——！熱源…ツ!?!』

しかし、彼がトリガーを引く事はなかった。否…出来なかった。

突如としてコックピット内にアラート音が鳴り響き、遠方からビーム攻撃が放たれたのである。威嚇ではなく正確にギラドーガを撃ち抜こうとする射撃であり、いち早く察知したりベリオは回避運動を行い、ギリギリの所でビームを躲していく。

『敵……ツ、増援部隊ね……！』

この攻撃には見覚えがあつた。マゼンタ色のビーム、そして出力の高さ…何よりも殺意の高い正確な射撃。彼の予感程なくして確信に変わり、つい舌打ちをしてしまった。

『てめえか、オカマ野郎…！』

忘れもしない、自分が手を下して初めて逃してしまった敵…あの可変モビルスーツだった。『プロトタイプ・リゼル』と呼ばれる、連邦の次期主力と目される試作可変モビルスーツである。ミノフスキー粒子の濃度が薄くなっている影響もあり、ムカつく敵の声が通信に乗ってコックピット内に響いてきた。

リベリオはすかさず反撃しようと、ウェイブライダー形態のリゼルに向かってビーム・マシンガンを発射していく。だが、敵の機動力は明らかに以前とは比べ物にならない程に高く、ギラドーガの照準補正が追いつかず、ビームはどれも敵機を捉えきれないでいた。

それもその筈である。敵機もガンダム同様に、後付けのブースターユニットを装備しているではないか。リベリオはまたも舌打ちをしながら、ならばと接近戦に持ち込もうと思ひ、距離を詰めようとスラストターを噴射していく。

『隊長！リベリオ隊長、無事ですかツ!?!敵の増援が迫ってますぜ、急い

でイサベルへ撤退を…!』

そんな最中、またも別の人物の通信が割り込んできた。聞き慣れたその声は、バルバロイに残してきた副長の声だ。かなり焦った様子で、現在自分達が置かれている状況を告げ、撤退を進言してきている。

『チツ……、忌々しいわね…ツ……。撤退するわ!』

確かに、モニターで捉えているリゼル以外にも、後方から複数の熱源が接近しているのをセンサーは捉えていた。コンソールパネルのレーダーにも、熱源反応が3つ表示され、どれも高速でこちらに接近している。

リベリオは直ぐに撤退の判断を下すと、腰部に備え付けてあるクラツカーを左手で握り、それをリゼルに向けて放り投げた。

『ツ……、くそ……!』

プロトタイプ・リゼルで突貫してきたローマン隊長は、クラツカーが放り投げられた事を察知すると、ウェイブライダー形態からモビルスーツ形態に緊急変形し、シールドを構えて直撃を防ぐ体勢を取っていく。だが、シールドに当たる直前…クラツカーは自ら炸裂した。

眩い閃光がクラツカーから放たれ、ローマン隊長はモニターを直視していたばかりに、その閃光に目を潰されてしまう。それだけではない、炸裂した閃光にはジャミング効果も含まれているようで、リゼルの頭部センサー機能を一時的に阻害したのだ。

『隊長、大丈夫ですか?!』

『ああ、悪い…やられちゃった…ツ。それより…敵は?少尉は無事か…っ?』

まだ目を開けられず、状況が確認出来ないローマン隊長の元に、部下である他のリゼルとジェガン2機が追いついて合流を果たす。通信を介して部下に今の状況を伝えてもらうと、どうやら敵は今の目眩しの合間に素早く撤退したようで、既にこの宙域から敵艦と共に離脱したようだ。それと同時に、ガンダム自体に目立った損傷はない事も伝えてもらうと、ローマン隊長はホツと胸を撫で下ろしていく。

『しかし…シーナ少尉からの応答はありません。メインジェネレーターも停止してますから…一体何があったのか……!』

『あいつはしぶとい、こんな事で死ぬような奴じゃねえさ……。……推進剤も残り少ない、味方の到着を待つぞ』

ようやく目が開けるようになり、ローマン隊長はモニターを見渡しながら、計器類にも目をやっていく。ブースターユニットでかなりの推進剤を消耗したので、ここから追撃に移るには補給が必要だ。加えてガンダムも沈黙している現状では、敵艦を足止め出来るような状況ではなく、こちらも立て直しを余儀なくされている。

ローマン隊長の下した決断は、ガンダムを守りながら周辺の警戒を続け、ラー・ネイジユの到着を待つ……というものだった。部下達もその決定に異論はなく、皆周辺の警戒行動に移行していく。

『……俺達の負けだな……。』

連邦政府代表団を救出出来なかった。その悔しさを滲ませながら、ローマン隊長は静かに独り言を漏らす。

——イサベルのネオ・ジオン軍と、ロンド・ベル。2つの勢力による戦いは、この日を境に更に激化の一途を辿る事になるのであった——

第12話『モビルビツト』

「……………あ……………」

目覚めると、見慣れた白い天井が見える。ふわふわとした感覚に全身が包まれているようで、四肢を動かそうと思考を働かせても、身体が言う事を聞かない。まるで、ここは夢の中のような…夢現な感覚が、シーナを支配していた。

「……………、大丈夫か…シーナ？」

「…カト…レア……………。そっか……………私……………」

目覚めた私を心配そうに見つめているカトレアの姿を確認すると、ゆつくりと口を開きながら言葉を発していく。良かった、喉は潰れていないようだ。彼女が居る事で、ここがラー・ネイジユの医務室なのだと把握し、再び身体を動かそうと力を入れてみた。

「……………なんとか、大丈夫そう……………かな……………」

今度は身体の感覚も掴めるようになり、上半身を起こしてみる。多少動き辛さを感じるものの、時間が経てば普通に動かせそうではあった。そんな私の様子を見ているカトレアの表情は、何処か複雑そうなのが気になってしまう。

「…カトレア、うちの制服似合ってるよ」

よく見ると、彼女は連邦軍の制服を纏っていた。常に患者用の服を着ている訳にもいかないだろうから、女性用の予備を貸し与えたのかもしれない。私の言葉を聞いて、彼女は僅かに微笑みを見せてくれた。

「……………エヴァ少尉が貸してくれてな。」

「…そっか。」

少し前まで、エヴァはカトレアを敵視し続けていたし、カトレアを気遣う私を良く思っていなかった。そんなエヴァが自分の予備の制服を彼女に貸すなど、普通であればあり得ないだろう。

彼女の表情を見る限り、エヴァとの間に何か確執があったり、衝突があったようには見えない。きっと私の知らない所で、お互いの人と

なりを理解し合えた時間があつたのだろう。そんなエピソードを聞くよりも前に、彼女の方から神秘的な表情で意味深な言葉が放たれた。「…ドクターは直に戻ってくるだろう。それから…お前が眠っていた間の事を、話した方がいいだろうな。」

「…私が眠っていたって…、どのくらい？」

「…約2週間。」

彼女の言葉に、つい目を丸くしてしまいながら口がぽっかりと空いたまま呆然としてしまった。2週間も眠っていたと言われて、なるほどと納得出来る方がどうかしている。だが、身体が直ぐには動かさず鉛のような感覚だった事を思い返すと、徐々にではあるが現実の事なのだと思え止めていく。

「…聞かせて、カトレア。私が眠っていた間の事。」

彼女は小さく頷きながら、言葉を並べていった。

…カトレアから聞いた話を簡単に纏めるなら、この2週間で私達を取り巻く戦況は大きく変化したようだ。彼女が言うには、小惑星イサベルのネオ・ジオン軍と地球連邦政府の間で、秘密裏に協定が結ばれたらしい。それは、人質として捕えられた連邦政府代表団の身柄を解放する事と引き換えに、地球側が掌握しているコロニーを1基譲渡するというものだ。人命とコロニーの交換という事にはなるが、イサベル側の主張としては『老朽化した小惑星を廃棄し、多数のイサベル内民間人の新たな生活拠点構築の為』だとしていると言う。その事については、カトレアが明確に否定したのが私には印象に残った。「イサベルは強固な軍事要塞であり、100年は余裕で維持出来る居住空間も作り出している。そう簡単に手放すような代物じゃない」…との事。つまり、このコロニー譲渡は新たな火種になり得ると言う事だ。

それだけではない。ロンド・ベルによる軍事抵抗と作戦行動を容認し、支持を続けてきた地球連邦軍の上層部一派が、政府の圧力によって軍中枢から排斥され、事勿れ主義となった政府に迎合する勢力が掌握したのだ。今後イサベルのネオ・ジオン軍と事を構えるには、満足のいく補給が受けられない可能性が出てくるらしい。幸いにもセレーネや既存のモビルスーツ部隊の整備補給は済んでおり、大破した

ルミナスガンダムもほぼ修繕と改修が終わった事が、唯一の救いか。「それと…、私はお前が眠っている間に艦長や副長達と話し合い、情報支援と戦闘アドバイザーとしてブリッジに詰める事になった。…今の私にとつて、お前が居る場所が私の帰る場所だ。イサベルが敵になった以上…お前達の力になると決めたよ。」

「…：そっか。ありがとう、カトレア。」

こんなにも詳細な情報を何故彼女が知っているのか、その理由がようやく分かった。アンダーソン艦長やエリス副長達は、カトレアの事を理解し、私達へ害を及ぼす存在ではなくなったと信じ、ギムレット・クルスに立ち向かう為に協力関係を結んだのだ。同時に、彼女の存在は今の連邦軍上層部に知られてはいけないのだとも理解し、カトレアの存在が漏洩すれば私達の立場も今後危うくなる可能性は否めない。「でもさ…、よく艦長や副長が許可してくれたね?」

「…働かざる者食うべからず、という奴だ。」

話を聞くと、心身共に回復したカトレアは、このラー・ネイジュの雑務という雑務を自ら率先してこなし、言葉ではなく行動で信頼を得たのだと言う。炊事、洗濯、掃除…：それらをこの2週間近く毎日こなしていたと言うのだから、そんな彼女の姿を是非見てみたかったと内心思ってしまう。

「なんだ、目覚めていたのか?」

「あつ…ドクター…：すみません、またここに来てしまつて…：」

「何を言うかと思えば…：気にするな、少尉。」

カトレアとの会話の最中、医務室にDr. モーリスが戻ってくるのと、私はベッドの上で頭を下げながら謝罪の言葉を口にしていく。2週間もベッドの1つを占領してしまったのだ、兵士としては申し訳ない気持ちに苛まれてしまう。

だが、彼は私を責める事はせず、気さくな笑みを浮かべながら首を振っていた。その気遣いに、私は感謝をしながら再び頭を下げた。

「少尉、検査結果に問題が無ければ明日にでも復帰は可能だ。頭を下げるなら、艦長やローマン隊長、ウォルド主任にな?」

「…そうですね…ありがとうございます、ドクター。」

ドクターは変わらずに笑みを浮かべ、私のカルテに目を落としていった。カトレアはカトレアで、そんな私達のやり取りを柔らかい表情で見守ってくれている。

「…では、私はブリッジに戻る。明日からよろしく頼むぞ、シーナ。」
「ん……ありがと、カトレア。」

彼女が医務室から出ていくと、私は再びベッドに横になり、天井をぼんやりと眺めていく。様々な人に迷惑をかけ、人質を守りきれなかった私に出来る事などあるのだろうか…と、ネガティブな考えが頭を過り、右手を天井に向けて伸ばしながら自身の手のひらを見つめていく。

…もつと強くなりたい。大切なものを守れるように。その為には、操縦技術を磨き、自身の精神を強め、どんな困難にも立ち向かう覚悟が必要だ。それは分かっているものの、一方では不安な気持ちも拭えないでいる。今まで生きてきて様々な困難に直面しては乗り越えてきたが、今回ばかりはその壁が高過ぎる…と、つい考えてしまう。

「…随分と思い詰めているようだね、少尉？」

そんな私の考えを見透かしたように、カルテから視線を上げて私を眺めるDr. モーリスが話しかけてきた。私は掲げた右手を下ろし、彼へと視線を向けていく。

「…こんなんじゃない…死んだ父さんや母さん…ゴードン隊長に笑われちゃうなって、思ってる。」

不甲斐ない私の気持ちは、短い言葉に全て乗せて伝えていった。その一言だけで察してくれた彼は、小さく息を吐きながら笑みを溢している。

「…少尉、人間は皆不完全な生き物さ。ニュータイプだろうと同様にね。だが、不完全だからこそ…最善の方法を取ろうと努力をするのも人間だ。言葉を変えれば…過ちを受け止め、未来の可能性を広げるのが人間だよ。分かるかい？」

「…だから、どんなに辛くても、悲しくても…それでも…前に進み続けろって事ですか？」

「そうだ、少尉。君はあのガンダムのパイロットなんだ。…猛獣を手懐けて、君の選ぶ未来を掴み取りたまえ。君の優しさは、きつといい未来に繋がっている筈だからね。」

「……ありがとうございます。」

Dr. モーリスは身体の傷を治すだけでなく、心を癒す術にも長けているようだ。腐りそうな私の心を叱咤し、前を向いて歩く事を促してくれる。彼の優しさは、今の私にはとても有難いものだった。

早ければ明日から実戦配備となる。私は視線を再び天井へと向け、ゆつくりと瞼を閉じていく。きつとゆつくり休めるのは今日くらいだろうと、なんとなくそんな予感を抱きながら……。

※

「この度の補給、感謝します。シュミット艦長。」

『これくらいお安い御用さ、アンダーソン艦長。うちの社長からの命令でもあるからね。』

「然し……我々の現状は艦長も聞き及んでいる筈。もし軍側から圧力が掛ければ……」

『何を言っている、私は軍人じゃない…民間企業の職員さ。例え連邦軍の圧力があるうが、君達を支援し続けるよ。』

「……ありがとうございます。」

ラグランジュ・ポイント3の宙域に進出したラー・ネイジユに対して、補給を行う為に到着したアンバークイーン。補給作業はシーナ・ランチエスターが意識を取り戻す数刻前に完了し、現在はドツキングを解除してラー・ネイジユは出航を果たしていた。アンバークイーンを離れる際、アンダーソン艦長とシュミット艦長は、通信回線で別れ際の挨拶を交わしていく。

ラー・ネイジユを取り巻く現状は厳しい。地球連邦政府の弱腰な姿勢は、遂に軍内部にまで影響を及ぼしてしまい、アンダーソン艦長を始めロンド・ベルの作戦行動を支えてきた將軍一派が失脚したのだ。ロンド・ベル隊の作戦指揮権は正規軍とは独立しており、行動自体は

正当性が担保されているとは言え、直接的な支援は今後期待出来ないのが現実だ。そんな中、独自にロンド・ベルへの支援を表明する企業が存在していた。

アナハイム・エレクトロニクスである。

『では、アンバークイーンはフォン・ブラウンに向けて発進する。アンダーソン艦長、貴艦の幸運を祈るよ。』

「はっ…、シュミット艦長もお気を付けて。」

通信を終え、アンバークイーンは月方面へと進路を向け、この宙域から離れていく。その姿が遠ざかっていくのを、アンダーソン艦長他ブリッジクルー達は、モニター越しに眺めていた。

「…これで当面の作戦は可能となりましたね、艦長。」

先に口を開いたのは、副長席に腰掛けているエリス中佐。アンバークイーンによって供給された補給物資のリストを眺めながら、僅かに安堵の声を滲ませて呟いている。アンダーソン艦長は小さく頷きながら、エリス副長に指示を出していく。

「まずは人質を救出する事が急務となるだろう…、各長とパイロット達をブリーフィングルームに集めてくれ。」

「はっ、了解しました。」

エリス副長は直ぐに艦内放送用のマイクを手に取り、ブリーフィングルームに集合するよう呼集をかけた。それに合わせ、アンダーソン艦長は補助席に座るカトレア・ペントラスへと視線を向けていく。

「貴殿にも同席して欲しい。宜しいか?」

「…了解した、アンダーソン艦長。」

「では、留守を頼んだよ。副長、エヴァ少尉。」

アンダーソン艦長以下、主だった各部署の責任者である長の面々がブリッジを出ていき、そこにカトレア・ペントラスも加わってブリーフィングルームへと向かい移動していく。

次の作戦については、既にカトレアや艦長ら、そしてローマン隊長を加えて協議がされており、後は作戦内容をパイロット達やメカニックへと周知させるだけとなっていた。そんな最中、移動中の通路にて1人の男性がアンダーソン艦長へと声をかけていく。ガンダム開発

主任のウォルド・シャウラだ。

「艦長：2分だけ時間を頂けないでしょうか？」

アンダーソン艦長は足を止めると、他の面々に先に行くよう促し、ウォルドの問いかけに応える形で向かい合っていく。

「手短に頼むよ、ウォルド主任。」

「ありがとうございます、艦長。……こちらを。」

彼は艦長にある資料を手渡した。表面には何も書かれていない、黒一色の資料。アンダーソン艦長は表紙を捲り、中に書いてある内容へと目を通し始めていく。

たった数ページ、それも文字ではなく図面や設計図の類が描かれているもの。だが、その中身を見ていくアンダーソン艦長の表情は徐々に変化していき、目を見開きながら息を呑んでいた。

「……ウォルド主任、こんなものをアナハイムは……」

「いいえ……これは社長や上層部には知られていない、極秘のプロジェクトです。私と、私の息がかかった部下達や協力者の手によって……ほぼ稼働状態まで完成してあります。この兵器は、イサベルと事を構える以上、必ず必要となるでしょう。」

「……それはそうだろうが……、主任……。君は大丈夫なのかね？」

「……恐らく私の地位は無くなるでしょうし、命も狙われるかもしれません。それでも……私はシーナ少尉の可能性に賭けたいのです。どうか少尉と私をグラナダに向かわせる許可を頂ければ幸いです、艦長。」

アンダーソン艦長は暫し言葉を飲み込み、口を閉ざしながら考えに耽る。人質救出作戦に際し、シーナ・ランチエスターの駆るガンダム・セレーネは主力として機能してもらおう予定でいた為、作戦を一から練り直す必要性が出てくるからだ。

作戦自体の時期をずらすか？否、それは出来ない。コロニーがイサベルのネオ・ジオンの手に渡れば手遅れとなる。そうなる前に人質を救出し、コロニーの譲渡を阻止しなければならぬ。かと言って、ガンダムが不在の状態で作戦を完遂出来るかと言えば、かなり危ういと言わざるを得ないだろう。戦力を増強する意味では、今直ぐにでも2

人をグラナダへ向かわせるべきなのだろうか……

「……アンダーソン艦長、私が出よう。」

「っ……カトレア閣下……聞いていたのかね？」

通路の角から姿を現し、2人へ声をかけてきたのは、先にブリーフィングルームへ向かった筈のカトレア・ペンタスだった。アンダーソン艦長は一瞬驚きの表情を浮かべ、ウォルド・シャウラは真剣な表情を浮かべて彼女をそれぞれ見つめていく。

「ガンダムによる敵勢力への陽動が無ければ、イサベル内部へ救出部隊を突入させる事は出来ん。その役目をあいつの代わりに私が受け持とう。……不安なら、コックピットに遠隔の自爆装置を仕込んでくられても構わん。」

カトレアの言葉は真剣そのものだった。自分が身を挺して覚悟を示し、離反の不安を抱かれる事も踏まえて逃げ道を自ら消してきたのだ。確かに彼女の操縦技量とニュータイプ能力があれば、シーナ・ランチェスターの抜けた穴を埋める事も可能だろう。

「……時間が無い。閣下、ブリーフィングルームに向かおう。ウォルド主任……少尉を連れてグラナダへ向かう事を許可する。」

「はっ……、ありがとうございます……アンダーソン艦長。」

アンダーソン艦長は決断を下し、カトレアを連れてブリーフィングルームへと向かっていく。その場に残されたウォルド・シャウラは、自分の部屋へと向かいながら、懐から携帯端末を取り出してある人物へ連絡を取り始めた。

「……私だ、艦長から許可を取り付けた。少尉と共に間も無くグラナダへ向かう……アルストロメリアをいつでも起動出来るよう準備を進めてくれ。」

『畏まりました、ウォルド主任。……社長に気付かれる前にお早めに。』

「……分かってる、そちらも気を付けるんだぞ。」

『ええ。……ああ、それから一つ伝えておきたい事が……』

「何だ？」

『アナハイム・エレクトロニクスの名で、地球の主要各都市部や連邦軍駐屯基地に輸送コンテナが送られているとの報告が上がっています。然し、我が社からそのような物資輸送の履歴は無く、コンテナも嚴重なロックが掛けられていて解錠が出来ないとの事。……計画を急いだが宜しいでしょう、主任。』

「……分かった。出来る限り急いでグラナダに向かう。では……」

端末の通話ボタンを押し、通話を切ると、ウォルドはノーマルスーツを着る為に足早に部屋へと向かう。妙にきな臭い動きが世界に広まりつつあるという情報に、胸騒ぎを覚えていた。

一方、同時刻。場所はラー・ネイジユのブリーフィングルーム。

ブリッジクルーの各長とモビルスーツ部隊のパイロット達、整備長に機関長と錚々たる面子が連ねており、皆アンダーソン艦長の入室を待っていた。これから始まるであろう作戦、その緊張感は既にこの室内に漂っており、楽観的な空気を出す者は一人として居ない。

「もう身体は大丈夫なのか？少尉。」

「はい、問題なく……。絶対に作戦を成功させます。」

「……あんまり気負うな、俺らも居るんだからよ。」

「……そうですね……」

モビルスーツパイロットの面々が腰掛ける席の中で、ローマン隊長とシーナ・ランチェスターは隣同士となっていた。隊長から気遣いの言葉を受けると、彼女は少しだけ目を伏せながら頷いていく。自分がやるべき役割、果たすべき責任を感じているからこそ、彼女に笑みは無い。そんな彼女を見つめるローマン隊長の表情もまた、複雑な感情を抱いたものだった。

次の瞬間、ブリーフィングルームのドアが開き、残る2名の参加者が室内へと入ってくる。アンダーソン艦長と、カトレア・ペントラスだ。出席者は全員起立し、姿勢を正しながら艦長へと視線を向けていく。

「休め。……皆、よく集まってくれた。これより作戦を説明する。」

艦長の一声に全員が着席していくと、ブリーフィングルーム内の室内灯は消灯され、艦長の背後にある大型のモニターによる発光が室内

を照らしていく。一層緊張感が増し、全員の表情が引き締まっていくと、アンダーソン艦長とカトレアはモニターを使いながら作戦を説明し始めていった。

「今回の作戦は、小惑星イサベルに捕えられた人質救出が主任務となる。敵防衛部隊への奇襲と陽動を敢行し、敵の注意を引きつけている間に陸戦部隊をイサベル内へ突入させる。イサベルの情報については……閣下、説明を頼む。」

「…了解だ、艦長。小惑星イサベルは複数の巨大核融合炉を最奥部に備えてあり、その膨大なエネルギーとミノフスキー粒子の応用を効かせ、常時惑星全体を光学迷彩で覆っている。目視やレーダーによる探知は不可能だが…凡その位置は判明している。我々が向かうべきポイントとは……ここだ。」

バトンを受け取ったカトレアが説明を始めていき、モニターの画面内容を変えていく。そこには、2週間前にセレーネと敵部隊が交戦した地点と、敵艦の逃走経路、そしてイサベルの予測地点が表示されていた。予測によれば、小惑星イサベルはL3宙域に存在している事を示している。

「光学迷彩の消費エネルギーによって、イサベル自体は殆ど移動が出来ない。よって、この地点に潜伏している可能性が高いだろう。次に…これが小惑星イサベルの内部構造だ。」

カトレアが次の画面に切り替えると、今度は小惑星イサベルの全体像と、細かな内部構造の図面データがモニターに表示された。司令室、管制室、ブリーフィングルームは勿論の事、民間人の居住スペースやモビルスーツの格納庫、戦艦を係留するドック、新型モビルスーツ開発工場、スペースゲートの位置まで、事細かに表示されている。これはカトレア・ペンタスの記憶を頼りに作成されたデータであり、天才的な頭脳を持ち完成された強化人間である彼女の成せる技とも言える。

「人質が収容されている可能性がある場所は…この地下ブロックの牢獄だ。ここは犯罪者を収容する為の場所だが、人質を隠すにも絶好の場所となる。この牢獄に最短ルートで行く為には、7番スペースポ―

トから徒歩で行く他ない。……激しい抵抗が予想されるだろう。」

カトレアの説明はここまでのようで、彼女はアンダーソン艦長に目配せをしていく。再び説明のバトンを受け取った艦長は、次の画面に切り替えて説明を続けていった。

「部隊編成を伝える。迎撃に出て来るであろう敵艦、及び防衛部隊の奇襲と陽動には…ガンダム単騎で行ってもらおう。その他のモビルスーツ隊は、上陸ルート確保と艦の護衛につくように。ラー・ネイジュはガンダムと連携し、イサベルへの陽動と攪乱を行う為、後方から艦砲射撃とミサイルで応戦した後にスペースゲートへと突入。以降は陸戦部隊が任務を完了して帰還するまで、ゲートを封鎖、維持し続ける…ローマン隊長、護衛部隊の指揮を頼んだよ。」

「はっ…、了解です艦長。」

「敵部隊を引きつけ、陽動に出るガンダムだが…先刻修復が完了したルミナスガンダムに出てもらおう。搭乗員、カトレア・ペントラス。」

この発言を聞いた瞬間、ブリーフィングルーム内が俄かにざわつき始める。その中でも特にシーナ・ランチェスターの反応が顕著だった。

「艦長、なんで…ッ、」

「尚、シーナ少尉は別途特命任務がある為、ガンダム・セレーネとゲタを使い、ウォルド技術主任と共に至急グラナダへと向かうように。…以上だ、質問はあるかね?」

彼女の言葉を遮るようにアンダーソン艦長は捲し立てていき、任務説明は終わった。流石にこれには強気なシーナと言えど口を挟む事は出来ず、言葉を詰まらせながら口を噤んでいく。いや、それ以上に気になる発言があった。特命の任務…そしてウォルド・シャウラと共にグラナダへ向かえというものだ。

室内のざわつきは徐々に収まっていき、皆覚悟を決めたように鋭い目つきをしていた。あのアンダーソン艦長がガンダムにカトレア・ペントラスを乗せる事を許可したのだ、それ以上に信ずる事の出来る理由など有りはしない。クルーやパイロット達は、皆艦長を信頼しているのだ。

「では、作戦開始まで交代で休息を取るように。以上、解散。」

アンダーソン艦長の一声に、全員が席から立ち上がり敬礼をしていく。それを受ける艦長もまた、全員に向けて敬礼を返していった。ブリーフィングルームの室内灯が再度点灯し、モニター画面の映像は消え、皆それぞれ部屋を出ていく。そんな中、シーナ・ランチエスターはルミナスガンダム of 新たな担い手、カトレア・ペンタスの元へ歩み寄っていった。

「……カトレア。」

「…すまない、シーナ。お前の機体を使わせてもらう。」

「いいの…？あんたは、それで……」

「私は決めたのだ…お前と共に行くとな。それがかつて私を慕い、付き従ってくれた同胞に銃を向ける事になろうとも…迷いはない。」

「……ん…、……分かった…無事に帰ってこなきや承知しないから。せつかく私のガンダムを譲ってやったんだからさ。」

「…それはこちらの台詞だ。お前も…無事に私の元に帰って来い。」

確かな信頼の形が、そこにはあった。2人は不敵に笑みを浮かべ合い、軽くハグをして身体を離していく。その様子を見つめていたアンダーソン艦長の眼差しも優しい。間違いなく、カトレア・ペンタスはラー・ネイジユのクルーの一員となっていたのだった。

特命を帯びたシーナ・ランチエスターは、ブリーフィングルーム後にすると、急ぎパイロットスーツを着込んでモバイルスーツデッキへと向かっていく。艦長からの話によると、既にベースジャバーとセレーネの発進準備が進められていると聞いたからだ。

「来たか、少尉。」

「あつ…ウオールドさん。2人旅だね？」

「そんな気楽なものでもないが…そうだろうな。」

モバイルスーツデッキに入って直ぐ、通路に佇んでいたウオールド・シャウラが声をかけてきた。彼も既にノーマルスーツを着込んでおり、後はベースジャバーに乗り込むだけとなっていた。

「揃ったな、お二人さん！こっちの準備は出来てる、いつでも出られるぞ！」

セレーネの足元に居た整備長が、私達の姿を確認して声を張りながら呼びかけてくれた。私は直ぐに「了解、ありがとうございませす！」と返事を返すと、ウォルドへと視線を向けていく。

「行こう、ウォルドさん。説明は行きながら聞くから。」

「…そうだな、悠長に内容を話してる暇はない。」

お互いにヘルメットを被り、彼はベースジャバーのコックピットへ。私はセレーネのコックピットへと、それぞれ乗り込んでいった。既にセレーネはベースジャバーの背に膝立ちで掴まっている体勢となっており、後はこのままカタパルトデッキに上げられて発進するだけとなる。

「メインジェネレーター…：始動…、サイコミュシステムとの連動確認…：全天周囲モニター点灯、火器管制…：オンライン。スラスタ駆動確認…：よし。そっちはどう、ウォルドさん？」

『問題ない、航路の入力も済ませてある。後は行くだけだ。』

「了解…っ」

発進前の最終チェックを済ましていき、セレーネを載せたベースジャバーがカタパルトデッキへと上げられていく。第1デッキのハッチが開かれていき、星々の煌めく宇宙の海がモニターに映り込んだ。

そう言えば、2人だけで宇宙の海を飛んでいくのは…：出会ったあの日以来か。その間あまりにも色々な事が起こり過ぎて、もう数年前の出来事のように懐かしく感じてしまう。私はついそんな事を思いながらも、発進の為に操縦桿を前へと目一杯押し込んでいった。

「シーナ・ランチェスター、ガンダムセレーネ…：行きますす！」

カタパルトが勢いよく射出され、ベースジャバーごとセレーネは宇宙の海へと飛び出していく。直後、ベースジャバーのブースターが作動し、更なる加速をかけて飛翔していった。

加速Gの負荷はほんの一時であり、巡航速度に移行すると寧ろ快適なくらいである。ベースジャバーの自動操縦に任せながら、ウォルド・シャウラは通信を介してこちらに話しかけてきた。

『少尉、聞こえるか？』

「お肌の触れ合い回線でバッチリだよ、ウォルドさん。」

『それは何よりだ…、今回の任務についてだが…少々強引にある機体を受領しに行く。』

「…ある機体？」

『そう…うちの社長すら知らない極秘の機体だ。』

カトレアと私が互いに共通の敵として認識している、アナハイムの社長。その社長ですら把握していない機体がグラナダにあるという事に、私は内心驚いていた。その機体を彼は知っているという事はつまり……

「……ウォルドさんが作った機体なの？」

『…まあ、そんな所だ。月までの軌道は問題ないだろうが…管制レーダーに捕捉されれば、当然グラナダに守備隊が駆け付けるだろう。その前に機体を起動し、小惑星イサベルへと向かう。』

彼の言葉と共にとあるデータが転送され、コックピット内のコンソールパネルに表示されていく。その中身はアンダーソン艦長も目にした、例の機体の設計図や図面、そしてスペックの表だった。

そこに書いてある、機体のコードネームを口ずさんでいく。

「…アルストロ…メリア……、これって……」

『……セレーネの、本当の姿さ。少尉』

私は、その中身に戦慄を覚えていた……。

『モビルビット』（2）

宇宙に住む人々の揺籠、第二の故郷であるスペースコロニー。そのスペースコロニーの中でも、スペースノイドの自治独立を訴え、ネオ・ジオンの思想に寄り添うコロニー群もあれば、地球連邦政府の庇護下に参加するコロニー群もあり、コロニー毎に様々な特徴を有している。

サイド7に属するコロニー“ロウグ”。地球連邦政府の庇護下に入るコロニーの内の一基だが、思想としては中立に近い。ここには連邦軍の軍事施設も無く、またネオ・ジオンの軍事施設も有しておらず、人々は揺籠の安寧に心の安らぎを覚えながら生活を送っている。

「港長、最後のコンテナです。確認をお願いします。」
「ああ、今行くよ。」

ロウグのスペースゲートには、日夜様々な企業の輸送コンテナが運び込まれて来ており、現場で従事する作業員はコンテナの搬入受け入れと仕分け作業に追われている。プチモビルスーツを用いて用途や搬入先毎に仕分けがされていき、今日の分の最後のコンテナを搬入スペースに置いた作業員が、書類とコンテナの情報に相違がないか港長に最終確認を頼みにやって来た。作業事務所内でデスクワークをしていた港長は一旦手を止め、椅子から立ち上がってノーマルスーツのヘルメットを被りながら、事務所を出てスペースゲートへと出ていく。

『最後のコンテナは…これだな？』

『はい、アナハイムからのコンテナです。』

モビルスーツ程の大きさがある輸送コンテナの側面には、アナハイム・エレクトロニクス社のエンブレムが大きく描かれており、その数は10個。港長が受け取った資料に書かれてある中身については、『精密機器類』と記されている。

アナハイムからこういつたコンテナが届くのは珍しくない。今でこそアナハイムⅡ軍需産業というイメージが持たれているが、そもそ

もは一般家庭や企業向けの家電・電子機器類の製造メーカーだったのだ。今でもそういった物を作り続けており、製品や修理用の部品をこうしてコンテナで運んだりしているので、今日搬入されたコンテナもその類だと認識して港長は承認をしていく。

『よし、それじゃ運搬作業ブロックに移しといてくれ。また明日の朝にはコンテナが山程届くからな。』

『ははっ、そうですね。偶にはゆっくり仕事したいもんです。』

『そう言うな、これで飯が食えてるんだからな。』

港長と作業員は談笑を交わし、港長は再び事務所内に戻ろうと踵を返した時だった。

『こ、港長っ……！』

作業員の驚きと恐怖を孕んだ言葉がヘルメット内に響いてくると、港長はすぐさま振り返っていく。すると、先程確認して承認したアナハイムのコンテナのロックが自動で解除され、天井部分のパネルが開かれていったのだ。それも1個や2個ではなく、全てのコンテナが全く同じタイミングで開いたのである。あまりにも突然の出来事に、港長と作業員だけでなく、周囲でプチモバイルスーツを使ってコンテナの移動を行っていた作業員達も異変に気付く。

『落ち着け、冷静に対処するんだ……！』

コンテナが勝手に開く事は今まで無かったものの、この混乱を最小限に抑える為に、作業員達へ呼びかけていく港長。だが、そんな港長の行為も虚しく、更なる混乱が起こってしまったのだ。

『なっ……、港長……！中からモバイルスーツが……！』

『何だっ!?』

コンテナの真上に位置し、プチモバイルスーツに乗っていた作業員の1人が、必死の形相で叫んでいる。すると、開かれたコンテナの中から、ダークグレーのカラーリングが施された異形のモバイルスーツが立ち上がり、10機のモバイルスーツの頭部バイザーが赤い光を放った。

『中立コロニーにモバイルスーツを持ち込むだと……ッ、直ぐにコロニー守備隊へ連絡しろ！』

港長の直感が、これは不味い状況だと叫んでいる。ヘルメットの通

信機能を用いて事務所に残っている職員へと通信を行っていき、不明機体はお構いなしに起動していき、スラスターを噴射してコロニー内部に通じる隔壁へと向かって行った。幸いにも隔壁は閉じている状態なので、そう簡単にはコロニー内部に侵入する事は出来ない筈である。守備隊のモビルスーツが到着すれば無力化出来るだろうと、この時は誰もが考えていた。

『港長、守備隊へスクランブルを要請しました！』

『よし、これで……』

だが、僅かな希望は無慈悲な現実が打ち砕いていく。あろう事か、不明機達が手持ちの武器を構え、隔壁に向けて銃口を向けたのだ。作業員達、そして港長はギョツとしてしまい、次の瞬間には港長が声を張り上げた。

『総員、退避いッ!!』

不明機達のビーム砲が隔壁に撃ち込まれ、直後に凄まじい爆発が起こり、衝撃波と破片が飛び散りながら港長の叫びを掻き消していく。スペースゲートを爆炎と爆風が遅い、その場にいた作業員達や港長、搬入途中だったコンテナ、そしてゲート内の事務所……全てを吹き飛ばし、燃やし尽くしていったのだ。

生存者は居ない。あっという間に惨劇の舞台となったスペースゲート跡に居るのは、10機のモビルスーツのみ。真っ赤な光を放つバイザーが何度か点滅すると、モビルスーツ達は次々に隔壁内部へと侵入していく。その先にあるのは、人々の生活の場であるコロニー内部だ。

コロニー公社守備隊が到着するまでの間、不明機達はコロニー内の至る箇所を無差別に攻撃していく。学校、病院、市街地の中心部、公共の広場……ありとあらゆる場所にビーム砲が撃ち込まれていったのだ。住民達はただ、訳も分からず罅り殺されていったのである。

※

「艦長、至急電です！」

それは、人質救出作戦開始の1時間前に起きた。

ラー・ネイジユのブリッジも既に戦闘態勢を整えており、後は戦闘ブリッジに移行するという段階で、通信オペレーターのエヴァ少尉が声を張り上げる。

「読み上げてくれ、少尉。」

「はっ…。」発、ロンド・ベル艦隊司令ブライト・ノア。宛、ラー・ネイジユ艦長レイ・アンダーソン。現在複数のコロニーと地球各地で、所属不明モビルスーツによる同時多発テロが発生中。ロンド・ベルは直ちに鎮圧作戦を開始する。貴艦の作戦遂行を早められたし……以上です！」

「……ふむ……」

至急電の内容を聞き、アンダーソン艦長の表情がより険しくなっていく。あまりにもタイミングが良過ぎると感じたのだ。アンダーソン艦長は見解を問おうと、補助席に座るカトレア・ペントラスへと顔を向けていく。

「カトレア閣下、貴女の見解を訊ねても宜しいか？」

「…恐らくは、ギムレット・クルスの策略だ。」

艦長からの問いかけに、カトレアは迷う事なく今感じている事を口にしていく。

「イサベルを防衛する為、こちらの戦力集中を妨害して分散させる狙いが一つと…コロニー落としの障害となる我々の戦力を削る狙いがあるだろう。」

コロニー落とし。

その言葉を聞いた瞬間、ブリッジ内に張り詰めた空気が漂っている。この宇宙世紀の時代を生きる者ならば、地球にコロニーを落とすという事はどんな被害を齎すのか、知らない者は居ない。あのピースミーティアの何倍、何十倍もの質量のコロニーを地球に落とされてしまえば、場所によっては億単位の人々が死ぬ事となる。

イサベルのネオ・ジオン軍にコロニーが渡れば、こうなるだろうと

いう予測は誰もが出来ていた。だが、実際にこうして言葉にされて突き付けられると、誰もが事態の深刻さに口を閉ざし、目を伏せてしまっていた。

「……諸君、我々は諦める訳にはいかない。この攻撃を盾として、連中はコロニー譲渡を急がせる事を政府に要求してくるだろう。若しくは：強引にコロニー奪取に乗り出す可能性もある。ブライト司令の言うように、人質救出作戦を直ちに決行する。総員、戦闘配備！」

アンダーソン艦長は決断した。作戦時間を早め、一刻も早く人質を救出する。被害がこれ以上地球圏に広がらないよう、ギムレット・クルスの暴走を食い止めなければならぬ。

「これより作戦行動に移る。総員、第一種戦闘配備！繰り返す、第一種戦闘配備！」

副長のエリス中佐が艦内の全部署へとアナウンスを行い、直後に艦内放送に乗せて戦闘配備を告げるサイレンが鳴り響いた。作戦予定時刻よりまだ早いものの、クルー達の動きは迅速で迷いがなく、誰もが担当の部署や配置に駆け足で移動していく。

「では、私もガンダムで待機する。」

「……武運を、閣下。」

席を立ったカトレア・ペンタスに対して、アンダーソン艦長の一言を皮切りに、エリス副長を始めブリッジクルー全員が彼女へ向けて敬礼をしていた。彼女もまた、全員に向けて敬礼を返していく。

そんな中、彼女は一人の人物の元へと歩み寄っていった。通信オペレーターのエヴァ・ヒギンズ少尉である。

「えっ……、あの……」

「……私に何かあれば、あいつを支えてやってくれ。頼んだぞ……少尉。」カトレアはエヴァ少尉の肩に手を置きながら、真っ直ぐに見つめて言葉を紡いでいく。この作戦では多くの血が流されるであろう事、その内の一人に自分が含まれる可能性もあると自覚した上で、シーナ・ランチエスターの事を予め託す為の言葉を告げたのだ。

そんなカトレアの言葉を受け、一瞬目を見開いたエヴァだったが、肩に置かれた彼女の手を握って真っ直ぐに見つめ返すと、真剣な眼差

しで言葉を返していく。

「…その願いは承服しかねます…。…貴女も、シーナも、みんな揃って帰って来て下さい…ッ。」

エヴァの言葉に、今度はカトレアが目を見開いてしまった。あまりにもストレートで、彼女の人間性が分かる言葉を受け止め、カトレアの瞳が僅かに揺らぎを見せながら目を細めていく。ただ短く、「ん…。」と呟きながら頷いていくカトレアの表情には、ほんのりとした微笑が浮かんでいた。

「…ではな。」

カトレアはエヴァから離れ、ブリッジを出てモビルスーツデッキへと向かって行く。

…この艦には、大切なものが出来過ぎた。彼女は密かにそんな事を思い、ヘルメットを持ちながら通路の扉を何箇所か抜け、モビルスーツデッキ前の隔壁へと到着した。

(…あいつが戻って来るまで…私になんとかしなければな…。)

モビルスーツデッキへと入っていくと、既にジェガンやプロトタイプ・リゼル達の機体に火が入っており、パイロット達が各々機体へと乗り込んで準備を進めているのが見えた。私はデッキ内の通路から身乗り出すと、手摺りを蹴って一直線にルミナスガンダムの元へと降りていく。

ガンダムの足元には、このモビルスーツデッキ内を預かる責任者の整備長が居た。

「…よう、ネオ・ジオンの総大将。あんたがこいつに乗るんだってな？」

整備長の言葉には明らかな棘があり、敵意を向けている事を感じ取っていく。私は少しだけ表情を固くし、鋭い眼差しで整備長を見つめ返しながら、相対するように床面に降り立った。

「…そうだ。」

「…俺はまだあんたを信用した訳じゃねえ、あんたらのせいで何人も仲間が死んだんだ。」

「…分かつている。全て私の罪だ。」

「…あんたには、まだまだ山程言いたい事があんだ。勝手に死ぬんじやねえぞ。」

整備長はそう吐き捨てる、ガンダムへ乗り込む為に道を開けてくれた。言葉には未だに敵意が籠っているものの、この作戦の為には致し方ないという妥協が見て取れる。…そんな彼の厚意を無駄にしない為にも、私は私に出来る事をやり切るまでだ。

「…ありがとう。」

私は小さく感謝の言葉を述べると、ヘルメットを被りながらコックピットへ向けて床を蹴りながら向かっていく。無重力空間である為、一直線にコックピットブロックに辿り着き、素早く乗り込んでいった。

「…やはり、キュベレイとはコックピットの形状が違うな。…：動かせれば問題はない…：か。」

初期設定は既に済んでおり、シーナ・ランチェスターが搭乗した際の戦闘データが全て残っている状態のルミナスガンダム。当然操縦の癖やサイコミュ受信機の数値もシーナ用に調整されているので、まずは機体の動きを把握しながら作戦を進める他ない。加えて、このガンダムは試験的に全身のフレームをサイコフレームに作り替えてある代物だ。当然キュベレイ以上の反応速度と追従性、出力の高さに耐えなければならぬ。

「…あいつが使いこなせていたのだ…：私が出来ない道理はない…：。」

コンソールパネルに触れながら、自分に喝を入れるように独り言を呟いていく。ガンダムを託された者として、そしてカトレア・ペンタスの名を穢さぬよう、全身全霊でこの暴れ馬を手懐けてみせようと覚悟を決めたのだ。

ラー・ネイジユは第一戦速で、作戦予定宙域へ向けて航行を始めている。第一陣として出撃するのは、このルミナスガンダムだ。操縦桿を握り締め、ブリッジからの通信を静かに待っていた。

——そして、その時は来る。

『進路クリアです、ガンダムをカタパルトデッキへ！』

エヴァ少尉の言葉が通信を介してコックピット内に響き、ルミナス

ガンダムはモビルスーツデッキからカタパルトデッキへと移されていく。程なくしてハッチが開かれ、漆黒の宇宙の海が見えてきた。本来なら黒のカラーリングに染め上げて溶け込みたい所だが、そんな贅沢は言ってもらえないだろう。

カタパルトが固定され、射出コントロールがパイロットに譲渡された事がコンソールパネルに表示されると、操縦桿を引いて機体を射出体勢に屈ませていく。ここを出れば、もう後には引けない。それでも私は迷う事なく引き金を引くだろう。自分の信じる道の為に。

「カトレア・ペンタス…ルミナスガンダム、出るぞッ。」

カタパルトデッキ内に表示されているシグナルが赤から青に変わり、操縦桿を強く前に押し込んでいくと、ガンダムは勢いよくカタパルトで射出されてラー・ネイジユを発った。

身体にかかる加速Gの強さ、それに機体の反応性を確認するように、発進後に戦闘機動を試しながらマニューバをかけてみる。

「――、これは…中々…ッ…！」

右へ、左へ、そして上下へ。迫り来るデブリにも怯む事なく、バレルロールを交えながらスラスターを噴射して掻い潜っていく。

何という機動性、そして反応速度。スラスターを自分の意のままに操れる、この不思議な感覚。正に人馬一体という言葉が当て嵌まるような、フルサイコフレームが齎すダイレクトなインフォメーションに、感心と共に恐怖にも似た感情を抱いてしまう。こんなものを本気で動かそうものなら、間違いなくパイロットが先に斃れてしまうだろう。文字通り、私のような強化人間か…若しくは、シーナのようなニュータイプでない限り。

(…人の想いに応えるのが、お前なら…！私の想いを力に変えてみせろ…ガンダム…ッ)

ルミナスガンダムの装甲の隙間からは、仄かに赤色の光が漏れ出始めていた。その軌道は複雑な模様を描きながら、ラー・ネイジユを導くように姿を隠しているイサベルへ向けて飛翔していく……

※

「ギムレット大佐、MB稼働状況良好。各地の防衛部隊や迎撃部隊との交戦を開始した模様です。」

「よし、第一段階は完了だな…戦闘データの随時吸い上げは忘れるな。連邦政府へのコンタクトは？」

「はっ、間も無くレーザー通信回線が開きます。」

小惑星イサベルの司令室内では、ギムレット・クルスが複数の大型モニターを眺めながら下士官達からの報告に耳を傾けている。カトリア・ペントスの創造した設計図を基に、培ってきた知識と技術を注ぎ込んだ我が子達の活躍を聞き、感動にも似た感情を覚えずにはいられない。

MB（モバイルビット）。それがギムレット・クルスの仕掛けた策略の本体。ペーパープランにて終わっていた機体の設計図を用い、ニュータイプ研究所の蓄積してきた膨大な強化人間達のデータを集約し、自律兵器としてこの世に解放された命なき人形。まるで意思を持っているかのような戦闘機動をこなし、人工知能は戦闘を重ねる毎に学習していく為、戦場に存在し続ける事で進化していくマシンだ。コロニー数基と地球各地に送り込んだモバイルビットは、実戦配備したとは言えまだまだプロトタイプに過ぎず、改良の余地を残している。いずれは精鋭部隊であるロンド・ベルに鎮圧されるのも時間の問題だろう。だが、戦闘データさえ取れば今後のモバイルビット達にインプットさせ、より強力な自律兵器として生み出す事が出来る。

パイロットの数も兵器の数も、圧倒的に足りていないイサベルの内情事情においては、実に有効的な兵器とも言えるだろう。

「大佐、繋がりました。」

下士官の言葉と共に、正面の大型モニターに映像が映し出された。画面の向こうには、連邦政府の中枢を担う政府閣僚の面々が揃っている。誰も彼も表情に焦りが見られるのは、余程モバイルビットの襲撃が堪えているのだと容易に想像がつく。

「お久しぶりです、皆様方。地球圏各地でテロが発生している事は私の耳にも届いております。」

『…流石に情報を掴むのが早いな、ギムレット大佐。』

「ええ。なんでも…アナハイムから謀反を起こされたとか何とか。」

ギムレットの発言に、閣僚達の表情が更に陰っていく。勿論アナハイム・エレクトロニクスが仕掛けたテロではない…が、アナハイム社が使用する輸送コンテナに偽装して各地に送りつけたのは、ギムレット・クルスの作戦である。今となっては地球圏を支配する計画を進める上で、アナハイム・エレクトロニクスという力を持ち過ぎた企業は大きな障害となっているのだ。政府とアナハイムの蜜月の関係に亀裂を生じさせ、そこに付け込んで両者を共倒れさせる事が、ギムレットの狙いである。

沈黙が支配する閣僚達の空気を変えるように、尚もギムレットは言葉が続けていく。

「皆様に、私から一つご提案があります。譲渡していただく建造中のコロニー運搬につきまして、我がイサベルの技術部隊に任せていただきたい。そうすれば、運搬に割いている其方の護衛艦隊を、全てアナハイムによるテロ活動への対処に向ける事が出来るでしょう。」

『…それは、その通りだが……』

「加えて、アナハイムの粛清には…我々もお力添えさせていただきます。民間企業と言えど、その資金力や軍需品の製造能力は侮れない。私と皆様で作る新しい地球圏の未来には、あのような過ぎたる力を持ち過ぎた企業は危険極まりないと、お分かりの事だと思えますが？やがては政府を飲み込み、軍を飲み込み、宇宙を飲み込み…この地球圏を飲み込むでしょう。月が地球を支配する未来に、皆様の席はありますか？」

『む、う………』

保身しか考えない現在の地球連邦政府に、選べる選択肢など有りはしない。お膳立てを済ましてやれば、自ずと出口を求めて縋り付いてくる。

『…分かった、ギムレット大佐。指定する座標宙域にて速やかな人質の受け渡しを願いたい。身柄の安全を確保出来た後に、運搬途中のコロニーを即時イサベルへ譲渡する。』

「結構です。人質はランチに乗船させてそちらへお渡ししましょう、お互い護衛のモバイルスーツは非武装で……宜しいですか？」

閣僚達は黙って頷いている。これにて交渉は終了した。奥の手を使うまでもなく、コロニーを地球に落とす事で計画は成就されるだろう。

地球連邦政府の中枢たる場所に、コロニーを落とす。その後、混乱に陥った地球をモバイルビットの軍勢によって制圧し、政府機能を完全に掌握する。それがギムレット・クルスの目論む野望だ。カトレア・ペンタスのような半端な生ぬるさではなく、徹底的に破壊し尽くして奪い取るという明確な意志を持ち、その為ならどれだけの人々が死のうが構わないとさえ思っているのだ。

勿論、その全貌を知る連邦側の人間は居ない。現に政府閣僚らは、コロニーを引き渡せばイサベルが手を引いてくれると思っ込んでいる。真つ先に抹殺されるのが、自分達であるというのに。

「では、準備を進めて参りますので……これにて。」

レーザー通信回線が切られ、大型モニターは元の画面へと戻った。その直後、連邦政府からの暗号通信が届き、人質受け渡し時の指定座標が開示された。

「大佐……これでいよいよ地球は我々の手に。」

「そうだな……。だが、まだ安心するには早い。ロンド・ベルとアナハイムを消してからだ。」

下士官の喜びの滲む言葉を受けても、ギムレット・クルスの表情は変わらず固いままだ。現にロンド・ベルは独自に作戦行動を開始しており、コロニーで発生したテロ行為の鎮圧に向けて艦隊を派遣している。その一部は地球にも降下を始めており、数日の内にモバイルビット達は制圧されてしまうだろう。その中でも、ロンド・ベル本隊と別行動を取るラー・ネイジユの動きは、注視していかなければならない。

もう一つは、月のアナハイムの動きだ。社長の人柄や考え方は知っているつもりであり、この状況を楽しんでいるに違いない。あの社長には、野望とも願望とも言えるものを心に秘めており、そのステージに至る為に手段を選ばない人物だ。そう言う意味では似た者同士と

も言えるが、願いを叶える為にアナハイムを捨てる程の夢想家とも言えない。〃何をしてくるか分からない〃という不気味な存在は、計画を進める上で最大の障害になりかねないのだ。

ギムレットはイサベル内の兵器開発工廠へと通信を繋ぎ、責任者に対してコンソールパネルのモニター越しに問いかけていく。

「技師長、MBの生産状況はどうなっている？」

『おう、大佐。艦隊と拠点防衛用って分けちゃいるが…明日までに50機つてとこだな。割り振りはあんたに任せるよ。』

「そうか、その調子で増産を頼む。」

『あいよ。それとな…新型MA（モビルアーマー）の件だが、パイロットは決まったのか？』

「ああ、先程調整が完了した。直ぐにでもテストに向かわす。」

『そいつは何よりだ…起動準備しておくぜ。』

ギムレット・クルスの策は、モビルビットだけではない。保険という意味合いが強いものの、切り札をその手に忍ばせているのだ。

「っ——、イサベルのレーダー警戒網に感あり！」

刹那、レーダーを監視していた下士官の一人が叫ぶ。ギムレットは直ぐに「詳細を報告せよ。」と命令を下していき、司令室内の空気に緊張感が漂い始めた。

「はっ…、高速で接近してくる高熱源体を捕捉。数は1、この熱量は…モビルスーツです！」

「…来たか、ロンド・ベル。このイサベルを探知するとは…。」

下士官からの報告を受けて、ギムレットは直感していく。このモビルスーツはロンド・ベル所属の、あの忌々しいガンダムである…と。光学迷彩を常時展開しているこのイサベルを探り当てた方法は不明だが、現に熱源は一直線にこの場所へと向けて突き進んでいる。こうなった以上、迎撃に出るしかない。

「直ぐに迎撃部隊を出撃させる、稼働可能なモビルビットも出すんだ。」

「了解しました。」

ギムレットの命令を受け、イサベルの軍事施設全域に対し、スクランブル発進を告げるアラート音が鳴り響いていく。けたましく、そして連続して鳴り響くアラート音に、イサベル内部は慌ただしく戦闘準備に迫られていった。

『第一種戦闘配備。繰り返す、第一種戦闘配備。イサベルに接近中の不明機体を捕捉、艦艇とモビルスーツ部隊は発進急げ。』

……当然、このアナウンスを聞いているのは、ギムレット・クルスに異を唱えるダリオン将軍一派も同様。奇しくも、作戦決行日である今日この時に来襲とあっては、正に神の悪戯とも言えるだろう。

現在時刻、23:40。クーデター決行まであと20分。ダリオン将軍の端末に、ある人物から連絡が入った。イサベル艦隊旗艦アグライアの艦長、エドワード・マキネン中佐である。

『将軍：スクランブル警報が発せられました。アグライアにも出撃命令が出されています。』

「仕方あるまい…、君は命令通り出撃したまえ。こちらの作戦開始と共に、輸送船の護衛についてくれ。」

『はっ…、了解です。では…』

マキネン中佐からの通信が切られ、ダリオン将軍は端末を懐に戻していく。現在将軍が居る場所は、イサベルの地下ブロック：囚人を捕える監獄エリアだ。本来の作戦に加え、新たにサイド6へ逃す人物らと接触していたのである。

「…お聞きの通りだ。不明機体の目的は未だハッキリとしないが、諸君らの救出か…或いはこの基地の破壊か…いずれにせよ、ここはもうじき戦場となる。」

「…そのようだな…ダリオン将軍。」

牢獄の檻を隔てながら、ダリオン将軍は中に捕えられている人物と言葉を交わしていく。この場所に収監されている数は、男女合わせて9人。つい2週間前にこのイサベルへ連行された、地球連邦政府の高官達だ。その中の代表者である男性が矢面に立ち、ダリオン将軍と会

話を繰り広げている。

とは言っても、これはあくまでも將軍からの一方的な接触だ。捕虜となった彼らには何ら力もない事は承知している。然し、ギムレット・クルスの野望に彼らが利用されている事もまた事実。故に、將軍は彼らも逃す為に此処に来たのだ。

「諸君らには、我々の用意する輸送船でサイド6に行ってもらおう。このイサベルの民間人と共に。」

「……私達を逃すと？……將軍、貴方は一体……」

彼だけでなく、周りの高官達も困惑した表情を浮かべている。クーデター計画を知らない彼らにとつては無理もない。だが、悠長に説明している時間がないのも事実であり、ダリオン將軍は再度代表者の男性に問いかけていく。

「我々は間もなくクーデターを決行する。それに合わせて民間人を退避させる。……諸君らはそれに乗じて脱出したまえ。いいな？」

返事を聞く前に、將軍は檻のロックを解除し、扉を開けていった。これでいつでも人質である彼らは逃げる事が出来る。まだ困惑している様子の彼らを見ると、素直にこちらの言葉を信じてくれるのか不安は残るが、どうするかは判断を委ねるしかない。ダリオン將軍は立ち去る際、「この地下ブロックから地上に登るエレベーターが、通路を出て突き当たりにある。そこからスペースポートに向かうといい。」と言ひ残し、その場から去っていった。

残された連邦政府代表団の面々は、顔を見合わせながら言葉を発していく。

「…信じていいのでしょうか？」

「罨という可能性も…」

「私達も…処刑されるんじゃないや……」

当然と言えば当然の反応である。現に一人見せしめのように射殺されているのだ、これ自体が罨であると疑うのが自然だが……

「いや……この話に乗ろう。」

代表団をまとめる団長の男性だけが、ダリオン將軍の持ちかけてきた脱出計画に賛成の意を述べたのだった。誰もがその男性に視線を

向けて、発する言葉に耳を傾けている。

「このままこの場所に留まれば、遅かれ早かれ私達は殺されるだろう。なら…最後まで足掻こうじゃないか。少しでも生き残る目があるなら、私はそこに身を投じたい。」

彼の言葉は最もだった。人質として利用価値が無くなれば、真つ先に殺されるのは明白である。その言葉に奮い立たされるように、誰もがしつかりと頷いていく。

——時刻は23:55。後にこのクーデターが、イサベルとラー・ネイジユを取り巻く命運を揺がす分水嶺となる事を、まだ誰も知らない……。

第13話 『混迷の宇宙』

ラー・ネイジユを発艦してから幾許かの時を経て、ルミナスガンダムは目標宙域へと到達していた。そこはサイド7とサイド6の間地点に位置する場所であり、見渡す限り星々の海が広がる宇宙の景色しかモニターには映っていない。一見すると何もない場所であるが、カトレア・ペンタスは確かに捉えていた。光学迷彩によって姿を隠している、小惑星イサベルの姿を。

(…さて、向こうは既に捕捉している筈だが…)

戦闘体勢を整えながら、目を凝らして何もない場所を見据えている。更に接近していけば迎撃されるだろうと思いつつ、スラスターを噴射しながらゆっくりと前進していった。何処から攻撃が来るのか、どのように迎撃部隊が出てくるのか、頭の中でシミュレーションを行っている最中、それは起こる。

「ッ……………」

何もない筈の場所から、突如として大量のミサイル群が飛来してきたのだ。直ぐに回避運動を行いながら、頭部のバルカン砲を発射してミサイルを迎撃していく。1発、また1発と撃墜していき、ミサイルの爆発によって他のミサイルにも誘爆を引き起こし、全てのミサイルを撃ち落とす事が出来た。

素晴らしい運動性能、そして思考がダイレクトに駆動系に伝播するフルサイコフレームの恩恵を直に感じ、カトレア・ペンタスは感心したように吐息を漏らす。キュベレイにもコックピットブロックにサイコフレームを導入していたが、このガンダムはまるで別物だ。

「…お出ましか。」

ミサイルの爆煙の奥から、突如としてイサベル所属の艦隊が姿を現す。ムサカ級、エンドラ級、それに奥には艦隊旗艦アグライアの姿もあった。元々私が座乗していた艦だが、今は敵である。向こうがやる気なら、こちらも対処するまでだ。前衛であるエンドラ級からモビルスーツ部隊が次々と発艦し、こちらへと迫り来るのが見える。

…出来る限り、無益な戦闘は避けるべきだろう。時間稼ぎをする意味も込めて、私はコンソールパネルに触れていくと、オープンチャンネルを開いて声を張り上げた。

「聞け、栄えあるイサベルの戦士達よ。私の名は…カトレア・ペントス！」

その効果の程は…直ぐに現れた。

発艦したモビルスーツ部隊の動きが止まり、艦隊も攻撃の手を止めていたのだ。オープンチャンネルで放った肉声と共に、リアルタイム映像も同時に発信しているので、受信している者達は皆私の顔を見ているのだ。ミノフスキー粒子が完全に散布されていない状況も相まって、こちらにも通信が届き始めている。

『まさか…本当に、閣下が…？』

『だが、あれはガンダムだぞ…っ』

『しかし、あの声にお顔…見間違うものか…！』

…ここぞとばかりに、私は言葉を続けていく。

「ギムレット・クルスの野望に、お前達の尊い命を賭けるべきではない…。奴が望んでいるのは、完全なる地球人類の抹殺と、全宇宙の独裁的支配だ。だが…地球と宇宙の共存を許さぬ破滅的な支配など、反感を覚えた市民や勢力を助長させ、また新たな戦争の火種を生むだけだ…！…そして、お前達の命は無為に散らすべきではない。平和な世界で、幸せに生きてほしい…私の願いは、」

『艦隊、そしてモビルスーツ部隊に告ぐ。』

私の話を、突如として遮る者が現れた。この声、聞き間違える筈もない。

『我々の敵は、我々の存在を脅かし、スペースノイドを弾圧し続ける地球である。カトレア・ペントスは既に戦死した、あれはよく出来た偽物である。惑わされるな、イサベルの兵士達よ。ガンダムは敵だ、直ちに攻撃を開始せよ。』

ギムレット・クルスが、向こうもオープンチャンネルを用いて戦場

の全兵士へと命令を下したのだ。更に困惑の色を深める艦隊であったが、最終的な決断を下すのにそう時間はかからなかった。

『……全艦、攻撃開始！』

「ツ……、やはりそうなるか……！」

イサベルの実権を握っているギムレットの命令に反するなど、出来る筈もない。艦隊からの砲撃、そしてモビルスーツ部隊による攻撃が、ガンダムに向けて降り注がれていく。

私は舌打ちを一つ溢しながら、即座に回避運動に入る。キュベレイ以上の機動性と反応速度に、まず艦隊からの砲撃は当たる気配が無い。艦砲射撃を回避していくと、次々に押し寄せてくるモビルスーツの数々を捕捉していった。

「……ファンネル！」

私の感応波を、サイコミュを通じてフィン・ファンネルへと伝播させていくと、攻撃命令を受けた6基のファンネルが背面から射出され、ギラドーガ部隊へと襲い掛かっていく。

ファンネル達の攻撃は、ギラドーガの頭部に直撃し、腕を撃ち抜き、脚を撃ち抜いていった。コックピットへの直撃は避け、不殺の覚悟を持った精密攻撃を繰り返していく。これ程までのファンネルのコントロールを可能としているのは、ひとえにカトレア・ペントスの完成された強化人間としての能力故である。

『くそ、化け物が……！』

行動不能となった機体の内の一つから、パイロットの声が通信を介して届いてくる。そうとも、化け物でいい。化け物相手に負けたなら、帰る言い訳はつくだろう。

私は更に突き進む。ファンネル達を操り、ライフルでの狙撃も併せて行い、前衛のエンドラ級から発艦したギラドーガ部隊をほぼ無力化する事に成功した。その数はざっと数えて10数機程、まずまずの戦果である。

『くっ……、やはり閣下相手では……。モビルビットを出せ！』

すると、エンドラ級とムサカ級から、それぞれ新たなモビルスーツ部隊が発艦を開始した。直掩部隊のギラドーガではなく、識別にも反

応しない…そしてサイコミユを通じ、ピリピリとしたものが私の感応波に干渉してくるのを感じる。

ルミナスガンダムは、その敵を知っていた。まるで意思を持っているかのように、ガンダムのツインアイが一際輝きを放つ。

「…そうか、あれが…」

命を持たぬ人形、その正体がこうして私の目の前に現れたのだ。ギムレットの悪趣味がよく表れていると感じながら、急速接近してくる新型モビルスーツ部隊…モビルビットへ向けてこちらも突っ込んで行く。

こちらの動きに合わせて、キュベレイの面影を残す漆黒の体軀をしたモビルビット達は散開し、手持ちのビームライフルをガンダムに向けて発射してきた。その軌道、正確な射撃、無人機とは思えない人間のような動きに、つい私は目を見張る。

「…だが…ッ。」

相手が無人機なら容赦はしない。フィン・ファンネル達へ再び攻撃命令を行うと、複雑な軌道を描きながら6基のファンネルはモビルビット達へと襲い掛かっていく。今度は無力化させる為の攻撃ではなく、文字通り破壊する為の攻撃だ。四方からのファンネルのオールレンジ攻撃に対処し切れず、コックピットブロックとバックパックに攻撃を受けてしまった1機が爆散していく。

1機、また1機、次々に撃ち落とされていくモビルビット。回避プログラムも働いているようだが、所詮は無人機の動き。容易に回避する先を先読み出来て、ファンネルが的確に攻撃を加えていく。

「くっ……、鬱陶しい……！」

だが、多勢に無勢。モビルビットの数は更に増していき、モニター上で捕捉しているだけでも20機以上は居るだろうか。物量で押し切ろうとするように、ありとあらゆる方向からビーム攻撃が迫り、こちらも回避と防御に専念しなければならない時間が訪れる。

そんな中、1機のモビルビットがビームサーベルを展開し、ガンダムに向けて接近戦を挑んできた。その動きは滑らかで、戦闘データがよく反映されているのだと分かる動きだった。こちらも背部ファン

ネルラックからビームサーベルを引き抜くと、応戦するように振り抜いていく。

「この、動きは……ッ……」

ビームサーベル同士がぶつかり合い、ビームの火花を散らしながら鏢迫り合い状態となりながら、私は直感的に感じていく。この軌道、攻撃動作……まるで私自身を相手にしているようだ。どうやら無人機の中に、私の戦闘データを組み込んだものが紛れ込んでいるらしい。

「だが……負けん……ッ」

スラスターペダルを踏み込んで推力を解放すると、ガンダムはそのパワーを以て無人機を圧倒していき、鏢迫り合いを制して弾き返していった。体勢を崩した無人機は、姿勢制御の為にスラスターを小刻みに噴射しており、そこに追撃の隙が生じる。

すかさずビームサーベルを振り抜こうとした刹那——今度は別の機体がこちらに攻撃を加えてきた。

「ッ——、やるな……い！」

ガンダムのセンサーが攻撃接近を捉え、コックピット内にアラート音が鳴り響くよりも前に、サイコミュが敵意の感応波を拾った事で素早くシールドを構え、対ビームコーティングが施されたシールドはビーム攻撃を受け止めつつ弾いていった。

新たな無人機からの攻撃。今の一撃で追撃のチャンスが潰れると、一度距離を取ってから2機目の無人機に向けて銃口を向け、トリガーを引いてハイパー・ビーム・ライフルの攻撃を放っていく。

だが……無人機は必要最小限の動きだけでビームを躲して、その動きのままライフルを構えて反撃してきたのだ。

(……やはり……っ、この機体に組み込まれているデータは……い！)

反撃してきたビーム攻撃も恐ろしく正確であり、再びシールドを構えて防いでいく。この動き、この感覚……2機目に搭載された戦闘データは、シーナ・ランチェスターのものだと確信した。然し、どうやってギムレットはシーナの戦闘データを入手出来たのか……謎が謎を呼んでしまっており、戦闘の最中であって余計な事を考えてしま

う。

私の戦闘データを組み込んだ無人機が前衛、シーナの戦闘データを組み込んだ無人機が後衛として、連携を取りながらこちらに攻撃を仕掛けてきた。私とシーナを同時に相手取る形となると、流石のガンダムと言えど反撃する隙が限りなく消えていく。唯一の救いは、どうやら向こうにはオールレンジ攻撃を行うオプションが搭載されていない事くらいだ。

「チツ……、黙らせる……！」

だが、こんな所で足止めを喰らう訳にはいかない。作戦時間は刻一刻と過ぎており、間も無くラー・ネイジユも戦闘宙域に到達する頃だろう。いつまでも無人機の相手ばかりをしていければ、その分だけラー・ネイジユに敵の戦力を向かわせてしまいかねない。少々無理をしなければならぬが、私は再びスラスターペダルを床まで踏み抜いていき、前衛である無人機へと突撃していく。

ビームサーベルを振り抜くと、向こうもビームサーベルを展開し、激しく刃がぶつかり合って鏢迫り合いとなっていた。この隙を見逃す筈もなく、後方では後衛の無人機がライフルを構え、照準をこちらに合わせていく。正に引き金が引かれようとしているその刹那、私の意識は目の前の無人機でも後方でもなく、別の所に向けられていた。

「来い、ファンネル……！」

6基のフィン・ファンネルを引き戻し、一斉に攻撃命令を感応波によって飛ばしていくと、ライフルを構えていた後方の無人機へ襲い掛かっていったのだ。四方から次々に撃ち込まれるファンネルのビーム攻撃に反応すると、無人機はライフルの構えを解いて回避運動を行っていくが、それこそが私が狙っていた行動だった。

鏢迫り合いの状態の最中、ファンネルの動きを制御しつつ、私はシールドを無人機へと向けていく。そしてトリガーを引くと、シールドに内臓されているビームガンから閃光が迸り、ガラ空きとなった無人機のバックパックへと命中したのだ。背部、そして胸部と撃ち抜かれた無人機は、ファンネルの攻撃もその身に降り注ぎ、全身を撃ち抜かれて爆散していった。

「次は…お前だ…ッ！」

意識を再び目の前の敵機に向けていく。私の戦闘データを組み込んだ無人機は、左腕にもビームサーベルを構え、突き刺そうと振り被って来たのが見える。だが、その行動もまた私にとっては隙を突くチャンスとなった。

ビームサーベルを握る側の右腕部。その装甲が開いていくと、中から姿を現したのはガトリングガンの砲身。鏢迫り合いの状態にあって、私は素早くトリガーを引くと、ガトリング砲身が高速で回転していき、無数のビームの弾丸をゼロ距離で無人機へと撃ち込んでいく。耐ビームコーティングを施しているようだが、この至近距離でのビームガトリングガンの斉射には装甲は耐え切れないようで、程なくして表面装甲に穴が開き始め、抉るように胸部を穴だらけにしていく。

「ふん…、この程度か…。」

バチツ…バチツ…と火花を散らす無人機へとドメを刺すように、動かなくなった機体の頭部にビームサーベルを突き刺し、そのまま蹴り飛ばして距離を離していくと、2機目の無人機も激しい爆発を起こして機体が粉々に散っていった。

戦闘データを組み込んだとは言え、所詮はデータ通りにしか動けないデッドコピーに過ぎず、絡繰が分かかってしまえば倒せない敵ではない。爆発の光をモニター越しに眺めながら、静かに言葉を吐いていく。

「さて…、まだまだ来るようだな…。」

歯応えのある2機の無人機を倒したとは言え、戦力の内の一部を削ったに過ぎない。残りのモバイルビットの部隊が隊列を組み直し、再びこちらに向けて迫って来ていたのだ。

エネルギー残量、推進剤の残量共にまだ余力はあり、自身の体力も残っている。サイコミュとの感応波による連動も問題なく、囷としてまだ戦える事を再認識していけば、操縦桿を握り直して応戦の構えを見せていく。

気になるのは、艦隊旗艦であるアグライアの動きだ。見る限りでは、アグライアに大きな動きはなく、初期位置からほぼ動かずに戦場

全体を眺めているようだった。旗艦として指揮を取るという意味では正しい行動なのかもしれないが、現存艦隊はアグライアを含めて3艦のみ。無人機を多数出撃させているとは言え、アグライアの火力も用いない事には厳しい筈だが……

その時だった。

「ッ……、何だ……？」

突如として、アグライアの後方……何も無い筈の場所から爆発が起こり、無数の破片が辺りに飛散していく。それも一つではなく、次々に爆発が起こったのだ。無人機達の攻撃を回避しつつ、私はセンサーによる索敵を行い、熱源反応をコンソールパネル上で確認していく。

……やはり、ラー・ネイジユはまだ到着していない。連邦軍の識別反応は無く、モビルスーツ部隊も私と無人機達、そして艦隊の直掩機達のみ。つまりあの爆発は、姿を隠しているイサベル内部で発生したものであると分かる。だが、驚くべき事は更に続いていた。

「……アグライアが、離れていく……？」

エンドラ級、ムサカ級を残したまま、旗艦アグライアが反転して離脱の動きを見せ始めたのだ。無人機からの波状攻撃を掻い潜り、ハイパー・ビーム・ライフルとファンネルの攻撃で撃墜していきながら、アグライアの行動に驚きの声を漏らしてしまう。

撤退するなら、撤退命令の信号弾を上げる筈。それすら無いというのは、別の任務を帯びているのか、単に味方を残して本当に退くつもりなのか……。その時、ガンダムコンソールパネルに1通の暗号通信が届いた。敵の攻撃の勢いが弱まった隙を見て、暗号通信を開いてみる。

「カトレア閣下、生きておられると信じておりました。我が艦はこれより、ギムレット・クルス一派に対してクーデターを執行し、イサベルの民間人と地球連邦政府の人質を乗せた輸送船護衛の任に就きます。新たな敵味方識別情報を送りますので、連邦軍への共有を願います。」

——アグライア艦長、エドワード・マキネン」

「…よくやった、艦長。」

暗号通信の発信元は、離脱していく旗艦アグライアの艦長…エドワード・マキネン中佐だった。通信に添付される形で、アグライア艦載機と輸送船を味方とする敵味方識別データも受信し、先程の爆発はクーデターの狼煙だと理解していく。

今私がやるべき事は2つ。このデータをラー・ネイジユへと転送し、救出作戦の中止を進言する事。そして、クーデターを起こしたアグライアと輸送船を守る事だ。

「ラー・ネイジユ、応答せよ。こちらガンダム、聞こえるか?」

※

それは、ルミナスガンダムがイサベルの警戒宙域へと侵入してくる数分前の出来事だった。

「…諸君、始めようか。」

小惑星イサベルの7番スペースゲートに程近い、とある備品庫の中。ギムレット・クルス率いる革新派に反旗を翻す、保守勢力のリリーダーであるダリオン將軍は、クーデターに賛同して集まってくれたメンバー達を前に、遂に作戦決行を宣言していく。

時刻は00:00。イサベルでは警備システムと監視システムの保守点検の為、内部電源の一部がカットされ、通路やスペースゲート、軍事工廠の照明の大半が消え、静寂と暗闇が一時的に場を支配していた。これこそクーデター決行の合図であり、メンバーの中でも電子工学に長けた者達が一斉に端末を操作し始め、イサベルの警備システムと監視システムのハッキングを開始したのだ。

「どのくらいで終わりそうか?」

「2分もあれば乗っ取れます、ただ…長くは保たないでしょう…っ。」

ハッキングを行っている内の1人が、ダリオン將軍の問いかけに答えつつ、端末のキーボードを目にも止まらぬ速さで叩いていく。他のメンバーも同様で、先ずはこのハッキングが成功しない事には次の段

階に進めない。

「よし、この間に工作班は起爆装置の最終確認をしておけ！勘付かれ
たら直ぐに銃撃戦になる、銃の安全装置も外しておくように！民間人
の誘導と護衛を最優先だ！」

ダリオン將軍の言葉に、武器を携えたメンバー達が力強く頷き、「了
解っ」と返事を返していく。小銃の安全装置を解除し、弾丸がきちん
と装填されているか各々最終確認を行っていくと、ハッキングをして
いたメンバーの1人が声を上げた。

「ハッキング成功、監視モニターを遮断！早期警戒システムも無効化
に成功しました！」

「…よし、工作班…やってくれ！」

ダリオン將軍の命令は通信を介して備品庫外に居る工作班メン
バーへと伝わり、起爆装置の遠隔スイッチを押していく。すると、ほ
んの一呼吸を置いた後に凄まじい爆発が発生し、爆音と振動が備品庫
に伝わってきた。それも1回ではなく…2回、3回…複数回の爆発が
発生しては振動が伝わり、メンバー達は一斉に立ち上がって備品庫の
扉を開けていく。

「行くぞ、スペースゲートへ急げ！」

小銃を携えたメンバー達が先に飛び出していき、次いでハッキング
班と共にダリオン將軍も駆け出していく。今の爆発は、イサベル各地
に設置していた遠隔式爆弾であり、民間人の居住ブロックやスペース
ゲートを避け、軍港やモビルスーツ開発工廠を狙ったの攻撃だ。これ
で守備隊の注意を逸らし、輸送船発進の時間を稼ごうという作戦であ
る。

「民間人の誘導はっ？」

「爆発の音を皮切りに、皆移動を開始した模様です！」

「よし、輸送船を奪い発進準備をさせるんだっ。」

ここからは時間との勝負となる。5番、7番スペースゲートそれぞ
れに民間人100名余りと保守派のメンバー達が駆け足で向かって
おり、輸送船の接收に手間取ればそれだけ脱出は難しくなる。

ダリオン將軍率いるグループは7番スペースゲートへと到着する

と、中に飛び込む前に息を潜めてゲート内を確認していく。スペースゲート内も限られた床面の非常灯以外は照明が消えており、ほぼ暗闇が支配していた。そんな中、小銃を携えたメンバー達は暗視ゴーグルを装着していき、輸送船の周囲を見張っている数名の警備兵を確認していく。この警備兵を制圧しなければ、輸送船に辿り着く事は出来ず、下手をすれば守備隊に連絡されてしまう恐れがあるのだ。

警備兵達も先程の爆発音は聞いており、少なからず動揺を見せていた。辺りを見渡し、落ち着かない様子でその場をウロウロしている。意識が散っている今こそ、制圧のチャンスだ。

「っ……………」

一瞬、誰もが小銃の引き金を引くのを躊躇った。暗視ゴーグルの先に見据えているのは、他ならぬ苦楽を共にした仲間なのだから。だが、一度走り出したその足を止める事など出来ず、せめて苦しまずに逝かせてやるのが、最後に与えられる情けというものだろう。照準はしっかりと頭部を狙い澄まし……ドンツ、ドンツ……と、何度かの発射音が響き渡り、次の瞬間には警備兵達は力なく地面に倒れ伏した。

全員頭を撃ち抜かれ、即死だった。きつと苦しむ事なく逝けただろう。引き金を引いた保守派メンバー達は、僅かに震える手でなんとか小銃を握り締めながら、深く息を吐いていく。

「……忘れぬ事だ。彼らの生きた時間を無駄にしない為に。…我々は進まなければならぬ。」

ゆつくりと進み、事切れた警備兵達の亡骸に手を添えながら、ダリオン將軍は絞り出すように言葉を口にしていった。それを聞いたメンバー達は、かつての仲間の亡骸に向けて、敬礼をする事で哀悼の意を表していく。

その時だった。

「っ……民間人が来ました!」

スペースゲート内に凡そ50名の民間人が、メンバーの誘導に従う形で入って来たのだ。しんみりとした空気を振り払い、誰もが今やるべき事に意識を切り替えていく。

「急ぎ輸送船の発進準備だ!」

ダリオン將軍の掛け声と共に、メンバー全員が「了解！」と返事を返していくと、数人が先に輸送船へと乗り込んで発進準備を始めていった。残るメンバーは民間人の乗船誘導や、守備隊が駆けつけた際に迎撃する為に小銃を構えて辺りを警戒している。

それから10分ほど経過した所で、輸送船のメインエンジンに火が入り、船内の照明が点いた。次いでスペースゲート内の照明も点灯し、輸送船の発進準備は最終段階に入りつつあった。だが、そう物事は万事上手く運ぶ訳ではない。

「將軍、情報部からの介入です……！ハッキングを無効化しようとしていますっ！」

「早いな……、なんとか発進までハッキングを保たせるんだ……っ」

「今やつてます……！くそ、手が足りないぞ……ッ」

予想通り、警備システムと監視システムのハッキングを察知した軍の情報部によって、こちらのハッキングを無効化しようと手を施し始めて来た。分かっていた事ではあるが、これで守備隊に察知されるのも時間の問題となったのである。

保守派メンバー達はハッキング維持に全力を注ぎながら、電子の世界で激しい戦いを繰り広げていく。これが無効化されてしまえば、スペースゲートから輸送船を発進させる為の隔壁を開く事が出来なくなってしまうのだ。

「ッ……、守備隊が来たぞ!!」

輸送船の外で警戒をしていたメンバーの1人が、大声を張り上げて皆に知らせる。それは、地獄への入り口に身を投げ打つに等しき宣告だった。輸送船に乗り込んだ民間人達にも緊張の色が走る。

「発進準備はまだかっ?」

「もう直ぐ完了します……！発進ゲートの隔壁を開いて下さい……！」

ダリオン將軍の問いかけに、操縦を務めるメンバーが切羽詰まった様子で答えていくと、それと同時にハッキング班が端末を介して操作を開始していき、スペースゲート内の宇宙に面している発進ゲートの隔壁を開き始めていった。

「隔壁が開くぞ……早く中に……！」

直ぐにこのスペースゲート内は空気が無くなり、ハッキングも無効化されて隔壁が閉じられてしまうだろう。脱出するチャンスは今しかない。

輸送船の外では激しい銃撃戦が繰り広げられており、ゲート内に突入してきた守備隊を押し返そうと、保守派メンバーの迎撃部隊は皆一歩も退かない構えで自動小銃を発射していく。だが、隔壁が開こうとしているその時になっても……寧ろ、必ず阻止するという強い意志を示すように、守備隊の圧力はどんどん増していくばかりだ。

銃撃戦により、守備隊側にも保守派メンバーにも負傷者、死傷者が出始めていく。数で圧倒する守備隊を前に、このまま防ぎ切るのはほぼ不可能な状況と言えるだろう。ジリジリと後退していき、小銃で撃ち返しながら輸送船へとメンバーが乗り込んでいく最中、ある1人が叫んだ。

「不味い……ッ、対モバイルスーツ用のロケットランチャーだ!!」

守備隊の奥……肩に担ぐタイプの大型の火器を構えた、複数の射手が姿を現す。その重火器は対人兵器ではなく、巨人を屠る為の装備：対MS用のロケットランチャーだった。そんなものを撃ち込まれれば、輸送船などたちまち木っ端微塵に爆散してしまうだろう。

「……將軍、後を頼みます……ッ。行くぞお前ら!」

輸送船に乗り込んでいたメンバー達は、意を決したようにノーマルスーツのヘルメットを被り、自動小銃を構えて船外に飛び出しているってしまった。引き金を引き続け、誰もが重火器を構える守備隊の射手に向かって突撃していく。

「將軍……!」

機内に残るメンバーから、複雑な表情と眼差し、そして決断を迫る言葉をかけられたダリオン將軍は、苦虫を噛み潰したように表情を歪めながら、輸送船の扉を閉めてロックをかけた。

「……直ちに発進せよ!急げ!!」

ダリオン將軍は決断を下した。仲間への尊い犠牲を無駄にしない為に、民間人を何が何でも脱出させる事を。操縦桿を握るメンバーが輸送船のスロットルを引き上げていき、レバーを押し込んでいくと、船

体最後部のブースターが点火して輸送船が動き始めていった。

「早く撃ち落とせ！叛逆した民間人ごと葬るんだ！」

守備隊の隊長と思わしき人物が叫び、対MS用ロケットランチャーを構えた射手達に命令を下していく。それを聞いた保守派メンバー達は、怒声を上げて突っ込んでいった。

「させるかよッ!!」

次々に放たれる小銃の弾丸が、守備隊の隊員達に命中していき、1人、また1人とその場に血を流しながら倒れていく。それと同時に、守備隊から放たれた弾丸も保守派メンバー達の身体に撃ち込まれていき、頭を撃ち抜かれた者は力を失って地面に倒れていった。

「ぐッ…、まだだ…！」

足を撃ち抜かれたメンバーの1人が、地面に倒れながらも小銃を構え、ロケットランチャーを構えている射手の胴体と頭に弾丸を撃ち込んでいく。短い呻きと共に射手が倒れ、然しその衝撃なのか反動なのか、事切れる間際に引き金を引いたのだ。

ロケットランチャーの弾が発射されるものの、倒れながらに撃たれたその軌道は輸送船には届かず、明後日の方向へと飛翔しては…：スペースゲート内の壁に激突し、凄まじい爆発を起こした。

「しまった…!?た、退避しろ！」

輸送船は隔壁が完全に閉じられる前に、ゲートを通過して宇宙の海へと飛び出していく。その姿を睨みつける守備隊長だったが、今の誤射によってゲート内の設備にも誘爆を起こしてしまい、内壁のあちこちが連鎖的に爆発を起こして崩れ始めていたのだ。

このまま留まっていたは、全員爆発に巻き込まれてしまう。そう直感したが故の退避命令だったが…：

「へへ…、一緒に地獄に付き合ってもらおうぜ…！」

殆どの保守派メンバーが撃ち殺され、その場に屍と化して倒れ伏している者達や宙を漂う者達で溢れ返っているが、まだ息がある1人が狂気沁みた笑みを浮かべると、血反吐を吐きながらあるものを守備隊に向けて放り投げた。

それは、対人用の手榴弾。既にピンが抜かれ、起爆までほんの数秒

といった所。無重力空間故に真つ直ぐ守備隊目掛けて飛んでいくそれを、最早防ぐものは何もなかった。誰もが目を見開き、息を呑み、この後待ち受ける運命を本能で覚悟していく。

「ひっ——」

誰かが引き攣った声を漏らした瞬間、撤退しようとしていた守備隊の只中に放り投げられた手榴弾が炸裂し、爆風と共に破片が守備隊員達に襲い掛かり、ノーマルスーツとヘルメットを引き裂いていった。中には腕を、脚を、首を吹き飛ばされた隊員も居り、スペースゲート内は正に阿鼻叫喚の地獄絵図と化している。

吹き飛ばされた隊員達、そして今の爆発によって退避路となっていた出入り口も損傷して扉が潰れてしまい、辛うじて生き残った守備隊員達は脱出する術を失ってしまった。

「くそっ…、早く救援要請を…！」

「だ、ダメです、間に合わない…ッ！」

崩壊していく7番スペースゲート。爆発が爆発を呼び起こし、残された守備隊は悉くその爆炎の中に悲痛な叫びと共に包まれていってしまう。

生存者無し、文字通りの全滅だった。

※

「ギムレット大佐、7番スペースゲートが消滅しました…！」

「そうか…、5番ゲートはどうか？」

「はっ、脱出を試みた輸送船を撃墜。反乱分子の制圧完了との事。」

「上出来だ、後はどうとでもなる……。追撃には奴を出せ。」

「了解しました。」

イサベルの司令室内では、ハッキングから起こった一連のクーデターについての報告がなされており、守備隊の迅速且つ懸命な仕事ぶりによって、概ねクーデターを鎮圧出来た事にギムレットは目を細めて微笑を浮かべていく。保守派の動向には警戒をしていたものの、こゝろもタイミング良く決行された事に、ロンド・ベルと内通していたの

ではないかと勘繰ってしまふ程だ。

次いで彼は、最も警戒感を募らせていた存在について確認をしていく。

「カトレア・ペンタスの行方は？」

「はっ…、ガンダムは現在サイド6方面に向けて移動を開始した模様。これは…アグライアと合流するものと思われます！」

「…マキネンめ、このままで済むと思わない事だ。」

エンドラ級には、クーデターに加担して艦隊を離脱したアグライアを追撃するよう既に命令を下しており、追いつく頃にはガンダムと対峙する事となるだろう。あのカトレア・ペンタスを相手にするには、エンドラ級の戦力とモビルビットだけでは足りないのは明白。やはり、テスト段階ではあるが新型モビルアーマーを差し向ける他ないだろう。現行戦力として手が打てるのは、今はこれが全てだった。

「ギムレット大佐、地下ブロックから報告が…」

「今度は何だ？」

「人質が…脱走したとの事です…！」

「何だと…っ!？」

この報告には、流石のギムレット・クルスも目を見開き、驚愕の表情を浮かべながら声を張り上げてしまう。確かに7番スペースゲートは地下の牢獄に最も近い場所だが、まず脱走出来るような場所ではない。誰かの手引きが無ければあの場所から出られる筈はないが…

「…何処までも鬱陶しい存在だな…ダリオン將軍…ッ」

考えられる可能性は1つしかない。地下ブロックへのアクセス権を有する保守派唯一の人物、ダリオン將軍だ。怒りを滲ませた表情と声色をするギムレットの姿に、司令室内に詰める兵達に緊張の色が走る。これ程までに感情的になった姿を、未だかつて誰も見た事が無かったからだ。

ギムレット・クルスの脳内では、怒りの中でも冷静に今後の状況推移を予想し始めていた。恐らく人質は輸送船に乗せられ、サイド6に向かっているのはほぼ間違いなく、輸送船の拿捕は現行戦力では難し

いだろう。人質がイサベルの手から離れた事を連邦政府に知られては、コロニーを無傷で手に入れる事すら危うい。この時点で、プランAのコロニー落とし作戦はほぼ破綻してしまったのだ。そうになると、今から次のプランに移行するべきだと判断し、ギムレットは下士官へ新たな命令を下していく。

「コロニー移送の為に集めている技術班を呼び戻せ、ネメシスの発射準備に取り掛らせろ。」

「は…？し、然し…ネメシスの威嚇を以てコロニーを奪取する手筈では…？」

下士官の言葉に、ギムレットは鋭い眼光を向けて冷徹に言葉を返していった。

「いいか、カトレア・ペンタスは今も生きている。そして、奴は我々の秘匿する情報を全て握っている女だ。我々の手札を晒されては、連邦軍は総力を上げて押し寄せてくるだろう。そんな状況で、連中を恫喝してコロニーを奪取している暇などあるものか…。その前に…地球に撃ち込むのだッ、何としても!!」

自身の机に握り拳を叩きつけ、ギムレットは怒声を上げて命令を叫んだ。連邦宇宙軍の主力艦隊がイサベルを包囲する前に、地球へネメシスを撃ち込んで連邦政府と軍中枢機能を喪失させなくてはならない。その後は、連邦宇宙軍の宇宙拠点であるルナツ1、そしてロンド・ベル艦隊の司令機能を有するサイド1“ロンデニオン”、最後に月面都市フォン・ブラウンをネメシスによる攻撃で破壊すれば、地球圏において彼の野望を邪魔する者は居なくなる。目指す未来の為には、今は兎に角時間が欲しいのだ。

ギムレットの命令を覆せる人物など、最早このイサベルには存在しない。下士官達は慌てた様子で命令を実行に移し、技術班への至急電を送り始めていった。

人類の滅亡へのカウントダウンは、刻一刻と刻まれていく……

『混迷の宇宙』（2）

「それは本当かね…っ？」

『ああ、間違いない。アグライア経由で輸送船に乗船した名簿リストを見たが、連邦政府代表団の面々も居る。この事を直ぐに軍と政府へ伝えて欲しいのだ…アンダーソン艦長。』

「…分かった、本艦も直ちに護衛の為向かうと伝えて欲しい。宜しいか？」

『了解した、アンダーソン艦長。では私もアグライアと輸送船の直掩に就くぞ。』

「…くれぐれも無茶はしないで頂きたい。」

『ふ…、それはお互い様だ。』

作戦予定宙域に到達したと同時に通信が入り、アンダーソン艦長らブリッジクルーはその内容に目を見開いて耳を傾けていたのが、つい数分前の出来事。その相手は先行して出撃したカトレア・ペンタスからであり、報告された内容は誰もが耳疑うような内容だっただけに、初めはキチンと把握するまで多少の時間を要してしまった程だ。

彼女の報告によると、イサベル内で一部の将校らがクーデターを決行し、民間人100名余りと人質として捉えられていた連邦政府代表団を輸送船に乗せて脱出させ、現在サイド6へ向けて航行しているらしい。クーデターに加わった中には、イサベルのネオ・ジオン軍艦隊旗艦であるアグライアも居るようで、輸送船の護衛に就いているとの事だ。当初計画していた救出作戦の流れから大きく状況が変わり、正に混迷を極めていると言えるだろう。

カトレアは僅かに笑みを溢した声色でアンダーソン艦長に言葉を残すと、そこで通信は途切れた。次いで副長席に座るエリス中佐が、アンダーソン艦長へと問いかけていく。

「艦長、宜しいのですか？せめてブライト司令に報告を入れた方が…」

「そんな時間はないさ、副長。事態は急を要する…：：：作戦変更だ。」

アンダーソン艦長の言葉を受け、エリス中佐は静かに頷いていく

と、艦長の代わりに艦内アナウンスのマイクを手に取って声を張りながら命令を下していった。

「総員、救出作戦を直ちに中断つ。陸戦部隊は対空砲座に着け！モビルスーツ部隊はいつでも発艦出来るよう待機せよ！」

エリス中佐のアナウンスが艦内各部署に響き渡り、最初は急な作戦変更にぎわつきが起こったものの、皆直ぐに自分のやるべき事を認識して迅速に行動していく。陸戦部隊の隊員達も、メカニックマン達も、パイロット達も、誰もがアンダーソン艦長の決断を信賴しているからこそその統率力とも言える。

「諸君、当初の作戦とは違うが…目的は何ら変わっていない。政府代表団だけでなく、非戦闘員達の命を守る為に、我々に出来る最善を尽くそう。ラー・ネイジユ、機関最大つ。」

「機関最大、第一戦速！進路をサイド6へ！」

ブリッジ内では、アンダーソン艦長の言葉に続いてエリス中佐が命令を発していく。航海長が進路を変更してラー・ネイジユの艦首が向きを変えていく。目指す場所はサイド6宙域に向かう、イサベルを脱出した輸送船とアグライア。位置関係としては、恐らく到着する頃には戦闘が始まっているだろう。後はカトレア・ペントスとルミナスガンダムの奮闘に期待するしかない。

(…やはり、シーナ少尉不在の穴は大きいか…。)

エンジンの出力を最大にしたラー・ネイジユが、その巨軀をサイド6に向けて進めていく最中、アンダーソン艦長は冷静に現状を分析していく。

戦闘状況の最中、現在地から地球へ直接連絡を取る手段は、実は無い。ルナツーを中継基地として、地球へ報告を行ってもらうのが、今最も確実に早い方法である。既にエヴァ少尉に指示を出し、ガンダムから転送された情報データをルナツーへと送信してもらっているものの、ミノフスキー粒子の影響もあるので相当の時間は掛かるだろう。その間はラー・ネイジユ単艦だけでイサベルからの攻撃を食い止め、輸送船をサイド6へ辿り着かせなければならぬ。これが連邦軍の総力戦として最初から行動出来ていれば…と、つい思ってしまう

ものの、今更そんな事を考えても仕方ないので、考えに耽る事を一旦止めてモニターへ目を向けていく。

「対空、対モビルスーツ戦闘警戒を厳となせ。既にここは敵地だ、デブリや伏兵にも警戒せよ。」

アンダーソン艦長の命令はブリッジ内に響き、各部署の長達は一層気を引き締めて計器に目を配っていく。巨大な軍事要塞である小惑星イサベルが今何処に居るのか、ラー・ネイジユ側はまだハッキリと捉え切れていないのだから、アンダーソン艦長の言葉は最もである。

同時刻、小惑星イサベルのモビルスーツ開発工廠内にて。

クーデターによる爆破の影響で多数の設備が損傷したものの、最低限の施設運用や設備稼働は可能であり、工廠の中心部ではモビルスーツとは呼べない巨大な機体：新型モビルアーマーの最終調整作業が駆け足で進められていた。

「残りはどのくらいだ!？」

「後はコックピット周りだけです!」

「推進剤の補充は70%まででいい、作業員に周知させろ!」

「了解っ!」

「サイコミュ調整終了しました!」

「武装のセーフティーは外しておけよ、直ぐに戦闘になる!」

技師長やメカニックマン達の声が工廠内に木霊していき、異形のモビルアーマーの起動準備に邁進していく。そんな工廠に、このモビルアーマーのパイロットを任せられた人物が入ってきた。

「お前がコイツを任せられた坊主か、頼んだぜ?」

技師長が話しかけた人物は既にパイロットスーツを着込んでおり、ヘルメットを被ってはいるが、その顔はハッキリと見えている。まだ若い青年だが、ギムレット・クルスの説明によれば……ニュータイプ研究所を再び稼働し、“カトレアを超える強化人間”として久造された被験体らしい。その代償なのかどうなのか、技師長の問いかけにただ小さく頷くのみで、虚な眼差しを向けたまま言葉を発する事はなかった。

深く聞く気はなく、そんな時間もないので、技師長は肩を軽く叩いてやると、青年は地面をトンツ…と蹴り出して無重力空間の中を漂い、コックピットハッチへと真っ直ぐに向かっていた。丁度コックピット周りの調整も済んだ様子で、中に入っていたメカニックマンが出てくると、入れ替わるように青年がコックピットへと乗り込んでいく。

「お待ちしてました。初期設定と調整は済んでいます…：今回は初めての起動となります。操作性やサイコミュについては、戦闘を行いながら確かめてもらうしか…：」

若いメカニックマンの説明を聞きながら、青年はただ小さく頷きながらベルトを締めていく。ここでも変わらずに無言のまま、コンソールパネルに触れて設定を確認し始めていった。その姿を見てメカニックマンは「…では、御武運を。」と言い残して敬礼し、コックピットハッチから離れていく。

「…：大丈夫なんですかね、技師長。あのパイロット…：」
「まあ、コイツをいきなり戦場に出そうってんだ。相当俺達は追い詰められてる…：起死回生の一発の為には仕方ないさ。」

若いメカニックマンは技師長へと近付き、モビルアーマーに乗り込んだ新しい強化人間について疑問を呈する発言をしていく。その疑問は当然のものであり、技師長自身も今日初めて会ったのだから、メカニックマンの彼と感じ方は大差ない。

だが、突如としてクーデターが起こり、噂によればカトレア閣下が生きていて、あろう事かガンダムに乗って敵になったという話が流れてくれば、誰であろうとイサベルは絶体絶命な状況に陥っていると分かる。例え誰がモビルアーマーに乗ろうとも、この危機的状況を覆してくれるのなら、その素性を気にしても仕方ない。二人は異形のモビルアーマーを見上げながら、コックピットハッチが閉じていく様を眺める。

「…モビルアーマー…：イブリス…：か。」

まるで小型化した巡洋艦…：とでも呼ぶのが相応しいだろうか。技師長がモビルアーマーの名を呟き、次の瞬間には頭部にあたる部分の

モノアイが発光した。後は工廠のハッチを開放し、このモビルアーマーを出撃させるだけである。

「ハッチ開けろ！メカニックマンは退避！」

技師長の掛け声と共にメカニックマン達は通路へと退避していき、次いで宇宙に面する隔壁が開かれていった。それに合わせてモビルアーマーを固定していた複数のドッキングアームが解除されていき、スラスターを噴射しながらその巨軀を前進させていく。

ギムレット・クルスが放つ秘められた兵器、新型モビルアーマー『イブリス』。悪魔を冠する巨大兵器は、ただ一つの目標を捉えて工廠を出撃していった。忌むべき存在、カトレア・ペントスを葬るという意思を携えて…。

※

サイド6へと向けて逃走を図る船団の行手を追うルミナスガンダムとカトレア・ペントスは、ラー・ネイジユとの通信を終えて程なく、無事に輸送船とアグライアに接触を果たしていた。

『閣下…よくぞ()無事で…！』

「ダリオン將軍…。貴様もよくぞ反旗を翻してくれた、礼を言おう。」

『とんでもない…我々は我々の意思で立ち上がったのです。このままではギムレット共々滅びの道を歩む事になると…』

「…そうだな…。」

輸送船の側にガンダムを寄せると、カトレアは船内に居る保守派リーダーのダリオン將軍と言葉を交わし、再会の喜びを噛み締めていた。連邦軍のパイロットスーツに身を包んでいるものの、ダリオン將軍は驚く訳でも嫌悪感を露わにする訳でもなく、ただただ生きて再び会える喜びを発露させていたのだ。それと共に、険しい現状についても認識を一致させていき、2人の表情もまた喜びから徐々に神妙なものと変わっていく。

『…イサベルを守れず、申し訳ありませんでした…閣下。それに、民間人にも犠牲が出てしまい…』

「…生き延びた民間人達を必ずサイド6に送るのだ。全てが終わった後、犠牲になった者達全てへ手を合わせよう。」

『畏まりました、閣下…っ。』

2隻あった輸送船の内、5番スペースゲートから脱出を図った輸送船は撃墜され、民間人50名余りと保守派メンバー数名が死亡した事は、ダリオン將軍から聞いた所だった。彼らの魂がきちんと成仏する事を祈りつつ、今はこの窮地を脱しなければならぬ。

ダリオン將軍との通信を一旦切ると、今度はアグライアへと繋いでいく。

「アグライア、応答せよ。」

『閣下…！』

「マキネン艦長か、心配をかけたな。」

『いえ…閣下が生きていらっしやるだけで、私には十分以上の幸せです…っ。』

リアルタイム通信で繋がっている為、コンソールパネルの画面上にはアグライア艦長のエドワード・マキネン中佐の姿が映し出されており、涙ぐんでいる様子がよく分かる。これだけ私は皆から信頼と期待を寄せられていた事を改めて実感し、胸が熱くなる想いに駆られていく。

…やはり、そう簡単に死ぬ訳にはいかない。私を慕う彼らの為にも。カトレア・ペンタスの胸の内に決意がより一層固く宿ると、一瞬だけ浮かべていた笑みを消し、凜とした声色でマキネン艦長へと問いかけていく。

「…マキネン艦長、アグライアのレーダーが捉えている敵の情報が欲しい。」

こちらの問いかけに対して、マキネン艦長はしっかりと頷き、捕捉している敵の情報を読み上げていった。

『エンドラ級が後方につけ、こちらを猛追して来ています。更にその後方からムサカ級も…』

「…ラー・ネイジュが直に合流する、それまで私が保たせる。」

『単騎では危険です、閣下…！せめて護衛モビルスーツを…ッ、』

「艦長、今最も重要なのは民間人と人質を無事にサイド6へ辿り着かせる事だ。違うか？」

『…それは、そうですが……』

アグライアの艦載モビルスーツの総数は分からないものの、エンドラ級とムサカ級を相手に輸送船を無傷で守り切るのは、かなり微妙だと言わざるを得ない。それならば、自由に動けるガンダムが敵を牽制し、アグライアは輸送船の傍から動かさないのが正しいだろう。勿論、モビルスーツ部隊は全てアグライアと輸送船の直掩につけるべきだ。私の意図を汲み取るマキネン艦長の表情は悲痛に歪んだものであり、少なからず私も彼の感情を理解出来るので申し訳ないという気持ちも抱いてしまう。

だが、今は選択を迷う時ではない。簡単に死ぬつもりはないが、この命ある限りは誰かの為に戦うつもりだ。私に出来る事があり、その力があるなら、躊躇う必要などありはしないのだ。私の決意を受け入れた様子のマキネン艦長は、覚悟を決めたように頷いてみせ、「…了解しました。」と小さく返事を返してくる。

「…さて、行くか。」

通信をこちらから切れれば、輸送船とアグライアから離れていき、後方へとガンダムを進めていく。輸送船の足は遅いので、出来るだけ時間を稼ぐ必要があり、ラー・ネイジユが合流する迄は無人機や艦隊の砲撃を一手に引き受けなければならない。然し、それは救出作戦における囨と同じ事なので、私は慌てる事なく深呼吸を一つ行い、気持ちを整えていった。

数分は経過しただろうか。ガンダムのセンサーが複数の熱源反応を捉え、敵味方識別によって熱源がエンドラ級とムサカ級である事を認識し、艦載モビルスーツが次々と発艦しているとセンサーが伝えてきている。推進剤とエネルギーの残量を確認し、厳しい戦いになる事が頭を過ぎるものの、可能な限り戦い続けるのみだ。

「やあ、来い……」

戦いの第二幕の始まり。無数のビーム攻撃が降り注ぎ、即座に回避運動へと入っていく。

接近してくるのは無人機が20機余り。その後方にはエンドラ級とムサカ級が控えており、直掩機のモビルスーツも合わせれば40機程だろうか。流星にこれだけの数を一度に相手にするのは骨が折れるが、私は回避しつつペダルを一気に踏んでいき、敵部隊中央へと突貫していく。

「行け、フィン・ファンネル……！」

ガンダムのツインアイが一際強く輝きを放つと同時に、背部ファンネルラックから6基のフィン・ファンネルが射出され、攻撃形態へと変形して無人機達へと襲い掛かっていく。サイコミュを通じて感応波でファンネル達をコントロールしながら、無人機の死角を狙うように攻撃を繰り返していき、確実に一機ずつ撃ち落としていった。

「やはり、まだまだ開発し切れていないようだ……ッ。」

無人機達の動きはパターン化されており、先刻交戦した私やシーナの戦闘データを組み込んだ無人機と比べると、明らかに機敏さに欠けている。何らかの理由で全ての機体に私達の戦闘データを載せられなかったのか、そこは私の知る所ではないものの、幾分か戦闘に余裕が生まれる事は確かだった。

「くっ……い……！」

だが、油断は出来ない。圧倒的な数の差は依然として脅威であり、四方八方からのビーム攻撃を回避しなければならぬ事へ神経を使わざるを得ないのだ。回避が難しい場合はシールドを構え、ビームを受け止め、そしてライフルで撃ち返して撃墜していく。

着実に数は減らせている。それと同時に、ガンダムのエネルギーも減り続けており、プロペラントタンクの推進剤を使い切ってしまった。私は舌打ちを一つ漏らしながらタンクをパージし、機体本体の推進剤へと切り替えて無人機達の只中へ飛び込んでいく。ラー・ネイジユが到着するまでは、何としても戦い続けなければならない。

「輸送船は……ッ。」

戦闘中、ビーム攻撃を掻い潜りながらコンソールパネルへと視線を落とし、輸送船とアグライアの位置を確認していく。足は遅いものの、戦闘宙域から安全圏へ離脱しようとひたすらに真っ直ぐ航行して

いる事は分かり、意識を再びモニターへと向け直した。無人機の一機が急速に近付き、ビームサーベルを展開して切り掛かってきたのだ。

こちらも応戦していく。素早くビームサーベルを引き抜くと、敵機のサーベルと鏝迫り合いとなり、その隙を突いてシールドのビームガンを至近距離で発射していった。

「ふん…、次だ…！」

コックピットブロックを撃ち抜かれた無人機は力を失って機能を停止し、その胴体を蹴り飛ばしてやると、再びスラスタを噴射して別の無人機へと向かっていく。これで10機近くを撃墜し、敵の追撃の勢いを確実に挫き始めていた、その時だった。

「ッ……………」

サイコミュが微かに拾った、この戦場に混じり始める明確な殺意。息の詰まるようなプレッシャーは、私が今まで感じたどんなプレッシャーとも毛色が違っており、一瞬ガンダム動きが鈍る。

…恐れを抱いているのか、この私が？シーナと相対した時と似ているが、この纏わりつくような嫌悪感は何だと言うのだ。そのプレッシャーの方へと自然と視線を向けた途端、今度は脳裏に強烈な攻撃の意思がサイコミュを通じて流れ込んでくる。

「逃げろ、アグライア！輸送船も緊急回避だ！」

私の叫びが届いているかは分からない。だが、攻撃は明らかに輸送船を狙っている事は分かる。

次の瞬間、戦場を貫く巨大なビーム粒子の塊が眼前を過ぎていき、サイド6方面へと向かって行くのを見る事しか出来なかった。僅かな時間を経て複数の爆発が発生し、私は苦虫を噛み潰したような渋い表情を浮かべ、繰り返し通信を介して輸送船とアグライアへ問いかけていく。

「アグライア、応答しろ…！ダリオン将軍、マキネン艦長…無事か…？」

初めはノイズが強かったものの、僅かに人の声が混じり始め、それ

が徐々にハッキリと耳に届き始めた。

『……………』——下、閣下……………無事で……………』

「マキネン艦長…皆は無事か?」

『はい、本艦も輸送船も無事です。然し…直掩機の何機かが巻き込まれて……………あれは一体…っ…。』

「…とにかく逃げるんだ、一刻も早く。私が何とかする。」

『危険過ぎます、閣下…!ギラドーガ6機を一瞬で撃破する程の攻撃…ガンダムと閣下の力と言えど単騎では…!』

「艦長、これは命令だ。必ず輸送船をサイド6に送り届けろ。…:行け!」

『…閣下……………ッ……………』

通信越しに聞こえてくるマキネン艦長の声は、悲しみや後悔、そして葛藤を多く含んだものだった。今私がしてやれるのは、決して後ろを振り向かず、ただひたすら前へ進めと促してやる事だけ。次の攻撃を撃たせない為にも、私も前に進まなければならない。

マキネン艦長は最後に「…ご武運を…!」とだけ言い残し、そこで通信は切れた。これで私も覚悟を決めていく。

「……………あれか…、…何だあれは……………」

発射地点から現在地を予測し、ガンダムを進ませていくと、漆黒の宇宙の海に巨大なモビルアーマーの姿が浮かんできた。それは無骨で、小型化した巡洋艦のような見た目をしており、モノアイの赤い光がこちらを睨むように光り輝いている。

間違いなく、あのモビルアーマーに乗っているのは私と同じ強化人間。ニュータイプの力を植え付けられた同類である気配が、より一層強烈にサイコミュによって受信されて感じ取れる。プレッシャーも、間違いなくあのモビルアーマーから発せられていたものだ。

「……………ここから先には行かせん。」

どこが弱点なのか、どんな武装を施されているのか、どれ程の推進力を持っているのか、全てが不明である。だが、だからと言って逃げるという選択肢は存在しない。守るべき者達の為に、直ぐにモビルアーマーへ向けてハイパー・ビームライフルの銃口を向け、躊躇う事

なく引き金を引いた。

マズルから放たれたマゼンタ色のビームは、一直線にモビルアーマー本体へと向かい、回避する事なく真正面から受け止めていった……が、先制攻撃は不発に終わる。

「……I・フィールドか……、ならば……！」

直撃したかに見えたビーム攻撃は、然しモビルアーマーの装甲に当たる事はなく、直前でビームが弾かれて掻き消されてしまったのだ。これは想定内だが、I・フィールドジェネレーターの存在は鬱陶しい事この上ないので、こちらの攻撃オプションは限られてくる。

やはり、接近戦を仕掛けるしかないだろう。そう考え、ライフルを腰部へとマウントさせると、ビームサーベルを引き抜いてモビルアーマーへ肉薄していく。

「ッ……！」

然し、そう易々と近付けさせてはもらえない。こちらの攻撃の意図を察知した敵パイロットは、モビルアーマー両側面のミサイル発射管を開き、大量の迎撃ミサイルを発射してきたのだ。一々数えるのも馬鹿らしくなる程の物量、考えるよりも先に体が動く。

反射的に操縦桿のスイッチを押し込み、回避運動を行いながら頭部バルカン砲を発射し、迫り来るミサイルを迎撃していった。1発、2発、3発とミサイルにバルカン砲が命中し、次々に爆発していつて他のミサイルにも誘爆していく。だが、爆煙の奥から更にミサイルが飛来して来ると、バルカン砲だけでなくファンネルも用いながら迎撃をしていき、全てのミサイルを撃ち落としていった。

「まだ来るか……ッ。」

漸くモビルアーマーへと姿勢を向け直すものの、当然の如く休む間など与えてくれる訳もない。モビルアーマーはミサイルではなく、今度は機体後部から大量のファンネルを放出し、こちらへ向けてオールレンジ攻撃を仕掛けてきたのだ。これだけの物量は、流星の私でも全て避ける事は難しい。となれば、強行突破あるのみ。

「ファンネル……！」

私の感応波に敏感に反応したファンネル達は、ガンダムを囲むよう

に周囲に集い、ビーム粒子の膜を形成してビームバリアを張った。簡易的なI・フィールド：とでも言った所だろうか、シーナが行っていた芸当を真似しただけである。

だが、効果は靦面だ。ファンネルのビームバリアは敵モビルアーマーのファンネル攻撃を物ともせず、全てのビーム攻撃を受け止め、弾き返している。キュベレイでは出来なかつた芸当だけに、防御にも転用出来るフィン・ファンネルの性能の高さに改めて感心しながら、ビームサーベルを構えてモビルアーマーへと突貫していく。狙うはモノアイの部分：恐らくはコックピットブロックであろう箇所へ、サーベルを突き立てる為に。

「その図体では、回避は出来ないだろう……！」

目と鼻の先までモビルアーマーに接近した事により、ファンネルによるビームバリアを一度解除すると、サーベルを構えてスラスタを全開にしていく。だが、近接戦闘に対する迎撃手段も持ち合わせているようで、モビルアーマーの頭頂部と思わしき場所や、胴体の至る箇所から機関砲が姿を現し、ガンダムに向けて弾幕を展開してきたのだ。

流石に至近距離での弾幕は回避が難しく、咄嗟にシールドを構えて直撃を防ぎつつ、それでもスラスタを緩める事なくモビルアーマー本体へと肉薄していく。シールドに容赦なく機関砲の弾丸が撃ち込まれ、操縦桿越しに振動が手に伝わってくる。シールドの限界は直ぐそこまで来ていた。

「ッ……、もらつた……！」

ビームサーベルの切先が届く距離にまで到達した時、機関砲の雨を受け止め続けていたシールドが破壊され、咄嗟に半壊したシールドを放り捨てる。そしてサーベルをモノアイに向けて突き立てたその時、視界の端に何かが映り込んだ。

「ぐっ…、何……ッ!？」

ビームサーベルをモノアイに突き刺し、バチバチと装甲を融解しながら火花が飛び散る中、ガンダムは謎の力によって両腕を掴まれて拘束されてしまった。何が起きたのか一瞬理解出来ず、ビクともしない

操縦桿を動かそうと力を込めてみるが、拘束を振り解けない。モニター越しにガンダムの両腕を見ると、モビルアーマーが展開した隠し腕に掴まれているではないか。

足元のスラスタールペダルを床まで踏み抜いてみる。機体が唸りやうげ、凄まじい推進力で拘束を振り解こうとするものの、それ以上のパワーで押さえ付けられており、やはり抜け出す事が出来ない。

『……ガンダムは……敵……』

「っ……、貴様……っ……」

機体同士が接触している事により、敵パイロットの肉声通信を介してコックピット内へと響いてくる。若い男の声だった。

『……ここで消えてもらう……カトレア・ペンタス。』

「……その……声は……まさか……、お前……っ……」

聞き覚えのある声。私はこの声の主を知っている。だが、それを確かめる前に死が目の前に迫ってきていた。

ガンダムを拘束したままのモビルアーマーは、モノアイにビームサーベルが突き刺さったままの状態で、メガ粒子砲の発射口を開いてきたのだ。丁度ガンダムの真正面に発射口が突き出され、いくらサイコフレームの力があると言えど至近距離からの直撃は防ぎ切れるか不明である。いや、サイコフィールドを発生させたとして、私自身が耐え切れる保証はない。

「聞け、お前は洗脳されているだけだ……っ、かつての私のように……」

『メガ粒子砲、チャージ完了……』

「……エリック……っ……」

メガ粒子砲の発射口に粒子の光が集い、圧縮され、いつでも発射出来る状態になった事が分かる。私は叫んでいた、イサベルで出来た友の名を。

『カトレア!!』

その時。

私達の通信に割って入って来た、別の男の声。それと同時に、ガンダムの左腕を拘束していたモビルアーマーの隠し腕にグレネード弾が複数発命中し、爆発の衝撃で拘束が緩んだのが分かった。

「ローマン隊長か……!」

声の主は、ラー・ネイジユのモビルスーツ部隊を指揮するローマン隊長。いの一審にこの戦闘宙域へと駆け付けたのだろう、後方には他のプロトタイプ・リゼルの機影も複数見える。

だが、束の間の喜びに浸る時間はない。緩んだ隙に左腕を引き抜くと、ビームサーベルを引き抜いて右腕の関節に刃を振り下ろし、ガンダムの右腕を自ら切り落としていく。これで完全に拘束が解け、スラストを噴射してモビルアーマーから距離を取ろうとするが、明確な殺意を再びサイコミュが捉えて私の脳に伝えてくる。来る、あの攻撃が。

「ッ——、来るな!離れろッ!」

咄嗟に私はローマン隊長や他のパイロット達へ叫びながら、感応波を飛ばしてフィン・ファンネルをガンダムの周囲に集めた。そして、6基のフィン・ファンネルを使いビームバリアを展開させた瞬間、モビルアーマーのメガ粒子砲が放たれたのだった。

狙いは私。ガンダムを屠る事だけを考えて発射しているのが分かるが、射線にはアグライアと輸送船が居る。退く訳にも避ける訳にも行かず、ビームバリアとサイコフレームの力を信じて受け止めるしかない。

『カトレア、無茶はよせッ!』

ローマン隊長の叫びが通信を介して聞こえてくるが、敢えて聞こえていないフリをする。無茶でもなんでも、やるしかないのだ。

メガ粒子砲がビームバリアに直撃し、粒子の奔流が飛び散りながら凄まじい閃光を放つ。勿論衝撃も機体に影響を及ぼしており、コックピット内には負荷限界を告げるアラート音がけたましく鳴り響いていた。

(まだだ…、まだ…耐えろ…ッ…!)

歯を食い縛り、モニターを睨みつけながら、ビームバリアがメガ粒子砲に耐え切れず瓦解していく様を見つめる。バリアが崩壊した瞬間、ファンネルもメガ粒子砲に飲み込まれ、溶けるように爆発していった。これでガンダムを守る盾は無くなり、機体を曝け出す形と

なってしまう。

「ッ」

その刹那、不可思議な現象が起きた。

私の脳裏を過ったのは、走馬灯のように過去の記憶が駆け巡り、そして最後にシーナの姿と笑顔が浮かんだのだ。まるで、心配する事はないと諭すように：私を安心させるかのような、そんな笑み。

そんなシーナの姿を脳裏に浮かべた私の心は、自身でも驚く程に落ち着きを取り戻し、温かさを感じ、不思議と力が漲るような感覚になったのだ。目の前に迫る死を跳ね除けると、シーナが叱咤してくれているようだった。

「私は……死なない……！」

刹那、ガンダムが応えてくれる。装甲の隙間から漏れ出るサイコフレームの赤い光が、緑の光へと変わっていき、サイコフレームを生かしていく。それはメガ粒子砲の直撃を真正面から受け止め、吸収し、弾き返しながら堰き止めていたのだ。この光景にはラー・ネイジユのモビルスーツ部隊員達は勿論の事、メガ粒子砲を発射した敵パイロットも驚きを隠せずに居た。

『…カトレア…ペントス…ッ……！』

憎悪を込めた声が、通信ではなくサイコフィールドの共鳴によって脳内に響いてきており、モビルアーマーにもサイコフレームが内蔵されている事が分かる。今なら直接私の声が届くかもしれないと、感応波を最大限響かせながら語りかけていく。

「エリック、聞け……！お前は私と同じ道を歩む必要などない……そんなものに乗っかっていたら、お前の心が壊れてしまう……！」

「黙れ、カトレア・ペントス……！お前は敵だ、ガンダムは忌むべき存在だ……！」

「違う、私達は手を取り合える存在だ……！殺し合うだけが強化人間の存在意義ではないのだ、ニュータイプは分かり合う為の力だ、エリック……！」

「黙れ……黙れ黙れ……ッ！お前の存在が俺の頭を痛ませる……ッ、お前が死ねば……この痛みも無くなる……！」

「ッ……、ギムレットの洗脳か……！」

人は、そう簡単に分かり合う事は出来ない。私はこの奇跡とも呼べる状況を経て、その難しさを痛感していた。恐らく彼は強化人間としての手術の後遺症で、酷い頭痛に苛まれているのだろう。その痛みがサイコフィールドの共鳴によって、私にも伝わってくる。この痛みを取り除く為に私を殺そうとしているのなら、ギムレット・クルスの洗脳が完成されているのだと認めざるを得ない。

だが、それでも。私は諦める事はしない。諦めたら彼を救う事は出来なくなる。

「ッ——、ぐ……ああッ……！こんな、時に……ッ……！」

それは、メガ粒子砲の攻撃を完全に防ぎ切った時に起きた。突如として胸が張り裂けそうな程の激痛に襲われ、視界がぼやけ始めていく。強化人間としての後遺症を抑える薬の効果が切れてしまい、死を覚悟する程の激痛が私の身体を蝕んでいたのだ。操縦桿すらも握れなくなり、感応波も乱れていくと、緑色に発光していたサイコフレームの光が消えていき、サイコフィールドも消滅してしまう。

私の異変を察知したローマン隊長や他のモビルスーツ部隊は、すぐさまガンダムの援護と回収に動き出す。だが、この隙を見逃す敵ではない。

『死ね、カトレア・ペンタスッ!!』

『カトレアを守れ!!』

敵パイロットの殺意に満ちた声と、ローマン隊長の掛け声が交錯し、次の瞬間にはモビルアーマーから放たれた無数のファンネルが再び砲身をガンダムに向けて攻撃を開始していく。それとほぼ同時に、プロトタイプ・リゼルの部隊がガンダムの周囲を囲むと、シールドを構えながらファンネルのビーム攻撃を防ぎ、頭部バルカン砲やビームライフルでファンネルを迎撃し始めたのだ。

ファンネルの動きには精彩さが欠けていた。それは強化人間であるモビルアーマーのパイロットが副作用で苦しんでおり、感応波が乱れている故の事である。そのおかげでリゼル達も何とかファンネルの攻撃を受け止め切れているものの、そう長く保つものでもない。

『くそッ、耐えろ…!』

ある機体は頭部にビームが直撃し、またある機体はビームライフルを破壊されて右腕が吹き飛び、シールドも半壊し始めている機体も出てきている。だが、リゼル達の反撃も功を奏しており、バルカン砲が直撃したファンネルはその都度撃ち落とされ、確実に攻撃の波は弱まりつつある。あのメガ粒子砲を再度発射されれば防ぎ切る事は不可能だが、直ぐに発射してこない所を見ると、どうやらチャージに相応の時間が必要なようである。

ローマン隊長はそう判断すると、今はとにかく耐えて隙が生まれるのを待つしかないと思い、ジリジリとした持久戦の様相を呈し始めていく。

『鬱陶しい…蠅どもが…ッ!』

ファンネルの攻撃では決定打を与えられないと判断した敵パイロットは、ファンネルを一旦下がらせ、次の攻撃を仕掛けようとしてくる。ガンダムに対して行っていた、大量のマルチミサイルによる制圧攻撃だ。ミサイル発射管が開き、大量のミサイルが発射されると、半包围するようにガンダムとプロトタイプ・リゼル達へと襲い掛かってくる。

『来るぞ、お前らッ!』

『迎撃!!』

『任せてくださいっ!』

既にボロボロのリゼル達だが、士気は旺盛。必ずカトレアとガンダムを守るという決意に満ち溢れており、これもひとえにカトレアの行動が皆の信頼を勝ち取った証でもあった。ミサイル群が襲い掛かってくるのを待ち構え、リゼル達はビームライフルや頭部バルカン砲でミサイルを迎撃していく。

だが、全てを撃ち落とす事は難しく、何発かのミサイルは弾幕をすり抜けてリゼル達へと迫ってきていた。それを見て咄嗟の判断だろうか、隊員の1人がシールドを構え、前へと押し出てミサイルを自ら受け止めたのだ。

『よせ、無茶するなッ!』

『無茶でもなんでも、やらなきゃいけないでしょうが!』

ローマン隊長の制止も振り切り、前へと出たりゼルに向けてミサイルの雨が降り注いでいく。シールドで防いだ際に複数の爆発が起き、爆煙に飲み込まれていくプロトタイプ・リゼルの背を、皆ただただ見ている事しか出来なかった。その直後、レーザー信号がロストした事を示す表示が各機のコンソールパネルに表示され、ローマン隊長の表情は悲痛なものに歪んでいく。

然し、直後にその表情は驚きが変わっていった。爆煙の中から球体状のコックピットブロックが飛び出してきて、仲間の1機が回収したのだ。

『隊長、生きてます!』

通信を聞いたローマン隊長は、安堵の息を漏らしながら、然し気を緩める事なくモビルアーマーの動向を注視していく。次の攻撃を仕掛けてくる気配が漂っていると感じていたからだ。

案の定、モビルアーマーのメガ粒子砲発射口に粒子が圧縮されていく様がモニター越しに映し出されており、次の一撃で全てを消し去るつもりでいる事が伝わってくる。

『お前達はガンダムを回収して散開、離脱しろ! 奴は俺が引き付ける!』

ローマン隊長はそう叫ぶと、ウェイブライダー形態へとリゼルを変形させ、モビルアーマーへ向けて単騎で突撃していく。このままでは全員やられるのは目に見えているので、一番損傷が少ない自身が囨になる事で、カトレアと部下達を守る手を打ったのだ。

『隊長、引き返してください!』

『死んじまいますよ!』

『隊長ツ!!』

『うるせえ、いいから離脱しろツ! 命令だ!』

味方からの通信を一喝して遮り、メガ粒子砲が発射される前に発射口を潰そうとビームライフルを発射していく。だが、モビルアーマーが常時展開しているI・フィールドによって、ビーム攻撃は発射口に到達する前に全て弾かれてしまう。ローマン隊長は舌打ちをすると、

次々に襲い掛かってくる生き残ったファンネル達の攻撃に反応していき、ウエイブライダー形態のままスラスタを小刻みに噴射し、辛うじてオールレンジ攻撃を掻い潜っていく。

『くそッ、やっぱシーナやカトレアみたいには行かないか……!』

だが、直ぐに限界は来る。幾らプロトタイプ・リゼルの機動性を以てしても、強化人間相手にオールドタイプの人間では太刀打ち出来ない事を分からされてしまう。ファンネルの攻撃が徐々に機体に掠るようになっていき、1発はバックパックに直撃したのだ。

衝撃と爆発を受け、プロトタイプ・リゼルをモビルスーツ形態へと変形させ、バックパックユニットをパージして誘爆を免れていく。文字通り丸腰となってしまい、攻撃も防御も回避も出来ない状態で、ローマン隊長は不敵に笑みを浮かべながらモビルアーマーを睨んでいた。

『…へっ、ここで死んでも後悔はねえ。』

メガ粒子砲の発射口を正面に見据える位置に居る自機にとっては、脱出コックピットを作動させたとしても、メガ粒子砲の攻撃に吞まれて死ぬのは明らかだった。どうせ死ぬなら、味方を守って死ぬのが良いと思いつながら、姿勢制御スラスタを噴射してなんとかモビルアーマーへ接近しようと近付いていく。敵は今更細々とした攻撃で撃ち落とす必要もないと判断しているようで、ファンネルの攻撃は行わず、メガ粒子砲のチャージを進めていた。

だが、メガ粒子砲が誰にも直撃する事は無かった。

『なっ……!?!』

突如としてモビルアーマーの後方から無数の対艦ミサイルが飛来し、何発かはモビルアーマーの装甲に命中して爆発を引き起こしたのだ。相当強固に作られたであろうモビルアーマーの表面装甲は、数発のミサイルでは破壊するに至らないものの、爆発の衝撃と意表を突かれた攻撃でメガ粒子砲の発射角度が大幅にずれ、禍々しい攻撃は明後日の方向へと逸れていく。

『ローマン隊長、無事ですかッ!?!』

次いで通信で聞こえてきたのは、エヴァ・ヒギンズ少尉の声。ラー・

ネイジユが追いついてきた証だった。

『ああ、何とかな……！』

ラー・ネイジユからの艦砲射撃が繰り返し行われ、モビルアーマーに向けて攻撃が降り注いでいくと、流星にモビルアーマーも分が悪いと感じたのか回避運動を行いながらイサベル方面へと撤退していった。

この撤退には、ローマン隊長は怪訝な表情を浮かべる。あれだけの戦闘能力があれば、ラー・ネイジユを含めても殲滅出来る程の力があると感じたが、余りにも早すぎる撤退だと思わざるを得ない。退いてくれるに越した事は無いが、どうにも気味が悪いと感じてしまう。

『……とりあえずは……生き残った事を喜ぶべきだよな。』

リゼルは最早行動不能の大破状態、暫くは修理で動けないだろう。これで生き残れただけでも奇跡のようなものだ。ラー・ネイジユの姿が近付いてくると、直掩のジエガンが数機近付いてきて、大破した自機を抱えて回収されていく。

『隊長、よくご無事で。』

『俺も不思議さ……死んだって思ったよ。』

ジエガンのパイロットと通信で会話をしながら、ローマン隊長はヘルメットを脱いで額の汗を拭い、深く息を吐いて瞼を閉じる。

自分はこうして生き残れたが、カトレアは無事なのだろうか。そんな事を思いながら、ラー・ネイジユのモビルスーツデッキへと収容されていった。

人質救出作戦とイサベルのクーデター勃発の交差により、混迷を極めた戦場。その一方で、また別の場所では知られざる陰謀と死闘が繰り広げられていたのだった……。